

(論文題目)

ドイツにおける新体操促進運動 (Gymnastikbewegung) に関する

史的研究 (1901年-1933年)

—ドイツ体操連合 (Deutscher Gymnastik-Bund) の設立と

活動の実際に着目して—

(英 訳)

Historische Forschung der Gymnastikbewegung

in Deutschland (1901-1933)

—Mit besonderem Augenmerk auf die Gründung und
tatsächliche Tätigkeit des Deutschen Gymnastikbundes e.V. —

2017年1月

安則 貴香

Yoshika YASUNORI

目次

序章 研究の課題と方法	1
1. 研究の目的と課題	1
2. 先行論文の検討	5
3. 本論の構成	10
4. 訳語の解説	11
5. 注記および図（表）の取り扱いについて （注記および引用・参考文献）	12
第1章 19世紀におけるドイツ国民体育の実態	13
第1節 ドイツ国民体育の胎動	13
第1項 トウルネンの誕生とその特色	13
第2項 『ドイツトウルネン術』の発行とトウルネンの拡大	20
第3項 トウルネン禁止令	30
第2節 ドイツ国民体育の成立	36
第1項 シュピース＝マウル方式の概要	36
（1）「要素化」による運動の体系化	36
（2）「鑄型化」による集団秩序運動の確立	39
第2項 シュピース＝マウル方式の学校体育への導入	42
第3項 シュピース＝マウル方式の授業内容	45
第4項 シュピース＝マウル方式の体系化と普及	50
むすび	53
第2章 新体操促進運動の胎動とドイツ体操連合の設立へ向けた展開 （1901年－1925年）	55
第1節 芸術教育運動の興隆	55
第1項 新教育運動の概要	55
第2項 芸術教育運動の概要	57
（1）芸術教育運動の胎動	57
（2）第1回（1901年）第2回（1903年）芸術教育会議	58
第3項 第3回芸術教育会議（1905年）	60
（1）プログラム構成	60
（2）体操的理念の浮上－体操と音楽と美の融合	63
（3）第3回芸術教育会議の意義	66
第2節 体操諸流派の台頭	67

第1項	表現技術の革新に向けた医学的見地に基づく体操系統	67
	(1) デルサルト	67
	(2) カルマイヤー	69
	(3) メンゼンディーク	71
	(4) ローエランド	72
第2項	運動リズムと表現力の発達に向けた音楽教育的見地に基づく 体操系統	74
	(1) ダルクローズ	74
	(2) ボーデ	77
第3項	運動構成の発達に向けたダンス的知見に基づく体操系統	79
	(1) ダンカン	79
	(2) ラバン	82
	(3) ヴィグマン	85
第3節	ドイツ体操連合の設立への経緯	89
第1項	ベルリン中央教育研究所と徹底的学校改革者同盟	89
第2項	芸術体操会議(1922年)	90
	(1) プログラム構成と内容	90
	1. 授業実践	91
	(a) ジャン・ダルクローズ学校	91
	(b) メンゼンディークシステム	92
	(c) ラバンシステム	93
	(d) ローエランドシステム	93
	(e) 表現体操	94
	(f) エリザベス・ダンカン学校	94
	2. 講演	95
	(a) 「生命の中のリズム」	95
	(b) 「芸術的な身体訓練のための音楽の意味」	95
	(c) 「芸術的な身体訓練のための生理学的意義」	95
	(d) 「呼吸の意義」	95
	(e) 「子どもの身体教育」	96
	(2) 芸術体操会議の意義	96
第3項	「体操のための本部事務局」の設置(1925年)	97
むすび		99
第3章	ドイツ体操連合の設立と活動内容の実際(1925年-1933年)	102
第1節	ドイツ体操連合の設立	102

第1項	ドイツ体操連合の設立目的	102
第2項	ドイツ体操連合の組織構成	108
	(1) 理事長・理事会・総会	108
	(2) 会員	109
第3項	機関誌『ジムナスティック』の発行	110
第2節	ドイツ体操連合の活動内容	113
第1項	体操学校の活動概要	113
	(1) 会員数	113
	(2) 学校数	114
	(3) 教育内容	116
	(4) 受講生の内訳	119
第2項	一般人向け授業と職業養成専門教育のための要綱	123
	(1) 要綱作成の経緯	123
	(2) 要綱の概要	124
第3項	体操の普及・促進・保護	126
	(1) 新体操教育会議(1926年)	126
	1. プログラム構成	126
	2. プログラム内容	130
	(2) 女子体操教科課程講習会	134
	1. 第1回女子体操教科課程講習会(1926年)	134
	a) プログラム構成	134
	b) 講義概要	137
	c) メンゼンディークの実践活動	137
	d) ボーデの実践活動	140
	e) ラバンの実践活動	141
	f) 陸上競技的な実践活動	142
	g) 指導実践と公開公演	143
	h) 講習会の成果	145
	2. 第2回女子体操教科課程講習会(1927年)	146
	3. 第3回女子体操教科課程講習会(1928年)	149
	(3) 人間教育としての体操会議(1931年)	150
	1. プログラム構成	150
	2. プログラム内容	153
	3. 会議の意義	155
第3節	ドイツ体操連合の右傾化と活動の変容(1933年)	157
むすび		160

第4章	ドイツ体操連合が普及・促進した体操の特色	164
第1節	機関誌『ジムナスティック』にみる運動形成	164
第1項	運動形成の様式	164
第2項	運動形成の指導実践	171
第2節	ドイツ体操連合の諸活動にみる体操の特色	183
第1項	身体の内的機能の重視と空間認識による運動	183
第2項	運動と音楽の融合	184
第3項	芸術教育運動との接続	187
むすび		190
結章	まとめと結語	194
注記および引用・参考文献		201
機関誌『ジムナスティック』(1926年-1933年)の寄稿論文目録		228

序章 研究の課題と方法

1. 研究の目的と課題

文部科学省は、平成 20 年の学習指導要領に中学 1・2 年生の保健体育において、「体づくり運動」、「器械運動」、「陸上競技」、「水泳」、「球技」、「武道」、「ダンス」のすべての運動領域を必修とすることを告示した¹⁾。その後、平成 21 年度より 3 年間の移行期間を経て、選択種目であった「武道」と「ダンス」は、周知のとおり男女とも完全に必修化となったのである。これらの運動領域のなかで「ダンス」は、あるがままに感じたままに即興的にイメージを表現し、リズムに乗って全身で自由に弾んで踊ることなど、「表現」として自己表現の経験を重視し、体育における教育的創造的芸術経験として位置づけられる²⁾。

日本のダンス教育は、明治期以来教科としての「体育」に位置づけられている。欧米列強に比類する近代国民国家の建設を国是とするなかで称揚された富国強兵・殖産興業は、学校教育にも影響を与え、しばしば指摘されてきたように教師の指示に合わせて既成の作品を踊ることがダンス教育の中心であり、身体修練に力点が置かれたものであった³⁾。戦後、昭和 22 年に施行された学習指導要綱において学校体育の理念は、軍队的な身体修練の色を濃くしたものから、児童中心に改革するものであった。全体的かつ画一的な教育から個別のかつ創造的な教育へ移行した体育の新しい理念を最も象徴的に示し、具現化させたのが「ダンス」領域であった⁴⁾。つまるところ表現運動であるダンスは、体育の中でも芸術的かつ創造的な運動の実現という独自の特色をもち、思うままに体を動かし、動きを創造し、リズムに合わせて踊り、自己表現する喜びに接近する教育へと変容していったのである⁵⁾。この原点を求めるならば、芸術的かつ創造的な運動の実現を追及しようとドイツで興隆した新体操促進運動（Gymnastikbewegung）に遡ることができる。

19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、産業都市化の急速な進展とともに発展した国家経済を支える労働力の確保、軍事力強化に向けた兵士の養成を目的として展開されたドイツの学校体育は、近代国民国家の基底を支える役割を担っていた⁶⁾。このために実際の授業内容は、教師の号令に合わせた整列・行進、また身体運動を分節化し、それら一つ一つを組み合わせる統合させた形式的な集団秩序運動を主な内容としていた。この集団秩序運動で要求されたことは、皆が同一の運動を一糸乱れぬかたちで実践すること、個人の感情を押し殺して集団に同調すること、教師の指示に服従すること、つまるところ工場労働者や兵士としての任務を忠実に遂行するための「規律と秩序」（Zucht und Ordnung）を体得することで

あり、仲間と運動する喜びの獲得、身体運動をとおした自主性、情緒や知性の養成とは隔絶したものであった。19世紀後半に胎動した新体操促進運動は、まさしく規律と秩序による人格の陶冶を基調とする集団秩序運動の克服を目指すものであった。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて教育改革を目的として興隆した新教育運動のなかで身体教育の史的考察をしたガイスラーは、新体操促進運動のなかで構築された3つの体操（Gymnastik）に関わる運動認識として、①身体感覚を呼び覚まし、無駄のない姿勢と運動の意識を向上させるための認識（衛生学的—生理学的—教育学的な系統）②運動のリズムと表現力を発達させるための認識（リズム的—教育学的な系統）③運動形成の発達に向けて、具体的な想像力を獲得させるための認識（ダンス的—教育学的な系統）をあげている⁷⁾。これら全て運動認識が教育学な系統に連なる端緒を探るならば、新体操促進運動に多大な影響を及ぼした19世紀後半から20世紀中頃にかけて興隆した「芸術教育運動」、および、その流れを基盤として1925年に設立された「ドイツ体操連合」（Deutscher Gymnastik-Bund e.V.）の存在に留意しなければならない。

教育改革を目的とする「新教育運動」（reformpädagogische Bewegung）⁸⁾のなかで立ち上がった芸術教育運動は、人間の感性から導かれた身体表現に新たな価値を見出し、自然や郷土との関係性、医学的観点、ドイツ工芸の経済的・実用的な必要性等を考慮に入れながら、子どもの主体性を尊重した教育を前提とするものであった⁹⁾。これは、子どもが本来、知的な学習に興味、関心を抱く存在であるばかりでなく、何よりも豊かな芸術的才能をもった創造的、かつ、感性的な存在であるという捉え方に根ざしていた。

芸術教育運動は、1896年にハンブルクで開催された「芸術教育保護の為の教員集会」（Lehrervereinigung für die Pflege der künstlerischen Bildung in Hamburg）で明確な運動として組織化され¹⁰⁾、その後の3回（1901年、1903年、1905年）にわたる芸術教育会議（Kunsterziehungstage）を経て、ドイツ全土に拡大していった。ここで中心的な役割を果たしたリヒトヴァルク¹¹⁾は、芸術教育運動について、教師を主体とする組織的運動へと発展させることで、格式を伴った教育運動へと転化させた。新教育運動の先鞭をつけた芸術教育運動は、母国語であるドイツ語、音楽、図画だけでなく、体育の分野においても教授内容や教授方法を整備していくうえで大きな影響を与えたが¹²⁾、そのなかでも1905年に「音楽と体操」（Musik und Gymnastik）をテーマに開催された第3回芸術教育会議は、ドイツ体操連合が誕生する契機となった会議であり、学校体育を教育問題として公的に取り上げた初めての会議であった。

学校体育が議題化された背景には、当時の体育が美的要素を欠いており、授業が退屈で凝り固まっているとして、その元凶たる集団秩序運動を克服するには、音楽との関わりをとおした表現の発達、美へと連なる新たな運動形態を必要としていたことにある¹³⁾。第3回芸術教育会議の後、集団秩序運動に代わる体操の構築が目指され、また、芸術性に根ざした学校が設立されるなど、新たな運動認識に対応した体操の指導方法論を確立しようとする試みも重ねられた¹⁴⁾。体操家と舞踊家の双方の指導方法論に違いがあるとしても、芸術教育に傾倒していた点では一致しており、集団秩序運動とは趣を真逆とする、自然性の観点に立脚した教育を追求しようとしていたのである。その後、第1次世界大戦を挟んで新体操促進運動は、新たな体操を推進する体操家、舞踊家による体操諸流派の活動をとおして、著しく進展していった。

1922年に開催された「芸術体操会議」(Tagung für künstlerische Körperschulung)は、第3回芸術教育会議で討議された「音楽と体操」の総括の場として設けられた。ここでの議論の中心は、芸術、教育、医学の総合的側面から全身が有機的にかかわり合うような身体運動を検討することにあつた。この芸術体操会議から導き出された、人間の本質への問い直しを基本的観念とする考えは、後に体操諸流派の共有する運動認識がリズム、音楽と結びついた美的な基本運動として実体化されていくこととであった。

体操家、舞踊家に音楽家が合流するところとなった体操諸流派は、各々が芸術体操会議に至るまで単独で活動を展開していたが、1925年3月に「体操のための本部事務局」(Zentralstelle für Gymnastik)が設置されると、これを母体に体操諸流派が統合され、その帰結として同年11月1日にドイツ体操連合が設立された¹⁵⁾。ドイツ体操連合は、体操に関する会議や実技講習会をはじめとする諸事業を頻繁に開催し、また広報活動の基幹事業として機関誌『ジムナスティック』(GYMNASTIK)を発行するなど、体操の普及・促進・保護に向けた多様な活動を展開した。しかし1933年1月30日に、国家社会主義ドイツ労働党(Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei)の党首であるヒトラーが政権を掌握すると、ドイツ全土における教育制度をくまなくその支配下に置き、ドイツ体操連合も例外に漏れず、ナチズムへの従属を強いられた。

ドイツ体操連合は、「ナチス教員同盟」(Nationalsozialistischer Lehrerbund)の傘下にあつた「ドイツトゥルネン・スポーツ・体操教員帝国同盟」(Reichsverband Deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer im NS-Lehrerbund)の専門団体「体操とダンス」(Gymnastik und Tanz)に併合され、機関誌『ジムナスティック』は1933年11・12月号を以て廃刊となった。しかし、

大局的な身体文化史の観点から見過ぎてならないことは、ドイツ体操連合の活動が近代国民国家の建設に倣うかたちで展開された、体操に関わる諸事象から断絶し、精神性や知性を備えた身体の評価を多角的に捉える運動認識、身体の奥底に潜在する運動法則に目を向けた基礎理論の構築に力を注いだように、新体操促進運動の集大成として、身体を解放し、身体をもって表現する自己目的化された運動形成を絶え間なく追及したことである。

ドイツ体操連合は、自ら開催した会議や講習会、機関誌『ジムナスティック』の発行をとおして、体操の基礎理論や運動認識を学校や一般社会にひろめる取り組みを重ねた。ドイツ体操連合のなかで築かれた体操は、今日において実施されている新体操競技、古典バレエから脱したモダンダンスの基礎へと派生し、また、戦後のドイツやオーストリアにおける学校体育に組み込まれたことが示すように、様々なかたちで現代にも引き継がれている。しかしながら、日本では戦後に移入された新体操競技の存在が知られるばかりで、実際のところ、新体操促進運動のなかで築かれた体操の実態については、議論の無いまま今日に至っている¹⁶⁾。管見ながら、新体操促進運動を牽引した体操諸流派に関わる従前の研究に着目してみても、体操諸流派への個別的な論及は重ねられているものの、体操諸流派の総体であるドイツ体操連合の具体的な活動内容、および、そこで築かれた体操に照準した研究を認めることができない。

戦後から今日に至る日本のダンス教育は、自己表現を拓くことを念頭に据える人間の生の欲求に応じた芸術的かつ創造的な教材へと変容していき、男女必修化にともなう量的拡大だけでなく、質的充実への期待は大きい¹⁷⁾。この潮流下で、新体操促進運動の象徴的産物であるドイツ体操連合に注目することは、日本のダンス教育の指導実践に多くの示唆を与え、ダンス教育の地平を切り開くという観点から、意義深いものと考えるところである。

以上より本研究では、ドイツ体操連合の結成に至る経緯、組織の理念と構造および活動内容に注目し、その中で練り上げられていった体操の特色を明らかにしていきたい。

2. 先行論文の検討

本論文の目的は、20世紀初頭に胎動した新体操促進運動を契機として、体操家、舞踊家、音楽家からなる体操諸流派が一堂に会し、1925年に設立されたドイツ体操連合の全様について、機関誌『ジムナスティック』の分析を中心に明らかにすることである。そのために本研究を大局的に捉えるならば、新体操促進運動を射程の中心に据えた歴史研究として位置づけられる。そこで以下、(1)新体操促進運動を検討の中心に据え、また、それに論及した文献、(2)新体操促進運動が胎動する布石となった芸術教育運動を検討の中心に据えた文献、(3)新体操促進運動下の体操、および、舞踊の動向を検討した文献に区分して、先行論文の検討を進めていきたい。

(1) 新体操促進運動に関する文献

新体操促進運動に関する文献を渉猟したところ、体育・スポーツ事典のなかで新体操促進運動に言及したもの、体育・スポーツ通史をまとめた図書のなかで新体操促進運動に関する記述が認められるもの、個別論文として新体操促進運動を主題化したものなどに大別される。以下、この3点から当該文献の検討を進めていきたい。

1933年に発行されたベックマンの『スポーツ辞典 A-Z』¹⁸⁾は、新体操促進運動の担い手の活動に関する詳細を明らかにした上で、芸術教育運動の一環として1905年に開催された第3回芸術教育会議が新体操促進運動に多大な影響を及ぼし、これが、ベルリン中央教育研究所と徹底的学校改革者同盟が1922年に主催した芸術体操会議で加速し、これらの帰結としてドイツ体操連合が設立された一連の流れについて概観している。このなかでベックマンは、ドイツ体操連合の理念が「体操を推進する者は、身体的な問題だけでなく、体操をとおして心理的精神的な価値を置くことを目的としている」ことを明らかにし、また、ドイツ体操連合の会員審査や体操授業のための共通要綱、「一般人向け授業と職業養成専門教育のための要綱」(1927年)についても言及している。さらに、ドイツ体操連合主催の一大イベントであった1926年の新体操教育会議についても取り上げている。

1972年に発行された『身体文化とスポーツの小百科事典』¹⁹⁾は、旧東ドイツ(ドイツ民主共和国)時代のものである。ここでは、上記事典と同様に、新体操促進運動の担い手の活動について個別に明らかにした上で、担い手によって立ち上げられた体操諸流派が1933年に至ってファシズムに包摂されていったことについて論及している。

1987年に刊行された『最新スポーツ大辞典』に収録されている稲垣がまとめた項目「新

体操」²⁰⁾では、18世紀にグーツムーツが編み出した近代の体操から、北欧体操、新体操促進運動に至る体操の変遷をまとめるなかで、新体操促進運動により導かれた体操を①身体機能を重視する体操②演劇的発想から感情の表出を重視する表出体操③音楽リズムと運動リズムを融合させたリズム体操④古典バレエの打破を目的とした新たなダンス的発想に基づく芸術体操に分類している。この点に加えて、芸術体操会議からドイツ体操連合の設立に至る過程、機関誌『ジムナスティック』の概要について触れている。

以上にあげた文献は、事典という性格から本研究の基礎資料として位置づけられるものであるが、これらに共通して認められた点は、ドイツ体操連合の具体的な活動内容が論及されていないことであった。

次に体育・スポーツ通史をまとめた図書に注目してみると、1932年に発行されたノイエンドルフの『近代ドイツ体育史』の第4巻²¹⁾では、ドイツ体操連合の設立に貢献したボーデのリズム体操を中心に、新しい身体運動様式としての体操について論述している。また、ドイツを中心とする体操の変遷を『西洋体育史』²²⁾のなかでまとめた今村は、ドイツ体操連合の設立に貢献した体操諸流派の活動に認められた共通要因について論じた。ここでは、従来、ほぼ男子による体操の模倣に過ぎなかった女子の身体運動にたいし、新たな領域を開拓したこと、また、ここに存在した新たな体操が形式化し、固定化したトゥルネンとは性格が異なり、音楽やリズムと結びついていた点に特性を見出せることが明らかにされている。岸野が編纂した『体育史講義』²³⁾からは、新体操促進運動の詳細が確認できる。ここでは、新体操促進運動に導かれた体操について、①生理的機能の向上を目指したグループ②表現体操の名のもとに「表出」を主張したグループ③リズム的な方向性を指向したグループ④古典バレエの固定図式を打破し、モダン・ダンスの確立をめざしたグループの4つに分類している。これに加えて新体操促進運動の担い手である体操諸流派の個別の活動についてもまとめており、体操諸流派のドイツ体操連合への統合などにも論及している。2013年に発行された成田の『近代ドイツ・スポーツ史 IV』²⁴⁾は、新体操促進運動下で立ち上がった新たな体操の様相について、①デルサルトが試みた表現術の革新、②ダルクローズの音楽教育、③表現ダンスの新しい創造の3点を挙げ、それぞれの詳細について言及している。また、新しい体操の台頭をドイツの教育界に周知させた点で第3回芸術教育会議が注目すべき機会であったこと、さらにドイツ体操連合の設立をもって、トゥルネン、スポーツ、体操の各領域に関わる明確な理論が併存するに至ったと論究している。

以上の図書は、新体操促進運動を牽引した体操諸流派の個別の活動、および、体操諸流

派のドイツ体操連合への接合のありようについて論及しているが、事典と同様に、ドイツ体操連合の具体的な活動内容、および、そのなかで導きだされた音楽、リズムと融合した体操の実態に端的に示される、体操の具体的な様相には触れていない。

最後に新体操促進運動を主題化した個別論文の内容を列挙してみると、新体操促進運動のなかでも 1920 年代から 1930 年代に構築された体操のイデオロギーについて検討したもの²⁵⁾、第 1 次世界大戦以降の新体操促進運動の担い手である体操諸流派の体操体系を個別に分類して論じたもの²⁶⁾、新体操促進運動の担い手である体操家と舞踊家を取り上げ、それぞれの運動方法の違いを明らかにしたもの²⁷⁾、体操諸流派の布置関係や体操体系の理論的特色について論じたもの²⁸⁾、リズム体操の継承者であるメダウの体操体系について検討したもの²⁹⁾³⁰⁾³¹⁾、表現体操やリズム体操の体系化を主導したダルクローズとボーデのダンスに基づいた身体教育論が、20 世紀初頭以降のドイツの教育改革運動に及ぼした影響を検討したもの³²⁾、ボーデのリズム体操のためのピアノ音楽の考察から、音楽と動きの関係性を明らかにしたもの³³⁾、芸術体操の基礎を築いたラバンのライフヒストリーをまとめたもの³⁴⁾、ラバンの舞踊理念、振付法、作品の特色について検討したもの³⁵⁾³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾³⁹⁾ が挙げられる。また新体操促進運動の象徴的産物たるドイツ体操連合に関する歴史論文に注目してみると、ドイツ体操連合理事長であったヒルカーに着目し、ドイツ体操連合が設立される経緯における彼の役割を論じたもの⁴⁰⁾、新体操促進運動に多大な影響を与えたラバンに着目し、ヒルカーの著書『ドイツ体操』におけるラバンに関わる叙述を分析したもの⁴¹⁾ がまとめられている。

以上の多様な視角から取り組まれた個別論文は、本研究に多くの示唆を提供するものである。しかし、ドイツ体操連合の活動内容の全様を明らかにする本研究と検討の射程を異にするために、重要参考資料の域を出るものではない。

(2) 芸術教育運動に関する文献

芸術教育運動の一環として開催された 3 回にわたる芸術教育会議を主導したリヒトヴァルクの言説を翻訳した岡本は、芸術教育運動の理念、および、第 2 回、第 3 回芸術教育会議におけるリヒトヴァルクの講演内容の詳細を明らかにしている。これは、ドイツ体操連合の設立の契機となった「音楽と体操」をテーマとする第 3 回芸術教育会議のリヒトヴァルクの言説は、本研究に多くの示唆を与えるものであった⁴²⁾。平野、山本、大久保は、ドイツ新教育運動に多大な影響を与えたヘルマン・ノールに着目し、ヘルマン・ノールの芸

術教育運動に関する言説を翻訳し、芸術教育運動から新体操促進運動が胎動したこと、新体操促進運動の担い手によってダンスやリズムとの新たな関係が形成されたことを明らかにしている⁴³⁾。鈴木はドイツにおける芸術教育運動が、「芸術教育の改革運動」として発展し、その一方で、「教育改革運動」として発展するなかで、新しい芸術教育観と教育観が醸成されていった様相を詳述している⁴⁴⁾。

以上の文献は、芸術教育運動の概要、および、芸術教育運動に携わった識者の言説をまとめたものであったが、芸術教育運動と新体操促進運動の接合部の詳細について論及したものではなかった。

(3) 体操、舞踊に関する文献

まず体操に関する文献に注目してみると、昭和初期において大谷が『新しい體操への道』⁴⁵⁾を上梓し、当時の欧州で立ち上がっていた新たな身体運動としての体操を日本で初めて紹介している。そこでは、新体操促進運動を牽引した体操諸流派の紹介とそれぞれの活動理念が提示され、さらに僅かばかりの記述であるものの、ドイツ体操連合の設立の意義、1926年に開催された新体操教育会議について触れられている。同書は、従前の日本語文献を渉猟する限り、最も広範にドイツ体操連合の活動内容の詳細を網羅したものとして、本研究の重要参考文献に定位される。木村は、『自然体育の成立と展開』⁴⁶⁾のなかで第1次世界大戦後のオーストリアにおける体育改革を推進していったガウルフォーファーとシュトライヒャーの体育思想「自然体育」に関する包括的研究に取り組んだ木村は、人間の本性に根ざした運動材や指導法の開発、自然な発育・発達の促進を目的とした自然体育が、新体操促進運動から多大な影響を受けた実態を明らかにしている。そのなかで、新体操促進運動を牽引した体操諸流派の活動理念と活動内容を明らかにした上で、体操諸流派のなかに横たわっていた根本的な運動認識について、従来の学校体育や古典バレエに認められた要素化、鑄型化と対立するものであったとし、その帰結としてのドイツ体操連合の設立について言及している。ディームは、1991年に刊行された『新体操促進運動』⁴⁷⁾のなかで、女子スポーツの発展の象徴的事象として新体操促進運動を取り上げ、20世紀初頭に興隆した芸術教育運動からドイツ体操連合の設立に至る変遷をとりまとめている。そのなかで、芸術教育運動の一環として開催された第3回芸術教育会議におけるリヒトヴァルクの役割、および、芸術体操会議の詳細、芸術教育運動と新体操促進運動の関連性について明らかにしている。アウベルトは、2010年に刊行された『エルザ・ギンドラー（1885-1961）の活動

コンセプト』⁴⁸⁾のなかで、ドイツ体操連合の設立に貢献したギンドラーに着目し、彼女の研究活動及び教育実践をまとめている。同著は、ドイツ体操連合の設立時から1933年にナチスの教員組織であるドイツトゥルネン・スポーツと体操教員帝国同盟の「体操とダンス」に併合されるまでの間、機関誌『ジムナスティック』を資料として、ドイツ体操連合の動静について詳細に論究している。

2004年に発行されたコルヴェの『新しい人間』⁴⁹⁾は、1900年代から1930年代にかけて、裸体文化、リズム的体操、ヨーガ、ボディビルに関わるドイツの身体文化に着目し、これらが健康や体力の維持・向上を目的とした運動として現代の体育に引き継がれていることを明らかにしている。なかでもリズム的体操については、19世紀から20世紀にかけての芸術、音楽、教育学に関わる改革運動のなかで明示されたと言及している。

以上、体操に関する文献をとりあげてきたが、とりわけアウベルトの文献は、機関誌『ジムナスティック』を資料として使用していたことから、本研究に多くの示唆を与える典拠文献として位置づけられる。しかしながら、ドイツ体操連合が開催した2回の体操専門会議、および、3回的女子教育課程講習会の詳細については、それぞれ明らかにされていない。また、その他の文献についても、ドイツ体操連合の主催による諸事業の実態については、明らかにするものではなかった。

次に舞踊に関する文献に注目してみると、シュピースによる体育の実際、新体操促進運動の担い手の運動認識を骨子とする身体文化史をとりまとめた中村の『ドイツ舞踊文化』⁵⁰⁾では、ドイツ体操連合の活動理念、および、新体操教育会議に関わる記述が認められる。ミュラーは、『アウスドゥルック (表現)』⁵¹⁾のなかで、1920年代のドイツで大流行した古典バレエに依存しない独自の表現主義舞踊について考察し、舞踊と体操の学校がベルリンで乱立した状況を明らかにしている。これは、1920年代のドイツにおける舞踊の状況に言及する本研究に多くの示唆を与えるものであった。海野は『モダンダンスの歴史』⁵²⁾のなかで、シュピースの集団秩序運動に批判が集中した結果として新体操促進運動が興隆したこと、身体鍛錬を目的とした機能的、合理的な体操が広がりを見せる一方で、人間の内面に宿る精神性の欠落が課題として浮上し、それが演劇やダンスの分野で解消されていったことを論述している。また、新体操促進運動の担い手による活動の詳細について明らかにしている。

舞踊に関する文献を検討する限り、新体操促進運動について断片的な検討に終始し、また、ドイツ体操連合に関する記述が認められなかった。

3. 本論の構成

「ドイツにおける新体操促進運動（Gymnastikbewegung）に関する史的研究（1901-1933）ードイツ体操連合（Deutscher Gymnastik-Bund）の設立と活動の実際に着目してー」と題した本研究の課題は、新体操促進運動を担った体操家、舞踊家、音楽家の体操諸流派が一堂に会して1925年に設立されたドイツ体操連合に着目し、ドイツ体操連合が結成されるに至る経緯と活動の全容について検討しながら、そのなかで築かれていった体操の特色を解明することにある。この課題にアプローチする本論の構成は、以下のとおりである。

第1章では、20世紀初頭に胎動する新体操促進運動の前史として、19世紀初頭に自由意志を尊重する国民体育として胎動したヤーンのトゥルネンの誕生とその特色を明らかにし、さらに、ヤーンのトゥルネンから学校体育を軍事体育として捉えた、要素化と鋳型化を基礎とするシュピースとマウル集団秩序運動への変容のありようについて概観していく。

第2章では、トゥルネンを形式的体操として批判し、新たな理論と方法に基づく体操（Gymnastik）の構築に努めていったドイツ体操連合の設立に向けた経緯を明らかにする。そこで、19世紀後半から20世紀初頭における、芸術的で創造的な運動の実現を求める新体操促進運動に多大な影響を与えた芸術教育運動の概要をまとめ、新体操促進運動が始動する契機となった1905年の第3回芸術教育会議の内容、新体操促進運動を牽引した体操家、舞踊家、音楽家の活動、および、ドイツ体操連合が設立する直接の契機となった1922年の芸術体操会議の実態を詳らかにしていく。

第3章では、新体操促進運動が芸術体操会議を契機に明確な組織的運動となり、その帰結として実体化するところとなったドイツ体操連合の活動の全容を明らかにしていく。そこで、ドイツ体操連合の広報事業として発行された機関誌『ジムナスティック』を参照し、ドイツ体操連合の設立目的、組織構成、ならびに体操の啓発活動として大々的に運営された体操専門会議と女子体操教科課程講習会の詳細についてまとめていく。

第4章では、ドイツ体操連合が普及・促進した体操の特色を明らかにする。そこで、ドイツ体操連合が開催した体操専門会議と女子体操教科課程講習会から認められる体操の運動認識、および、『ジムナスティック』に掲載された寄稿論文から認められる体操の運動形成を勘案し、ドイツ体操連合が普及・促進した体操の内実と特色を浮き彫りにしていく。

4. 訳語の解説

① 「Gymnastikbewegung」

従前の研究において「Gymnastikbewegung」を「体操改革運動」と訳すことが多く見受けられたが、本研究では「新体操促進運動」と訳した。新体操促進運動は、19世紀後半に学校体育で実施されていた、シュピーース=マウル方式の集団秩序運動にみられる要素化・鑄型化を特色とした運動認識に異を唱え、音楽との関わりをとおした表現の発達を目標とする新たな体操が第3回芸術教育会議において胎動した。この新たな体操とは、集団秩序運動の改革ではなく、新たに胎動した運動認識に基づく運動形成を指し示していることから、「Gymnastikbewegung」を新体操促進運動と訳した。

② 「Turnen」

ラテン語を語源とする「Turnen」（トゥルネン）は、ドイツ国民体育の父と称されるヤーンが実践した活動の総称として、一般的に理解されている。ヤーンが実践したトゥルネンの包括範囲は、器械運動のみならず、走、跳、投の基本運動、レスリングを含む幅広いもので、それらは、祖国愛に燃え共同体の精神に目覚めた、意志が強固で身体強健な青少年の育成をめざす国民教育に根差した教育手段であった。トゥルネンの教育目的を端的に示すならば、統一ドイツ国家の建設に向けて、ドイツ国民としての民族意識を青少年に覚醒させることに根本的な精神が置かれていた。これを素地として、ドイツ学校体育の父と称されるシュピーースは、トゥルネンに倣った徒手体操や手具体操、要素化、鑄型化を特色とする集団秩序運動を内容とする学校体育の確立に指導的な役割を果たした。シュピーースは、兵士を養成する準備教育として学校体育を位置づけ、軍隊で要求される規律と秩序の陶冶に向けた集団秩序運動の体系化に努めた。その後、シュピーースの弟子であったマウルにより完成されることとなった集団秩序運動は、第1次世界大戦期に至るまで、ドイツにおける学校体育の中核を担い続けた。本研究では、19世紀初頭のヤーンの活動を端緒として、シュピーース=マウル方式に接続する一連の身体活動を称してトゥルネンと認識していく。

③ 「Gymnastik」

古代ギリシア語の「gymnos」（裸体の、軽装の）という形容詞に「techne」（技術）の語を付け加えた「gymnastike」に語源を求めることができる⁴⁹⁾。「Gymnastik」をドイツの体育分野で初めて使用したのは、近代体育の父と称されるグーツムーツ（J.C.F.Guts Muths,1759-1839）であった。人間にとってふさわしい運動が自然であるという考えを抱いていたグーツムーツは、18世紀後半に汎愛教育運動の模範校であったシュネッペンタール

学校で、走る、投げる、跳ぶ、取っ組み合う、よじ登る、泳ぐ等の運動群を体育に取り入れ、この体育活動を「Gymnastik」（体操）と命名した。グーツムーツが提唱した「Gymnastik」は、リング（P.H.Ling,1776-1839）の考案によるスウェーデン体操に引き継がれ、生理学や解剖学の知見に基づく調和のとれた身体形成を目指す体操として発展し、さらにデンマークのブック（Niels Bukh）やクヌッセン（Knudsen）、フィンランドのビョルクステン（Bjorksten）らに受け入れられ、北欧体操（Nordische Gymnastik）として展開していった⁵⁰⁾。第3回芸術教育会議を契機として「Gymnastik」の用語は、北欧体操の影響を受けながら、演劇、舞踊、音楽と結びついた新しい体操の運動として19世紀後半のドイツで再度使用された。「Gymnastik」を体操と表記する本研究において、検討対象時期である20世紀初頭のドイツの体操は、身体の調和的発達と機能向上を目的としたもののみならず、音楽と密接に関連した舞踊の領域も含んでいる。そこで本研究では、集団秩序運動を主な意味内容とするトゥルネンとの区別を明らかにするために、「Gymnastik」に「体操」の訳語を当てている。

④ 「Deutscher Gymnastik-Bund」

本研究では、「Deutscher Gymnastik-Bund」を「ドイツ体操連合」の訳をあてた。ドイツ語で「Bund」は、「連合」「同盟」「連盟」という意味内容を持つ。「連合」は、二つ以上のものが共通の目的のために結び合うこと、「同盟」は、個人、団体、または国家などが互いに共通の目的を達成するために成立した関係のこと、「連盟」は、共同の目的のために行動を共にする組織をそれぞれ意味する。本論で詳述するようにドイツ体操連合は、体操家、舞踊家、音楽家から成る体操諸流派が一堂に介して設立された団体であることを考慮し、「連合」の語を使用した。

5. 注記および図（表）の取り扱いについて（注記および引用・参考文献）

- 1) 注記は、各章ごとの通し番号とし、1)、2)、の形式で巻末に一括して掲載した。
- 2) 図（表）は、全章の通し番号とし、図（表）－1、図（表）－2、の形式で文中に掲載した。

第1章 19世紀におけるドイツ国民体育の実態

本章では、20世紀初頭に胎動する新体操促進運動の前史として、19世紀初頭に産声をあげた自由意志を重視する運動を基調とするトゥルネンが、軍事体育の色彩を帯びた鋳型化と要素化を基礎的な要素とする集団秩序運動へと変容しながら、ドイツ国民体育として定着していった足跡について概観していく。

第1節 ドイツ国民体育の胎動

第1項 トゥルネンの誕生とその特色

ドイツ国民体育といわれるトゥルネン (Turnen) が正式に誕生したのは、ベルリン郊外にあるハーゼンハイデ (Hasenheide) に体育場が開設された 1811 年 7 月に遡る。そこで、プラマン学校の教師であったヤーン (Friedrich Ludwig Jahn, 1778 年-1852 年) を中心にトゥルネンが産声をあげていった。当時のドイツは、1806 年にフランスのナポレオンの前に屈したことを受けて、多くの町は壊滅的な状況に見舞われ、そこでは、自信と気力を欠いた意気消沈する若者が溢れかえっていた。そこでヤーンは、若者が困難を克服し、健康でたくましく自信と勇敢さを持ち、いかなる逆境にも乗り越えられる教育の必要性を思い抱き、トゥルネンを提唱・実践していった。トゥルネンはまさしく、祖国愛に燃え共同体の精神に目覚めた、意志強固で身体強健な青少年育成をめざす国民教育の中核に位置づけられた教育手段であった。そこでヤーンは、過酷な障害物を兼ね備えたトゥルネン場を開設したのである¹⁾。前述したハーゼンハイデには、以下の設備が整えられた²⁾ (図-1 参照)。

1. 遊動木

トゥルネン用の道具として、かなり太い仕切りの横木を使用。この横木の太い末端は、木馬代わりに振動運動に使用。助走を付けずに遠くへ跳躍。簡単なやり方で横木に乗り、降りる。

2. 登り網

並んで立っている松の木の間には棒を通して網を下げる。初めのうちは、誰も上まで登れなかった。特に体の小さい者が登ると、見物人は驚いたという。上から下へ滑り降りるときに指が燃えるように熱くなる。

3. 梯子

梯子は、しっかりと支えられている横木に対して立てかけている。梯子に登る練習や懸垂練習に使用する。

4. 2本の登攀用マスト

5. 2組の跳躍用道具

自由跳びや棒高跳びの練習に使用する。

6. 台形型の跳躍用の堀

7. 数本の投げ槍

的が据え付けられていなかった。

8. レスリング用の広場

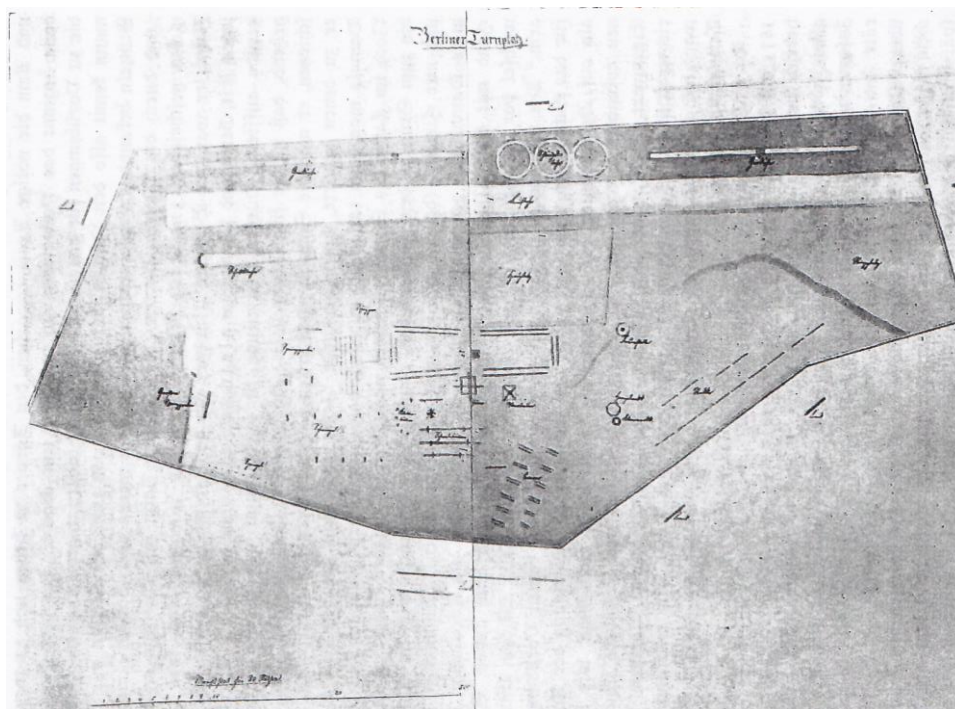
この広場は頻繁に使用され、定期的にレスリングが実施された。毎回の優勝者は、トゥルネンに対する尊敬の念を主張した。

9. 2円の円形トラック

2名から3名で競走し、持久走でも使用した。

10. 懸垂用水平棒

かなり太い松の木で作られており、3本の松の木の間を網で三角形の形に取りつけられていた。横木は松の木の外側を交差し、地面から2.5mの高さに設置された。懸垂の状態から移動し、また、水平棒によじ登る運動のために使用した。その後に、蹴上がりや大車輪のような運動が実施された。十字に形づくられた棒の上に、背中で寄りかかったり、そこから約2.5mの距離のある登り網に、まずは手を使って、その後に足を使って跳躍したりした。この運動は、「櫓から網への跳躍」(der Sprung vom Galgen zum Strick)」と称されていた。



図ー 1. ハーゼンハイデのトゥルネン場のスケッチ

(Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.145.より転載)

トゥルネン場の整地や用具づくりは、ヤーンや上級の生徒たちによって、学校の休日や授業のない時間帯に行われ、昼食の際は、塩を付けたジャガイモ料理をはじめ、パンやビールでお腹を満たし、ドイツ民話や様々な話題で盛り上がった。トゥルネン場の開設後、生徒の他、孤児から貴族の息子にいたるまで、多種多様な人々が集まった。トゥルネン場は狭く、用具も少なかったが、当初に集まった人数が多いわけではなかったため、参加者たちは比較的自由に運動を実践することができた。しかし、夏期のうちに参加者が 300 名にまで膨れ上がると、トゥルネン場から溢れかえった参加者たちは、近隣の広場での遊戯活動を余儀なくされた。ヤーンは、若者が開放的な戸外に出て、青少年らしい喜びに満ちた共同生活を送ることを願い、そのなかで遊戯をとりわけ重要視した³⁾。また、トゥルネンを実践するには、美食・喫煙・飲酒が厳禁とされ、漂白されてない麻製の長ズボン、短い上衣の着用を義務づけた規定が設けられ、トゥルネンの実践者は、ヤーンによりトゥルナーと称された。

ヤーンの弟子であるデュレ (Dürre) は、ハーゼンハイデにおけるトゥルネンの初期の状

況について次のように回想している⁴⁾。

棒高跳びは 2.2m から 2.5m は高かっただろう。これは現在の我々の感覚からすれば、それほど高いものではない。しかし、それを見ていたベルリンの人々にとっては、驚きと感嘆であった。幅跳びは 3.75m でそれほどの衝撃ではなかった。懸垂棒での懸垂では、若いトゥルナーたちが 6 回の順番で都合 3 本の棒をなめらかに登ることができた。

1811 年の冬は、厳冬のために戸外での活動を中止しなければならなかったが、その代わりにグーツ・ムーツ⁵⁾の著書などを講読し、陸海軍の士官学校の教師による棍棒の訓練やフェンシングなどを実施した。この翌春にヤーンは、トゥルネン場を新たな場所で改設し、5 月に活動を再開した⁶⁾。新たな器材を備えて規模を拡大させたこのトゥルネン場では、いかなる運動を実施していたのか、少々長くなるが以下に記していきたい⁷⁾。

1. 走 (Das Laufen)

走るための場所を設置するために、まず、芝生を鋤き返した。ヤーンはトゥルナーを一列縦隊にさせて、端から端まで斜め向かいに横切るように小走りで、鋤き返した地面を踏み固めさせた。この鋤き返された地面を固める一連の作業は、規則的な運動へと発展した。この運動は、後のトゥルネン大会における長距離走の運動の一つとされ、「蛇行走」(Schlangenlauf)と命名された。蛇行走は、意図的に観客を楽しませるための工夫をこらし、絡み合いの演技を加えていった。蛇行走のコースは、150 歩幅の長さで 15 歩幅の幅で、後に規則的な運動の一つとなる螺旋走へと分化していった。

2. 跳躍 (Das Springen)

高跳びや棒高跳びのために 3 つの跳躍器具を設置した。砂袋で重しをのせた紐は、赤色で作られた。トゥルナーの多くが 2.2m から 2.5m の高さまで、棒を使用して高く跳び越えた。自由跳びについては、それほどの熱狂を呼び起こすことはなかったが、幅跳びは、楔形の溝が掘られており、そのままの跳躍や棒を使用した跳躍が行われ、多くの関心を集めた。

3. 投 (Das Werfen)

槍投げには、2.25m から 2.50m の長さの槍を固定された的に向かって投げた。

4. 格闘 (Das Ringen)

格闘は、格闘場で熱心に練習が重ねられた。トゥルナーは敵にたいして、いかなる時でも開放的で誠実に対応しなければならなかったのも、敵に背中を見せることはなかった。2人以上の体の小さい選手対1名の大きな選手との対戦なども生まれ、非常に多くの選手が参加した。

5. 遊動木 (Das Schweben)

いかなる運動であったかは、明らかにされていない。

6. あん馬 (Das Schwingen)

1 m、1.25m、1.6m の高さのあん馬が3台設置された。それらは、角を丸く滑らかにした短い樹幹で作られており、足が付いていた。

7. 登攀 (Klettern)

ヤーンは、とりわけ登攀運動を重視していた。従前の器材とともに新たな器材を部分的に並べた。以下に詳述するように、登攀の設置構造はトゥルネンの特徴を鮮明に表すものであった (図-2 参照)。

(1) トウルネン場の中心に設置された登攀は、およそ 16m の高さがあり、頂上には旗が備え付けられていた。頂上から 1.5m 下には、横木が固定されていた。支柱からは約 3m の距離があり、14.5m の長さのロープが地面まで垂れ下がっていた。横木から約 1.5m まである支柱に椅子が急傾斜に立てかけられていた。トゥルナーは梯子から横木によじ登り、ロープで途中まで降り、さらに下まで降りるか、または、再度ロープで上に登って行く。頂上の旗に向かって横木を越え、梯子で降りてくる。8歳から10歳にかけての多くの少年たちは、これを実施するに十分な力量と器用さを兼ね備えていた。ロープを降りてくる者と登っていく者との間で入れ替わるような試みも行われた。

(2) 5 m、7.5m、11m の高さのある3種類の登攀用の棒があり、それぞれ頂上までよじ登って座ることができた。この登り棒は非常に滑るので、足で棒を締め付けることが要求された。

(3) 3本の木が三角に立てかけられており、地面から約 3m の高さに横木がある。この横木もトゥルネンで頻繁に使用され、中央の旗まで約 12.5m、横木からロープが 9.5m 垂れ下がっていた。この3本の木の運動は、以下のとおりである。

- 1) ロープを使って一人が登っていく。その後、横木を乗り越えて移動し、2本目のロープを使って下へ降りる。
- 2) 他の者は梯子を使って登るが、その際に手を使わず、それ以外の体の部位を使って登る。
- 3) 他の者は手の支えのみで梯子の裏側をよじ登ることを試みる。もしくは、手だけで支持しながら下へ降りる。
- 4) 他の者は再度、斜めに立てかけてある支え柱をよじ登る。
- 5) 他の者は様々な身体能力と器用さを要求される運動を実施する。それは、横木の下にぶら下がって横移動したり、もしくは、身体を巧みに方向転換させながら運動することである。これらの運動と同時進行で、横木で懸垂運動をすることもある。
- 6) 他の者がロープを補助にして、一番小さい梯子に向かって振り動かし、そのはずみで交差している所に座る。

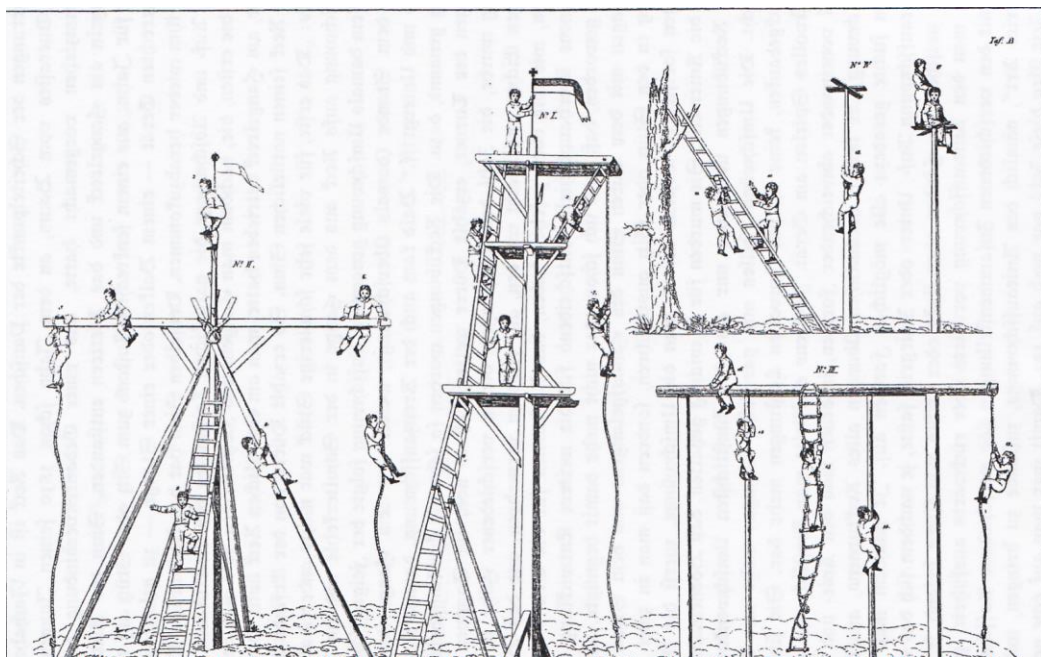


図-2. 登攀でのトゥルネン (Klettern)

(Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18.

Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.149 より転載)

8. 水平棒 (Das Turnen am Reck)

木々の下、おおよそ 90 cm から 2.5m の高さのある様々な横木が懸垂運動用に設置された。それは個々の筋肉を強化するため、さらには、関節の柔軟性を高めるためのもので、非常に根源的な運動であった。水平棒 (平均台または横木) での運動は、上がる、降りる、回転を行うことのできる独自の器材として活用された。水平棒の上で垂直に倒立姿勢から長座姿勢、もしくは、腕立てした姿勢へ、そして再び体を持ち上げる。これが水平棒独自の運動であった。そこからの蹴上がりや飛び降り、水平棒での通常の技であった。様々な工夫が加えられた水平棒の運動は、参加者から好評を博し、実に 132 種類の運動が考案された (図-3 参照)。

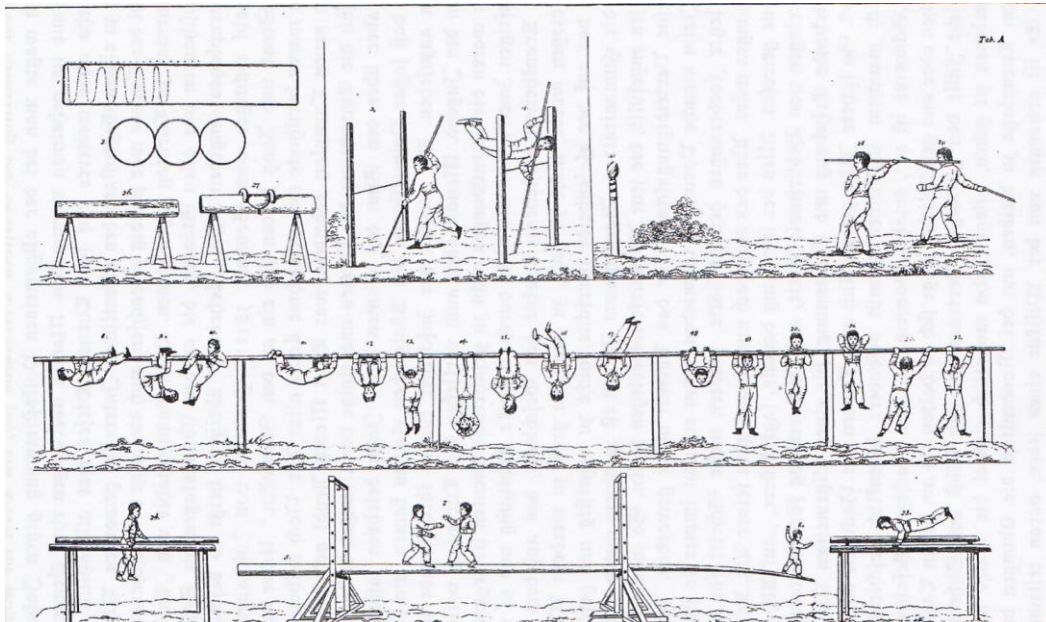


図-3. 水平棒でのトゥルネン (Das Turnen am Reck)

(Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.155 より転載)

トゥルネン場では、器材を使用した運動の他に、ヤーンが遊戯を重視していたように、鬼ごっこや闘争遊戯のような簡易的な運動も実施されていた。新たなトゥルネン場において、学校の授業のない水曜日と土曜日の午後を基本とし、日曜日にも活動が実施されていたが、ヤーンは定期的にトゥルネン場へ足を運んでいた。そのなかでトゥルネンは活況を呈していき、トゥルナーの数は 500 名にまで増加し、6 歳から全年齢層とあらゆる世代の

者を網羅していった⁸⁾。

以上において、開設間もない頃のトゥルネン場における運動、および、それに関わる様相を記述してきたが、ここに認められるヤーンの実践したトゥルネンを概略すると、それは、走・跳・投などの陸上競技的な運動、器具を用いた運動、遊戯であった。ヤーンはこれらの活動を指導するにあたり、決して強制的な手段を用いることなく、優れた指導力を発揮し、規律と秩序で満たされたあらゆる現象が自由意志から立ち上がるような、一つの道徳的な集団を形成していた⁹⁾。この根底には、トゥルネンをとおして自然と触れ合い、様々な困難を乗り越えようとする意欲や能力を向上させんとする壮大な理念が存在していた。参加者たちは、トゥルネンをとおして人間が生来的に兼ね備えている原始的な能力に気づき、その実感をもってよりトゥルネンに駆り立てられたという¹⁰⁾。

第2項 『ドイツトゥルネン術』の発行とトゥルネンの拡大

1913年3月に勃発したフランスとの解放戦争（1813年3月17日－1814年3月31日）による勝利に勢いを得て、ハーゼンハイデと同様のトゥルネン場の開設が相次ぐと、トゥルネンはドイツ各地で活発化し、拡大していった。トゥルネンの参加者数は、1816年10月に1000名を突破し、翌年に1070名に到達すると、トゥルネン場の活況はその頂点に達した¹¹⁾。解放戦争後にヤーンは、ドイツ各地に拡大したトゥルネンの実践者の要望に応えるために、共通の指導書である『ドイツトゥルネン術』（Deutsche Turnkunst）を弟子のアイゼレン（Ernst Wilhelm Bernhard Eiselen, 1792年-1846年）の協力のもとで上梓し、トゥルネンの基本的な指針づくりとその徹底に努めた。同書の内容は、ハーゼンハイデでの5年間の活動を参考に発展させたものであった。

『ドイツトゥルネン術』では、トゥルネンの基本的運動である歩行運動・走行運動・跳躍運動・跳馬運動・振動運動・水平棒（鉄棒）運動・平行棒運動・よじ登り運動・投擲運動・引く運動・押す運動・拳上運動・運搬運動・伸展運動・レスリング・輪とび・縄とびの17種目が紹介されている。そこで、従前の歴史研究で明確な記述が残されている、歩行・走行・跳躍・振動・平行棒・投擲・伸展・レスリングに焦点を絞り、それらの運動概要を明らかにしていきたい¹²⁾。

1. 歩行（Gehen）

ハーゼンハイデでは、実際に行っていない。ヤーンは歩行運動について、様式化した技法に基づいた歩行、規則正しい歩行、隊列を組んだ行進としての歩行ではなく、単純にハイキングをすることと理解していた。

2. 走行 (Laufen)

(1) 幅と距離が必要な競走路。本来であれば競走を実施するが、とりわけ、見るトゥルネン、として好評を博した蛇行走が実施された。

(2) 曲がりくねった競走路。2つ並んだ同形の円。体を円心に向けて斜めに傾け、左回り、または、右回りで走ることができる。2重の円やさらに多くの円がある競走路では、必然的に変化のある蛇行運動になる。

ヤーンは走行運動の変形として、円弧での走行、直線と角度をつけたジグザグ走の他に、蛇行走、螺旋走、タゲリ走、後方走、突撃走を加えていた。また、かなり険しい小丘陵を登ることも走行運動に含まれていた。

3. 跳躍 (Springen)

跳躍運動は、多くの歩行と走行の合間に実施されていた。ヤーンとアイゼレンは、ともに跳躍独自の運動性質があると考え、跳躍運動の種類を非常に多く増補した。また、ヤーンは跳躍運動のなかから、さらに他の運動性質を見出した。

(1) 高跳び

高跳びは、踝、ふくらはぎ、膝から、鼻、目、額、頭頂などの14種類の異なった身体部位に向けた跳躍方法が提示された。それにより跳躍の計測が可能となる。ヤーンによれば、高跳びには活気と跳躍する人間の個性が表出されるという。

(2) 幅跳び

身長に応じて計測される。幅跳びでは、おおよそ身長の2倍の長さを跳べるように目標を置いた。身長2倍半跳んだならば、それは良い跳躍であり、さらに3倍跳べば、並外れた跳躍であるとヤーンは考えた。

(3) 垂直跳び

垂直に地面から跳び放つ。反動を付けずに15 cmから23 cmの足の設置部から跳び、低くて45 cm、高くて150 cm跳べれば十分であった。

4. 振動 (Schwingen)

振動は、足の蹴りによって身体を維持し、手で体を支持させる。振動運動を実施する際に、まず、手を棒に乗せる。振動運動の準備、または、運動の移行時に

行う軽い跳躍も計測するのではなく、トゥルナーが自分自身で体を前方に始動した時に数字を数え始める。振動運動から懸垂、蹴上がり、回転、飛び降りなどへ応用できる。

5. 平行棒 (Barrenübungen)

平行棒は、ヤーンによって振動のための予行演習に向けた器材として開発された。以下、平行棒運動の性質について2例あげる。

(1) 振り上げ、両腕で支え、倒立運動 (いずれも腕の強化を意図した)

- ・両腕で支えながらのバウンドと支持
- ・腕の曲げ伸ばし
- ・両腕を支えながらの足の持ち上げ
- ・倒立、および、倒立をしたままでの飛び跳ね
- ・前振りひねり倒立

(2) 全振動運動

- ・長座姿勢での方向転換
- ・方向転換と下向き横跳びこし
- ・開脚入れに向けた振動
- ・腕の上下動による振動
- ・平行棒での倒立回転

6. 登攀 (Klettern)

従来の登攀運動と同様のものであり、新しいものではなかった (図-4 参照)。

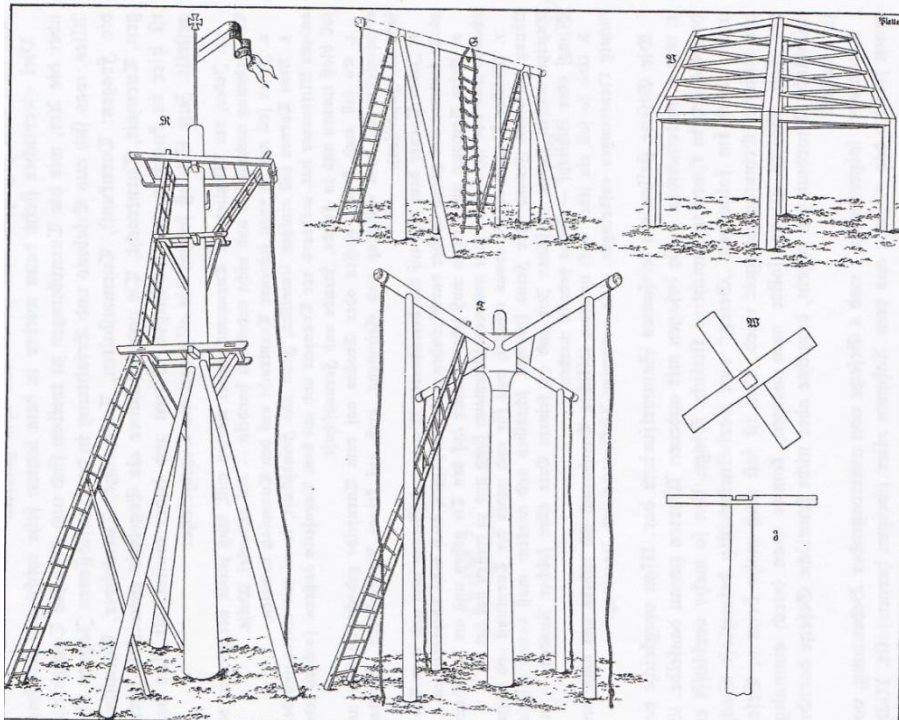


図-4. 『ドイツツウルネン術』の登攀

(Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.209 より転載)

7. 投擲 (Werfen)

ヤーンとアイゼレンは、幅広い投運動の種類を列挙した

- ・ライフル、石弓、弓、槍で撃つ
- ・的のある1ポンドから3ポンドの砲丸投げ
- ・距離を競う6ポンドから24ポンドの砲丸投げ
- ・小石、ボールを手で投げる
- ・固い地面上に投運動であえて衝撃を与える
- ・平たい石、木片、かけらを水面にかすめて飛ばす

8. 伸展 (Strecken)

- ・手を利用した伸展運動は、腕立て伏臥である。
- ・地面から前方方向と後方方向へ体を持ち上げる
- ・椅子やベンチに座りながら、足をつま先から膝関節の高さまで曲げ、伸ばす

9. レスリング (Ringen)

レスリングでは、生命力や新鮮さをテーマとして、何よりも対戦することに喜びを感じることを、それに加え、レスリングを行うことにより肉体的な痛みを感じないように行うことが重要であった。

ヤーンは、前述したとおり、これらの基本的運動と同時に遊戯も重視していたが、その内容は、以下のとおりである¹³⁾。

1. ツールネン場と遊戯場

黒ん坊 (Schwarzer Mann)

陣取り遊戯 (Barlaufen)

2. ツールネン場外

騎士と市民 (das Ritter- und Bürgerspiel)

狩猟遊戯 (das Jagdspiel oder die Jagd)

突撃遊戯 (das Strümen oder der Sturm Lauf)

ドイツ球技 (das deutsche Ballspiel)

体育史研究に従事する森田は、遊戯に関わるヤーンの選択基準には、「ドイツ性」、「運動」、「道徳性」の基本的視点がまず存在しており、具体的条件が定められていると論じている¹⁴⁾。そこで、遊戯を実施するにあたり、ヤーンが実際に掲げた具体的条件を以下にあげておきたい¹⁵⁾。

1. 大規模で広大な設備を必要としない。
2. 容易に習得でき、しかも、ルールにより基礎づけられている。
3. 単なる偶然、もしくは、多くの偶然に左右されない。
4. 少人数の場合でも、容易にツールネンの目的に適ったものを実施できる。
5. 現状況が少人数の場合でも、広い場所を必要としない。
6. 参加者のなかに、無味乾燥な傍観者を必要としない。
7. 各々の参加者が、適切に動き、意味なくはめをはずすことがないように取りはからう。
8. 負荷と休息という有効的な配分がとれている。

9. 一方的で、かつ、交代もなく長期にわたって単調に繰り返すことがない。
10. 上手く遊戯を実施するためには、遊戯仲間の敏捷性と器用さを必要とする。
11. 常に新たな熱意と活気ある遊戯への参加を可能とする。
12. とりわけ、青少年の情緒（童心）を味わう。

ヤーンは「遊戯なくしてトゥルネンは栄えず、遊戯場のない運動場は全く考えられない」¹⁶⁾とトゥルネンにおける遊戯の役割を強調し、その教育的意義を評価していた。ヤーンの考える教育的意義とは、遊戯が国民生活を豊かにする橋渡しとなり、青少年の友情の輪を広げる力を備えているが故に、感動的で、喜びに満ちた、新鮮な競争の精神が息づいている遊戯をとおして、青少年が同等の権利と規則のもとで競えるという点にあった¹⁷⁾。また、ヤーンはトゥルネン場を作る際に必要な施設や用具について述べている。場所は徒歩で30分から60分圏内に位置し、空気と水はけの良さを考慮し、少々高地で芝生と樹木の茂った土地が好ましいと判断してした¹⁸⁾。

最後にヤーンは、トゥルネンをどのように実践すべきかとする点について、「トゥルネン術」(Turnkunst)、「トゥルネン施設」(Turnanstalt)、「トゥルネン場」(Turnplätze)、「トゥルネン教員」(Turnlehrer)、「トゥルネン練習」(Turnübungen)、「トゥルネンの時間」(Turnzeit)、「トゥルネンの服装」(Turntracht)、「休憩場」(Tie)、「観客」(Zuschauer)について述べている。トゥルネンの意図を具現化する実践の場がトゥルネン場(Turnplatz)であり、都市単位で設置されることが望ましいとして、ヤーンは教区ごとにトゥルネン場を設置するように指示した¹⁹⁾。これに加えて、トゥルネンの指導者像が提示され、ヤーンはトゥルネン教員(Turnlehrer)と称されるトゥルネンの指導者の心構えについて、以下のとおり列挙している²⁰⁾。

1. 悪い模範を青少年に提示してはならない。それは、トゥルネン場外でも同様である。
2. トゥルネンの時間内は、喫煙や飲酒をはじめ、青少年に相応しくない如何なる飲食も禁じる。
3. 上品ぶった、表面的な振る舞いではなく、絶えず好感が持てるようにしなければならない。
4. トゥルネン場に遅れて来るのではなく、可能な限り、早く来なければならない。

5. 法を順守する監視人として規定を第一に守り、傲慢な印象を与えてはならず、厳格な審判員であらねばならない。
6. 決して全てのトゥルナーを凌駕する、もしくは、彼らと競い合うのではなく、喧噪やわめき声をあげずに、物静かで謙虚にトゥルネンを実施しなければならない。
7. 青少年との対話を誘導しなければならない。その対話は啓発的で、青少年を楽しませるものであり、対話のなかでの発言によって嫌悪感を与えてはならない。
8. 学校での授業のような堅苦しさを避け、気品ある真面目さ、および、情愛をともなった友好的な振る舞いと態度でなければならない。
9. 重要な事柄に熱中させること、金欲的な利己主義や下劣な虚栄心を駆り立てないよう、一日の目標を明確に据えなければならない。
10. 人間として愛し、人として尊重することを前提として、生徒、弟子、信頼を寄せている者同士が共に過ごすことに理解を示し、共に交流することを心得なければならない。
11. 隠れている特性を探り出し、発芽しようとする長所を育成し、芽生えだした民族性を構築しなければならない。
12. 古参者、リーダー、レフェリー、助言者、警告者としてトゥルナーを統治しなければならない。

ヤーンが求めたトゥルネンの教員像は、如何なる時であっても品格を持ってトゥルナーに接し、トゥルナーの長所を伸ばすことに指導上の力点を置き、トゥルナーたちが身分を越えて、互いに信頼関係を持って交流できるように配慮できる教員であった。さらにヤーンはトゥルネン教員について、時代社会の流れを読み取り、国民性を理解し、青少年からの尊敬を集めなければならないと説いた²¹⁾。ここからヤーンが、1806年の敗戦により自信と気力を欠き、意気消沈していた若者にたいして、トゥルネンにより祖国ドイツの民族性を高揚させんとする教育をトゥルネン教員に求めていたと捉えられよう。ヤーンは、このようなトゥルネンの意図や精神を下記のとおり、規則のなかに組み込んでいった²²⁾。

1. トウルネン共同体 (Turngemeinschaft) に属しているあらゆる参加者は、トゥルネンの秩序に従って忠実に生き、決して異なった方法で行動を行わないことを、最初に誓わなければならない。

2. トウルナーは、トウルネン場に灰色の麻でできたトウルネン用の服装で参加すること。
3. トウルナーは、トウルネンの時間とトウルネン場にいる間、仲間のトウルナーに憤懣、私闘、敵意を持たないこと。トウルナー各位は、平和と喜び、友情をもってトウルネンを行わなければならない。
4. トウルネン場で憎悪、または、恨みを持ち込まないこと。往路や帰宅途中、または、トウルネン旅行（遠足、徒歩旅行）でも同様である。
5. あらゆるトウルナーは、トウルネン場への移動について指定された方法と道順でのみ行うこと（這って通り抜けたり、乗り移ること、跳び移ることもしてはならない）。
6. トウルナーは、出入りするときはティー（Tie）へ行き、案件が掲げられている木に、誰かに知らせなければならないことが記述されているかどうか事前に確認すること。
7. どのトウルナーもとにかく、トウルネン術と我々の練習の賛否のために、その賛助者と反対者と対話し、文章にし、活動することを経験すること。そこから即座に訴えを行わなければならない。それと同時に時間と場所をすべての通知で（思いやりまたは侮辱）を考えさせなければならない。
8. そして我々の賞賛に値するトウルネンの慣習に従って、新しい病的な改革を流布させず、事前の協議と審議をすることなしにトウルナーを修復するべきである。

これに続けてヤーンは、「トウルネン活動が人間形成の主要な部分とならなければならないこと、それは民族的な性格をもったもので、同じものがどこの地域にも通ずるといようなものではないこと、そのような活動をもてる民族は独立して自由な立場になければならないということ」²³⁾とトウルネンの実践者に訴えかけ、「ドイツの国民性がドイツ国民性と呼ばれるものであるように、ドイツの体育的活動がトウルネンである」²⁴⁾と喝破した。

トウルネンの活動形態の実際に注目してみると、先述したとおり基本的に学校の授業のない水曜日と土曜日の午後に実施され、それを前後半に区分し、前半は自由意志によって取り組まれる自由練習（Turnkür）、後半は定められた課題を集団で練習する集団練習（Turnschule）に割かれていた。前半については、各人が自ら運動を選択し、最も得意なものと苦手なもの、あるいは、更に鍛える必要があるものを練習した。トウルネンの参加は、

誰にも開かれていたが、決して強制されて実施する者は存在せず、強制する者も存在しなかった。そこには学校教員も参加していて、学校教員にあっても指導者の指示とトゥルネンの規則にたいして秩序を保ちながら自発的に従い、時には指導する立場として注意を払わなければならなかった²⁵⁾。

自由練習と集団練習の間には休憩が入り、参加者はトゥルネン場中央にあるティー (Tie) と呼ばれる休息所に集まった。そこで、乾燥したパンや水を味わい、民族歌をみんなで歌い合い、また、トゥルネンの規則の徹底化を図らんとして、ドイツの民話が伝えられ、詩が朗読されたように²⁶⁾、ティーは愛国心が発揚する場でもあった。休憩が終わると、チームトゥルネン (Riegenturnen) の時間となり、年齢ごとに分かれた練習が始まった。全ての練習はグループごとに実施され、各グループに配置されたリーダーは、運動の仕方の模範を示したりしたが、必ずしもリーダーばかりではなく、グループ内で実力を有する者の代行も認められた²⁷⁾。

先に取り上げた練習時の服装について、ヤーンは、「長もちし、安価なもので、あらゆる運動に適するものでなければならない。一番良い服地は灰色のさらしてない亜麻の布である。その他の布地は、わずかしか長持ちせず、安価ではないので、容易に洗うことができない。灰色の亜麻のジャケットとズボンは、誰でも調達することができる。もし外国の服地を用いると、練習は直ちに富者と貧者とに区別しなければならなくなる」²⁸⁾ として、経済力の違いに関係なく、誰もが平等にトゥルネンを実施できるように規定した。ヤーンは、トゥルネンの運営や練習が滞りなく進行するために集団規律に重きを置き、トゥルネンに臨むにあたっての基本姿勢として「新鮮に、自由に、楽しく、敬虔に」(Frisch, Frei, Fröhlich, Fromm)²⁹⁾ という4Fを掲げた。

『ドイツトゥルネン術』の発行により、トゥルネンの理論と実践に関わる詳細が具体的に提示されたことを要因として、トゥルネンは瞬く間にドイツの広範に拡大していった。トゥルネン場は、単にドリルを反復する空間ではなく、また、堅苦しい雰囲気を満たされた軍事演習の空間でもなく、トゥルナー個々が品位を保ち、紳士的な態度で運動を実践する空間であった。仮にトゥルナー間で異なる意見が浮上したとしても、トゥルナーはそれを理性的に対応し、仲間を思いやる寛大な態度で共同体を意識して、トゥルネンに励んでいった³⁰⁾。ここに述べたように、トゥルネンをとおして、より高い人間性を培うこと、すなわち調和的な人間形成を育み、積極的で楽しみながら共同体のなかで活動し、共同体のために持ち得る力を全て注ぐ精神を養うこと、それがまさしくトゥルネンの目的であった

31)。ヤーンは、「体育 (Leibesübung) は明確な国民教育 (Volksbildung) への手段である」³²⁾と述べているが、ヤーンにとってトゥルネンは、完全なる国民教育の手段であったのである。トゥルネンの何よりの決定的な成果は、最終的にドイツとドイツ民族といった祖国愛を醸成したことであった。

ヤーンは、トゥルネンを学校外の自主的な社会体育活動として位置付け、地域別のトゥルネンクラブ組織「トゥルンフェアアイン」(Turnverein)を結成し、その会員たる数々のトゥルナーを産み出し、クラブの会員数が急速に増えたことにより、トゥルネンはプロイセン政府によって積極的に受容されていった³³⁾。ヤーンは、自らの指導能力の高さと他者に働きかける独特の技術で、良い習慣と自由な秩序をもった一つの集団に多様な青少年たちをまとめあげることに成功したが³⁴⁾、実際のところは、トゥルネンにたいして背を向ける向きも少なくなかった。彼らの反感の矛先は、トゥルネンの開放的かつ挑戦的性格、運動にともなう過度な努力と危険性、規定された服装にあり、トゥルネンが「古代ドイツ時代を再現しようとする一つの新しい没常識である」との意見もたちあがった³⁵⁾。またトゥルネンの史的考察に取り組んだ小原によれば、青少年の身体育成に理解を示し、トゥルネン場の設置を推進したのは、大学教授、校長、教師、教育行政官、家庭教師等の教育関係者や医師、市長といった教養市民層に限られており、トゥルナーの社会的出自は、父親の所属階層別に分類すると、その多くが上・中流市民層の子弟であったこと、そして中・下層の民衆がトゥルネンに対して反感を抱いていたと論じている³⁶⁾。しかし、ヤーンは自らに向けられた批判に臆することなく、自ら掲げる目的にたいして猪突猛進であった³⁷⁾。

トゥルネンの普及が加速するなか、1813年の対ナポレオン戦争では、ヤーンとともに多数のトゥルナーが義勇軍として戦った³⁸⁾。解放戦争後の1814年6月にハーゼンハイデで開催されたトゥルネン祭 (Turnfest)を皮切りに、同年10月に諸国民解放戦争1周年を記念してベルリンでトゥルネン祭が開催され、このトゥルネン祭にはプロイセンの皇太子や皇族や貴族などを含めおよそ1万の観衆が詰めかけ、ヤーンのトゥルネン活動は最高潮に達した³⁹⁾。1817年にも、ベルリンにおいてパリ占領記念日にあたる3月31日と諸国民解放戦争の戦勝記念日の10月18日にトゥルネン祭が開催された。トゥルネン祭は次第にベルリン以外の地域にも拡大し、リグミッツで1818年8月にフランスにたいするシュレーゲン軍の勝利を記念し、また、同年にはエルフルトで国王の誕生日を記念したトゥルネン祭が開催された⁴⁰⁾。1811年に産声をあげたヤーンのトゥルネンは、1814年に最高潮を迎え、1818年にはプロイセンだけで100を越すトゥルネン場が開設され、祖国愛に燃える多くの人々

がトゥルネンに傾倒していった⁴¹⁾。プロイセン政府はトゥルネンに対しておおむね好意的で、新しい軍隊は懲罰強制によってではなく、個々の兵士の自発性によって編成されねばならないと考え、ヤーンのトゥルネンはこのような軍制改革の理念に合致するものとして注目された。1815年にはハーゼンハイデのトゥルネン場にたいして政府の資金援助が開始され、さらにプロイセンのみならず、他の連邦でもヤーンのトゥルネンは注目され、君主自らトゥルネン場の設置や指導者の派遣をヤーンに依頼するまでにヤーンのトゥルネンは社会運動として拡大していくこととなった⁴²⁾。

第3項 トウルネン禁止令

ヤーンのトゥルネンに刻み込まれた、身分を越えた平等性の確立、調和的な人間形成という目的は、フランスとの解放戦争（1813年-1814年）を経て、オーストリアの外務大臣であったメッテルニ（Klemens von Metternich, 1773年-1859年）によって打ち出された、自由意志の圧迫、国民の不平弾圧という方針に基づいて、反政治体制の象徴とみなされていった。ヤーンは1817年1月から4月にかけて、「ドイツ民族性」と題した公開講演を行った。この講演は21回にわたり、多くの市民の耳目を集め、新聞等でも取り上げられるほど熱狂的に受け入れられ、ヤーンとトゥルネンの活動の知名度をさらに高めることとなった。しかしヤーンの講演内容が、ドイツ統一と憲法制定の意義、解放戦争以後の反動政治を否定するなど、当時の偽政者に対する厳しい批判を含むものであったため、トゥルネンの教育効果にたいする疑念が政府関係者から起こり、ヤーンに批判を加える知識人も登場するようになった。ヤーンの激情的で粗野なトーンでの講演は、批判に追い打ちをかける結果を招いた⁴³⁾。

ヤーンとトゥルネンにたいする不信感が広がる決定的な契機となったのは、1817年10月18日から19日に開催されたヴァルトブルク祭であった。ヴァルトブルク祭は、ドイツの学生結社連合であるブルシェンシャフト（Burschenschaft）⁴⁴⁾の主催で、ルターの宗教改革300年とライプチヒでの戦勝を記念して開催されたものである。そこで実際にヤーンは欠席したものの、ヴァルトブルク祭の開催にあたり、ブルシェンシャフトに様々な指示を与えていたという。ヴァルトブルク祭の2日目に、トゥルナーやブルシェンシャフトの学生たちが、反体制活動に熱をあげ、体制側に与した人々の書物、ナポレオン法典やヘッセン軍の兵帽、プロイセン騎兵の軍服、オーストリア軍の使用するステッキともどもを火中に投ず

るといふ事件が勃発した。この行為は、ヴィーン体制を構成する諸連邦政府にブルシェンシャフトとトゥルネンを危険視させるに十分なものであった⁴⁵⁾。

1818年9月30日から11月21日にかけて、オーストリア、プロイセン、ロシア、イギリスの代表がアーヘンに集まり、アーヘン会議が開催された。ここでドイツの革命的な雰囲気を感じたロシアの提案により、ブルシェンシャフトとトゥルネンの活動を含む一切の進歩的な自由主義運動、革命運動を封じる方針が決められた。当時の政権にあったメッテルニヒの反動体制は、ドイツの統一と憲法の制定を要求するトゥルナーや学生を危険分子として弾圧しはじめ⁴⁶⁾、最終的にプロイセン政府は1819年3月15日の文部省通達により、正規の学校教育外でのトゥルネンの活動禁止を決定した⁴⁷⁾。そこから間もない3月23日にトゥルネンと密接な関係にあった学生ザント (Karl Ludwig Sand, 1795年-1820年) が、保守主義者として知られていた文筆家で、ロシアの国家顧問を担当していたコツェブー (August von Kotzebue, 1761年-1819年) を暗殺する事件が勃発し、この一事が政府をあらたな恐怖へと追い込んでいった⁴⁸⁾。

多くのトゥルナーやブルシェンシャフトに属する学生たちは、徒党を組んでメッテルニヒ体制保守派との対立を深めていったため、体制保守派にとって、ヤーンのトゥルネンが内包する思想は、自らを転倒させる反乱因子と映るようになった。その結果、ブルシェンシャフトが解体され、さらに、ヤーンも国内秩序を乱す危険分子として1819年7月14日未明に逮捕され、それと同時にハーゼンハイデのトゥルネン場も閉鎖された。これにより、プロイセン政府によりブルシェンシャフトとトゥルネンの活動が厳禁とされ、大学を追われた教授や学生は、いかなる大学にも在学する権利を取得することができなくなり、また、新聞、雑誌、書籍等の全ての出版物は、政府の厳重な検閲下におかれるようになった⁴⁹⁾。これらの状況が指し示すように、プロイセン政府は1820年6月に「トゥルネン禁止令」 (Turnsperr) を正式に発令し、これをうけて他の連邦国においてもトゥルネンは、禁止されていった⁵⁰⁾。

トゥルネン禁止令の期間 (1820年 - 1842年) において、トゥルネンが公然の活動として許諾されたのは、児童・生徒を対象とした「トゥルネン教室」 (Turnanstalt) に限定された。このトゥルネン教室を主宰した者に、トゥルネンの活動を推進しようとした2人の人物が存在した。一方の中心人物がヤーンのトゥルネンをあくまでも継承・発展させようとしたマスマン (Hans Ferdinand Maßmann, 1797年-1874年) であり、他方の中心人物が教育機関との連携に基づく合法的な活動を展開しようとしたアイゼレン (Ernst Wilhelm Bernhard

Eiselen,1792年-1846年)であった⁵¹⁾。彼らのトゥルネン教室では、運動器具や体育館の使用を目的に成人男性が加入している場合もあったが、あくまでも活動の主眼は未成年者の身体教育に置かれていた⁵²⁾。

ヤーンの弟子であったマスマンは、1827年に国王から軍隊と皇族の体育指導を委任され、その翌年に「公共体育学校の建設について」とする提案をまとめた。提案の内容は、学校から離れた場所で自主的な共同生活を送るという、ヤーンのトゥルネンを目指したものであった。これは、トゥルネン禁止令が徹底化されていた地域では実施が不可能に近い状況であったが、トゥルネン禁止令の矛先の中心は、ドイツ統一と憲法制定を求める社会運動に据えられていたため、諸々の活動の全てが排除されたわけではなかった⁵³⁾。アイゼレンは、ハーゼンハイデのトゥルネン場が閉鎖されて以降も、ベルリンのプラマン学校でトゥルネンの指導を継続していた。1819年8月にベルリン行政府へトゥルネンの再開を申し出て失敗に終わったが、学生のための剣術と乗馬の教室を1826年に開設し、その翌年に小規模なトゥルネン場の開設を政府から許可され、1833年には嚆矢となる女子のためのトゥルネン場を開設した。アイゼレンは、これらの活動と並行して数多くの体育書を上梓し、体育理論の確立に精力を傾けたが、そこにはヤーンが目指した身体運動を介した国民形成という政治的な意図は存在せず、人間の身体それ自体を自然科学の観点から直視する非政治的な色彩を帯びた性格が貫かれていた⁵⁴⁾。

トゥルネン禁止令が発令される以前から、すでに軍隊体育の要求が存在していた。プロイセンでは、国民軍の創設という、国家運営の根幹にかかわる改革に着手していた。従来の軍隊は、徴兵区制度による主として農民と都市下層民の徴兵、および、外国人の傭兵を基盤としていたが、国民が国家の護衛にあたるという原則のもとに、「一般兵役義務」(20歳以上の国民男子の兵役義務、3年の現役、2年の予備校、各7の第一・第二後備役)が1813年に時限立法として発布され、翌1814年には恒久的な立法として導入された⁵⁵⁾。この一般兵役義務は、フランスとの解放戦争中に導入されたものであったが、解放戦争後の1816年には、ヤーンのハーゼンハイデにおけるトゥルネンに国防大臣の支持で軍人が参加していた。さらに、軍隊の水泳学校も1817年にベルリンで設置された。これらの軍隊体育は、トゥルネン禁止令の影響を全く受けることなく、時代の要請として存続した⁵⁶⁾。

トゥルネン禁止令期間中、医師たちの間では健康問題との関連で体育の重要性が叫ばれるようになった。そのなかでコッホ(Karl Friedrich Koch, 1802年-1871年)は、1830年に著書『食養生法と心理学の観点からの体操』(Die Gymnastik aus dem Gesichtspunkt der Diätetik

und Psychologie)、シュレージエンの医師ロリンザー (Carl Ignatius Lorinser, 1796 年-1853 年) は、1836 年に『学校における健康予防について』(Zum Schutze der Gesundheit in den Schulen) をそれぞれまとめた⁵⁷⁾。これらはトゥルネンが禁止されていても、教育的・医学的配慮からの体育論や、兵役準備に関連した体育論の必要性を骨子としたものであり、学校教育のなかで青少年育成のためにトゥルネンを導入させようという動きへと発展していった。結果として、ヤーンのトゥルネンをもとに自然科学的な見地に立脚した体育論、兵役の予備段階としての体育論の要素を基軸とするアイゼレンの活動は、体制側の維持・強化に適った体育の構築・実践という点で大きな役割を果たした。

1830 年代を迎えてドイツ社会で急速に進んだ産業資本主義化に起因する市民階級の増大を背景に、トゥルネン禁止令が発令されているにもかかわらずトゥルネンに関わる諸活動が各地で活発化していった。体制側は当初の意向を翻意し、枢密顧問官にあったシュルツェ (Johann Schulze, 1786 年-1869 年) よってまとめられた 1837 年 10 月の文部大臣回令により、上級の諸学校における体育の採用を許可した。これによりトゥルネン禁止令は、学校教育への効力は失われ、この回令によって体育を促進する活動は容易なものとなった⁵⁸⁾。

シュルツェは、体育が心身のバランスであり、兵役への準備になり、市民共同体への教育の一手段になるという旨をまとめた提案を 1842 年 4 月にプロイセン国王に提出した。これを受けて、6 月 6 日にプロイセン国王ヴィルヘルムはシュルツェの提案に賛同し、体育勅令を発した。その内容をまとめてみると、①青少年の精神形成は、発達の過程と現時点の教育の現状とに応じてなさねばならず、健康の維持・増進に特に留意し、心身の諸力の調和的形成によって祖国に有用な子弟を育成すること②かつてのトゥルネンの身体的、特に道徳的欠陥を引き起こす一切のものを除去すれば、体育が所与の目的を促進するのにふさわしいものであること③身体運動が男子教育に必要不可欠の領域であること④体育が教育全体のなかに取り入れられ、公教育施設と結び付けられ、校長の監督下に置かれるべきであること⑤無用なもの、見せかけのもの的一切を排除して、身体運動を完全にしよう配慮すべきであることであった⁵⁹⁾。

プロイセン政府は、ヤーンのトゥルネンを学校体育のなかに取り入れるものの、ヤーンの政治思想性を排除し、体育の目的についてトゥルネンをとおした身体形成のみに限定した。トゥルネン禁止令が発令される以前から軍隊体育の要求も出ており、シュルツェもプロイセン国王にトゥルネンが兵役への準備になると提案していたことから、プロイセン政府が積極的にトゥルネンをとおした軍事能力の確保と青少年の身体訓練とを結合させよう

としていたことが、シュルツェの体育勅令から見受けられる。

学校体育の確立のために政府の要求に合致した方策を打ち出したのがシュピース (Adorf Spieß, 1810年-1858年)であった。かねてからヤーンのトゥルネンの熱心な信奉者であったシュピースは、1842年に自らのトゥルネン再建構想の見解である「国民教育への体育導入案」(Gedanken über die Einordnung des Turnwesens in das Ganze der Volkserziehung)をプロイセン政府に提出した。シュピースはこの提案のなかで、トゥルネンが学校教育に相応しいように根本的に構成し直すべきであるとする考えのもと、トゥルネン導入案をまとめ、学校へのトゥルネン導入の指針を明らかにした⁶⁰⁾。

この期の政府が学校体育に求めていたものが、「秩序と規律と良風」を身につけ、政府に「すなおに奉仕」する「臣民」の育成であり、この「臣民の兵役義務」の準備であった⁶¹⁾。プロイセン政府が望むトゥルネンをとおした体育とは、近代国民国家の兵士像であり、非個性化した労働力の養成であった。それは工場で大量生産される銃と同様、他と取り替え可能な集団のなかの歯車としての訓練を受け、身体をとおして服従的精神を育むものであり、ヤーンが始めたハーゼンハイデでの自由な秩序をもったトゥルネンとは異質なものであった。学校体育を基礎として国民教育を行うべきとの考えを保持していたシュピースのトゥルネン再建構想は、まさしくプロイセン政府の意向に合致するものであった。それは、ヤーンのトゥルネンが社会騒動の温床であるという考えを抱き、ヤーンのトゥルネンこそ国民教育への体育導入を阻止するものであると確信していたからである。結果として、シュピースは教科体育を中核とする学校体育の確立に寄与することとなり⁶²⁾、プロイセン政府は学校教育へのトゥルネンをとおした体育導入に踏み切っていったのである。

プロイセン国王ヴィルヘルムの体育勅令により、国民教育の一手段という範囲内で、男子教育に必要な営みとしてトゥルネンの存在が見直され、約20年にも及んだトゥルネン禁止令は廃止された⁶³⁾。プロイセンの禁令解除に続き、1843年にはバイエルンの全学校にたいして運動場設置の政府勧告が出され、ヴェルテンベルクでは中等学校への体育教育の導入が決定された。また、1846年にはバーデンとザクセンで、1847年にはオルデンブルクでそれぞれ体育教育が開始された。こうしてトゥルネンは、1840年代に学校教育への導入を契機として再開された⁶⁴⁾。

トゥルネン禁止令が解除されると、プロイセン政府の意図に反してトゥルネンは息を吹き返し、活動が活発化していった。1811年にヤーンが初めてトゥルネンの活動を始めて以来、100以上のトゥルネンクラブが組織されていたが、禁止令以降はその多くが解散を余儀

なくされたにもかかわらず、禁止令が解除されると、再び各地に多くのトゥルネンクラブが結成されていった。トゥルネン禁止令が発布される以前、様々な世代、階層の人々がトゥルネンに参加していたが、その中心は青少年であった。1840年代に差し掛かりドイツ各地に再び開設されたトゥルネンクラブでは、当時成長しつつあった市民層を中心に、産業革命にともなって増加したプロレタリアートを含め、多様な人々の参加が顕著に認められ⁶⁵⁾、また、労働者階級を中心としたクラブも設立され始めていた⁶⁶⁾。新たに設立されたクラブでは、身体トレーニングに傾注するばかりでなく、民族統一を標榜する政治運動的な志向性を有していた。その証左として、842年にマインツ、1843年にハーナウ、1845年にロイトリンゲン、1846年には南ドイツのハイルブロンで大規模なトゥルネン祭が実施されたが⁶⁷⁾、各地で開催されたトゥルネン祭は、身体的な能力を誇示するとともに、国民アイデンティティの構築・強化という性格を帯びたものであった。この延長線上で、1848年3月に生じたドイツ3月革命を契機として、トゥルネンの政治色はより一層濃くなっていった⁶⁸⁾。

その一方で、身体の鍛錬や地域住民との交歓こそがクラブ活動の目的であると考え、政治運動から距離を取ろうとしたトゥルナーも存在していた。しかし、ドイツの「自由」と「統一」を声高に叫ぶ政治的トゥルナーの旺盛な活動の前に、非政治的なトゥルナーの批判や躊躇は、抑制力にはならなかった。非政治的なトゥルナーはしばしば臆病者と罵倒され、身体訓練のみに限定されたクラブ活動は「トゥルネン術への裏切り」行為とみなされた⁶⁹⁾。

1848年3月に勃発したドイツ3月革命の大きな目的は、社会的、政治的な自由を獲得するために体制側を打倒し、国民の代表からなる国民議会を設置し、憲法制定を進めるとともに、最終的にドイツ統一を実現することであった⁷⁰⁾。トゥルナーの大部分は、革命を目指す義勇兵として自由と権利を求め、革命側に帰属した。民族統一を重要な課題に据えていたドイツ3月革命では、民族統一にたいする考えをめぐって自由派と共和派に大きく分かれ、自由派に属する者の多くは立憲君主制を支持し、急進的な小市民層やプロレタリアートに属するものは共和制を支持した⁷¹⁾。この余波はトゥルネンにも及ぶところとなり、トゥルナーの活動は、祖国の解放と統一を求める政治運動的要素を含み、革命直前になるとトゥルナーの発言や行為は、革命や武装化を促す発言が多くみられ、過激な発言が飛び交うようになった⁷²⁾。さらにトゥルネンの内部においても、トゥルネンの全国的な統一団体を設立するにあたり、立憲君主制と共和制のいずれに従うべきかで対立が生じた。領邦

君主にたいして武装化した3月革命期のトゥルナーたちが分裂し、3月革命が未完成のままに終焉すると、以前のような反動体制が復活し、再びトゥルネンは弾圧されていった。以後、トゥルネンから政治的主張が薄れていき、体制へ奉仕する団体へと組み替えられていった⁷³⁾。

1850年代に入ると産業革命が進展し、その担い手であるブルジョワジーが経済的に大きな力を獲得していった。著しく伸長した経済力を背景として、ブルジョワジーは領邦君主にたいして政治的・社会的自由を強く求めるようになり、トゥルナーたちへの弾圧も徐々に緩和していった。そのなかで、1856年にはトゥルネン祭の再開、『ドイツトゥルネン新聞』(Deutsche Turn-Zeitung)の創刊が実現し、また、1860年に第1回ドイツトゥルネン祭が開催され、これらの帰結として、1868年に全国の隅々へ散在していたトゥルネンクラブの統合団体として「ドイツトゥルネン連盟」(Die deutsche Turnerschaft)が設立し、社会体育として確立されていくのである⁷⁴⁾。

トゥルネンは1840年代に学校教育への導入を契機に再開されたが、そこには学校体育を基盤として、その継続教育としての社会体育の基礎を固めながら国民教育への体育導入を実現させんとしたシュピースのトゥルネン再建構想が存在した。それは、ドイツの近代的な学校体育・社会体育の確立にきわめて重要な役割を果たすこととなる。そこで次節では、ヤーンのトゥルネンを基盤として、シュピースとその弟子であるマウルが再構築したトゥルネンがいかなる様相を呈していたのかという点を明らかにしていきたい。

第2節 ドイツ国民体育の成立

第1項 シュピース＝マウル方式の概要

「ドイツ学校体育の父」と称されるシュピース(A.Spiess,1810-1858)のトゥルネンは、ヤーンのトゥルネンと趣が異なり、徒手体操や手具体操、集団運動を運動の基盤に据え、集団秩序運動(Ordnungsübung)を主軸とする体育の確立に指導的な役割を果たした。シュピースの集団秩序運動とは、いかなる運動であったのかという点に着目し、ここでは、シュピースの運動理論である「要素化」と「鋳型化」を両軸とする集団秩序運動の概要について述べていきたい。

(1)「要素化」による運動の体系化

シュピーースは、運動の体系化の出発点を「運動する身体そのもの」に求め、運動の主体たる身体について、「分節化された (gegliedert) 一つの全体」であり、「精神の道具」であると捉えた。この精神に従属する身体の運動は、「精神的本質の象徴的な代役」であり、「内面的全体の身体的表出」である。この身体観や運動観に基づいて、シュピーースは「身体運動のあらゆる現象の基礎を成す精神が、各々の活動形態 (Gestalt) をとおして身体的に立ち現れるか」という点に関わる研究を重ねていったのである。この「身体の外的現象」に視点を置いた「運動可能性」(Bewegungsmöglichkeit) という「共通の体系原理」に基づく身体運動の体系化は、「身体の随意的な力と活動の実施における、身体の精巧な機構に関係し、その力と活動を最も単純な構成要素に分析し、さらに種属 (Gattung) と種目 (Art) に従って配列される力と運動の組み合わせ」⁷⁵⁾ が基盤となっている。

シュピーースは、運動を簡素なものから構成されたものへ、容易なものから困難なものへと組み換え、とりわけ、困難な運動について分節化し、それを厳格かつ忠実に実行させた。教員は分節化された微細な運動の断片を生徒が頭で理解し、実践できるまで、幾度も反復練習を重ねて体得させた。その後、一連の運動の流れに沿ったかたちで運動の断片が組み合わされ、集団秩序運動として構成された。

ここで、走行運動を具体例として取り上げ、シュピーースによる「要素化」による運動の実際を以下に示しておきたい⁷⁶⁾。

1. スキップと跳躍を入れた基本姿勢での走行

方向：蛇行前方・後方・左右・斜め前方・斜め後方

直線または蛇行、大小、踝・脛脛・膝を持ち上げた跳躍、両足または片足による同時または時間差での跳躍、様々なフォームでの後置

2. 踵、母指球、つま先、ふちでの走行

3. 足の様々な方向転換姿勢での走行

足は 45 度、90 度、180 度の角度で形作る

4. 前方と後方でのステップ姿勢、開脚姿勢、斜めステップ姿勢、十字ステップ姿勢、押し出し姿勢、計測姿勢での走行

5. 小さく、半分深く、非常に深く屈んだ姿勢、フェンシング姿勢、フェンシング開脚での走行

6. 足の運動による走行

支持脚でない足の引き付けと伸展

支持脚でない足の上下動と叩き

7. 膝の運動による走行

支持脚でない足の臀部に打ち付けと膝の跳ね伸ばし

支持脚でない足の膝上下動

8. 足の運動による走行

支持脚でない足の下げ振り開脚、下げ振り閉脚、曲線開脚と曲線閉脚、十字旋回、押し張る、押し出す、押し進む、打ちたたく

9. 上体運動での走行

上体の上下動、様々な上体屈姿勢、上体方向転換、上体旋回、肩竦めと肩回し、肩の前方後方姿勢

10. 腕運動での走行

腕の持ち上げ、腕の振り下げ、下げ振り旋回、曲線旋回、規則性旋回、車輪旋回、十字旋回、ストローク旋回

11. 肘運動での走行

前腕の伸展旋回とひねり旋回、肘回旋、腕突き、腕突き立て

12. 手運動の全種での走行

13. 頭部運動の全種での走行

シュピースは、走行運動だけでも上記のような構成要素に分節化したうえで、各種要素の組み合わせによる運動可能性を追求し、水平、斜め、垂直あるいは前後左右、前方、後方、ゆっくり、早く、45度と90度といったように運動を細かく分類した。

このように身体の「外的現象」に従った「運動可能性」を追求するシュピースによる運動の体系化は、分節と要素の組み合わせから成る「要素化」に根差したものであった。この点について、近代の体育哲学研究で多くの功績を遺した木村は、デカルト的心身二元論と主知主義の思想に立脚しているとしたうえで、それは、「身体は精神（知性）の従順なる下僕でなければならぬ」というテーゼに端的なかたちで示されるように、主体たる精神は頭をひねって考え出された要素運動のひとつひとつを意識して練習することにより、下僕たる身体を隅々まで支配できると考えられていたと論及している⁷⁷⁾。このようなシュピースによる運動の体系化を投影させた最たるものが、徒手体操や集団秩序運動であった。

(2) 「鋳型化」による集団秩序運動の確立

「鋳型化」(Steilisierung)とは、一つ一つの運動、および、運動を実施する姿勢や四肢・胴体を特定の型にはめて、画一化を図ることである。教育の本質的な課題を規律と秩序(Zucht und Ordnung)の形成に据えていたシュピーースは、これを達成するための最も有効な手段として集団秩序運動を築き上げていった。ここで、歩行とホッピングの組み合わせを具体例として、シュピーースによる鋳型化された集団秩序運動の様相を示しておきたい。

シュピーースは、何度も歩行とホッピングを反復練習させ、その発展形として、足踏みに合わせ、拍手を入れて、拍子に合わせて歩かせた。それを1回の足踏み、2回の足踏み、3回の足踏みと規定された歩数に応じて実施し、そのなかで足によって可能な全ての運動を歩行と結びつけた。膝回旋での歩行、上昇経過、曲線でのステップ、左上昇歩調と右ホッピング、左踵上げと右カーブでのステップで走行し、さらに、前後開脚、深い膝曲げ、膝硬直と足の上下動、足回転での膝の上下動へとつなげていく。通常の足踏み、脚前方振り上げと側方振り上げからの蹴る動作と開脚(前方、側方、後方)、これらを拍子に合わせての歩行させるのである。この間にホッピングを導入することで、細分化された運動の組み合わせにより、運動そのものに変化が生じるとシュピーースは考えていた⁷⁸⁾。加えて、この練習は後置歩調(ギャロップ)でも実施され、そこに胴体と腕の運動を伴う歩行、歩行における回転練習のために、ひねりの入ったステップとして腰ひねりと開脚ひねりが後に続いた。これらの運動を生徒に指示する際の掛け声は、次のようなものであった⁷⁹⁾。

気を付け！左右ロックステップで3歩回転！一進め！

左ステップ3歩のみ回転！一進め！

右ステップ3歩のみ回転！一進め！

左ステップ1歩目、2歩目回転！一進め！

右ステップ2歩目、3歩目回転！一進め！

左ステップ1歩目、3歩目回転！一進め！

右ステップ1歩目(2歩目または3歩目)回転進め！

通常のロックステップ歩調！一進め！

左右ステップ1歩目2歩目回転！一進め！

左右ステップ2歩目3歩目回転！一進め！

左右ステップ1歩目3歩目回転！一進め！

通常のロックステップ歩調！一進め！

右ステップ1歩目と左ステップ2歩目回転！一進め！

右ステップ3歩目と左ステップ1歩目回転！一進め！

左右ステップの間、右足全歩回転！一進め！

左右ステップの間、左足全歩回転！一進め！

通常のロックステップ歩調！一進め！

シュピースは、その他にも振動を入れたホップ、方向転換を入れたホップ、回転、クロススキップなど運動の多様性を考慮し、それらを組み合わせて跳躍運動に結びつけた。シュピースによれば、これらの運動を練習することにより、スコットランド風のスキップやポルカ、ワルツにも応用できるという⁸⁰⁾。

以上のシュピースによる歩行とホッピングを組み合わせた集団秩序運動は、個々の身体性に価値を置くヤーンのトゥルネンと明らかに性格が異なる。シュピースは、規律と秩序（Zucht und Ordnung）による陶冶を教育の本質的な課題と考え、この目的を達成する最も有効な手段を秩序運動と集団修練に重きを置いた体育授業に求めた。シュピースの集団秩序運動を忠実にこなすには、細分化された動きの寄せ集めを整然かつ一糸乱れぬかたちで多数の者と合わせなければならない。それは一つの運動種目（Übungart）、あるいは、単なる多数者による集合運動（Massenübungen）ではなく、秩序をもって結合し、団体的で共通的な編成に基づいた運動集団（Tungemeinde）の修練形態であった。このように集団修練は、空間的に同じ運動を実施するものであり、この修練形態は、秩序における教授、つまり規律の訓練であることを同時に要求した。また、集団秩序運動の練習の際には、教員が集団を管理せねばならず、生徒は教員の命令に従順でなければならなかった。それゆえ、集団修練による体育授業においては、規律と秩序を備えた教師による集団の管理が指導上の要点とされたわけであるが、これがまさしく、シュピースの体育授業における「経営方法」（Betreibungsweise）であった⁸¹⁾。

集団での運動をとおして、個々人がいかに統合されるか、集団のなかで個人がいかに一致と団結を発揮できるか、これがシュピースの「秩序論」（Ordnungslehre）であり、そこで

重要なことは、空間的・時間的に共通の運動を実施することであった。それは、つまるところ集団による運動と形態に関わる変化可能性の法則を、感覚で測るものであり、シュピースは、この空間的・時間的な秩序を以下のように細かく規定した⁸²⁾。

1. 空間的規定

- (1) 立位 (=姿勢 (Stellung)) → 前向き姿勢、左右の横向き姿勢、後向き姿勢、斜め姿勢による8つの姿勢。これらの姿勢は、回転によって相互に移行する。
- (2) 回転 (Umdrehen) → 45度、90度、135度、180度の回転。
- (3) 歩行 → 基本線、歩行線一直線、曲線、環状線、組み合わせられた線一、歩行方向、歩行回転 (Gangdrehen)。(歩行方向は姿勢に一致する)。

2. 時間的規定

- (1) 歩長 (Schrittlänge) または足長 (Fußlänge) → $1\frac{1}{2}$ 歩長 (= 3足長)、1歩長 (= 2足長)、 $\frac{3}{4}$ 歩長 (= $1\frac{1}{2}$ 足長)、 $\frac{1}{2}$ 歩長 (= 1足長)、 $\frac{1}{4}$ 歩長 (= $\frac{1}{2}$ 足長)、 $\frac{1}{8}$ 歩長 (= $\frac{1}{4}$ 足長)。最も習慣的な歩長は1歩長 (2足長) である。
- (2) 歩行速度 (Schrittzeit) → 最も習慣的な歩行速度は、1分間に80歩である。
 - 早足 (Schnellschritt) — 1分間に100歩、120歩、140歩、160歩一。
 - 遅足 (Langsamschritt) — 1分間に70歩、60歩、50歩、40歩一。
- (3) 回転速度 (Drehungsdauer) — 最も習慣的な1回転は $\frac{4}{3}$ 秒である。

シュピースは、空間的・時間的規程を用いて、まず個人「歩行方法 (Gangweise) の多様性」を追求した。次いで、集団の編成について、①列 (Reihe) (1列の編成)、②隊列 (Reihenkörper) (2列の編成)、③部隊 (Körper) (多くの列の編成) に分け、各々の編成の可能性、および、編成における各個人の立位・歩行・回転 (または旋回 <Schwenken>) の可能性を上記の各規定によって追求した。これを基礎としてシュピースは、集団秩序運動という「全く新しい一つの運動種目」を考案したが、それは体育的観点から考案された軍隊的行進運動 (Marschübungen) とほぼ同様のものではなかった⁸³⁾。

第2項 シュピース＝マウル方式の学校体育への導入

シュピースがドイツで初ともいえる近代的な学校体育（教科体育）の構想を示したのは、1842年にプロイセン政府へ提案した「国民教育への体育導入案」（Gedanken über die Einordnung des Turnwesens in das Ganze der Volkserziehung）であった。このなかでシュピースは、学校教育における体育の目的、および、位置づけについて以下の意見を述べている⁸⁴⁾。

体育の目的は、心身ともに健全な国民を作ることであり、その方法は学校に適した方法で、段階的に学級教授の形式で行わねばならない。体育の教師は、教育一般に関する知識をもち、体操場については室内であれ戸外であれ、できるだけ学校の近くが好ましい。児童生徒にとって体操場の無い学校は、半分の価値しかないし、また、学校から離れた体操場も価値がない。ただし成人のためには、学校施設としての外に公開体操場もまた必要である。体育は軍隊教育の準備段階でもある。国民を体育的に訓練することは、軍の資質を向上させることになる。従って国家は体育を管理する必要がある。

シュピースがプロイセン政府にたいして「国民教育への体育導入案」を提出した1842年は、おりしもプロイセン国王ヴィルヘルムの体育勅令により、トゥルネン禁止令が廃止された年であった。1820年にトゥルネン禁止令が公布されたが、1830年代になるとドイツの産業資本主義化にともなう市民層の増大に配慮して、枢密顧問官シュルチェ（Johann Schulze, 1786年-1869年）により、上級の諸学校における体育の採用許可を本旨とする回令が1837年10月24日に発布された。帝国主義国家の建設に邁進した当時のヨーロッパ列強では、軍事力の強化に向けた権威主義が蔓延っていた。

ドイツにおいても国家経済を支える労働力の確保、国家の軍事力強化を目的として、健康かつ命令に従順な兵士の養成に向けた身体鍛錬の必要性⁸⁵⁾が主張されはじめていた。この点についてシュピースは、「学校訓練と戦争訓練とはその本質において一つであり・・・中略・・・体育こそ、まさしく目的達成に最も適切な手段である」⁸⁶⁾と考えていた。シュピースは学校について、「常備軍と国土防衛のための固有の予備校（Volksschule）になる」と把握し、学校で実践される体育の具体的な方法を集団訓練に求め、これは「教練のための予備教育をなしており、一般に一人の人間のように一つの精神で行動しなければならない部隊（Schar）の秩序術（Ordnungskunst）をなしている」⁸⁷⁾とし、先述したとおり、規律と秩

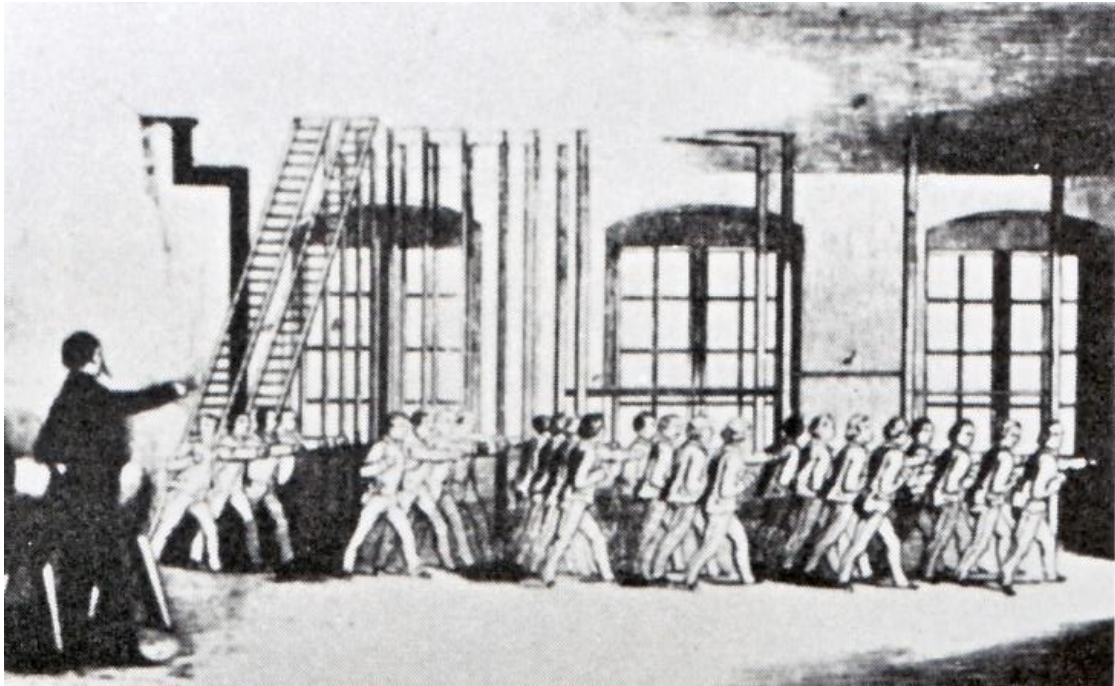
序による陶冶を教育の本質的な課題とした。シュピーースは、学校教育の中で一教科としての体育を定位させるために、以下の意見を残している⁸⁸⁾。少々長くなるが引用しておきたい。

- ・トゥルネンは、ギムナジウム、高等実業学校、実業中等学校、教員教育機関、そして可能な限りの大公国の市立学校、厳密には、少年や少女が通うすべての学校において、主要な授業科目として、また教育主題として導入されるべきである。
- ・トゥルネンは、授業の適用と遂行に際して、運動選択や年齢段階に合わせて準備されねばならない。
- ・生徒たちは、すべての主要授業科目で義務づけられているように、トゥルネンに定期的に参加しなければならない。疾患、または、身体的障害や損傷のある者のみ、この規定の例外が認められる。そこでのトゥルネンの性質（身体の量感ある努力を必要とし、同時に、教育手段としてのトゥルネンの本質はすべて学校の風紀を保つために陶冶すること）は、機能不全者や身体障害者のために試みられる。医師より告知を受けた生徒は、その運動を行わないよう配慮することが望まれる。
- ・トゥルネン授業は、クラス単位で実施される。学校の他の授業において、まとまった教師陣を養成し、生徒の進級について適切な考慮の下で判定されるのと同様に、トゥルネンの専門教育においても知覚されうる経歴と準備が考慮される。
- ・トゥルネンの授業時間は、規則的な学校時間内で1時間だけ設定されるべきで、授業時間の終わりと午前・午後の間に設けることができる。もし、夏時間により広域の学童区分で、夜の催しとしてのトゥルネン運動とトゥルネン遊戯に取り組むならば、学校での定期的なトゥルネンの授業の進行を妨げないよう実施する。
- ・1週間ごとのトゥルネンの授業数は、生徒の年齢段階に応じて設定する。かなり成長した年齢の生徒には、徐々に少ない授業数を定められるのに対し、最年少者は、自然に即した身体的成長のもとで、できれば毎日のトゥルネンを行う必要がある。
- ・トゥルネン授業は、可能な限りクラス担任が行うべきである。トゥルネン授業の給料は、他の授業の給料と同様に、事情に応じて検討される。生徒がトゥルネンの授業のために特別な報酬を支払う必要はない。
- ・夏季や冬季におけるトゥルネン授業の定期的な運営のために、相応な空間と異なる年齢や性別に対応した用具の用意は必要不可欠である。空間について言えば、床板

が張られ、暖房装置のある体育館、可能な限り学校の近くにある郊外の運動場と遊戯場で、他の授業との入れ替わり時間に損失がなく、学校側からの簡易的な監視が可能な空間である。

- ・学校の青少年教育に必要な不可欠なトゥルネン教育に付随する試みとして、時々狭い教室から青少年たちを自然に囲まれた郊外のハイキングや遊戯に連れ出すべきである。学校生活の節目においては、毎年開催される学校祭に加え、記念日における青少年の祖国愛の高揚に向けて、祖国の高尚な物語に関わる歌唱や遊戯を盛り込んだトゥルネン祭を開催すべきである。

以上に示されるように、シュピースは学校教育のなかで体育を確立するために、全学校の児童生徒にたいして体育を必修にすること、他の授業と同様に学級単位で体育を指導すること、他教科と同様の単一時間制を採用し、児童生徒の発達に応じて毎週の時間数を設定すること、教員またはクラス担任が体育の授業を担当すること、授業用の体育施設を確保すること等を求めたのである。結果として、シュピースの考えに倣うかたちで体育は、一教科として採用されていった。全ての学校の生徒たちは、定刻になるとトゥルネン場や体育館に一斉に集合し、教員やクラス担任から指導を受け、そこでは、ヤーンのトゥルネンにみられたように、個々の運動の嗜好性によってクラスが構成されるのではなく、あらかじめ振り分けられたクラスに強制的に組み込まれた。図-5に示したシュピースのトゥルネンを基礎とした体育は、徒手体操と集団秩序運動を授業内容の柱としながら、先述した空間的・時間的秩序に従って展開され、生徒は教員の号令に合わせて規則正しく一斉にトゥルネンを実践した。そこでは、生徒の自発的な意志や個性も前景化する余地が存在しなかった⁸⁹⁾。



図－５．シュピーズの集団秩序運動の授業風景

(成田十次郎編 (1988) スポーツと教育の歴史. 不昧堂：東京, p.47 より転載)

第3項 シュピーズ＝マウル方式の授業内容

シュピーズの集団秩序運動は、実際のところ体育授業のなかでどのような行われていたのかという点に着目し、ここでは、そのあり様を記述していきたい。

シュピーズは、集団秩序運動にたいして3つの本質的な課題を設定していた。一つは基本的な運動 (Elementarbewegungen) である。これは様々な分析を施したうえで、写実的に構成した原理に則した運動を要するものであり、これは体系的に連続して練習されなければならない、全身体の可動性を生じさせるものであった。二つ目は共通運動 (Gemeinübung) である。これは練習時の連帯感を生じさせるもので、規律と秩序を同時に強化した。三つ目は構成原理に則した運動 (Zusammengesetzte Übungen) である。これは同時に規定された腕、足、胴体の動きであり、命令に応じた様々な運動を、拍手や音楽に合わせて連続して実施されるものであった。また、この運動は精神を制御するために実施された。秩序と規律を陶冶する教育手段としての集団秩序運動について、それを均整のとれた精巧な集団の形成に向けて、全学年にどのように実践させる利用させるかとする授業運営の模索が重ねられた。ここでは、隊列、構成要素、秩序だった編成と練習、確固たる連帯の方向とそれ

に相応する距離関係、精密な拍子に合わせた動き等々、様々な要素に注意を払わなければならなかった⁹⁰⁾。

これらの課題に取り組むなかで、シュピースは4つの姿勢を提示した。まず基本姿勢は、足を閉じることであった（内側の足の淵どうしを付ける）。二つ目の姿勢は、足の角度を60度に形作るよう踵を閉じ、両足を広く前へ回転させた。三つ目の姿勢は、二つ目の姿勢からつま先の開口部を90度から1/4へさらに広げる。四つ目の姿勢は、両足を緊張させたまま強制的に外側にそむけることであった。それはつま先が、踵を閉じたまま、両肩の方向線上へまっすぐに伸びた角度まで横に向けて立つことである。これら全ての姿勢において、歩行と走行運動を実施しなければならなかったが、低学年の生徒にとって強制的な姿勢は非常に困難なため、上体が前かがみに倒れることも可能として、シュピースは彼らにたいして、初めに膝を軽く曲げることを許容した。生徒は横列に並ばなければならず、後方の人間は、前方の人間の肩の上に手を伸ばして、バランスよく固定する。これらの姿勢に示されるように、シュピースは身体的作用と運動の関係について、常に厳密性を要求し、また、精巧に開発していくことが重要であることを主張して止まなかった⁹¹⁾。

立ち姿勢、歩行、走行とスキップの練習は、つま先のみならず、踵でも練習された。例えば水鶏歩を取り上げてみると、足踏みとしての水鶏歩は、足踏みのなかでもアクセントを付ける練習として行われ、その際に足踏みと一緒に左右の水鶏歩調が行われた。前後斜めなどの方向で水鶏歩調が行われている間、足踏みをせずに歩行のリズムを変化させる時、大きな音でのアクセントを付けたり、また、付けなかったりした。つま先のみ、踵のみという方法で水鶏歩の練習は行われ、このなかで水鶏歩は、前方、後方、横方向で練習された⁹²⁾。

開脚練習の冒頭で、シュピースはどのように開脚姿勢を行うかについて指示を出した。3列は、4ステップ分の列間隔で横向き跳び越しの状態で立ち、教員は自身が見本を示した後に、生徒にたいして「気を付け！小さいサイドステップに向けて左足を置き、ステップ位置にとどめよ！ステップ！横滑りを通じて、膝を伸ばしたまま大きくまたは強いステップに向けて左へのステップを拡張せよ！立て！」⁹³⁾とする号令を出した。

開脚練習の応用編として、右へのサイドステップと両足を同時に横滑りして前方へ出す方法も行われた。開脚練習では、拍子を付けたり、また、つけなかったりしながら、厳格に前方、後方、左右といった方向に向かって歩き、走ることができ、開脚する足の姿勢が不動なまま、跳ぶという運動にも発展した⁹⁴⁾。如何なる時でも必ず号令があり、「集まれ！」

という号令で集合し、「気を付け！右向け右！左向け左！」、「先頭基準に左に三步間隔開け！」といった号令の下で運動を繰り返し、「両手を前から上に上げ、横に開き、下に下す！用意、始め！1，2，3，4…」といった集団秩序運動を完成させていったのである⁹⁵⁾。

このような授業は、女子の輪舞（Reigen）にも見られ、それは幾何学的な美と秩序を追求する集団秩序運動であった。シュピースは、女子にふさわしい運動として輪舞を取り上げ、それを自らの「臣民」育成の体育理論に基づいて集団秩序運動として整理し、それを女子体育の中心教材に位置づけていった。輪舞での授業は、次のような方法で行われていた⁹⁶⁾。

1. 整列の練習。
2. 「二列整列！」、「四列整列！」、これをくり返し、次に、「円を作れ！」と続ける。
3. 足踏みの練習。「その場で足踏み22回始め！」、この練習が終わると、また「二列整列！」「四列整列！」を繰り返す。
4. 輪舞の歩行練習、ステップの練習、走る練習。
5. 1から4の基礎訓練の後で、直線や円で手をつないだり、手を離したり、前後斜めに歩いたり、走ったり、ステップしたりする。

以上は、10歳から16歳の輪舞指導の一例で、男子の徒手体操、秩序運動と同質のものであった。さらにシュピースの輪舞は、女子体育らしさを求め、音楽に合わせて実施された。その具体例は次のようなものであった⁹⁷⁾。いささか長くなるが、まとめておきたい。

- ・48名の生徒を四角形に配置し、1辺につき12名が立ち、基準との間の隅に空間を残す。
- ・隊列は、図-6に示したⅢとⅠ、ⅣとⅡが向き合って形作ることを指示する。四角形は3分割された最前列からなる。各列は、2名の6並び、または3名の4並び、または4名の3並びのなかで、進行の性質に応じて、再び分解する。そうして、図-6に示した配置と表示に従う。この線描は輪舞を理解するために必要不可欠である。

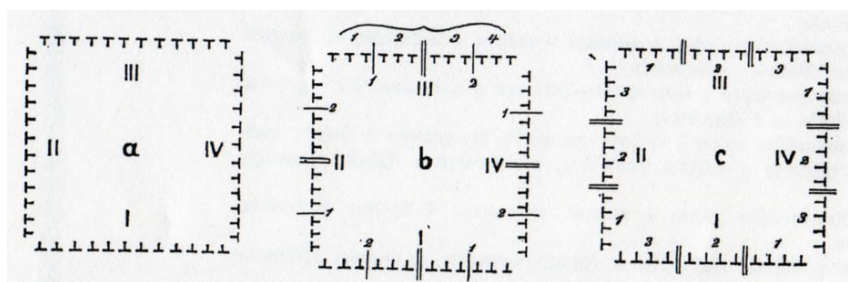


図-6. シュピースの輪舞の隊形

(Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18.

Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.IV. Wilhelm Limpert, Dresden, S.102 より転載)

- ・隊列は直線、もしくは、非直線としても表示される。並ばせるためには、手をつなぐ、腕を交差させる等によって行わせる。
- ・個々の詩節の間には、次の詩節が始まる前に、状況しだいその場で4、6または8ステップ行う（もしくは配置のなかで後退を使う）。“歓喜の叫び (Hurra)”で、様々な腕の位置での動きを行う。同様に歌の最後の拍子をとらえる。より大きな効果を持たせるように、およそ4拍子（歌声なしで）取り続ける。

音楽：“トランペットで何を吹き鳴らすか (Was blasen die Trompeten)”

4 × 12 = 48 (ステップ) 小節

第一詩節

その場で4ステップ

1. “トランペットで何を吹き鳴らすか、軽騎兵出てこい！”

I列目とIII列目は4ステップ前へ、4ステップ後ろへ、II列目とIV列目は同時にその場で8ステップ足踏みを行う。

2. “あつという間に元帥は騎乗する”

II列目とIV列目は4ステップ前へ、4ステップ後ろへ、I列目とIII列目はその場で8ステップ足踏みを行う。

3. “彼は、彼の勇気ある馬に楽しげに騎乗する”

6名の列 (図b、1と2) は、向き合って (列の1は左回りに、列の2は右回りに行う) 回転し、前方にいる人間の肩に手を置く。横向きの列は右に互いにすれ違

い、他の列の場所につく。最後に8ステップ、列は四角形を目指して1/4回転して閉じる。すなわち、列1は右回り、列2は左回りで行う。

4. “彼は、きらりと光る剣を勇壮活発に振りかざす”

I列目とIII列目は、4ステップ前へ、4ステップ後ろへ、II列目とIV列目はその場で8ステップ行う。

5. “ヤッホー！プロイセン（ドイツ）はここだ”

II列目とIV列目は、4ステップ前へ、4ステップ後ろへ、I列目とIII列目はその場で8ステップ行う。

6. “プロイセン（ドイツ）は陽気だ。プロイセンはヤッホー！と歓呼をあげる”

6名の列は、図cのように道しるべに相応して、すなわち、1/4回転で向かい合って歩み寄り、左に通り返けて、配置に向けて戻る（6ステップで）。そこで、手を腰に当てて、左に1/4回転して8拍子休止する（8拍子分の間の休止と7拍子分じっと動かずにいる）。

第二詩節

その場で8ステップ

1. 奇数の6名の列（列1）は、4ステップ前へ、4ステップ後ろへ進み、偶数列（列2）は、8ステップその場で行う（8ステップ）。
2. 偶数の6名の列は、4ステップ前へ、4ステップ後ろへ進み、奇数列は8ステップその場で行う（8ステップ）。
3. 奇数の6名の列は、4ステップ前へ、4ステップ後ろへ進み、偶数列は4ステップ後ろへ、奇数列が4ステップ後ろの時、偶数列は4ステップ前へ進む。
4. 奇数の6名の列は、4ステップ前へ、8ステップ後ろへ、4ステップ前へ進む。
偶数の6名の列は、4ステップ後ろへ、8ステップ前へ、4ステップ後ろへ進む（ $2 \times 8 = 16$ ステップ）。
5. 奇数の6名の列は、4ステップとともに1/2左回転（回れ右、前へ進め！）を行い、2ステップ前へ進み、休む。偶数の6名の列は、2ステップ前へ、4ステップとともに1/2左回転を行い、休む（ $2 \times 8 = 16$ 拍子）。休止のところは、両腕を前方に突き出す。

この輪舞は第9詩節から成るが、集団による幾何学的な隊列を重視し、動きはすべてステップと方向転換のみであり、その他の身体部位を使った動きは一切存在しなかった。女子体育も男子のそれと運動のあり様は同じものであったように、すべて型にはめられ、集団での一糸乱れぬ動きを要求されていた。シュピースの集団秩序運動に関わる理論と実践は、学校の内外へ次第に浸透していき、彼の弟子であるマウル (A. Maul, 1828年-1907年) によって精度を高めていったのである。

第4項 シュピース=マウル方式の体系化と普及

シュピースとともに、1880年代から1920年頃までのドイツ体育に歩みに大きな影響を及ぼしたのが、マウルであった。マウルが体育指導者として登場したのは、1850年から翌年にかけて、ダルムシュタットにおけるシュピースの体育教師養成講習会に参加してからであった。1869年にドイツのバーデンに設立された体育教師養成学校の校長に就任したマウルは、同年に体育指導者会議の委員を兼務し、カールスルーエ、バーデン、エルザス、オーバーラインの各地に体育指導者連盟を結成し、1872年にはドイツ体育指導者連盟の会長に就任した。また、マウルは1875年にドイツトゥルネン連盟委員、1887年にはその初代会長に就任するなど、学校と社会の両舞台における体育の発展に尽力し、全ドイツの体育家の先頭に立っていった⁹⁸⁾。

シュピースの体育を高く評価していたマウルの作りあげた体育とは、たやすく青少年の身体に故障が生じないような、強力かつ生命力にあふれた精神力を培うために、いかなる事態にも対応できる道具として、人間の身体を仕立て上げることであった。それに加えてマウルは、非常時の準備訓練にふさわしいように体育を構成し、学校は軍隊の予備教育機関であるという国家の特別な軍隊法規に、厳密なかたちで従わねばならないと考えていた。これは、シュピースの体育と同じ理念であり、マウルの体育も規律と秩序の陶冶に重きを置いた青少年の訓育を進めようとするものであった。

マウルがとりわけ力を注いだ学校体育は、クラス、年齢、性別、能力に応じて系統的に教材を配列し、反復練習によって各運動を正確かつ美しく実施できるよう、明確に細かく記された教授体系に基づくもので、器械体操を中心に、集団秩序運動、徒手体操、棒体操、走・跳などを教材としていた。マウルの運動の特色として有名なのは、シュピースの運動体系と同様に、号令に従って一斉に実施する集団運動で、シュピースの集団秩序運動を参

考にして下記に示した5段階の指導の型に確立させた⁹⁹⁾。

第1段階「自由練習」

教師または優秀なトゥルナーが、課題に応じて生徒の前で運動を行い、それに加えて、最も必要不可欠な解説も行う。その後、いかなる類の指示もないなかで、生徒は4台の平行棒を使用して模倣を試みる。チームでトゥルネンを行わせ、教師はチームの大多数が消化しきれていないときは、2回、3回、4回と繰り返して、出来栄を確かめる。

第2段階「課題練習」

“並べ！”教師が指示を出す。8名の生徒が最初に、水平棒の先に並ぶ。
“前方振り、後方振り、左外側に横向きに座り前方振りを行う—始め！”
“1回振り、後方振り、前方振り、右旋回—始め！”
“次の8名並べ！”以後同様の指示が続く。

第3段階「号令練習」

“8名最初に並べ！”
“1！”—“2！”—“3！”
“どけ！次の8名！”

第4段階「拍子に合わせた練習」

“8名最初に並べ！”教師は水平棒での振り運動にテンポを加えて号令をかける。
“6—7—8！”それに応じて8呼間での運動を最初の8名が遂行する。
“どけ！次の8名並べ！”

第5段階「各列隊形運動から統合練習」

“8名最初に並べ！”教師は水平棒での振り運動にテンポを加えて号令をかける。
“6—7—8！”それに応じて教師が1～8の号令をかけている間、最初の8名が運動を遂行する。彼らの練習が終了すると、即座に教師が9を数えている間に次の8名が、教師の指示のないなかで運動を始め、9～16数えている間に運動を遂行する。中断せずに3番目の8名が17～24、4番目の8名が25～32の号令に合わせて運動を遂行する。この練習は、全クラスが終わるまで継続した。統合練習は、優れた方式によってクラスの団結をまとめあげ、そこから更に踏み込んで、まとまった一連の運動を実施することであり、音楽に伴って行われた。

主要な練習が終わると、マウルは常にそれらを音楽に合わせて行わせた。1870年代に入ると、小学校においても体育が一教科として採用された。それはまさしく、各地域のトゥルネンクラブが統合され、「ドイツトゥルネン連盟」(Deutsche Turnerschaft)として全ドイツ的な組織化が達成されんとする時であった。先に述べたとおり、マウルは同連盟の要職を務めたがために、結果として、シュピース=マウル方式のトゥルネンが勢力を拡大していくこととなり、「軍人帝国」と揶揄されたドイツの軍事体制強化の一翼を担いながら、第一次世界大戦に至るまで学校体育を主導していった¹⁰⁰⁾(図-7参照)。



図-7. シュピース=マウル方式のトゥルネン

(成田十次郎編(1988) スポーツと教育の歴史. 不昧堂: 東京, p.47より転載)

しかしながら、シュピース=マウル方式のトゥルネンがドイツの学校体育を主導していた19世紀後半の状況は、人間の自然性と自由の精神に導かれた遊戯やイギリス産のスポーツ活動¹⁰¹⁾、医学や解剖学、生理学、衛生学をはじめとする自然科学の最新成果を取り入れながら体系化された、健康の保持・増進を目的とする北欧体操が伝播し、また、シュピース=マウル方式の女子体育とは趣の異なる、女性の身体機能の発育発達を主眼に据えた運動の重要性が強調され、実際のところ混沌としたものであった。この動向は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、シュピース=マウル方式に覆いつくされていた学校体育に変革を加えんとする契機となった。

むすび

ドイツ国民体育と称されるトゥルネンは、プラマン学校で教師を務めていたヤーンを中心に、1811年7月にベルリン郊外のハーゼンハイデで産声をあげた。当時のドイツは、1806年にフランスのナポレオンに敗戦したことを大きな契機として、近代国民国家の建設に向けた機運が高まり、社会の隅々で新たな動きが具現化し始めた時期であった。ヤーンが提唱・実践したトゥルネンは、祖国愛に燃え、共同体の精神に目覚めた、意志強固で身体強健な青少年の育成を目指す国民教育に支えられた教育手段であった。ヤーンのトゥルネンは、走・跳・投などの陸上競技的な運動、器具を用いた体操、その他にフェンシング、遊戯、ハイキングなどを包含し、ヤーンはこれらの活動において素晴らしい規律と秩序をもって優れた指導力を発揮し、あらゆる者が自由意志によって従うような道徳的な集団を形成していた。瞬く間にドイツ各地に拡大していったトゥルネンについて、各地域でクラブ組織が結成されていくと、自主的な社会体育活動として根付いていった。

国家統一、身分制度の撤廃、多面的で調和的な人間形成という政治的、教育的な目的を掲げて、ヤーンはトゥルネンを展開した。しかし、1814年のフランスとの解放戦争後、オーストリアの外務大臣メッテルニヒより、トゥルネンが反政治体制的な活動の象徴とみなされ、1820年6月に「トゥルネン禁止令」が発令され、プロイセンをはじめとして他の連邦国でトゥルネンは禁止された。トゥルネン禁止令の期間、ヤーンの政治的、教育的な目的とは乖離する、人間の身体それ自体を直視した活動が展開された。1830年代に入り、ドイツにおいて産業資本主義化が進展し、市民階級の勢力が増していくと、兵役準備を主眼に据えた体育論が立ち上がっていった。帝国主義化の道を歩んでいた当時のヨーロッパ列強は、軍事力の強化に向けた権威的な風潮が蔓延していた。ドイツにおいても軍事力の強化と国家経済を支える労働力の確保を目的として、健康で命令に従順に従う人材育成の必要性が主張され始めると、トゥルネンは国民教育に必要不可欠な要素として注目されるようになり、その結果として1837年10月にプロイセン政府は、上級の諸学校で体育の採用を決定し、1842年にトゥルネン禁止令は解除された。

ヤーンのトゥルネンから、運動の中心を徒手体操、手具体操、集団運動から構成される集団秩序運動に移行させ、これを基軸とした学校体育の確立に指導的な役割を果たしたのがシュピースであった。シュピースは学校体育と軍事訓練が本質的に同様のものであると考え、学校が常備軍と国土防衛のための予備校になると主張し、軍事体育の具体的な方法を集団秩序運動に求めた。そこでシュピースは、軍隊で重視される規律と秩序を学校体育

に導入するため、「要素化」と「鑄型化」を基礎的な要素とする集団秩序運動の体系化に着手した。

シュピースは、胴体と手足の各部を個別運動に分節化し、それらを組み合わせて一連の運動へと再編していく「要素化」に重きを置いた運動方法を追求した。それを顕著に具現化させたのが集団による運動であり、規律と秩序による陶冶を教育の本質的な課題に据えていたシュピースは、多数の者が一同にして連続して実践できる集団運動の方法論を考案した。それは、集団運動による共通の編成をとるために、各人の立位・歩行・回転などの運動を角度・歩調・歩行速度・回転速度など空間的、時間的な秩序のなかで細かく規定するものであった。つまり、運動の細部にまで厳格な規定を施すことで各人の運動が鑄型化され、教師は規律と秩序に基づく鑄型化された集団秩序運動を授業において教授する、これこそが、シュピースの体育授業の経営方法であった。シュピースの集団秩序運動に関わる理論と実践は、学校と社会の両舞台において次第に浸透していき、シュピースの弟子であるマウルにより拡大していった。

マウルが抱いていた体育理念は、シュピースと同様に非常時の準備訓練にふさわしいように体育を構成し、学校は軍隊の予備教育機関であるという国家の特別な軍隊法規に、厳密なかたちで従うものであった。そのためにマウルは、クラス、年齢、性別、能力に応じて系統的に授業を組み立て、反復練習により各運動を正確かつ美しく実施できるよう、細かな教授体系をまとめあげ、集団秩序運動を指導対象の中心とした5段階の指導法を確立させた。シュピース=マウル方式の集団秩序運動において、生徒は集団の一つの駒でしかなく、教師の号令に従順に従った一糸乱れぬ集団運動を要求されたが、重要視されたのは集団美であった。1870年代に入ると、体育は小学校の一教科として採用され、シュピース=マウル方式のトゥルネンは、第一次世界大戦期に至るまで学校体育の主流の位置を保持し続け、軍人帝国と揶揄されたドイツの体制強化の一翼を担っていった。

しかしながら、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、人間の自然性と自由の精神に導かれた遊戯やイギリス産のスポーツ、自然科学に関わる最新の知見を取り入れた北欧体操がドイツに伝播し、また、ドイツで女性の身体機能の発育発達を主眼に据えた運動の重要性が強調されるなど、体育をめぐる様々な現象が立ち上り、シュピース=マウル方式のトゥルネンに覆われていた体育にたいして、細々とではあるが変革をもたらさんとしていた。

第2章 新体操促進運動の興隆とドイツ体操連合の設立へ向けた展開

(1901年～1925年)

ドイツの学校体育を支配したトゥルネンは、20世紀にはいると形式的体操として批判され、そのなかで新体操促進運動が興隆すると、シュピース＝マウル方式の集団秩序運動を主とした従来のトゥルネンに代わる新たな理論と方法に基づいた体操（Gymnastik）の構築が求められていった。本章では、19世紀後半から20世紀初頭にかけて芸術的かつ創造的な運動の実現を追い求めた新体操促進運動に多大な影響を与えた芸術教育運動から、ドイツ体操連合設立に向けた経緯を明らかにしていく。

第1節 芸術教育運動の興隆

第1項 新教育運動の概要

1871年にドイツ帝国の成立という形で政治的な統一を成し遂げたドイツは、ヨーロッパにおける後進資本主義国として経済発展と国力増強に何よりも力を注ぎ、19世紀末から20世紀初頭にかけて、科学や技術が飛躍的に進歩し、その為に物質文明至上主義や合理主義を基礎とした思考が広がっていった¹⁾。このような状況下において、学校は教師の一方的指導による文化伝達の間であるに過ぎず、この教育形態では、詰め込み式のドリル学習や強制的な指導、画一主義や形式主義、見せかけの教師の優位性、子どもの人格発達への抑圧といった現象が立ち上がり、その結果として思考力、知識、自主性、創造性を育てる余地が無かった²⁾。これに対して鋭い批判を向け、教育のパラダイムチェンジを図らんとしたのが、「新教育運動」(reformpädagogische Bewegung)であった。

新教育運動は、伝統的な教育と教育観の行き詰まりを実感していた教育学者、新たな教育文化観の構築を求めていた若い世代の教育学者に強烈なインパクトを与え、彼らは新教育運動のなかで育まれた児童観、教育観、教育の新たな在り方を研鑽し、新しい教育学が創造される端緒を切り開いていった³⁾。この出発点は、新教育運動の「思想的序曲」と称される「文化批判運動」(Bildungskritik)であり、ラガルデ (Paul de Lagarde, 1827年-1891年)、ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844年-1900年)、ラングベーン (Julius Langbehn, 1851年-1907年)を代表的な担い手としていた。ラガルデは『ドイツ論集』(Deutsche Schriften, 1878年-1881年)、ニーチェは『反時代的考察』(Unzeitgemäße Betrachtungen, 1873年-1876年)、ラングベーンは『教育者としてのレンブラント』(Rembrandt als Erzieher, 1889年)において、

それぞれ独自の批判を展開した。この3人に共通する点は、当時の学校教育における形骸化した教養理念や狭隘な主知主義にたいして、人間の生の全体性の回復と個性的かつ創造的な発達を要求することにあった。文化批判運動は、「ドイツ青年運動」(die deutsche Jugendbewegung)によってかたちを伴い、いわば現実の運動として最初に顕現化していった⁴⁾。

ドイツ青年運動は、中産階級に属する青年たちの現状肯定的、小市民的な生き方に対する反抗として1890年代半ばに胎動し、青年自身の新しい生き方や文化を希求する運動として、またたく間にドイツ全土に拡大していった。ドイツ青年運動は、青年たちが自らのグループを形成して大自然を徒歩旅行するヴァンデルン(wandern)を基本的な活動とし、文明化された都市生活、古典的な中等学校教育、権威主義的で小市民的な家庭生活など、当時の退廃した生活文化への反抗という多くの青年の理想主義的な心情に根差したものであった⁵⁾。それは、理想に掲げた教育の実現に向けて青年自らが率先して尽力したという点で、教育史の前例にない出来事であり⁶⁾、多くの青年が教育の世界に身を投じ、後の芸術教育運動や作業学校運動、田園教育舎等を支えることとなった⁷⁾。

新教育運動の特徴の一つは、子どもの自発的活動や作業活動の意義を認めることにあり、そこには、従来の学校教育への厳しい批判が込められている。日常生活に横たわる様々な現象と隔絶する形式主義に陥った教育機関としての学校は、子供にとっては退屈に他ならず、健康な身体や精神の養成に適わない。このために新教育運動における教育形態は、画一的な一斉教授から個性を重視する合科教授へ、主知主義(書物主義)・注入主義から活動主義(事物主義)・自学主義に重きを置いた教育方法へ、教師中心主義から児童中心主義へ、思弁的な哲学的教育研究から実験的な科学的教育研究へといった改革が施された。これに加えて新教育運動は、初等学校教員のみならず、研究者や文化機関、行政機関の関係者までも巻き込んだ国民的教育運動として発展し、その影響力と支持層の広さ、学問的水準の高さからして、特異な教育運動を創り上げていった⁸⁾。新教育運動は、子どもの能力にたいする最大限の尊重という姿勢をいち早く構え、子どもの自発的な活動を重視して、子どもの生と生活の充実を図らんとしたわけであるが、これをすべての学校改革や教授計画に一元化するうえで決定的な契機を与えたのは、美術、手芸、作文、音楽といった創造的な活動をとおした情操の陶冶を目的とする芸術教育運動であった⁹⁾。

第2項. 芸術教育運動の概要

(1) 芸術教育運動の胎動

初期の芸術教育運動は、19世紀中葉に造形美術家たちの活動から立ち上がった。彼らは、形式主義をアカデミズムの理想とした当時の圧力のもとで、いかにして自らの独創的な芸術能力が奪われたかを感じ取り、それを乗り越えるための理想像を見出していた。教養や文化をめぐる闘争の第一波が芸術家たちの生存、第二波がドイツ人の人間性の確保にそれぞれ及び、芸術教育運動が台頭した。主知主義からの離反を骨子とした芸術教育運動は、身分や社会的地位を超越した人間の根源に存在する感性や身体に価値を見出すもので¹⁰⁾、19世紀後半に入り、この価値は自然や郷土との関係性、医学的観点、ドイツ工芸の経済的・実用的な必要性等の影響を受けながら、教育的な色彩を纏った芸術教育運動へと拡張していった¹¹⁾。このように、教育的な志向性を備えた芸術教育運動は、「母国語であるドイツ語、音楽、図画、体育などの授業を内容的、方法的に構成していくうえで貴重な刺激となった」¹²⁾ばかりでなく、教育における子どもの主体的位置づけを前提としていた。それは、子どもが本来、知的な学習に興味を持つ知性的存在であるばかりでなく、何よりも豊かな芸術的才能をもった創造的で感性的な存在であるという認識に基づいていた。

芸術教育運動は、1896年のハンブルクにおける「芸術教育保護の為の教員集会 (Lehreveinigung für die Pflege der künstlerischen Bildung in Hamburg)」として、明確な組織的運動として立ちあがった。この集会は、ハンブルク美術館へ赴いた教員と生徒向けの芸術作品の鑑賞訓練を端緒とし、その啓蒙活動を契機として、美術館、ベルリン工芸博物館、教員、芸術家、ランゲ、イエッセン、パラート教授等の協力関係を素地として計画された。図画・美術教育の普及、図画授業の改革を企図したここでは、芸術に関する理論的な知識を伝達するのではなく、優れた芸術に接することによって、幅広い層の子ども達に芸術的な感情を呼び起こし、純粋な生活享受に向けた衝動を植えつけることに目的が置かれていた。集会の議長にあったゲッツェ、その他の中心人物であったゲッツェ、ランゲ (Konrad Lange, 1855年-1921年)、リヒトヴァルク (Alfred Lichtwark, 1852年-1914年)¹³⁾により、集会とドイツ語で同名の「ハンブルクにおける芸術教育保護の為の教員連合」 (Lehreveinigung für die Pflege der künstlerischen Bildung in Hamburg) が1896年に設立された。「芸術教育保護の為の教員集会」(1896)から具現化していった芸術教育運動は、その後の3回にわたる「芸術教育会議」(1901、1903、1905年)を通じてドイツ全土へ拡大していった。

芸術教育会議で中心的な役割を果たしたリヒトヴァルクは、教師を主体とする組織的な運動を形成する為に、芸術教育運動を固有な教育運動へと転化させ、全ドイツ的な規模での運動の成立に決定的な役割を果たした¹⁴⁾。結果として、20世紀初頭に3回開催された芸術教育会議は、新教育運動の推進力となり、芸術教育に関わる理念は、後の新教育運動へ発展的に継承されていった¹⁵⁾。

(2) 第1回(1901年) 第2回(1903年) 芸術教育会議

第1回芸術教育会議は、1901年9月28日、29日にドレスデンで「造形芸術」(bildende Kunst)をテーマに開催された。同会議には、政府機関の関係者や市当局の代表者を含む約250名が参加し、ここでゲッツェ、イエッセン、カルクロイス、リヒトヴァルク、パラート、ザイトリッツは、造形芸術の訓育と陶冶に向けた革新運動の目標と内容に関する討議の活性化を呼びかけた。第1回芸術教育会議では、芸術教育の理解と表現と接続した図画教育の教育的意味に関わる理論的基礎づけが試みられた¹⁶⁾。

第1回芸術教育会議では、学校や家庭での青少年の芸術教育に関する課題について、チュービンゲン大学教授であるK・ランゲの講演「芸術的な教育の本質から」とリヒトヴァルクの講演「未来のドイツ人」を中心に取組みされた¹⁷⁾。ランゲは、芸術教育の本質を「青少年の問題」と位置づけ、子どもたち一人一人の美的享受能力の向上に連なる教育の実践が重要であると強調した。そこで、芸術への理解が浅い教師を有する多くの学校では、子どもたちの精神を蔑ろにする仕方での授業が実施されているとして、伝統の装飾文様、抽象的な空間形式を模倣する図式的な図画教育を批判した¹⁸⁾。またリヒトヴァルクは、学校改革の全てが教師の力量に左右されており、教師の力量の核心は、生き生きとした力の表出にあると主張した¹⁹⁾。教材、指導技術、より創造的な図画教育の実践不足は否めなかったものの、理論的な芸術教育の理解に向けた初めての討論が実施された第1回芸術教育会議は、当時のドイツにおいて画期的であった²⁰⁾。

第2回芸術教育会議は、1903年10月9日から11日までの間、「母国語と詩」(Sprache und Dichtung)をテーマにワイマールで開催され、第1回芸術教育会議と同様に政府機関の関係者や市当局の代表者、多数の教員連盟の代表者をはじめ225名が出席した²¹⁾。第2回芸術教育会議では、言語芸術である詩や作文の表現能力が主題の中心に据えられ、子どもたちの日常的経験や子どもらしい観点、周囲世界の観察による自由作文等の実践報告がなされた²²⁾。そのなかでリヒトヴァルクは、「芸術的な教育の統一」と題する講演を行い、次回の

第3回芸術教育会議のテーマは「音楽と体操」(Musik und Gymnastik) について討論する予定であると宣言し、学校体育が抱える問題について次のように指摘した²³⁾。

子どもは、学校に行く前は、大昔から人間が受け継いできた性質である遊びや踊りのなかで、身体と意志の諸能力を発達させてきた。このような、本来の遊びや踊りの源泉を認めない体育によって、都会の子どもは遊びや踊りとのつながりが断絶してしまい、この遊びや踊りのなかで培われる生き生きとした諸能力が、眠ってしまい、枯れてしまうのである。なぜなら、どんな身体的な努力も体育のことを思い出してしまい、つまらない気持ちを引き起こしてしまうからである。

さらに彼は、第3回芸術教育会議のテーマの一つである「体操」(Gymnastik) についても次のように述べている²⁴⁾。少々長くなるが引用しておきたい。

体操のなかでは、ドイツ的方法でもイギリス的方法でも我々の欲求を満たすことができない。両方法ともに、美学的な要因が欠けているのである。我々のトゥルネンは、中身のない教師ぶった人間のなかで硬直化している傾向があり、それを魅力的に蘇らせるためには、天才的な教育の素質が必要である。イギリスのスポーツと競技はまだ人間的であり、ますます、ドイツ国内で実施されているトゥルネンの基盤を脅かしている。そのなかで今日的な形態での目標は、粗野な19世紀的な諸要因を断ち切り、トゥルネンがどのように健康の育成に関わるかにある・・・中略・・・両方法が有する側面から、野蛮な力や競争をもって最高記録を達成させるようなものではなく、何よりも音楽との関わりをとおした表現の発達、主として、美しさを目標とするような体操の新しい形態だけが我々を救うことができる。それゆえ新しい体操の中心になるのは、19世紀以前の時代の舞踊から、自由で芸術的に至るような舞踊を目標にすることなのである。

つまりリヒトヴァルクは、体操にたいして創造的で感性的な教育を要求し、学校体育の中枢を形成したトゥルネンに異議を唱えたのである。学校体育を芸術教育として改革する為には、音楽と関わる表現の発達を目標とした新たな体操が必要であり、それによって達成できると考え、第3回芸術教育会議のテーマの一つとして「体操」(Gymnastik) を取り上

げたのである。

第3項 第3回芸術教育会議（1905年）

（1）プログラム構成

「音楽と体操」をテーマにした第3回芸術教育会議は、1905年10月13日から15日にかけて、ハンブルクの芸術ホールにあるマカルト広間で開催された。リヒトヴァルクは、会議初日の冒頭で「我々の会議の目的は、音楽や青少年教育に関わる有能な体操の指導者たちが集まり、各々の分野における考えや要望について自由に討議し、これを我々の国民に提示することである」²⁵⁾ とする会議の目的を述べた。これに加えてリヒトヴァルクは、これまでの芸術教育会議の議論を引き継ぎ、国民が実践する運動の実態を深く認識するように、全参加者へ周知を図った²⁶⁾。

第3回芸術教育会議の名誉理事には、学長閣下でありハンブルク市長の職にあった J.G.メッケベルク、市政府大臣であり高等学校省の指導司祭であったメレ、市政府大臣兼高等学校省指導司祭であった J.F.C.レファルドがそれぞれ就任した。表-1に示した第3回芸術教育会議の準備委員会のメンバーは、それ以前の会議からの継続委員と音楽と体操を専門分野とする新たな代表者とから構成された。音楽の代表者は、フィードラー、ニキッシュ、シャルヴェンカ、ヨアヒム、ヴェムバッハ、シュペンゲル、シュタインバッハの7名、一方体操の代表者は、ミュラー、フリッケ、リュール、ハーン、シュミットの5名であった。これまでの芸術教育会議と同様に、政府機関や市当局の関係者²⁷⁾、教育関係者、芸術家を中心として、新聞や雑誌を主戦場としたジャーナリストも参加し、さらに、45の連盟、12の報道機関の代表者、62名の芸術家と学者、153名の教育者と学校友の会が出席した。会議参加者は総勢333名と、一連の芸術教育会議の中で最多数を記録した²⁸⁾。

表－1. 第3回芸術教育会議準備委員会メンバー

R.バース	教授:ハンブルク
A.リヒトヴァルク	ハンブルク美術館長:ハンブルク
O.エルンスト	Gr.Flottbeck:ハンブルク
K.ミュラー	トゥルネン視察官:アルトナ
M.フィードラー	音楽学校長:ハンブルク
A.ニキシユ	ケヴァントハウスコンサート指揮者:ライプツィヒ
C.フライシュレン	ベルリン
L.パラート	教授:ベルリンーハーレンゼー
H.フリッケ	学校視察官:ハンブルク
D.リュール	ドイツウルネン連盟役員・地方視学官:シュテッティーン
C.ゲツツェ	芸術的教養育成に向けた教員協会理事長:ハンブルク
G.ザルヴェルク	枢密顧問官:カールスルーエ
H.ハーン	ドイツウルネン連盟代理理事長:ハンブルク
P.シャルヴェンカ	王室教授・王室芸術アカデミー構成員:ベルリン
P.イエッセン	王室美術工芸博物館図書館長:ベルリン
E.T.G.シェンケンドルフ	州議会議員:ゲルリッツ
J.ヨアヒム	王室楽団指揮者・王室音楽高等学校長:ベルリン
F.A.シュミット	衛生評議員:ボン
L. カルクロイス	王室芸術アカデミー長:シュトゥットガルト
P.シュルツェ	教授:ナウムブルク・ザーレック
G.ケルシェンシュタイナー	第2回芸術教育会議理事長:ミュンヘン
W.ザイドリッツ	枢密顧問官・第1回芸術教育会議理事長:ドレスデン
W.ヴュムバッハ	演習・音楽教員:ハンブルク
J.シュペンゲル	王室音楽局長:ハンブルク
P.クルムブホルツ	参事官・視学官:ワイマール
F.シュタインバッハ	総合音楽局長・地方音楽局長・ケルン音楽学校長:ケルン
H.ヴォルガスト	教頭:ハンブルク
K.ランゲ	大学教授:チュービンゲン
R.レーマン	教授:ベルリン
F.ヴォイルシュ	教授:アルトナ

(Kunsterziehung , R. Voigtländer Verlag in Leipzig,1906,S.10.より作成。)

表－2にまとめたのは、第3回芸術教育会議のプログラム内容である。初日の午前中は、先に取り上げた「音楽と体操」をテーマとするリヒトヴァルクの講演が実施され、続いてプラハのバトカによる「家庭での音楽育成」、キールのパイプオルガン奏者であり、音楽教員でもあったヨハンセンによる「芸術的な感覚の養成に向けた教育手段としての唱歌」、ハンブルクの大学教授であったバースによる「コンサートとオペラにおける青少年」、ベルリンの大学教授であったデッツイアーによる「音楽的な享受」といったように、音楽を主

題化した講演が重ねられた。午後はハンブルクトゥルネン連盟の St.パウリ体育館において、「トゥルネンの公開演技披露」が举行された。

表－2. 第3回芸術教育会議プログラム内容

1905年10月13日金曜日（場所：芸術ホールのマカルト広間）

1日目	タイムスケジュール	会議内容	担当者名：勤務地
午前	9:00-	1 音楽と体操	A・リヒトヴァーグ：ハンブルク
		2 家庭での音楽育成	R・バトカ：ブラハ
		3 芸術的な感覚に向けた教育手段としての唱歌	H・ヨハンセン：キール
		4 コンサートとオペラにおける青少年	R・バース：ハンブルク
		5 音楽的な享受	M・デツソイアー：ベルリン
午後	15:00-17:30	トゥルネンの公開演技披露 場所：St.パウリ体育館 徒手体操、手具体操、器械体操、輪舞・ダンス	

1905年10月14日土曜日（場所：芸術ホールのマカルト広間）

2日目	タイムスケジュール	会議内容	担当者名：勤務地
午前	9:00-	1 体育による身体美	F.A.シュミット：ボン
		2 徒手体操と手具体操におけるトゥルネン	ディーボウ：ベルリン
		3 遊戯と国民的な運動	J・シュパールビアー：ハンブルク
		4 学校の水泳授業	H.フリッケ：ハンブルク
		5 ダンス	G・フーフス：ミュンヘン
午後	15:00-16:00	男子校と女子校での公開水泳授業 場所：リュウベックエアトアー公営プール	

1905年10月15日日曜日

3日目	タイムスケジュール	会議内容	
午前	8:30-10:15	公開遊戯披露 場所：ハイリゲン-ガイストフェルデス児童公園 タンパリンバルとファウストバル、ラウンダーズ、陣取り	
	10:30-11:00	場所：ハンブルクトゥルネン連盟のSt.パウリ体育館 走・跳・投による国民的な運動	
	11:30-13:00	公開講演 場所：コンサートホール「ハンブルク」St.Pauli	担当者名：勤務地
午後	14:30-	1 音楽的な文化	R・バトカ：ブラハ
		2 美学的な教育における体育の意義	K・ミュラー：アルトナ
		3 我々の芸術教育会議	C・ゲッツェ：ハンブルク
午後	14:30-	小学生のためのコンサートハンブルグ音楽愛好家サークル楽団 指揮者：リヒ・バース（ハンブルク）協力：ハンブルグ教員声楽連盟	

（Kunsterziehung, R. Voigtländer Verlag in Leipzig, 1906, S.11-12. より作成。）

プログラム2日目の午前中は、体操に関わる講演がまとめて実施された。それは、ボンの衛生評議員であったシュミットによる「体育による身体美」、ベルリンの王室トゥルネン教員育成機関長であったディーボウによる「徒手体操と手具体操におけるトゥルネン」、ハンブルクの教員であったシュパールビアーによる「遊戯と国民的な運動」、ハンブルクの学校視察官であったフリッケによる「学校の水泳授業」、ミュンヘンの編集者であったフーフス

による「ダンス」であった。なお、初日と2日目の午前中に実施された各講演の際には、講演内容に関わる討論会が合わせて開催された。ハンブルクからリュubeckに会場を移した午後は、公開水泳授業がリュubeckエアトアー公営プールにおいて実施された。

3日目の午前中は、「公開遊戯披露」、「走・跳・投による国民的な運動」、「公開講演」が立て続けに行われた。公開講演はハンブルクコンサートホールにおいて、バトカによる「音楽的な文化」、アルトナのトゥルネン視察官であったミュラーによる「美学的な教育における体育の意義」、教員であり雑誌『種を撒く人』の編集者であったゲツツェによる「我々の芸術教育会議」がそれぞれ開催された。午後は、第3回芸術教育会議の締め括りとして、ハンブルクの音楽愛好家サークル楽団と国民学校男子生徒たちによる「小学生たちのためのコンサート」と題したコンサートが公開された。

(2) 体操的理念の浮上-体操と音楽と美の融合-

初日の冒頭でリヒトヴァルクは、「音楽と体操は、歌唱もしくは音楽にとって、ダンスや輪舞²⁹⁾のリズミ的な運動が伴う共通の身体的な根源を持っており、この根源は本来高尚で非常に古くからの関係があるものの、世間一般では実際に評価されておらず、体育授業における美学的な効果は、本質的に音楽との関連によって達成する³⁰⁾」と主張した。会議で取り上げられたテーマの一つである「体操」の教育的意義について、身体教育の手段、青少年の健康を獲得するばかりでなく、芸術教育においても重要な力添えになると考えていたリヒトヴァルクは、音楽とトゥルネンの関係にまつわる自身の体験を次のとおり回想している³¹⁾。

私の少年時代、根本的に音楽とトゥルネンの授業をまじめに考えていなかった。学校での指導は多少なりともつまらないものであり、早期に声変りをしたときの歌唱の時間と医師からの診断書によって、トゥルネンの授業を免除されることが嬉しかった。教師の熱狂などはどうでもよく、ただ憎まれないことに注意を払った。

リヒトヴァルクは、自身の体験したトゥルネンが規律を強調したあまり、「次の世代は、そのような身体教育を必要としないだろう」と述べたうえで、新たな思想に基づいたトゥルネンが必要であるとして「成人前の子どもたちが親しんだ伝統的な遊戯に生命を与えること、決意をもって最後までやり抜く為に力を注ぐこと、全身全霊でゲームのルールを尊

重すること、勝利者を称賛すること、これらは新たなドイツトゥルネンが生存する為の思考様式となるだろう」³²⁾と主張した。これに合わせてリヒトヴァルクは、ダンスと輪舞の原型のなかに音楽と体操が根ざしており、これらは生徒の自立心の養成に役立てられると力説した³³⁾。

「家庭での音楽育成」をテーマとする講演を担当したバトカは、ピアノとバイオリンを主流とする従来の一面的な音楽教育に異議を唱え、多様な楽器を導入すること、さらに、音楽を楽しむために重要なことは、音感を正確に把握する聴覚訓練ではなく、音楽とより密接な関係を築くことであり、偉大な作曲家の手による音楽そのものを主観的に感じ取る教育が重要であることを説いた³⁴⁾。また、公開講演「音楽的な文化」のなかで、しばしば従来の音楽教師に認められた高慢性、虚栄心、自己賛美に異議を唱え、教師は特定の形式に従って、生徒に音楽を理解させるのではなく、幅広い視野から音楽を理解させる重要性を指摘した³⁵⁾。

「芸術的な感覚の養成に向けた教育手段としての唱歌」をテーマとする講演を担当したヨハンセンは、ドイツ国民、ひいては、ドイツ社会に対して、「国民学校は、芸術的な教育方法として、唱歌の授業を強化すべきである」³⁶⁾と主張し、国民学校における音楽授業の2週間授業の承認、方法論の確立、学校教育にふさわしい唱歌本の編纂を提案し、情熱ある芸術家と芸術的教養の修得に勤しむ教員の養成を要望した³⁷⁾。

体操の専門家であるシュミットは、「体育による身体美」というテーマをもとに、生理学的な知見に基づきながら、人間の姿勢と身体運動の一つの理想型を掲げ、身体美の表出に向けた教育方法を開示した。シュミットは動きの一つ一つについて「幅広い歩幅で、活気あるリズムとテンポで、優美な姿勢で」という点に留意し、身体に負担をかけない方法で、しなやかな体型を作り上げることを目標とする教育を提唱し、これが美的、かつ、バランスのとれた運動に適い、全ての運動の基礎になると力説した³⁸⁾。彼はまた、身体を酷使した方法を用い、不必要に歪曲した運動を基礎とするトゥルネンの防止を説き、トゥルネンが軽快で自信に満ちたものに達成されようとも、生理学的知見を欠いたまま、不自然なかたちで実施される限りは意味をなさず、重要なことは「運動表現のなかにある、美しさと完璧さである」³⁹⁾という崇高な教育目標を掲げた⁴⁰⁾。

均整のとれた自然な運動を基調とする「遊戯と国民的な運動」について講演したシュバルビアーは、「運動する喜びは、即時に起こる喜びで、創造的な喜びであり、これは現代的な体操 (moderne Gymnastik) の基礎とならなければならない」⁴¹⁾とし、本来的に個々人の

運動欲求や運動感覚を十分に満たす遊戯領域にあるトゥルネンにたいして、創造力を養う教育を付加することを要望した⁴²⁾。また、「美学的な教育における体育の意義」について弁舌をふるったミュラーは、エネルギッシュな身体の解放、自然な運動形式を基礎とする自然法則に従った教育方法、これらに美学的な原理が初めて表面化されることを主張した⁴³⁾。

体操の公開実技披露は、3日間を通して実施された。1時間という短時間の内に多くのプログラムを凝縮した初日は、「トゥルネンの公開演技披露」をテーマとし、国民学校の児童、トゥルネンクラブに所属する男女による徒手体操、手具体操、器械体操、輪舞が披露された。まず、アルトナのトゥルネン視察官であったミュラーの指揮により、アルトナトゥルネンクラブの女性たちが棍棒を用いた簡易的な振動運動を披露し、続いてトゥルネン教員のデッペが、鉄棒を用いた数種類の女性向けトレーニングを紹介した。さらにトゥルネン教員のジーペルドの指導により、国民学校の女子児童たちが鉄棒での簡単なトレーニングを披露した。シュパルビアーとミュラーは、自然的、かつ、美学的な児童たちによる運動の総括として、いかに軽快で自然に即した走り方を教育できるか、という点について言及した。国民学校の男子生徒が腕立て伏せトレーニングを披露し、アルトナの実科ギムナジウムの男子生徒が腕の振動運動による鉄棒の支柱として、また、武器としての活用の実践例を幾つか挙げた。また、これら男子生徒が器械体操、徒手体操、跳び箱、跳馬、鉄棒等の演技を行なった⁴⁴⁾。トゥルネンの公開演技披露の最後に、クリューガー、デッペ、シェールと女性唯一の講師であったラドツヴィルが音楽と体操を関連させた演技を紹介した。そこで、クリューガーは国民学校の女子児童を整列させ、拍子に合わせて歩く・跳ねるというステップを中心とした運動、デッペとシェールはシューベルトの音楽に合わせた変化に富んだダンス、ラドツヴィルは子供の遊戯とフォークダンスに関連する民謡音楽に合わせたダンス運動をそれぞれ紹介した⁴⁵⁾。

2日目の公開水泳授業では、国民学校で実施されている水泳授業が披露され、泳法の指導でなく、自らの姿勢の気づきを目的として、仰向けとうつ伏せでの蹴伸びによる胸郭の意識づけに重点が置かれた。公開水泳授業の最後は、水中リレーや綱引き等の遊戯を男子児童が実施し、水中に一斉に飛び込んだ全ての男子児童によるバタ足は、公開水泳授業の愉快なありようを会議参加者たちに印象づけた⁴⁶⁾。

3日目の公開遊戯披露では、国民学校や上級学校の生徒とトゥルネンクラブの所属者の合同により、卓越した技術的能力、気力あふれる肉体的能力による緊張と楽しさを教養として獲得する試みとして、ファウストバル⁴⁷⁾、タンバリンバル⁴⁸⁾、コルプバル⁴⁹⁾、シュラ

グバル⁵⁰⁾、サッカー等の球技をはじめ、遊戯として陣取りが行われた。次に走・跳・投による国民的運動が披露され、上級学校の生徒により棒高跳び、幅跳び、石投げ、砲丸投げ、槍投げ、円盤投げ、ハードル競走等が実践された⁵¹⁾。

(3) 第3回芸術教育会議の意義

第3回芸術教育会議は、学校体育が教育問題として公的に取り上げられた初の会議であった。同会議のプログラムを参照してみると、体操の公開実技披露が3日間をとおして計画されたことが端的に示すように、学校体育の改革を図らんとするねらいが窺える。第3回芸術教育会議の準備委員会のメンバーであったパラートは、後に雑誌『ドイツ学校改革』(Die deutsche Schulreform)のなかで、「トゥルネン、それ自身は100年間にわたって改変されてきたにも関わらず、芸術的性格を備える取り組みは僅かに過ぎなかった。トゥルネンの芸術性は微々たるもので、トゥルネンを構成する要素の多くは、造型性に役立つものである⁵²⁾」とするトゥルネン批判を展開した。パラートが槍玉にあげた当時の学校体育におけるトゥルネンは、国家経済を支える労働力の確保と軍事力強化の必要性から、健康で命令に従順な工場労働者や兵士の養成に力点が置かれていた。そこでの教師の指導は、号令に合わせて生徒が迅速に動けるよう、規律と秩序の養成を絶対とする運動認識に支えられたもので、生徒個々の身体的特性を抑制した一糸乱れぬ集団運動を尊重したものであった。

衛生評議員であったシュミットは、生理学的知見を欠いた不自然な教育目標のもとで実施されるトゥルネンに異議を唱え、これからは、身体に負担をかけず、美的で、バランスのとれた運動によるしなやかな体型づくりが全ての運動の基礎になると主張した。これは、国防や産業の育成手段と結びついた身体運動から隔離し、自己の身体への意識を促し、個々の身体性を直視した教育の重要性を説くものであった。またシュパルビアーは、均整のとれた自然な運動の希求を内容とする講演「遊戯と国民的な運動」において、「運動する喜びは、即時に起こる喜びであり、創造的な喜びであり、これは現代的な体操の基礎とならなければならない⁵³⁾」と力説した。規律と秩序を絶対とする運動認識に支えられた従来の学校体育では、運動する喜び、創造的な喜びの獲得は難しいとし、創造力の養成に連なる要素をトゥルネンに付加する教育の必要性を主張したシュパルビアーの考えは、学校教育における新しい体育の方向性を示すものであった。これに合わせて、ミュラーが公開講演において、エネルギッシュな身体の解放、自然な運動形式に従った身体の教育方法の重要性を提示したことも、新しい運動認識に基づいた体育のあり方を示唆するものとして捉えら

れよう。

リヒトヴァルクは「音楽と体操」をテーマとした講演において、体育授業における美学的な効果は、音楽との関連によって決定されると述べたが、公開実技披露における具体的な実践例は、クリューガーの拍子に合わせて歩く・跳ねるといったステップを中心とした運動、デッペとシェールのシューベルトの音楽に合わせたダンス、ラドツヴィルの民謡音楽に合わせたダンス運動のみであった。パラートは第3回芸術教育会議の成果について、「新しい体操を演出するのに、体操家や舞踊家の具体例が挙げられず、会議は思わしい結果にいたらなかった」⁵⁴⁾との言葉を後に残している。また、自然体育の形成に関わるドイツの体育改革に貢献したハルテは、会議が失敗に終わった理由として、トゥルネンの公開演技披露をあげ、「美学的な自然の革新とトゥルネンの美的原理の融合を図ろうとしたとき、ドイツトゥルネンの改革はただの腰掛けで、それは深刻であった」⁵⁵⁾と述懐している。しかし、クリューガー、デッペとシェール、ラドツヴィルによる演技披露は、数少ない具体例に過ぎなかったものの、それをトゥルネンに彩られた従来の学校体育の内容と照射するならば、画期的な試みであったと言えよう。第3回芸術教育会議を契機として、人間の本質の問い直しを基本的な観念とする新体操促進運動が胎動し、体操がリズム、音楽と融合した人間の美的な基本運動として実体化していく端緒となった事実を考慮するならば、ドイツ体操史における同会議の足跡は非常に大きいものであったと認識できよう。

第2節 体操諸流派の台頭

第1項 表現技術の革新に向けた医学的見地に基づく体操系統

(1) デルサルト

新体操促進運動は、まずフランスの演劇家で、教育者でもあったフランソワ・デルサルト (François Delsarte, 1811年-1871年) の活動を端緒として立ち上がった。オペラ歌手を目指していたデルサルトは、1830年に歌手としてデビューしたが、誤った指導を受け続けた弊害として、声帯を痛めてしまった。当時の教育方法は、一流の俳優やオペラ歌手が模倣形式で少数の生徒を指導するもので、その内容は、生徒が戯曲の場面、詩の朗読の準備を積んでレッスンに臨み、教師によって修正、演じられたもの模倣するというものであった。教師たちは、指導上の基準を何ら共有しておらず、ひたすら個性や我流の指導方法を押し通し、執拗に模倣を強いた。それが俳優志願者にとって唯一の修行方法であった⁵⁶⁾。その

結果として、デビューの4年後に声が出なくなってしまったデルサルトは、自らの経験から、歌手や俳優を養成する正しい指導法の必要性を痛感し、身振りと発声を指導の中心に据えた表現技術を考案するに至った⁵⁷⁾。

デルサルトは、可能な限りその場その場の感情と関連付けながら、実際に世の人々がどのように動作し、反応し、話をしているかを正確に観察し、把握しようとした。都合15年間にわたり、デルサルトは情緒的刺激にたいする、あらゆる年齢層、社会階層、性格類型に及ぶ人間の反応を観察し、膨大なデータを収集し、そこでの分析結果から抽出した身振り、発生、表情の法則が数学の公理とほぼ同様に正確であることを突き止めた。デルサルトは、画家、彫刻家、作曲家、オペラ歌手などの芸術家のみならず、法律家、政治家、宗教家、批評家などの識者が集まるスタジオをパリに開き⁵⁸⁾、1839年から「応用美学講座」を開講した。そこでデルサルトは、身体の諸器官に関わる言語表出について、精神的で知的な存在である頭部、道徳的で意志的な存在である胴体、生命的で身体的な存在である四肢の3種類があるとし、これらを統合した「三位一体」の原理を導き出した。さらに、身体の3区分について、以下に記した3つのゾーンに分類し⁵⁹⁾、これらの部分を各々練習し、後にそれらを組み合わせて統合できるようにした。

【頭部】

積極的ゾーン：正面（精神的）、頬（道徳的・意志的）、口辺（生命的）

消極的ゾーン：側頭部（精神的）、頭頂部（道徳的・意志的）、後頭部（生命的）

【胴体】

胴：胸部（精神的）、上腹部（道徳的・意志的）、腹部（生命的）

【四肢】

腕：上腕（精神的）、前腕（道徳的・意志的）、上腕（生命的）

脚：足（精神的）、下脚（道徳的・意志的）、上脚または大腿（生命的）

デルサルトの弟子であったアメリカ人の演出家スティール・マッケイ（Steele Mackaye, 1842年-1894年）は、これら各部分を統合させた体操をハーモニック・ジムナスティック（調和体操）と命名した。デルサルトは、自らの体験に基づいて人間の運動を分析し、身体と情緒からなる精神を「表出」として一体化する独自のシステムを考案した。この独自のシステムを支える運動認識は、外面的な機能や運動というかたちだけでなく、内

面をも表出するものであった。デルサルトの表現システムは、マッケイに継承され、マッケイの弟子であるジュヌヴィエーヴ・ステバンス (Genevieve Stebbins, 1857 年-不明) が 1902 年に上梓した著書『デルサルトの表現システム』(Delsarte System of Expression) により、広範に普及するところとなった⁶⁰⁾。ステバンスは、美的体操の構想を抱いていたリングのスウェーデン体操⁶¹⁾とデルサルトの理念に基づき、医学的、衛生学的な体操体系と最新の呼吸に関わる学説とを結びつけ、呼吸、緊張、弛緩を中心とした体操体系を構築した⁶²⁾。後にデルサルトの表現システムは、図-8 にその一例を示した「表出運動」としてステバンスに受け継がれ、新体操促進運動の担い手たちに大きな影響を及ぼすところとなる⁶³⁾。

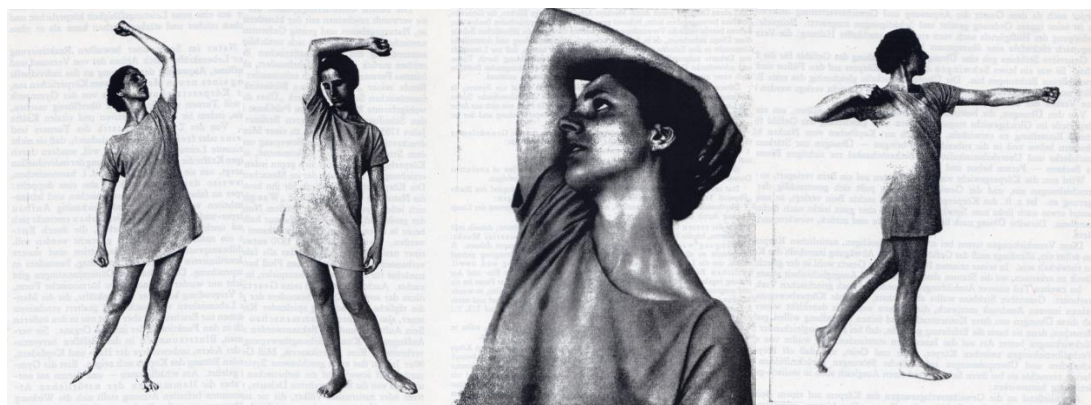
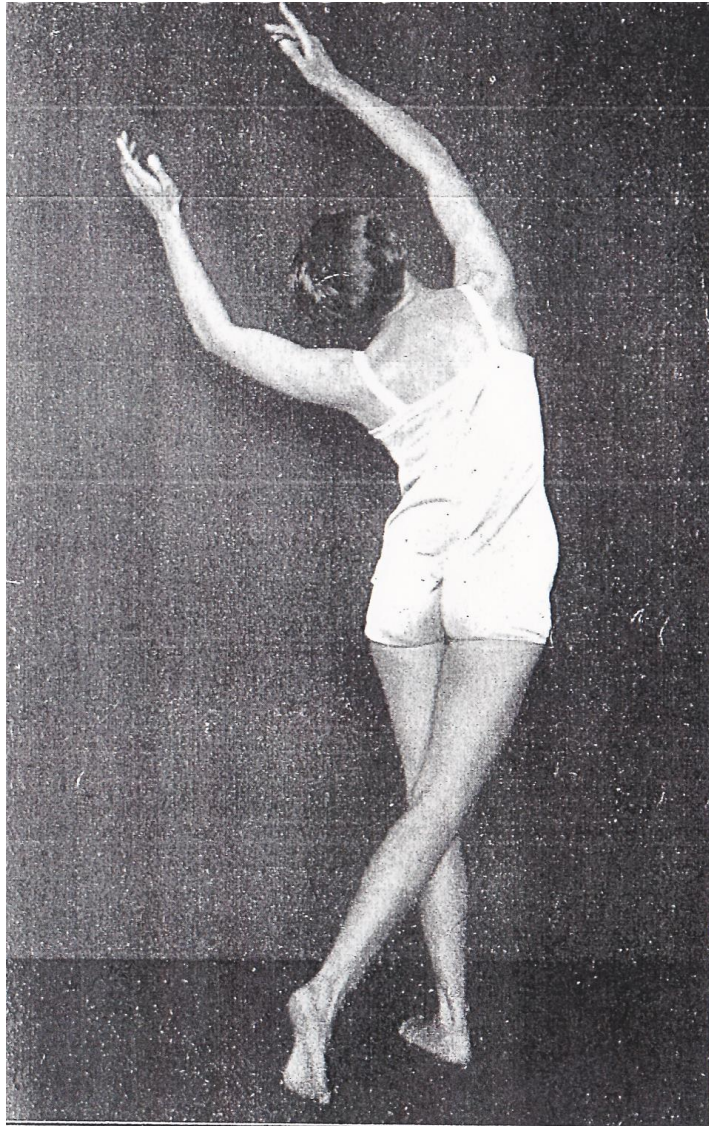


図-8. デルサルト＝ステバンスの表出運動

(Hilker, F. (1926) Vomsinn unserer Arbeit. GYMNASTIK 5/6: S. 70-81. より転載)

(2) カルマイヤー

カルマイヤー (Hedwig Kallmeyer-Simon, 1884 年-1948 年) は、俳優や歌手を養成するための表出体操の基礎を築いたデルサルトの流れを汲むステバンスに師事し、体操体系を学んだ。彼女は 1910 年に著書『芸術体操』(Künstlerische Gymnastik) を上梓し、自ら提唱する芸術体操の体系化に努めた。カルマイヤーの体操体系である芸術体操は、身体の調和的な陶冶とそれに関わる運動法則を基礎にした運動美の教育、日常生活や舞台芸術、音楽の印象を造形的に表出する身体訓練を目的としたものである (図-9 参照)。ギリシアの絵画や彫刻を観察し、そこでの芸術的な姿勢や動作を基礎とする運動美の習得に向けた教育を実践するため、カルマイヤーは次にあげる 3 つの運動法則を提唱した⁶⁴⁾。



図－9．カルマイヤーの身体運動

(Hilker,F. (1928) Reine Gymnastik. Hesse, Berlin, S.32.より転載)

1. 調和的な姿勢の法則 (Das Gesetz der Harmonischen Stellung)

体の重心を自然の状態に置くことにより、強健な身体を優雅に導く法則。

2. 反運動の法則 (Das Gesetz der Gegenbewegung)

四肢の自由な動作により、多種多様な姿勢を導く法則。

3. 運動系列の法則 (Das Gesetz der Folge der Bewegungen)

正しい姿勢から発出した運動により、重心移動を合理的に導く法則。

カルマイヤーの身体教育は、①美的体操とダンス②条件付き器械体操③左右身体の均衡の陶冶に配慮した野外の遊戯とスポーツ、とに大別されるものであった⁶⁵⁾。そのなかで彼女は、自らの師であるステバンスの運動認識に基づく体操体系「呼吸・緊張・弛緩」を中心に、音楽と運動の結びつき、手具を用いた運動（棍棒、木の棒、皿鈴、輪）等、運動の多様性を重視しながら、あらゆる運動が身体訓練として重要であると主張した⁶⁶⁾。カルマイヤーは、1908年に体操学校をベルリンに設立し（図-10参照）、自らの芸術体操の普及に努めた⁶⁷⁾。

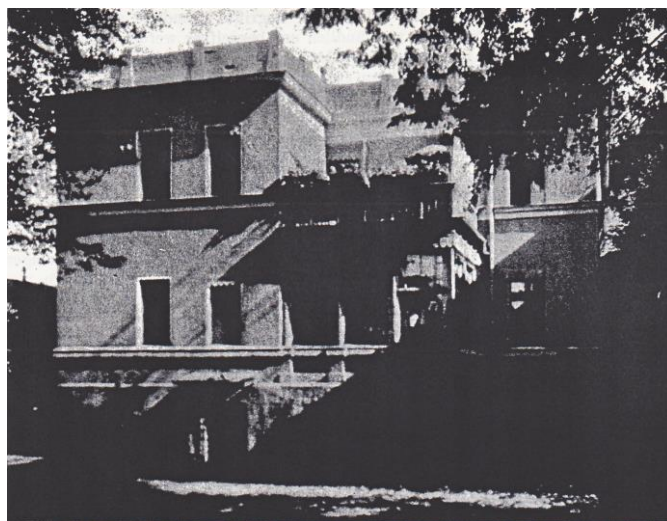


図-10. カルマイヤーの学校

(Röhr, E. (1933) Zur Bildung des Begriffes Gymnastik. GYMNASTIK11/12:S.183.より転載)

(3) メンゼンディーク

カルマイヤーと同様にステバンスに師事したメンゼンディーク (Bess Mensendieck, 1864年-1957年) は、特に女子の健康を視野に収めながら、医学的見地に立脚した独自の体操の体系化に努めた。ドイツの体操家たちに強いインパクトを与えた『女性の身体文化』(Körperkultur der Frau) を1906年に上梓したメンゼンディークは、同著のなかで「身体を体系にあてはめることが目的ではない。人間の身体をその解剖学的構造と物理学的合法性のなかで、自らが一つの体系をつくりあげていくということ、その営みに気付かせることが目的である」⁶⁸⁾と主張し、鋳型化された体操のあり方に異論を唱えた。彼女は、当時の女性が人体の構造や機能に関する知識を殆ど持ち合わせていないと指摘し、身体のどの部分をいかに動かせば、身体の形態のくずれを直せるのか、という運動認識の大切さを女性に理解させようとした⁶⁹⁾。また彼女は、解剖学的、生理学的な観点から女性の身体特性に

適った「機能体操」(Funktionelle Gymnastik)の体系化を試み、これらの研究成果をベルリンに設立したメンゼンディーク中央体操学校を通して1910年に発表した。

メンゼンディークは、当時の学校で実施されていたトゥルネンの授業が、模範とされた運動を正確になぞるドリルと化していることを批判し、身体への理解を深めるためには、運動の原理を学び、図-11に具体的な実践例を示したように、常に筋肉の特質を自発的に発見していくべきことを唱えた。彼女は、身体を総合的に把握するための30通りの運動内容を網羅した『機能的な女性体操』(Funktionelles Frauenturnen)を1923年に上梓した。メンゼンディークの体操体系は、方法論的な厳格さ、および、美的な洞察の深さにより、後に設立された多くの体操学校の模範となった⁷⁰⁾。

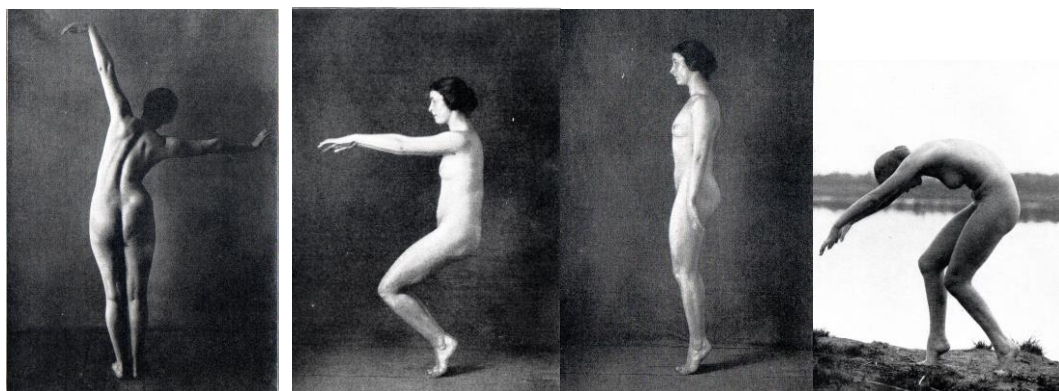


図-11. メンゼンディークの体操

(Pallat,L./Hilker,F. (1926) Künstliche Körperschulung. Breslau より転載)

(4) ローエランド

ローエランド系の代表であるローデン (Hedwig von Rohden) とランガード (Louise Langgard) の二人の女性は、メンゼンディークとカルマイヤーから強い影響を受け、運動の出発点を呼吸においた方法を見出し、二人の名前からローエランド (Loheland) 学校を設立した (図-12 参照)。ローエランド学校を紹介したパンフレットには、以下の記事が掲載されていた⁷¹⁾。少々長くなるが、引用しておきたい。

体操は人間の身体を必要とする。しかし、体操の領域で第一に問題なのは、身体 (Körper) ではなく、運動 (Bewegung) であることをまず認識しなければならない・・・中略・・・これは、音楽が音に、数学が数に従うのと同様に、体操は運動に従っている。

運動は個別的に条件づけられるものではなく、一定の法則性を伴った運動それ自体によって生ずる精神の現象形態である。音楽家や数学者が、ただ感情的に音や数を操るのではなく、それらの本質を認識せねばならないように、運動の本質も認識されねばならない。体操はまずもってして運動学であり、そこでは、運動の本質や条件に関わる明確な知識を得ることが問題となる。



図-12. ローエランド学校

(Hilker,F. (1933) Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes.

Aus den Ereignissen der Jahre 1925-1933. Gymnastik11/12:S.165.より転載)

ローエランドの体操は、外的な要素を重視する運動を主としたシュピース＝マウル式の運動ではなく、人間の全身体に内在する運動を運動認識の射程に取り込み、特に女生徒の心身統一をはかるために身体体験を重要視した。

ローエランド学校では、次の具体例が示すように⁷²⁾、人間の意志を自由に発露させ、人間開発の手段として体操を用いた。

生徒たちに上体前屈を練習させて、どの関節や筋肉がこの運動を可能にしているか、どこで運動が始まり、それがどのように身体に広がっていき、終わるのかを感じさせ

る。また、直立の際には、脚の上に骨盤、骨盤の上に胸部、最後に全体の組み立ての上に頭部というように、いかに諸部分が重なり合って、身体が重力のなかで平衡をとるように構築されているかを感じさせる。そうして、この自己の身体の体験的認知 (erlebnismäßiges kennenlernen) により、現代人に欠如している身体感覚 (Körpergefühl) が再び喚起され、身体が意識下に置かれる。

図-13 にその一端を示したが、ローエランドの体操は、従来の強制的な体操から、自発的に内部から生ずる意志を尊重した身体運動への転換を図るものであった。「指導者は助言者であって、命令者であってはならない」⁷³⁾ とする彼女たちの指導法は、まさしく自由意志に基づいた体操教育であった。

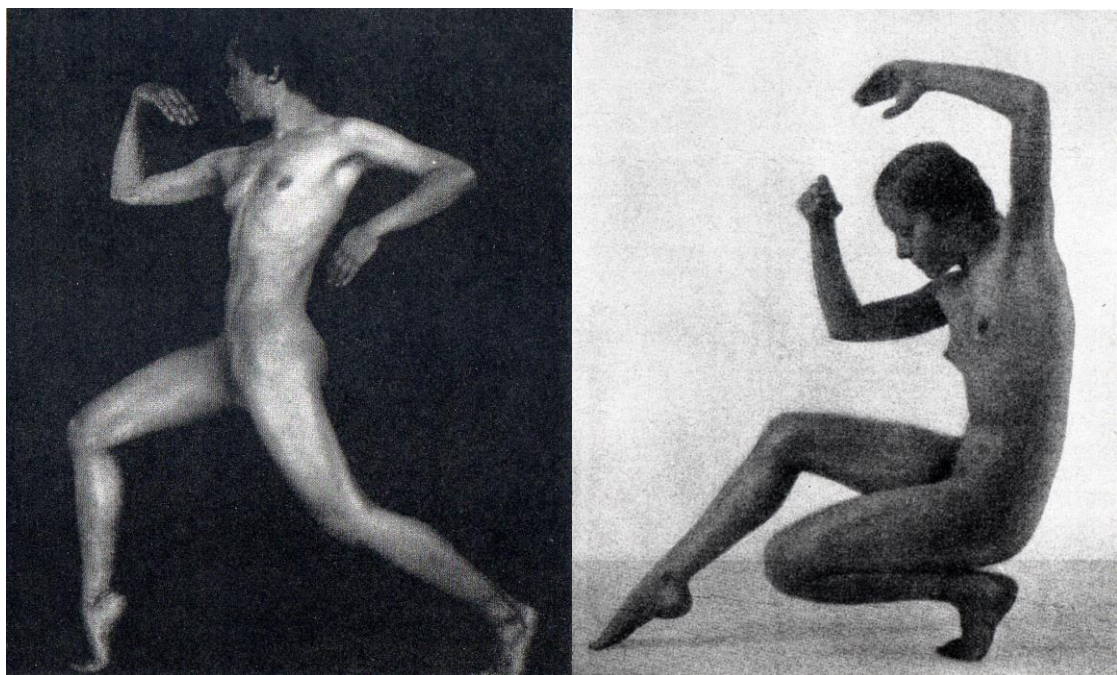


図-13. ローエランドの体操

(Pallat,L./Hilker,F. (1926) Künstliche Körperschulung. Breslau より転載)

第2項 運動リズムと表現力の発達に向けた音楽教育的見地に基づく体操系統

(1) ダルクローズ

音楽のリズムの習得と身体運動の関連性に注目して、リトミック (Rhythmische Gymnastik)

を考案したのが音楽家のダルクローズ (J.Dalcroze,1865 年-1950 年) であった。ダルクローズは、「リズムが音楽の最も重要な要素であり、音楽におけるリズムの源泉は、すべて人間の身体其自然なリズムに求めることができる」⁷⁴⁾ との前提に立った音楽教育を提唱した。しかし、ダルクローズが提唱したリトミックは、音楽教育のみならず、体操やその後のバレエやモダンダンスに多大な影響を及ぼすこととなった。

教授としてジュネーヴ音楽学院で授業を担当していたダルクローズは、その際に多くの学生が高度な楽器の演奏技術を持ち合わせていながら、音楽を感じ、表現することができないという実状を目の当たりにした。そこでダルクローズは、単純なリズムさえ捉えることができない生徒たちのリズム感の乏しさを運動認識の欠如に求め、音楽を、感じ・聴き・創り出し・知覚そして想像し・関係づけ・記憶し・読み書きし・演奏し解釈する能力を養成するための音楽教育の構築に努めたのである⁷⁵⁾。

ダルクローズは、リズム感覚を高める方法の確立に向けて、リズム学習における筋肉的感覺の作用について観察し、身体が動くときは、常に動きの知覚が感覚へと転換され、それは神経組織をとおして脳へ送られ、そこで知覚の情報は次々と知識へと転換されると仮定した。脳は、方向、重さ、力、アクセントの質、速度、長さ、出発点、到着点、直線と曲線の流れの過程、四肢の位置、関節の角度、重心の変化等に関わる感覚を知覚の情報へと変える。頭脳は情報を判断し、神経組織をとおして再び身体へと命令を発する。これらの命令は、人体を傷害から守り、集中力や記憶力、想像力や意思決定等の心的現象をとおして導かれる運動の効果的な方法を発見するために発せられる。この一連の筋肉運動感覺(動き-感覚-知覚)の過程を前提として、ダルクローズは自らの方法論を成功に導くための必要条件として、「聴くことは動きに結びつき、動きは感覚に訴え、感覚は筋肉運動感覺を引き起こす。筋肉運動感覺は情報を頭脳へ直接もたらし、神経組織を経て身体に戻る。この頭脳の結合は、表情豊かな演奏・読譜・記譜・即興演奏を進歩させ、改善し、完成するのに必要な分析的過程へと導く」⁷⁶⁾ との認識を獲得するに至った。

ダルクローズは、筋肉運動感覺による意識的なコントロールの可能性を生徒に気付かせ、運動認識をもとに、リトミック訓練の主要な目標を①注意力の発達②注意力の集中力への変換③社会的統合(自己と他者との類似・相違・適切な反応への意識)④すべてのニュアンスにたいする音の感じによる反応・表現⁷⁷⁾ に定めた。さらにダルクローズは、音楽にたいする無意識な身体的反応に関わるテクニックの習得に向けたリトミック訓練の8つの要素⁷⁸⁾ として、①リズムは音楽である②リズムは身体的なものである③すべての運動は、

時間と空間を含む④音楽的意識は、身体的体験の結果である⑤身体的活動の完成は、知覚の明晰さの結果である⑥時間における運動の完成は、音楽的リズムの意識を保証する⑦空間における運動の完成は、形体的リズムの意識を保証する⑧時間と空間における運動の完成は、リズム的な運動の訓練によってのみ得られる、をとりあげた（図-14 参照）。



図-14. ダルクローズのリトミック

(Pallat,L./Hilker,F. (1926) Künstliche Körperschulung. Breslau より転載)

ダルクローズは、1915年にドレスデン郊外のヘレラウにジャック＝ダルクローズ学校を開校して以降、リトミックの指導を軌道に乗せていった。彼のリトミックの認識は、「音楽教育のための基礎的な訓練法であって、表現そのものではない」⁷⁹⁾と限定されたものであったが、ダルクローズの学校では、次世代の芸術や教育を牽引する多くの人材を輩出した。ラバン、ボーデ、ヴィグマンといった新体操促進運動の担い手が、ダルクローズの独創的な教育の実験を学んだように、彼の功績は音楽教育のみならず体操教育にも及ぶものであった。

(2) ボーデ

ボーデ (Rudolf Bode, 1881年-1971年) は、音楽と身体運動を結びつけたリズム教育の創始者であるダルクローズのもとで学びながらリトミックの指導免許を取得し、1911年に自らの学校をミュンヘンに設立した。スウェーデン体操の後継者たちによって実践されていた体操が、生理学的・解剖学的な側面ばかりを強調し、形式化していることに異を唱えたボーデは、生命体・有機体としての人間の内面から生ずる運動衝動を自然的、全身的に表現するリズムカルな運動が体操の本質であると主張し、表現体操 (Ausdrucksgymnastik) の体系化に努めた。1922年に『表現体操』(Ausdrucksgymnastik)を上梓し、さらに、哲学者クラゲス (Ludwig Klages, 1872年-1956年)⁸⁰⁾の影響を受けたボーデは、身体運動の特質はリズムにあるとの立場から体操体系を構成し、その運動教程を提示した⁸¹⁾。

リトミックの教師として、ダルクローズの指導にあたったボーデは、音楽教育の一環としてのリトミックのありように疑問を呈していた。ダルクローズの教育方針は、リズムの有機性を動きで表現するというより、韻律法によって音楽と運動を結びつけようとするものであった。しかしながら、ボーデの教育方針は、生命の源としてリズムを捉え、他律的ではなく、自発的な動きに基づいた体操を提唱するもので、体操へのアプローチは、生理学的・解剖学的見地からではなく、自然運動の本質に留意し、リズムの有機性や創造性の表出に起因するものであった。ボーデは、人間の生命ある身体、そこに内在する運動こそが本源的、自然的なものとする運動認識をもとに、この運動の法則性を感知し、それを適切な練習によって抽出し、維持発展させることが体操の課題であると考えた。その際により良い運動を決定する質的原理として、ボーデは、①伝導性の原理を持った全体性の原則 (Das Gesetz der Totalität mit dem Übertragungsprinzip) ②動きにおける緊張と解禁の交互作用の原則、および、運動経過の三相性の理論 (Das Gesetz des rhythmischen Wechsels von Spannung

und Entspannung in der Bewegung und die Lehre von der Dreiphasigkeit des Bewegungsablauf) ③
経済性の原則とリズムの恒常性の理論 (Das Gesetz der Ökonomie und die Lehre von der
Stätigkeit des Rhythmus) ⁸²⁾ の3点を挙げた。

図-15 に具体例を示したボーデの提唱する表現体操は、人間の感情の衝撃を動きのなか
に表出させることで、シュピース=マウルのトゥルネンに見られる、予め定められた動き
を恣意的に分割したり、組み合わせたり、鋳型にはめ込んだ運動形成から脱却し、その根
底にある形式的・合理主義的な運動認識を克服せんとするものであった ⁸³⁾。

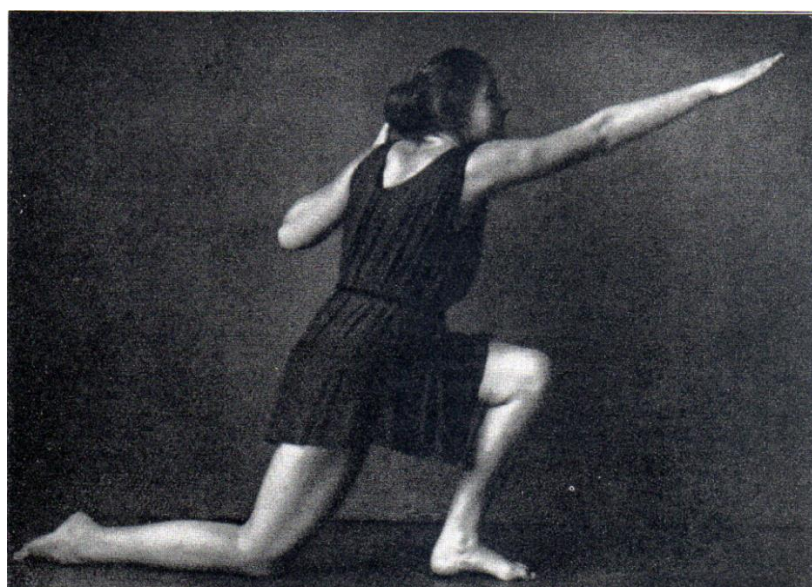


図-15. ボーデの表現体操

(Pallat,L./Hilker,F. (1926) Künstliche Körperschulung. Breslau より転載)

第3項 運動構成の発達に向けたダンス的知見に基づく体操系統

(1) ダンカン

アメリカ人のイサドラ・ダンカン (Isadora Duncan, 1877年-1927年) は、19世紀末から20世紀初頭にかけて西洋で勃興した近代舞踊革命の担い手である。彼女はデルサルートの弟子であるステバンスのもとで学び、アカデミック、かつ、クラシカルな「パ」(Pas)⁸⁴⁾に代表されるバレエの様式を用いず、人間の本能や直感、感性といった、内側から湧き上がる即興的な動きに注目した。ダンカンは舞踊史に刻まれる二つの功績を残している。

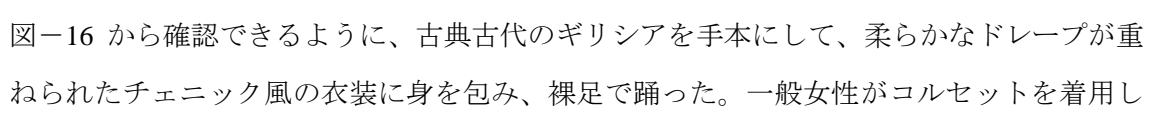
一つは衣装の解放である。コルセットとトゥシューズによって身体の一部を奇形化し、定式化した運動パターンを組み合わせる物語を表現する古典バレエに異を唱えた彼女は、 図-16 から確認できるように、古典古代のギリシアを手本にして、柔らかなドレープが重ねられたチェニック風の衣装に身を包み、裸足で踊った。一般女性がコルセットを着用していた時代に、コルセットを付けず、トゥシューズの代わりに裸足をさらけ出して踊るダンカンは、「自由」で「自然」で「健康」な、新しい女性と身体文化の象徴と見なされた⁸⁵⁾。



図-16. ダンカンの衣装

(Frank-Manuel,P. (2000) Isadora & Elizabeth Duncan in Deutschland. Wienand, S.9.より転載)

もう一つは、ダンスと相容れないと考えられていた、ヴァーグナー、バッハ、ベートーヴェン等の音楽を使用し、そこから感じたインスピレーションをもとに即興で踊ったことである⁸⁶⁾。ロシアを除いた19世紀後半のバレエは、大衆娯楽として定着していくなかで、技巧や装飾効果の過剰さを懸念する向きが強かった。このようなバレエの虚飾化が進行する一方で、芸術とは何か、舞踊とは何かという問い斯界で立ち上がり、「舞踊とは人間の内面的なものを体で表現する芸術である」⁸⁷⁾との考えが広がり始めていた。ダンカン

る時であれ、踊る時であれ、いつでも内的な目覚めから出発し、音楽にたいする深い沈潜から肉体が喚起されるのを待った。人間の生と舞踊を密着させるためにダンカンが見出した創作方法は、当時の舞踊芸術に欠けていた人間の内面感情に焦点を当てたものであり、既成の形式を解体し、「自然」を根源に据えて、人間の理想的な形態美を復活させ、この形態を表現しうる動きを復活させようとするものであった⁸⁸⁾ (図-17 参照)。



図-17. ダンカンの表現

(Frank-Manuel,P. (2000) Isadora & Elizabeth Duncan in Deutschland. Wienand, S.22 より転載)

ダンカンは、自らの舞踊にたいする思索を公演『未来の舞踊』(1902年-1903年)で明らかにしているが、その概要は次のとおりであった⁸⁹⁾。

自然こそ舞踊の根源である。裸に回帰した人間の動きは、自由な動物たちのように自然で美しい。芸術におけるもっとも高貴なものは、裸身である。未来の舞踊の根源となる基本の動きを発見し、止まることのない連続した動きを生み出さなければならない。これから創設するであろう舞踊学校では、子どもたち自身が自分の動きで踊れるように教え、身体と魂の調和的発達を図る、また、未来の舞踊はギリシアの場合と同じく、再び高度な宗教芸術、魂の表現となるべきである。

引用から確認できるように、1905年にダンカン姉は姉のエリザベートとともに学校をベルリンに設立した。ダンカンの学校は、パリ、ニューヨーク、モスクワでも開講されたが、とりわけ重要視されたのが、舞踊教育の内容や方法を工夫する拠点と位置付けられたベルリンであった⁹⁰⁾。個々人の感覚を重視した内面的な運動認識への転換を図ったダンカンの取り組みは、当時の体育を改革する鍵となった⁹¹⁾。内面的な感情の表現を提唱したダンカンの主張は、芸術教育や新体操促進運動に多大な影響を及ぼすところとなった、しかしながら、運動を形成するための技術体系、および、ダンカンの運動認識を具現化するための方法論が確立されていなかった為に、後継者の育成は実現ならなかった。

(2) ラバン

ダルクローズのもとでリトミックを学び、芸術的な側面からリズム教育にアプローチしたルドルフ・ラバン (Rudolf von Laban, 1879年-1958年) の功績の一つは、舞踊を空間芸術とみなしたことである。バレエを含めた舞踊は、時間芸術とみなされており、音楽の形式に依存する芸術と捉えられていたが、ラバンは舞踊それ自体の形式を確立する基本条件として空間学 (Raumlehre) を構築し、多面的な空間の運動方向に対する感情を舞踊家に理解させようとした⁹²⁾。その感情を表現させることに力点を置いたラバンの運動認識は、空間における可能な方向 (前方、後方、横方) に加えて、3つのレベル (低く、高く、中間)、3つのエネルギーレベル (強い、弱い、普通)、3つの速度レベル (ゆっくり、普通、速く) を用いることにより、一つの動きからあらゆる可能性をもつ運動形成に向けたものである。この運動認識による三重構造の基盤となるのは、運動の拡散と収縮の概念であり、中心から外へ向けられたものと、指先から内に向かうものであった⁹³⁾。ラバンは、バレエ、デルサルト、ダルクローズのリトミック、フォークダンス、数学、幾何学、解剖学を参考にし

ながら動きをつくり、統御する基本的要素を解析し、等身大のガラスのイコサヘドロン（20面体）を用いて、図-18 に示したように運動のあらゆるタイプと方向の完全な図表をつくる実験を行い、空間学を構築した⁹⁴⁾。

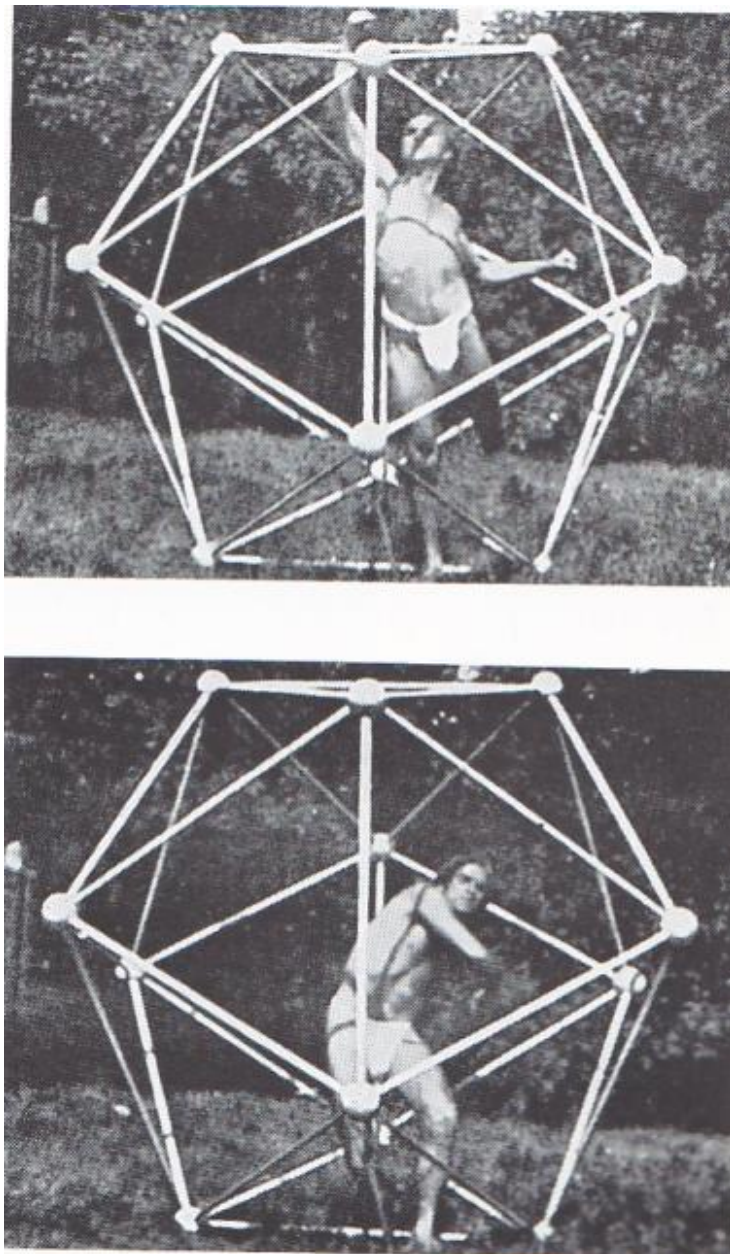


図-18. ラバンのイコサヘドロン

(Müller, H/Stöckemann, P. (1993) ”... Jeder Mensch ist ein Tänzer.”.

Anabas-Verlag, Gießen, S.65.より転載)

ラバンのもう一つの功績は、群舞による舞踊表現の領域を拡大したことである。従来の舞踊作品では、多数の舞踊家が同時に舞台上で踊っても、常に一人が中心で、他の者は「その他大勢」として括られ、伴奏の役割を担っていた。しかし、ラバンの群舞では、群そのものが主人公であり、個人の表現力以上に、より大きな表現力を引き出せるようになった。ラバンによって「動きの合唱」(Bewegungschor)と命名されたこの群舞は、後のダンスや体操の中核部分を占めるようになった⁹⁵⁾(図-19 参照)。

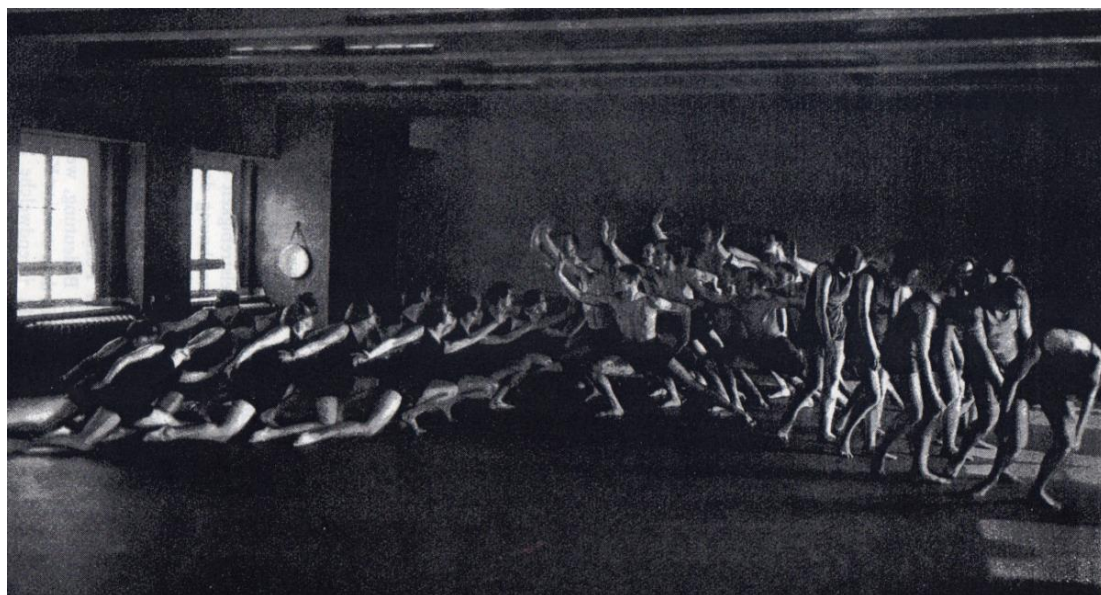


図-19. ラバンの「動きの合唱」(Bewegungschor)

(Bähme,F. (1926) Die Raumlehre der tänzerischen Bewegung.

GYMNASTIK 9/10:S.137.より転載)

またラバンは、舞踊が音楽に依存するのではなく、舞踊が音楽を主導するという考えを持ち合わせていた。この考えに基づきながら、舞踊や体操の基本形式、訓練法、創作に至るプロセスと伴奏音との関係に注目し、群舞での表現に活用したのである⁹⁶⁾。これに加えてラバンは、図-20 にとりあげた身体運動の記述法に関する研究にも着手し、舞踊を含むあらゆる運動の普遍的なコード化を目指し、舞踊記譜法を考案した。ラバンによる諸々の取り組みは、舞踊教育のみならず体操教育にも多大な影響を及ぼしていった。

Aus einem festlichen Marsch für Laienchor
 von Albrecht Knust
 ca. 24 Frauen, ca. 8 Männer

Aufgenommen bei den
 Hamburger Bewegungschören Laban

Kelliformige Gruppen, an den Spitzen die Männer

Anm. L und 7 bedeutet: Die Bewegung ist über vor bzw. zurück zu führen

Beilage zu Heft 2 des 3. Jahrganges der Zeitschrift „Schrifttanz“

図-20. ラバンの舞踊記譜法

(Müller, H/Stöckemann, P. (1993) ”... Jeder Mensch ist ein Tänzer.”.

Anabas-Verlag:Gießen,S.67.より転載)

(3) ヴィグマン

マリー・ヴィグマン (Mary Wigmann,1886年-1973年) は、ラバンに師事し、ラバンとともにドイツモダンダンスの礎を築いた。ヴィグマンはダルクローズのもとでリトミックの

資格を取得したが、身体運動のすべてを音楽に依存させたダルクローズの教育方法に限界を感じていた。彼女にとって、リトミックは無味乾燥で、自由な即興の余地がまったくなかった為に、身体運動に音楽を従属させるという理論を確立したラバンのもとで、人間の感情の表現としての舞踊表現を模索した。

ヴィグマンは、1914年に『魔女の踊り』(Hexentanz)でダンサーとしてデビューした(図-21参照)。



図-21. ヴィグマンの作品『魔女の踊り』(Hexentanz)

(邦正美(2000)メリー・ヴィグマンの芸術と思想. 論創社: 東京, p.72より転載)

この踊りは、激しく跳躍し、腕を大きく広げ、見慣れない奇妙な姿勢で身体をねじったりして、自分自身の感情表出の形式を求める内面の葛藤を表現したものであった。『魔女の踊り』以降、ヴィグマンは自ら感じ、体験したものを表現した舞踊作品『幽霊のダンス』(Gesoenstänze)、『夢』(Träume)、『恍惚のダンス』(Ekstatische Tänze)を発表し⁹⁷⁾、1921

年に自らの学校をドレスデンに設立した（図-22 参照）。



図-22. ヴィグマンの学校

（邦正美（2000）メリー・ヴィグマンの芸術と思想. 論創社：東京，p.43 より転載）

ヴィグマンの舞踊の第一の特色は、空間と運動認識の関係性にあり、運動範囲の限界、あるいは、運動する力への抵抗を示す要素として空間を認識し、各個人が適応していかなければならない宇宙の象徴的提示として空間をとらえたことである。第二の特色は、舞踊本来の型式や形態を見出すための運動形成に向けて、図-23 から確認できるように、既成の音楽から離れて、ゴングや太鼓などの打楽器を用い、また、時には無音楽舞踊を試み、振り付けと並行して音楽を作曲したことである。第三の特色は、図-24 が示すように、群舞により舞踊表現の領域を拡大し、新しい質の表現を加えようとしたことである⁹⁸⁾。これらの特色をもとにヴィグマンは、体内で感得しうる無音での舞踊を作品化し、さらに、人間の内面に潜む非理性的な力の闇と光を表現した⁹⁹⁾。



図-23. ヴィグマンの楽器を使用した作品

(邦正美 (2000) メリー・ヴィグマンの芸術と思想. 論創社：東京, p.128 より転載)



図-24. ヴィグマンの群舞

(邦正美 (2000) メリー・ヴィグマンの芸術と思想. 論創社：東京, p.112 より転載)

第3節 ドイツ体操連合の設立への経緯

第1項 ベルリン中央教育研究所と徹底的学校改革者同盟

「音楽と体操」をテーマに開催された第3回芸術教育会議により胎動した新体操促進運動は、体操家、音楽家、舞踊家の様々な取り組みをとおして活発化し、既述したように、1920年代にはいると新たな運動認識と運動形成に基づく体操思潮を醸成させていった。ドイツ体操連合設立の契機となった1922年の芸術体操会議（Tagung für künstlerische Körperschulung）で主体的な役割を果たしたのは、「ベルリン中央教育研究所」（Das Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht in Berlin）と「徹底的学校改革者同盟」（Bund entschiedener Schulreformer）である。そこで以下、両者の取り組みに注目しながら芸術体操会議の開催に至る経緯について言及しておきたい。

1914年にドイツの教育振興を目的に設立されたベルリン中央教育研究所は、新たな運動認識や運動形成に基づいた教育を模索する研究会、会議、講演会、学習会の主宰、国内外の教育事例や動向の調査を主な活動とし、また、これらの内容を図書にまとめて、活動成果を広く一般に公開した。さらに、各種の文化的行事を開催して、新たな教育に共鳴する教員、市民との学習交流の場を提供し、多くの人々に新教育を周知させたのであった¹⁰⁰⁾。

ベルリン中央教育研究所は、教育学部門、展示部門、外国部門、芸術部門、フィルムセンターの5部門から構成されており¹⁰¹⁾、所長は芸術教育運動の組織化の契機となった1896年の「芸術教育保護の為の教員集会」を計画し、また、3回にわたる芸術教育会議の準備委員会の一員でもあったパラート（Ludwig Pallat, 1867年-1946年）である。芸術部門の所長も兼務していたパラートは、本来、図画教育を専門とする美術学者であった。そのために芸術部門では、芸術教育の教授法の研究とともに継続教育、教育改革のテーマとして、塑造芸術、朗唱教育、素人演劇、音楽教育を取り上げた¹⁰²⁾。

パラートの補佐は、徹底的学校改革者同盟の構成員であり、後にドイツ体操連合の理事長を務めるヒルカー（Franz Hilker, 1881年-1969年）¹⁰³⁾であった。徹底的学校改革者同盟は、1919年9月18日にヴェルナー・ジーメンス実科ギムナジウムの会議室でパウル・エストライヒ、フリッツ・カルゼン、ジークフリート・カヴェラウ等、合計24名の中等学校教員で結成された教育改革団体である。当初中等学校教員のみから構成される団体であったが、国民学校教員、中間学校教員、さらには市民をも受け入れ、支持範囲もベルリンからドイツ全土へ拡大し、会員数は1921年時点で2000名から3000名を擁した。徹底的学校改革者同盟は、機関誌『新しい教育』（Die Neue Erziehung）をつうじて、新時代の教育と教師のあ

り方、教育政策に関わる論考を発表していった。さらに徹底的学校改革者同盟は、全国学校会議や公開会議で自らの教育論を唱え、新教育を積極的に支持する世論を形成し、現実の教育実践を改革する推進役を担っていった¹⁰⁴⁾。ドイツの新教育運動に関する思想について検討した小峰が、「徹底的学校改革者同盟が新教育運動にとって『酵母』であったとするならば、ベルリン中央教育研究所は『温床』であった」¹⁰⁵⁾と述べているように、ベルリン中央教育研究所と徹底的学校改革者同盟は、新体操促進運動の両輪として、体操家、舞踊家、音楽家がそれぞれの学校で実践する授業に影響力を及ぼした。

ベルリン中央教育研究所は1921年10月から1922年6月にかけて、体操教員、体操指導者、保育士を対象として、ダンカン学校で実践されている芸術的な身体訓練を中心内容とする「芸術的な身体教育のための教育課程」(Lehrgang für künstlerische Körperbildung)を週2回の割合で、芸術体操会議への助走路として開催した。指導については、ダンカン学校の校長であるエリザベス・ダンカンとマックス・メルツが担当した¹⁰⁶⁾。

第2項 芸術体操会議 (1922年)

(1) プログラム構成と内容

芸術体操会議は、1922年10月5日から7日にかけてベルリンで開催された。第3回芸術教育会議の総括として挙行された芸術体操会議の目的は、体操諸流派の体操学校や音楽学校で実施されている様々な授業方法を具体的に紹介すること、体操に関わる基礎理論を確立するために、芸術的な身体教育に関わる議論の場を提供することにあつた¹⁰⁷⁾。授業方法の紹介に関わる着想は、参事官であるマルヴィッツによるものであったが、最終的に徹底的学校改革者同盟により取り上げられ、ベルリン中央教育研究所の主唱のもと、「ドイツ体育委員会」(Deutscher Reichausschuß für Leibesübungen)と「スポーツ・体育中央委員会」(Zentralkommission für Sport und Körperpflege)との協力により会議は実現した¹⁰⁸⁾。そのなかで、プロイセンの科学、芸術と国民教育のための行政省の次官補であったベッカー(Prof.Becker)は、各演目を高尚に価値づけ、発展させたいとの期待を表明した¹⁰⁹⁾。授業実践と議論を柱とした芸術体操会議について、前者については、ベルリン音楽大学の大広間やヴェステン劇場、後者については、工科大学やベルリン市内の大学でそれぞれ開催され、男女あわせて約1400名が出席した¹¹⁰⁾。芸術体操会議のプログラムは表-3のとおりである。

表－ 3. 芸術体操会議のプログラム

1日目 1922年10月5日木曜日

タイムスケジュール	会議形態	会議内容	担当者名
9:00-11:00	授業実践	ダルクローズ	シャルロッテ・フェッファー(ベルリン) / エルンスト・フェランド(ヘレラウ)
11:30-13:30	授業実践	メンゼンディーク	ヘドヴィッツヒ・ハーゲマン(ハンブルグ)
16:00-18:00	授業実践	ルドルフ フォン ラバン	ルドルフ・フォン・ラバン(ミュンヘン)
19:30-20:30	講演	生命の中のリズム	ロベルト・フリース

2日目 1922年10月6日金曜日

タイムスケジュール	会議形態	会議内容	担当者名
9:00-11:00	授業実践	ローエランド	L・ランガード(フルダ)
11:30-13:30	授業実践	ルドルフ ボーデ	ルドルフ・ボーデ(ミュンヘン)
16:00-18:00	授業実践	エリザバス・ダンカン学校	マックス・メルツ(ポツダム)
19:30-20:30	講演	芸術的な身体訓練のための音楽の意義	パウル・ベッカー(フランクフルト)

3日目 1922年10月7日土曜日

タイムスケジュール	会議形態	会議内容	担当者名
9:00-10:00	講演	芸術的な身体訓練のための生理学的意義	フランツ・キルヒベルグ
10:00-	講演	呼吸の意義	クララ・シュラフホルスト
11:30-	講演	子どもの身体教育	マックス・テップ
16:00-	講演	運動遊戯と学校劇場	マルティン・ルゼルク
17:00-	討論会	一般的な身体教育の枠組みにおける芸術的な身体訓練の問題	

(Harte, E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.

In: Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang:S.411 より筆者作成)

先にあげたパラートとヒルカーは、1923年に会議報告書『芸術的な身体訓練』(KÜNSTLERISCHE KÖRPERSCHULUNG)をまとめているが、そこからは、会議内容の変更点をいくつか認めることができる。その代表的な事例は、会議初日にクラークスが「リズムの本質から」をテーマとする講演を担当する予定であったが、病気で欠席したことから、フリースが急遽、「生命の中のリズム」を講演したことであった¹¹¹⁾。授業方法については、ダルクローズ、メンゼンディーク、ラバン、ローエランド、ボーデ、ダンカンの6流派の体操学校で採用されている体操システムが取り上げられ、その屋台骨となる基礎理論も合わせて紹介された。以下、芸術体操会議において紹介された授業実践、および、講演の概要をまとめておきたい。

1. 授業実践

(a) ジャック・ダルクローズ学校: FrI.Charlotte Pfeffer (Berlin) と Dr.Ernst Ferand-Freund (Hellerau)

ジャック・ダルクローズ学校の代表者であるフェッファー (Charlotte Pfeffer,1881年-1990年) とフロインド (Ernst Ferand-Freund,1887年-1972年) は、同校が音楽専門の教育機関であることを言及し、主に表現活動に関わる練習を以下の4段階に区分して実施した¹¹²⁾。

1. 音楽の拍子に合わせて大股で歩く、走る、跳ぶ。ここでは異なるタクトの性質を利用して純粹に表現し、その表現を確立させる。
2. 大股で歩く、走る、跳ぶに相応しい運動と、その運動形式（それに伴って遊戯も行う）を向上、発展させるために拍子に注意する。ここでは、教育学的な補助手段として、様々な動物（ゾウ、ねずみ、馬）の性質を利用した動きが役立つ。これらの動きは、音楽を伴って演じられ、また、音楽から動きを再認識する。
3. 拍子の中にあるリズムを習熟させるには、指揮練習が役立つ。音楽作品のモチーフは、運動している者を無秩序な旋回に向けて導くことができる。その際、指揮者の活気ある動きは、表現に向けて自由に表出される。
4. 馬の動きの性質を利用したダンスとリズムの習得は、調和的な和音に向けた動きの根本的な要素をもたらす。

フェッファーとフロインドは、リズムを補助手段とした身体訓練が音楽感覚の習得、身体知覚を引き出すための可能性を有するとの運動認識を共有していた。それは、リズムの性質を利用して発達した筋感覚が、運動に必要な能力を微妙なニュアンスにまで転調させられ、これが身体の内的経験になること、さらに音楽と運動を融合するには、身体による音楽の理解が何よりも重要であることを示すものであった¹¹³⁾。

(b) メンゼンディークシステム : Frau Hedwig Hagemann (Hamburg)

メンゼンディークシステムは、ハンブルグのハーゲマン (Hedwig Hagemann, 不明) が紹介した。彼女はメンゼンディークシステムのねらいが、目的意識を持って自然な運動経過の妨げとなる全ての抑圧を排除することにあるとし、身体知覚の運動学への移行を素地とする運動認識に基づいた授業を実践した。そこでメンゼンディークシステムを習得するための基礎理論について、ハーゲマンは以下のとおり提示した¹¹⁴⁾。

1. 意識的に運動することによって、身体の障害を除去する為にのみ音楽を利用すること（その際、音楽のリズムは身体に不利に作用する）。
2. 細部の肢体を力だけで埋めるべきではなく、余力を残すこと。
3. 身体に精神的な感覚をも呼び覚ますには、正しく運動するために筋感覚を養わなければならない。これには呼吸のリズムを目的に応じて調整すること、身体諸器官の機

能の向上に向けて訓練すること。

上記の基礎理論への理解を深めるために、①身体を可能な限り敏感にするために、全ての関節を緩和させる訓練②こわばっている関節と腱の伸長に向けた訓練③バランス訓練（偏平足の予防ために、つま先立ちによる簡単で軽快な歩き方の訓練）④ドイツの伝統的な徒手体操による姿勢を十分に利用した姿勢訓練、にそれぞれ授業が区分され、これらを実践するにあたって腕と足の動きは自由に任された¹¹⁵⁾。

(c) ラバンシステム：Rudolf von Laban (München)

フォークダンスとバレエの動きによる運動芸術の習得を基礎としたラバンシステムについて、ラバン自らが紹介した。彼はリズムによる刺激が運動実践に役立つこと、さらに、一つの動きが時間、空間、力という3つの運動概念を用いることで有効的に運動形成にたいして作用することを強調した。一つの動きから、この3つの運動概念に従って動きを作るには、3つの概念を調和的に統合させねばならず、これにより一つの動きが独特な流れのある動きになると主張した。授業では6パターンの腕の振動を使い、棍棒を用いた振動運動のように動きを配列させた。「弱い、強い、狭い、広い、速い、遅い」の掛け声によって、3つの運動概念から導かれる動きを的確に把握して表現させる、これにより独特な雰囲気（勇気、不安、驚嘆、衝撃など）の身振りが形成される、この表現方法が新しい時代のダンス芸術による振付でもあるとラバンは主張した。ラバンシステムは現代的な絵画にみられるような、美的でありながら身体的には不自然に見える表現をダンサーの訓練に課していた。そこでは、①「弱い、強い、狭い、広い、速い、遅い」の6パターンによる腕の振動を用いた表現②腕の振動について、6パターンの順序を変えて行った動きの統合③集団で統一のとれたグループによる手の表現と腕の振動④集団での動きから手の表現の除外⑤これまでの動きを逆の順序にした、ペアによる腕の振動の表現⑥縦軸の旋回と腕の振動の関係、の6段階に分けて授業が実践された¹¹⁶⁾。

(d) ローエランドシステム：v.Rohden=Langgaard (Fulda)

ローエランドシステムの紹介は、代表を務める2人の女性、ローデンとランガードが担当し、呼吸を中心とする運動を提示した。彼女たちは、人間の精神的な生命が感覚や感情の充実により去来すること、たとえ人種を異にするとしても、世界中の人間が身体の全体

でリズム的な高揚を促す行為は変わらないとして、感情の高揚から運動意欲に向けた刺激が生じること、この刺激に導かれた運動が自我の影響として表出すると主張した。さらに両者は、運動の補助手段として、作曲家の精神が純粹に表現されるクラシック音楽が有効であると述べた。呼吸に注意しながら、音楽を深く聴きとることから授業が始められ、呼吸をとおした全ての関節、走行姿勢、バランスに関わる緩和訓練に至るまで、全身体の相互関連を基礎とする運動認識のもとに、3つの踊りが最終的に形成された¹¹⁷⁾。

(e) 表現体操 : Rudolf Bode

表現体操の創始者であるボーデは、ローエランド、ダルクローズ、ダンカンの体操システムと対立した。彼は自然な運動を行う際、意図的な外界からの影響を防御するためにはリズムが有効な教育手段であること、運動経過にそって全身体がリズムに関与するとき、それは表現に向けてのみ表出されることを主張した。また、ボーデの体操システムは、日常の生活場面を意識したものであり、スポーツにみられる分析的な運動方法とは対照をなすと述べた。さらにボーデは、運動形式とリズムの内面的な結合に反対し、そこには精神的な見解が必要であると主張した。ボーデは自らの体操システムを理解させるために、①他の体操システムの緩和訓練と非常によく似た緊張緩和訓練②運動刺激を重視した振動訓練③職業的、スポーツ的、芸術的な活動による基本動作 (a.衝撃、b.打撃、c.牽引、d.適応、e.バランス、f.抵抗) のための緊張訓練、をそれぞれ行い¹¹⁸⁾、これらが作業運動 (木挽き鋸、鐘鳴らし、船漕ぎなど)、芸術的な集団運動、ダンスの準備運動として有効であることを説いた。

(f) エリザベス・ダンカン学校 : Max Merz (Potsdam)

エリザベス・ダンカン学校における身体訓練は、舞踊美に関わる教育を骨子としていた。メルツは、歩行、走行、跳躍、腕や頭の動きと簡単な運動は、リズムをとおして、自然的、かつ、経済的な法則性に則して形成されるべきであること、リズムによる細かい振動運動は、表現へ昇華されていくと主張した。しかし、授業内容は演劇的に装われ、無理に編成されており、軽薄で大掛かりな歩行と走行運動を主としたものであった。個々人の感覚を重視した内面的な運動認識への転換を基礎とするダンカンの具体的な授業方法については、何ら提示されず、多くの期待に反して、結果は芳しくなかったという¹¹⁹⁾。

2. 講演

(a) 「生命の中のリズム」: Dr.Robert Fließ

フリースは、生命の中のリズムをテーマに、人間の体内で起こる循環について教授した。彼はリズム的な事柄が、人間の気質から生まれること、森羅万象の出来事を統治することを主張した¹²⁰⁾。

(b) 「芸術的な身体訓練のための音楽の意味」: Paul Bekker

人間の自然な感情表現法として、ベッカーは音楽の特徴を示した。音楽が社会的なものであること、音楽が緊張と緩和の相互の移り変わりを表現するように、彼は音楽を聴くことで、身体的な反射運動（呼吸、興奮、冷却、無意識的な体位移動などの変化）を呼び起こすこと、そのために、音楽を利用した身体表現が音楽と相似の魅力的なプロセスに伴って表現しなければならない、音楽と身体運動は分離できないと主張した。教育学は音楽と身体運動という、自然的な統一を高く評価すべきであり、従来の芸術音楽（シンフォニー、フーガ等）は、身体的な源泉から外れて、ファンタジーの領域へ傾いてしまったこと、それゆえに舞踊が身体的に作り上げられない状況にあることを懸念した¹²¹⁾。

(c) 「芸術的な身体訓練のための生理学的意義」: Dr.Franz Kirchberg

キルヒベルクは、生理学的な見地から単なる身体美の獲得に収斂された身体訓練を拒絶した。心理学的なテーマとして身体訓練を捉えたキルヒベルクは、体格教育と機能教育に理解を欠いた身体訓練が意味をなさず、芸術的な身体訓練のためには、創造的な素質が必要であると主張した。そこで仮に、舞踊がリズムの意識的变化に基づくならば、身体訓練の成果として価値を帯びるが、自分本位であることは確かなところであり、陶酔のなかで実践される舞踊は、身体形成のために役立たないと強調した¹²²⁾。

(d) 「呼吸の意義」: Frl.Clara Schlawffhorst

シュラフホルストは、呼吸と発声訓練について講演した。そのなかで、①呼吸は精神的なエネルギーのように、その能力を伸ばさねばならない②息を吸い込んだ後、横隔膜はゆっくり弛緩させなければならない③呼吸プロセスが終了した後、中休みに入らなければならない、ことに言及した。しかしながら、呼吸システムの実践的な紹介にまでは至らなかった¹²³⁾。

(e) 「子どもの身体教育」：Max Tepp

テップは身体訓練に関わる全ての方法論について、人間の全体性を考慮していないと批判した。テップによれば、手は筋肉や関節からなる形態を意味するのみならず、表現文化と接合すべきであるとし（握手は、友情、不実、羞恥心などを表明できる）、それ故に学校教育は、徹底的な改革がなされる必要であると述べた。テップは生徒の理解に努めることが教師の役目であり、教師と生徒によって探求されるべき「身体の道理」を人間の全体性の中核に位置づけ、教師は方法論でなく、内面的な連帯感も基づいた共感をもってして、生徒の表現を引き出すことができると主張した¹²⁴⁾。

(2) 芸術体操会議の意義

1905年の第3回芸術教育会議と比較すると、芸術体操会議では、音楽との融合を意図した身体訓練の事例が豊富に提示されていた。身体運動と音楽のリズムの関係性に注目したダルクローズは、身体教育におけるリズムの有効性を説き、動きと空間利用の方法論を模索したラバンは、身体運動を運動芸術として捉え、芸術的な表現方法の基礎を提示した。ローエランドは、作曲家の精神が音楽のなかに純粹なかたちで表現されるクラシック音楽を取り上げながら、運動の補助手段として音楽の効果を説き、ボーデは、音楽やリズムの利用が身体教育にとって有効であるばかりか、自らの体操システムが日常生活における運動と接続していることを主唱した。ダンカンは、ダンスが美的な教育であるとしてリズムを用いた身体表現を説いた。ダルクローズ、ラバン、ローエランド、ボーデ、ダンカンの授業実践は、それぞれ方法論が異なるにせよ、いずれも音楽やリズムと関連した運動認識に基づく身体運動やその表現方法としての運動形成の追求を試みるものであった。一方、メンゼンディークやローエランドの授業実践は、医学的知見に立脚した身体訓練の有効性を析出し、特に呼吸のリズムを身体の内面性や筋感覚を意識させることに基礎を置いた運動認識による身体訓練方法、呼吸を利用した全身体関節の緩和、走行時姿勢、バランス訓練を編み出していった。

また講演において、フリース、ベッカー、キルヒベルグは、身体教育における音楽やリズムの有効性、シュラフホルストは呼吸と発声訓練、テップは子どもの身体教育の重要性を総合的見地から説いた。これらの講演は、授業実践で採用された体操の基礎理論として、6流派の体操システムの紹介をそれぞれ補完する意味合いで実施された。ここには、体操諸流派の理論と実践をとおして、新体操の実像への総合的なアプローチを試みようとした

主催者の意図が見受けられる。芸術体操会議では、第3回芸術教育会議において認められなかった音楽と融合した身体教育の提示、自然に即した表現形式の追求がなされており、これらは自らの身体で表現する自己目的化された運動認識のあらわれとして捉えることができよう。また芸術体操会議の企画・運営において、ベルリン中央教育研究所と徹底的学校改革者同盟が中心的な役割を果たしたことは、新体操促進運動を推し進めてきた体操家、舞踊家、音楽家の運動認識を教育領域に取り込み、芸術教育の色を帯びた学校体育の改革を標榜する両者の社会活動の一環として把握できよう。

個別に展開されていた体操諸流派の活動が、芸術体操会議で合流したことをうけて、ベックマンが「新体操促進運動は、1922年ベルリン中央教育研究所、徹底的学校改革者同盟とドイツ体育委員会を主宰としてベルリンで開催された『芸術体操会議』の公開で際立った」¹²⁵⁾と述べているように、芸術体操会議は個別の域を脱して複合的に新体操促進運動を加速させる画期となった。

芸術体操会議では、個々の身体教育の類似性が強調された一方で、ボーデとローエラント、ダルクローズ、ダンカンとの間で生じたように、体操システムの見解の対立もみられた¹²⁶⁾。しかし芸術体操会議が、新体操促進運動の担い手である体操家、舞踊家、音楽家らの学校で実施されている授業の具体的なイメージを可視化させ、芸術的な身体教育の基礎理論の熟考を促し、身体教育の本質と価値を鮮明にした点を看過してはならないであろう¹²⁷⁾。それは、新しい身体活動領域として体操が、とりわけリズム、音楽と結びついた人間の基本的運動であるという価値を教育、芸術、医学の広範な分野に周知させる役割を芸術体操会議が果たしたからである。

体操諸流派の学校は、それぞれが単独に活動を展開していたが、芸術体操会議を契機として、1925年に「体操のための本部事務局」(Zentralstelle für Gymnastik)が立ち上がり、これを母体に諸流派の関係者が統合されるかたちで、ドイツ体操連合が設立されていく。

第3項 「体操のための本部事務局」の設置(1925年)

「体操のための本部事務局」は、1925年3月26日にベルリンに設立された。この事務局設立の契機となったのは、1922年の芸術体操会議であるが、直接的なきっかけは、1925年3月22日から24日の3日間、ベルリンのドイツ参議院ホールで開催された「第1回ドイツ女子体育会議」であった。この会議は、女性の体育・スポーツ促進をテーマとして、1865

年に設立された長い歴史を有する「ドイツ婦人連盟」と「ドイツ体育委員会」との共催で開催され、ドイツ全域から約 1000 名の女性が参加した。そのプログラム内容は、第 1 部が女子体育に関する 9 名の代表者の報告と討議、第 2 部が新しい女子体育模範演技、第 3 部が女性の体育・スポーツ服の展示、からそれぞれ構成されていた。会議の発案は、プロイセン体育教師連盟議長のハルテ (Erich Harte) であった¹²⁸⁾。

大川は、第 1 回ドイツ女子体育会議の開催にあたり、直接的な影響を与えた要因の一つとして、芸術体操会議の存在を挙げている¹²⁹⁾。芸術体操会議の関係者は、この女子体育会議においても、新しい身体活動領域としての体操が取り上げられることを期待した。しかしながら、ドイツ女子体育会議の主催者側から芸術体操会議の関係者にたいして、会議に向けた協力を要請されることはなかったという¹³⁰⁾。ベルリン中央教育研究所補佐で徹底的な学校改革者同盟員であったヒルカーは、「芸術体操会議では、ハルテが所属するドイツ体育委員会とスポーツ・体育中央委員会との合同で開催されていたものの、両者における会議の実施または評価において、活動的に際立ってはいない」と述べ、第 1 回女子体育会議における体操関係者の待遇に不満を表した¹³¹⁾。会議に居合わせていた体操関係の代表者たちは、女子体育会議の主催者からの待遇から、即座に体操諸流派の全てを一つにまとめんとする気運が自然の成り行きで膨れ上がった。この帰結として、第 1 回女子体育会議の終了 2 日後に「体操のための本部事務局」が立ち上がったのである。

表 4 に示したとおり、本部事務局は 1925 年 6 月にベルリン市民大学の行事であるベルリンスポーツ週間において、体操の啓蒙を目的とする講演と実演を行ったのを皮切りに、ベルリン中央教育研究所の主催による「計画的な身体教育のための会議」をケーニッヒベルグとヴィースバーデンでそれぞれ開催した¹³²⁾。いずれの講演についても、徹底的な学校改革者同盟のヒルカーが担当し、実演はボーデ、メンゼンディーク、ラバン、ローエランドの関係者が行った。これらの講演と実演をとおして、体操諸流派の代表者たちは、本部事務局だけでは組織的に不十分であること、体操諸流派の関係者たちが明確な組織として立ち上がり、体操の理論を統一させること、さらに、体操諸流派の学校で養成されている教員を一体化させる必要性が明白になり、1925 年 11 月 1 日にドイツ体操連合設立に至るのである¹³³⁾。

表－４．体操のための本部事務局設立からドイツ体操連合設立に至るまでに
開催された会議・講演会

日程	会議と講習会概要
6月24日	ベルリンスポーツ週間(ベルリン市内の体操学校による合同公演) 公演: フランツ・ヒルカー「体操とは何か？」 講演: ボーデ、メンゼンディーク、ラバン
9月30日	計画的な身体教育のための会議(中央教育研究所主催 場所: ケーニツヒベルグ) 公演: フランツ・ヒルカー「体操的な運動の発展」 講演: メンゼンディーク、ボーデ、ローエランド
10月14日	計画的な身体教育のための会議(中央教育研究所主催 場所: ヴィースバーデン) 講演: フランツ・ヒルカー「体操の本質と意味の発展」 実演: 自由で応用運動のための連盟(メンゼンディーク系)、ボーデ、ローエランド

(Hilker, F. (1933) Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes.

Aus den Ereignissen der Jahre 1925-1933. Gymnastik 11/12: S.166 より作成)

むすび

1871年にドイツ帝国が成立し、これにより政治的な統一をなしとげたドイツは、何よりも経済の発展と国力の増強に力を注いだ。このような社会情勢下の学校においては、教師中心の授業が展開され、授業中のドリル学習や強制的処置、教育における画一主義や形式主義、見せかけの教師の優位性等の問題により、子どもの人格発達への抑圧などが蔓延り、子どもの思考力、知識、自主性、創造性を育てる余地がなかった。この教育方法に異議を唱え、子どもとその能力の最大限の尊重という方向を最も早く標榜したのが、19世紀後半から20世紀初頭にかけて興隆したドイツ新教育運動であった。子どもの自発的活動を重視して、子どもの生と生活の充実を図ることをめざし、これをすべての学校改革や教授計画の一原理とするのに決定的な契機を与えたのは、美術、手芸、作文、音楽といった創造活動をとおして、子どもの情操の陶冶を図らんとした芸術教育運動であった。

芸術教育運動は、先ず1896年のハンブルクにおける芸術教育保護のための教員集会で明確な組織的な運動となり、その後の3回にわたる芸術教育会議により、ドイツの広域へ拡大していった。この芸術教育会議で中心的な役割を果たしたのが、リヒトヴァルクであり、彼は1903年に開催された第2回芸術教育会議のなかで、第3回芸術教育会議のテーマである「音楽と体操」の重要性について述べている。それは、身体教育にたいしても創造的で

感性的な教育が必要であること、学校体育で実施されている従来の集団秩序運動を主とするトゥルネンに異議を唱え、学校体育を芸術教育として改革するには、音楽との関わりをとおした表現の発達を目標とする新しい体操によって達成できること、その為に第3回芸術教育会議のテーマを「音楽と体操」に設定したのである。

第3回芸術教育会議は、学校体育が教育問題として公的に取り上げられた初めての会議であった。会議のなかで衛生評議員であったシュミットは、生理学的知見を欠いた不自然な教育目標のもとで実施されているトゥルネンを批判し、新しい体操の基礎は、身体に負担をかけない方法で、美的でバランスのとれた運動であると説いた。またシュパルビアーは、従来のトゥルネンに創造性を加える教育の必要性を主張し、さらにミュラーは身体のエネルギー解放と自然な運動形式に伴う自然法則に従った教育方法の重要性を提示した。これらは、従来の学校体育を覆っていたトゥルネンの運動認識から、新しい運動認識に基づいた体操の在り方を指示すものであった。音楽と体操をテーマに開催された第3回芸術教育会議において、実際に音楽と体操を関連させた具体例は、僅かに認められる程度であったが、従来の学校体育におけるトゥルネンの内容から鑑みるならば、画期的な試みであった。第3回芸術教育会議を契機として、人間性の本質への問い直しを基本的な観念とする新体操促進運動が胎動し、トゥルネンに代わるリズムと音楽と結びついた人間の美的な身体運動としての体操の価値が認められ、実体化していくこととなった。

1905年に開催された第3回芸術教育会議を契機として、カルマイヤー、メンゼンディーク、ローエランドによる、医学的見地から表現技術の革新に向けたデルサルトの表出体操、ダルクローズやボーデによる運動のリズムと表現力発達のための音楽教育的体操、ダンカン、ラバン、ヴィグマンによる運動構成の発展に向けたダンス的体操など、これら体操諸流派によって、シュピース=マウル方式のトゥルネンから距離を置いた、新たな理論と方法に基づく体操の構築が進められていった。これらの体操家、音楽家、舞踊家の活動は、従来のトゥルネンや古典バレエに認められたような、身体運動を外的印象によって要素ごとに分割し、それぞれの要素を幾何学的に図式化して再び組み合わせるといった運動形成に對峙するものであった。結果として、それまで注目されることのなかった、弛緩、リズム、表現等の身体運動の新たな側面が脚光を浴びることになったのである。第3回芸術教育会議によって胎動した新体操促進運動は、体操諸流派の様々な取り組みを通して活発化し、1922年の芸術体操会議を実現せしめることとなった。

芸術体操会議を開催するにあたり、その主催団体であったベルリン中央教育研究所と徹

底的学校改革者同盟の役割を看過することはできない。ベルリン中央教育研究所の所長は、1896年の「芸術教育保護のための教員集会」を計画し、3回にわたる芸術教育会議の準備委員会を務めたパラート、その補佐は徹底的学校改革者同盟員で、後に取り上げるドイツ体操連合の理事長を務めたヒルカーであった。ドイツ新教育運動のなかの芸術教育運動において中枢的な役割を担った両団体は、教育現場の改革を推進し、運動認識の構築とそれを具現化させた授業実践の側面で、体操諸流派の学校にたいする影響力を高めていったのである。

第3回芸術教育会議との比較において、芸術体操会議では、音楽との融合を意図した身体教育の事例が豊富に示された。とりわけ、自然に即した表現形式の追求は、集団秩序運動にはない、自らの身体で表現する自己目的化された運動認識のあらわれとして捉えられる。芸術体操会議は、学校体育の改革を企図した芸術教育運動の動向や新体操促進運動を推進してきた体操諸流派等の活動をとおして、芸術的な身体教育の基礎理論を構築し、身体運動の本質的価値を鮮明にした。それは新しい身体活動領域として体操が、とりわけリズム、音楽と結びついた人間の基本的運動であるという価値を教育、芸術、医学の広範な分野に周知させる役割を芸術体操会議が果たしたのである。

体操諸流派の学校は、それぞれ単独で活動を展開していたが、芸術体操会議の成功と1925年に開催された第1回ドイツ女子体育会議における主催者側の芸術体操会議の関係者との接触が、「体操のための本部事務局」の設置を促し、この事務局が母体となって1925年11月1日に体操諸流派の明確な組織としてドイツ体操連合が設立された。ここに記述してきたように、総じて新体操促進運動は、ドイツ新教育運動のなかの芸術教育運動から多大な影響を受けていたわけである。

第3章 ドイツ体操連合の設立と活動内容の実際（1925年-1933年）

新体操促進運動は、音楽と体操をテーマにした 1905 年の第 3 回芸術教育会議で胎動し、1922 年の芸術体操会議を契機に、明確な組織的運動として実体化していく。体操諸流派で学校を設立し、単独で活動を展開していた諸流派は、1925 年 3 月 26 日の「体操のために本部事務局」の設置をもって大きな推進力を獲得し、同年 11 月 1 日に設立された「ドイツ体操連合」(Deutscher Gymnastik-Bund e.V.) のもとに結集することとなる。ドイツ体操連合は、ナチスの政治的弾圧により 1933 年をもって解散に至るが、その間、体操に関する講演会や実技講習会を開催し、さらには、広報活動の基幹事業として機関誌『ジムナスティック』(GYMNASITK) を発行するなど、体操の普及・促進・保護に向けた多様な活動を展開した。本章では、このドイツ体操連合の設立と活動に関わる詳細について明らかにしていく。

第1節 ドイツ体操連合の設立

第1項 ドイツ体操連合の設立目的

1922 年の芸術体操会議から 1925 年の初頭までの間、体操諸流派の学校は、それぞれ単独で活動していたが、1925 年 3 月 26 日に体操のための本部事務局が立ち上がると、これを母体に諸流派の関係者が統合され、その結果としてドイツ体操連合が同年 11 月 1 日に設立された。ドイツ体操連合は、ベルリンにある「ラインゴールド」(Rheingold) で、カルマイヤー系、ギンドラー系、メンゼンディーク系、ローエランド系、ボーデ系、ラバン系の体操学校から集まった 56 名の代表者によるわずか 2 時間あまりの協議によって設立された。同日のうちに開催された 1 回目の委員会で理事が選出され、その後に開催された理事会では、ベルリン中央教育研究所補佐、および、徹底的学校改革者同盟員を兼務していたフランツ・ヒルカーが議長を務め、ボーデ学校の代表者メダウとともに体操の 5 流派の女性代表者たちが出席した。

女性代表者は、ヘドヴィッヒ・カルマイヤー・ジモーン (カルマイヤー系)、エルザ・ギンドラー (ギンドラー系)、エミー・グラウ (メンゼンディーク系)、ルイゼ・ランガード (ローエランド系)、マーガレーテ・シュミッツ (ラバン系) で、理事長には議長を務めたヒルカーが任命された¹⁾。ドイツ体操連合が設立された翌月の 12 月 1 日には、理事長のヒルカーをはじめ、メダウ、カルマイヤー、ギンドラー、ロスト、ザックアー、ヒルシュラーによって規約がまとめられた。過分に長くはなるが、規約の全文を以下に引用しておきた

い²⁾。

A. 連合の名称、所在地、目的

§ 1.

連合の名称は、ドイツ体操連合（登記済社団）とする。

§ 2.

連合の所在地は、ベルリンとする。

§ 3.

連合の目的は、体操の促進、普及と保護を行うことである。それは体操をとおした活力溢れる活動から、積極的に身体を構築し、発展させることである。そして、身体に対して物質的な側面のみから把握するのではなく、精神的・知性的な価値を積極的にもたらすことである。

§ 4.

この目的は次のように達成されるべきである。

I. 促進に関して

1. 活動団体の結成
2. 練習場と体操施設の調達
3. 体操的な実験場と研究所の設置

II. 普及に関して

1. 講演、実演、会議の開催
2. 教育庁と連携した共同作業
3. 新聞雑誌で発表した論考の出版と連合機関誌の発行

III. 保護に関して

1. 授業許可証と養成専門教育許可証を習得するための授業の実施、および、教師養成専門教育を実施するための指導要綱の作成
2. 法律問題にたいする会員の相談窓口
3. 科学的根拠を欠いた身体教育に関わる方法論の撲滅

B. 事業年

§ 5.

この事業年は10月1日から9月30日までとする。

C. 会員資格

§ 6.

会員資格の種類

連合は、次から構成される。

1. 正会員
2. 名誉会員

連合の正会員とは、次に挙げる者である。

1. 連合設立に寄与した体操学校で指導しており、教員免許状を所有している教員
2. 連合設立に寄与した学校外の教員で、§ 3. の主旨に賛同しており、なお且つ、連合がその者の活動を体操として認めていること(教員免許を所有していること)
3. 体操の促進と普及のために、体操の理論と実践に協賛できる教育者と医師

連合の名誉会員とは、次に挙げる者である。

卓越した方法で、体操の発展に貢献した人

§ 7.

会員の採用

正会員資格の取得は、志願者が実施している体操的な活動を、そのつど理事会で任命された理事に審査された後、志願者自らが書面にて申請を行う。志願者の採用の可否については、理事の多数決によって決定する。名誉会員への任命は、会員総会の約3分の2以上の決議により決定する。

§ 8.

会員資格の終結

会員資格は次により失効する。

1. 自発的な退会
2. 除名
3. 死亡

自発的な退会は、事前に提出された書面での解約告知の後、事業年の終了時にのみ可能である。解約告知は、遅くとも事業年終了6週間前に、理事会のもとに書留で届けなければならない。除名は、理事会での少なくとも3分の2以上の理事投票によって決議される。

除名は、6ヶ月以上に及ぶ会費の滞納、もしくは、個人的な態度や活動方法が連合の目的を脅かすような事例にのみ受け入れる。正会員は、理事会での除名者の決議にたいして、理事会後1ヶ月以内に会員総会を開催する権利がある。これは、単純な多数決により会員総会の開催を決定する。当該会員の権利について、開催期間中は停止する。

§ 9.

権利と義務

I. 正会員

1. 権利

- a) 標札等での名称“ドイツ体操連合に加盟”の使用
- b) 連合主催行事の参加と協賛、ならびに、入場料や参加料の25%割引
- c) 連合の手配による施設の使用
- d) 連合機関誌の無料購読、連合で出版された全ての印刷物の25%割引
- e) 会員総会での協議、提案、投票、選挙の権利

2. 義務

- a) 連合の目的を理解した責任ある活動
- b) 連合の会費の期日厳守での支払い
- c) 教員証明書や養成専門教育証明書の修得、および、授業実施方法や養成専門教育の構築にむけて作成された指導方針の厳守

II. 名誉会員

名誉会員は、正会員と同様の権利を持つ。

§ 10.

会員の会費

会員の会費は、半年ごとに事前に支払わなければならない。新会員は、現在の事業年度の会費を支払う。会費の金額は、そのつど会員総会によって単純な過半数の得票で決定される。全ての会員は、会費の支払いが記載されている会員証を理事会から得る。

D. 連合の機関と活動方法

§ 11.

連合の機関は次に挙げるものである。

I. 理事会

II. 会員総会

§ 1 2.

理事会

§ 2 6 BGB (Bürgerliches Gesetzbuch 民法典) から、理事会においては理事長、理事長に支障がある場合は、代理の理事長が務めることとする。それに加えて理事会は、理事長、代理人と少なくとも5名以上の理事で構成される。理事長は、事業年度に開催される会員総会において、正会員の総数の過半数の得票を得て選出される。発声投票による選出も認められる。理事は、理事長選出と同じ条件で決定される。しかし、理事を選出する場合の推薦権は、連合の設立に寄与した体操学校に与えられる。また、それ以外の体操学校や体操家のグループにも、会員総会での多数決をとおして、理事会での理事や代理人選出のための推薦権が認められる。理事長は、単独で連合の事業を管理する。理事長の代理人の決定、ならびに、理事会内での事業配置については、理事会の決議をとおして行われる。理事会は、事業体制を引き受ける権利がある。理事会は、規約を変更しない限り、少なくとも全会員の3分の2以上の出席のもと、多数決で決議を行う。理事長への投票は、可否同数で決定する。口頭での議決がある場合は、書面による同意で認められる。

§ 1 3.

会員総会

会員は、毎年9月の定例総会に招聘される。臨時会員総会は、理事会の提案、もしくは、10%以上の正会員による提案のいずれかで、理事長をとおして、提案受領後3ヶ月の期日内に開催されなければならない。会員総会の告知は、理事会をとおして、会員総会4週間前に連合の機関誌に議事日程が記載される。会員総会の全提案は、次の2つの内、いずれかの方法で実施される。

- a) 総会の2ヶ月前に理事会において文書で通知される。
- b) 理事会で審議された文書が会員総会で配布され、総会での同意を得て、議事日程に設定される。

§ 1 4.

議事録作成

会員総会や理事会での議決事項は、議事録に記録しなければならない。理事会で同意が得られた後、理事長または代理人によって署名されなければならない。

§ 1 5.

規約変更

規約変更は、会員総会における3分の2以上の多数決のみによって行われる。

E.連合の解散

§ 16.

解散条件

連合の解散は、次をもって行われる。

1. 総会での4分の3以上の多数決による議決
2. 理事長の決定により、会員数が20名を下回ったとき
3. 連合が権利能力を喪失したとき

§ 17.

連合の資産

連合が解散した場合、連合の資産は、ベルリン中央教育研究所に帰属する。あるいは、これまでの連合の目的を汲んだ資産を使用するために、用途の権利後継者に帰属する。

1925年12月1日、ベルリン

フランツ・ヒルカー (Franz Hilker)、ハインリッヒ・メダウ (Hinrich Medau)、ヘドヴィッヒ・カルマイヤージモン (Hedwig Kallmeyer-Simon)、エルザ・ギンドラー (Elsa Gindler)、イタ・ロスト (Ita Rost)、ケセ・ザックアー (Käthe Sackur)、ガブリエレ・ヒルシュラー (Gabriele Hirschler)

以上に規約の全文を挙げたが、まずもって、ドイツ体操連合の目的は、体操の普及・促進・保護にあった。そこでは、身体を単なる「肉体＝物」として考えるのではなく、精神的かつ知性的な価値を帯びた存在として直視することに眼目が置かれた。ドイツ体操連合の理事長を務めたヒルカーは、設立の趣旨をまとめた「我々の活動の意図について」と題した論文を機関誌『ジムナスティック』の創刊号に寄せた。そのなかで、ドイツ体操連合の目的、および、体操の意義について次のように論じている³⁾。

連合の目的は、自ら積極的に身体を教育、発達させ、身体を単なる肉体としてではなく、精神的かつ知性的な価値として捉えることである・・・中略・・・体操は表象的な

側面ではなく内面の機能へ働きかけ、いかにして身体を積極的に構築し、生き生きとした活動のなかで、活力に溢れたエネルギーを表現させるか、本質的に考察されなければならない・・・中略・・・体操が内包する意義は、生物学的、社会学的、文化哲学的な考察からもたらされるべきである。

またヒルカーは、体操の運動認識に関わる見解も表明している。それは、体操がトゥルネンのように身体の外的現象に従った運動可能性を追求するのではなく、身体の内面的な機能への働きかけを重視するものであるとの運動認識であった。ここで明らかにされた運動認識は、ドイツ体操連合の設立に関与した学校が共有した運動認識を集約したものとして捉えられる。生物学的・社会学的・文化哲学的な考察から身体を多角的に捉え、体操を総合的な人間の身体活動とみなすヒルカーの考えは、ドイツ体操連合の目的に連なっていた。前述したとおり、ドイツ体操連合の規約では、自らの目的を促進・普及・保護に据えているが⁴⁾、体操の促進事業としては、労働者への身体教育として体操を実践していくこと、事業運営に必要な体操練習場と体操施設を完備すること、実験場と研究所を設置することを掲げた。体操の普及方法については、体操に関する講演・上演・会議を開催し、これらの実施にあたり、公的機関である教育庁と連携すること、また、体操書の出版と連合機関誌の発行をとおして、取り組んでいる体操を世間一般に認知させることを掲げた。所属する体操諸流派の活動の保護については、連合所属教員が授業を実施する為に必要な授業許可証、体操教員を養成する為の養成専門教育許可書の発行、体操諸流派の活動を統括した指導要綱の作成を最重要課題とし、その他に、会員の法律相談や科学的実証を欠いた身体教育に関する指導方法の撲滅を掲げた。

第2項 ドイツ体操連合の組織構成

(1) 理事長・理事会・総会

ドイツ体操連合の主要事業は、理事長とその代理、その他の5名以上の理事からなる理事会を経て、年1回開催される会員総会で決定された。毎年の会員総会において過半数以上の同意を得て選出される理事長の権限は、単独で事業を管理することであり、理事長の代理人や事業配置については、理事会をとおして決議された。理事長であったヒルカーは、ドイツ体操連合が解散する1933年まで理事長職に就いていた。理事については、ドイツ体

ドイツ体操連合は、学校で教員免許を取得した者に入会を許可し、また、自らの趣旨に賛同しながら、独自の方法で体操研究に取り組む医者や教育者にも門戸を開放した。そこには、身体の内的側面に注目した研究に取り組む医者や教育者は、体操の講演会や実演会、および、体操の教員養成や教育実践に向けた指導要綱の作成に貢献するとの意図が反映されていた⁹⁾。

正会員として入会する為には、まず入会希望者を審査する理事会が開催され、志願者の体操活動の実際が、ドイツ体操連合の理念に合致しているかが審査された。その上で、審査に合格した入会希望者は、入会を希望する旨の文書を申請し、理事会の多数決をもって再び承認される必要があった。このように、ドイツ体操連合への入会は、誰でも容易に通過できる類のものではなく、厳しい審査が実施されており、入会希望者の諸処の活動がドイツ体操連合の教育方針に適合していなければ、厳しく排除された¹⁰⁾。名誉会員は、卓越した方法で体操の発展に寄与した人物が該当者として選定され、会員総会にて3分の2以上の支持をもって承認された¹¹⁾。

ドイツ体操連合への入会が認められると、会員の肩書を使用することが許可され、主催イベントの参加料、ならびに、出版物が25%の割引、機関誌の購読料が無料といった優遇措置を受けた。しかし会員の義務として、ドイツ体操連合の理念に沿った責任ある活動が求められ、会費支払いの厳守、養成専門教育認定証、または、教員認定証の取得、体操授業と養成専門教育を実施する為の指導要綱の厳守が求められた。会費については、毎年の会員総会で金額が決定した。

第3項 機関誌『ジムナスティック』の発行

機関誌『ジムナスティック』は、ドイツ体操連合が設立された翌年の1926年2月1日から隔月で発行され、1933年11・12月号を以て廃刊となったが、この間、都合48号が発刊された。理事長であったヒルカーは、機関誌発行の目的を次のように述べている¹²⁾。

機関誌『ジムナスティック』の発行の目的は、連合に所属する会員の枠組みを超えて、体操の意義を知る仲間を増やし、体操による身体教育それ自体の知識を深めることにある。そのためには、同じ方向性をもつ体操流派の代表者と研究者たちが、身体教育の問題について、個々の体操に関する方法論や個人的な理由による対立によって、

意義ある議論が阻害されることのないように、紙面上では自由に討議されなければならない。

上記のヒルカーによる記述内容から、機関紙発行の目的が、体操をとおした身体教育に関する知識の追求にあったことが認められよう。さらにヒルカーは、機関誌『ジムナスティック』の発刊に際して、「特に肝に銘じるべき事柄は、これまでの体操的な運動の歴史である。それは、19世紀から20世紀初頭にかけて、ドイツで顕著になったトゥルネンによる身体修練と社会へも拡大した学校改革としての新教育運動の関連である。この両者の関連を突き詰めると、様々な体操諸流派の活動が、同じ文化の土壌から如何に有機的に発生したかが明らかになるだろう」と述べている¹³⁾。ここから、学校改革を目指した新教育運動、従来の学校体育で実施されていたトゥルネンに対抗する体操諸流派の活動、これらの相互関連を機関誌上で焦点化させんとしたヒルカーの意向を看守できよう。ヒルカーは、機関誌発行の重要性について、次のとおり述べている¹⁴⁾。

ドイツ体操連合は、単なる利益追求の団体ではなく、体操が身体文化の明確な一つの課題であることを自覚し、これにたいする責任を負う活動団体である。連合の会員は、各々の体操をとおした活動のなかで、この課題について自覚する必要がある。これに加えて機関誌を編集する際には、この課題を強く意識しなければならない。

機関誌『ジムナスティック』の各号は、「体操をとおした身体教育に関する知識の追求」を目的として、①寄稿論文②文献紹介③ドイツ体操連合からの報告、を主要な柱として構成された。寄稿論文に注目してみると、総計199本の論文が掲載された。執筆者の陣容に注目してみると、教育現場、医療現場に従事する会員のみならず、執筆活動に専念する評論家の名前が確認され、それぞれの立場から、体操に関わる運動認識や運動法則の啓発、体操の医学療法への転用・応用、体操教育の具体的な実践例を主題化した論考をまとめた。文献紹介については、体操をテーマとしたもののみならず、個別のスポーツ競技種目のトレーニング方法、教育学や生理学、解剖学に関する基礎理論、人生訓や人間教育を内容とした指導書、雑誌が取り上げられていた。また、ドイツ体操連合からの報告では、講演会、実技講習会などの主催事業の記録とともに、会員の学校案内やイベントの告知などが掲載されていた。これらに加えて各号の巻末では、会員の学校のみならず、図-25に

あげたマリーヴィグマン、ボーデらなどの体操やダンス系の学校広告をはじめ、体操着、楽器、授業で使用するレコード、ボディークリーム、トレーニング器材などを取り扱う企業広告が掲示されていた。

WIGMAN-SCHULE-BERLIN

Einziges Zweiginstitut der Wigman-Schule-Dresden in Berlin
 Leitung: **Margarete Wallmann** — Persönl. Unterrichtsertelung: **Mary Wigman**

B E R U F S A U S B I L D U N G
Laienurse: 8—9 Std. mtl. 12.— M.

Sommerurse Sonderklassen für Lehrer u. Schüler anderer Systeme in reiner Gymnastik, tänzerischer Körperbildung u. künstlerischem Tanz, für Turn- u. Sportlehrer u. Studenten
 1. Juli — 31. August

Unverbindl. Auskunft, Prospekte: Kurfürstendamm 119 / Brabant 1782

Bode-Schulen

München, Leopoldstraße 102/I,
 Leitung: Dr. Rudolf Bode.
 Berlin-Schöneberg, Innsbrucker Straße 44/0,
 Leitung: Hinrich Medau.
Berufsausbildung:
 Neue Lehrgänge Ostern u. Herbst 1929.
 Pädagogische Lehrgänge und Ferienurse.
 Man verlange Prospekt für 1929.

 **Dora Menzler-Schule**
 für Gymnastik und gestaltete Bewegung

Leipzig: Grassstr. 33 und Gellertstr. 7/9
 im Sommer: Wustrow a. d. Ostsee
 Zweigschule: Bremen, Am Dobben 110

Berufsausbildung / Laienurse
 Ferienurse in Wustrow vom 15. 6. bis 1. 9.

Dem Deutschen Gymnastik-Bund angeschlossen.

GÜNTHER-SCHULE

Ausbildungsstätte vom
 Bund für angewandte und freie Bewegung e. V.
MÜNCHEN
 Leitung: Dorothee Günther
 *

3 selbständige Lehrausbildungen in:

1. Deutscher Mensendieck-Gymnastik
2. Rhythmisch-gymnast. Körperausbildung
 - a) mit Musikausbildung
 - b) ohne Musikausbildung

Das Lehrbefähigungszeugnis berechtigt zum Eintritt in den Deutschen Gymnastik-Bund e. V., Berlin
3. Tänzerische Ausbildung
 Mitwirkung in der eigenen Tanzgruppe:
MÜNCHENER KAMMER-TANZ-BÜHNE

Der Deutschen Tanzgemeinschaft e. V., Berlin angeschlossen!

Zweigstellen: Budapest / Stuttgart

Auskunft und Prospekte kostenlos durch die Geschäftsstelle: München, Luisenstr. 21, Gth. / Tel. 50136

Schule für Körperbildung und Tanz
Frieda Ursula Back

Mitglied der Deutschen Tanzgemeinschaft e. V.
 Leitung: Frieda Ursula Back, Diplom der Wigman-Schule Dresden und der Dalcroze-Schule Hellerau

BERUFS-AUSBILDUNG in TANZ und GYMNASTIK
 für Bühne und Lehrberuf
 an junge Mädchen und junge Männer
 EINTRITT JEDERZEIT

Gymnastik / Tanztechnik / Atmung / Raum- und Bewegungslehre / Klassen- und Einzelunterricht / Tanzkomposition und Regie / Geräuschrhythmik / Musikalisch-rhythmische Improvisation und Tanzbegleitung / Stilkunde / Pädagogik / Psychologie / Anatomie

N a m h a f t e F a c h l e h r k r ä f t e
 Abschlußexamen / Eigene Tanzgruppe

Beginn des Schuljahres: 15. September

Illustrierte Prospekte, Auskunft und Anmeldung
MANNHEIM
 Werderstraße 29 / Fernsprecher Nr. 27700

図-25. 体操やダンス系学校の広告

(Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1929) GYMNASTIK5/9 より転載)

第2節 ドイツ体操連合の活動内容

第1項 体操学校の活動概要

(1) 会員数

表-6にドイツ体操連合の会員数の推移をまとめた。創設時に56名であった会員数は、翌年に倍以上の120名を記録し、以後、増加の一途を辿り、1931年には1131名を数えるまでに膨れ上がったが、1932年から減少に転じた。その理由を導き出すにあたり、1930年代のドイツの社会状況に目を向けなければならない。

表-6. ドイツ体操連合会員数の推移

年度	会員数
1926	56
1926	120
1927	400
1928	600
1929	923
1930	1090
1931	1131
1932	957
1933	860

(Hilker,F. (1933) Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes Aus den Ereignissen der Jahre1925-1933. GYMNASTIK11/12:S.166-168 より作成)

1929年にアメリカで発生した世界恐慌を受けて、ドイツ経済は1931年に深刻な不況に陥った。銀行や有力企業の倒産が相次ぎ、失業率が40%以上を記録したように、国内経済は機能不全に瀕した。この余波はドイツ体操連合にも及び、実際のところ、1931年に発行された機関誌『ジムナスティック』11・12月号には、会員に向けた会費支払の勧告記事が掲載されている¹⁵⁾。ドイツ体操連合は、失業者のための無料体操コースを1930年11月から1931年3月まで開設したが¹⁶⁾、これが功を奏することはなく、1932年には多くの体操教員が職を失うこととなった¹⁷⁾。

1931年にピークに達した会員数であるが、同年にドイツ体操連合の設立に尽力したボーデ自身と彼が設立した学校の教師陣、理事を務めたヘアーマンと彼女が設立した全ての学校、「応用された自由な運動のための連盟」に所属する一部の教師陣が脱退したことにより¹⁸⁾、1932年には957名、ドイツ体操連合が解散した1933年には、860名にまで会員数が減少した。

(2) 学校数

ドイツ体操連合所属の学校は、ドイツ国内でどれほど存在していたのか、まずその実態把握に努めておきたい。1929年2月23日に開催された総会の報告には、1928年12月31日時点における体操諸流派の学校数(表-7参照)、および、都市別の学校数(表-8参照)が記載されている¹⁹⁾。

表-7. ドイツ体操連合所属の体操諸流派の学校数

	学校名(体操流派系)	学校数(校)
1	ローエランド(ローエランド系)	210
2	応用された自由な運動のための連盟 (メンゼンディーク系)	168
3	ボーデ(ボーデ系)	95
4	ハーゲマン(メンゼンディーク系)	95
5	メンツラー(メンツラー系)	82
6	ギンドラー フォン ホランダール (ギンドラー系)	56
7	ヘアーマン(ヘアーマン系)	46
8	ゼンフ(メンツラー系)	30
9	ヒルシュラー(メンゼンディーク系)	29
10	ホマーグックーミュラー (ホマーグックーミュラー系)	24
11	ラバン(ラバン系)	15
12	カルマイヤー(カルマイヤー系)	14
13	シュミッツ(ラバン系)	12
14	フィッケンチャー(フィッケンチャー系)	8
15	メンゼンディーク(メンゼンディーク系)	6
16	所属なし	33
合 計		923

(Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1929) Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes am 23. Februar 1929. GYMNASTIK 5/6, S.85.より作成)

表－8．都市におけるドイツ体操連合所属の学校数

	都 市 名	学 校 数
1	ベルリン	177
2	ハンブルク	54
3	ミュンヘン	37
4	ブレスラウ	35
5	ライプチヒ	28
6	デュッセルドルフ	28
7	シュツットガルト	22
8	ブレーメン	19
9	ドレスデン	18
10	フランクフルト	14
11	ケルン	12
12	マクデブルク	10
13	アルトナ	10
14	エッセン	10

(Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1929) Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes am
23. Februar 1929. GYMNASTIK 5/6:S.85.より作成)

体操諸流派の学校数については、ローエランド系が 210 校と最も多く、次いで応用された自由な運動のための連盟に所属する学校が 168 校、ボーデ系とハーゲマン系がそれぞれ 95 校と続いた。応用された自由な運動のための連盟、ハーゲマン、ヒルシュラーは、それぞれメンゼンディークの体操系列²⁰⁾に連なる学校であり、メンゼンディーク系の 6 校を合わせると 298 校となる。この数は、ドイツ体操連合内で最大の勢力を誇るローエランド系の 210 校を上回るものであった。1928 年 12 月 31 日時点での所属学校数 923 校の内、約 30% がメンゼンディーク系の学校で占められていた状況は、当時において「メンゼンディークンする」(mensendiecken) というドイツ語の動詞が、進歩的な女性の行動を示す言葉として日常的に使用されていたように²¹⁾、ドイツ体操連合において最大勢力を形成していた。

都市別の学校数で特に突出していたのが首都ベルリンであり、他を圧倒していた。1926年に開催されたドイツ体操連合の総会で、体操（Gymnastik）という言葉が営利目的のために乱用されている実態を問題視したことは、ドイツ体操連合とは無縁の体操学校がベルリンで多数開校されていたことを容易に想起させる事象である。前衛的なダンス雑誌『シュリフトタンツ』（Schrifttanz）の1928年8月号に掲載された記事からは、「ダンススクールは全国にキノコのごとくあらわれている。ファッショナブルな若いレディは、もはやピアノのレッスンをせず、その代わりに〈リズムック・ジムナスティックス〉のレッスンに参加する。それが〈フィジカル・カルチャー〉だそうだ」²²⁾との文言が確認できる。この記事からも、多くの若い女性たちがこぞってダンスや体操に興味を抱き、それに応えるかのように、ダンスや体操の学校が乱立していたことが伺える。またミュラーは、「1929年のベルリンの学校紹介書によれば、ダンスの学校が151校記載されており、その多くがプロ養成も行っていた」²³⁾と述べている。

ダンスであっても、基本運動としては体操を実施していたことから、学校名を「体操学校」と単独表記し、また、「体操・ダンス学校」と併記したものも存在した。その一方で、体操学校でもダンス的な教育が実施されていたように、体操とダンスの区分は曖昧で、混同した状況にあった。ともあれ、ダンスの学校よりも、ドイツ体操連合に所属する学校が26校多くベルリンに開校されていた実状は、ベルリンにおいて体操が一大ブームであったことを如実に物語っており、実のところ、ベルリンはともかく国内の広範に体操が普及していたのであった。

（3）教育内容

ドイツ体操連合に所属する各体操諸流派の学校では、いかなる教育が実践されていたのであろうか。次にその実態を明らかにしていきたい。表-9は、機関誌『ジムナスティク』の1927年5・6月号から、ドイツ体操連合の設立に大きく貢献したカルマイヤー系、ギンドラー系、メンゼンディーク系、ローエランド系、ボーデ系、ラバン系の6流派、および、ドイツ体操連合の設立後に加盟したヘアーマン系、メンツラー系、ホマーグックーミュラー系の職業養成専門教育代表校全16校の紹介記事をまとめたものである。ここから教員の養成期間については、多くの学校が2年以上に定めていたことが認められる。仮採用期間は、多くの学校で1か月から6か月の期間を設けていたが、この期間は、体操教員志望者にとって志望流派の学校が適性か、また、学校側にとって体操教員として志望者が

適任かを判断する時間にあてられた。

表-9. ドイツ体操連合所属の職業養成専門教育代表校一覧

ベルリン		ライプツヒ	
学校名	身体教育のためのボーデ学校(Bodeschule für Körpererziehung)	学校名	体操と構成運動のためのドラ・メンツラー学校 (Dora Menzler-Schule für Gymnastik und Gestaltete Bewegung)
代表者	ハインリッヒ・メダウ(Hinrich Medau)	代表者	ドラ・メンツラー(Dora Menzler)
養成期間	2年	養成期間	2年
採用条件	3ヶ月の仮採用	採用条件	高等女学校の10級修了、18歳以上、健康診断書の提出
授業科目	表現体操、ピアノ、触腿法、和声学、音感教育、解剖学、デッサン、教育学	授業科目	呼吸体操、静力学的体操、運動体操、解剖学と生理学、物理学、心理学、教育学、和声学、デッサン、芸術史、話術
学校名	アンナ・ヘアマン学校(Anna Hermann-Schule)	ブレスラウ	
代表者	アンナ・ヘアマン(Anna Hermann)	学校名	ドイツ東部の体操研究所(Ostdeutsches Gymnastik-Institut)
養成期間	2年	代表者	トニー・ホーマック(Toni Homagk)、マリ・ミュラー・ブルン(Marie Müller-Brunn)
採用条件	1ヶ月の仮採用(証明写真付き直筆の履歴書、成績証明書と健康診断書の提出)	養成期間	2年(2通りの教育方法、機能的体操とリズム的ダンスの体操)
授業科目	実践:呼吸訓練、発声訓練、身体教育、運動教育、リズム的訓練、音楽的教授、デッサン、彫型、マッサージュ 理論:解剖学、生理学、生物学、健康学、教授法、体操理論、音楽理論 授業時間:ゼミスターに応じて毎週16-24時間	授業科目	体操、解剖学、教育学、音楽学、音響リズムック、芸術史
学校名	カールマイヤー・ラウターバッハの学校(Schule Kallmeyer-Lauterbach)	デュッセルドルフ	
代表者	カールマイヤー・ラウターバッハ	学校名	デュッセルドルフのリズム的な学校サークル(Rhythmische Schulgemeinde Düsseldorf)
養成期間	2年(コース開始:9月1日)	代表者	ヒルダ・ゼンフ(Hilda Senff)
採用条件	半年の仮採用(修了試験は、連合執行部の代表者出席のもとで行われる)	養成期間	3年(最長で2年)
授業科目	体系的な基礎授業、解剖学と生理学、健康治療での指導、運動訓練、発声訓練、教育学	採用条件	ギムナジウム卒業証書、健康診断書の提出
学校名	ゲルトルード・フォン・ホルンダーの体操学校 (Schule für Gymnastik von Gertrud von Hollander)	授業科目	身体訓練:解剖学-生理学-物理学、芸術的な課題の詳細 体操(身体構築、呼吸、緊張、解放、空間スケッチ、力学、表現形式論) 音楽的訓練:音感教育、ピアノによる即興、和声授業、音楽史
代表者	ゲルトルード・フォン・ホルンダー(Gertrud von Hollander)	エッセン	
養成期間	2年	学校名	体操とダンスのための西部職業養成所(ルドルフ・フォン・ラバンの運動学) (Ausbildungsstätte des Westens für Gymnastik und Tanz)
採用条件	6週間の仮採用	代表者	マーガレテ・シュミット(Margarete Schmidts) 教員とダンサーのための職業教育
授業科目	呼吸を基礎とした体操、解剖学、発声訓練、デッサン、教育学、週1-2回の授業実践	養成期間	2年(入会:4月と10月)
学校名	ガブリエー・ヒルシャーの純粋なメンゼンディーク体操のための学校 (Schule für Reine Mensendieckgymnastik von Gabriele Hirschler)	採用条件	適性検査、健康診断書の提出
代表者	ガブリエー・ヒルシュラー(Gabriele Hirschler)	授業科目	1年目:技術的な体操、リズムック、振付の基礎による実践的な導入、 ダンス的なソロとグループ活動 2年目:トレーニング、高度な振付(実践と理論)、記譜法、独立したダンス的なソロと グループ活動、運動台唱、指導実践、合唱指揮もしくはダンス演出 1・2年目ともに実施される授業科目 必修科目:解剖学、生理学、生物学、体操とダンス理論、ダンスの文化史、拍子リズムック 選択科目:幾何学的な結晶学、シュプレヒコール
養成期間	18ヶ月	ミュンヘン	
採用条件	18歳以上(リツェウム(女子高等学校)修了書、健康診断書の提出)	学校名	応用された自由な運動のための連盟によるミュンヘン職業専門教育養成所 (Ausbildungsstätte München des Bundes für angewandte und freie Bewegung e.V.)
授業科目	物理学、解剖学、生理学、体操、教育学	代表者	ドロシー・ギュンター(Dorothee Günther)
学校名	ヘルタ・ファイストのダンスと体操学校(ルドルフ・フォン・ラバンの運動学) (Tanz- und Gymnastikschule Hertha Feist)	養成期間	2年
代表者	ヘルタ・ファイスト(Hertha Feist)	採用条件	健康診断、履歴書の提出と2年間の契約書の締結(1ヶ月の仮採用期間後に交わされる)
養成期間	2年(毎日授業)	採用条件	健康診断、履歴書の提出と2年間の契約書の締結(1ヶ月の仮採用期間後に交わされる)
授業科目	体操、リズムック、ダンス、舞踊史と舞踊理論、教育学	授業科目	専門教育:1. ドイツメンゼンディーク体操、2. 音楽的リズム的身体訓練、 3. 空間リズム的身体訓練 通常授業科目: 1:体操、マッサージュ、這う練習、解剖学と生理学、音楽的リズム的または空間リズム的 運動訓練(自由選択)、芸術史、合唱、デッサン 2:音楽的リズム的運動訓練、ドイツメンゼンディーク体操、グループ活動、音楽理論、 音楽演奏、解剖学、芸術史、合唱、デッサン 3:空間リズム的運動訓練、グループ活動、ドイツメンゼンディーク体操、振付、芸術史、 デッサン、解剖学
ハンブルク		学校名	ボーデ学校(Bodeschule München)
学校名	ハーゲマン学校(Hagemann-Schule)	代表者	ルドルフ・ボーデ(Rudolf Bode)とエリー・ボーデ(Elly Bode)
代表者	ヘドヴィヒ・ハーゲマン・ビューゼ(Hedwig Hagemann-Boese)	養成期間	2年
養成期間	2年	採用条件	健康診断書の提出、3ヶ月の仮採用
採用条件	18歳以上	授業科目	表現体操、ピアノ、触腿法、和声学、音感教育、デッサン、解剖学、水泳、マッサージュ
授業科目	ハーゲマン体操(メンゼンディークシステム)、呼吸学、体操練習授業、解剖学、 解剖学的デッサン、病理学、整形外科、マッサージュ、陸上、運動学、体操史と舞踊史、芸術史、 運動デッサン、静力学、授業実践	学校名	ゲルト・フィッケンチャー学校(Schule Gert Fikentscher)
学校名	ルドルフ・フォン・ラバンのハンブルグ運動合唱 (Hamburger Bewegungschöre Rudolf von Laban) ダンスと体操、ダンサーと運動合唱者のための職業養成所 (Ausbildungsstätte für Tanz und Gymnastik, Tänzer und Bewegungschorleiter)	代表者	ゲルト・フィッケンチャー(Gert Fikentscher)
代表者	アルブレヒト・クヌスト(Albrecht Knust)	養成期間	2年
養成期間	2年(修了試験後に教員免許状が与えられる。さらに継続して2年間の実践的な活動を行うとディプロムが与えられる。)	採用条件	リツェウム卒業資格・健康診断書の提出、1ヶ月の仮採用
フルダ		授業科目	構造体操、陸上、マッサージュ、解剖学、生理学、体育の生物学、リズム的な構造学、発声訓練、 楽器伴奏(自由選択)
学校名	身体教育のためのローエランド学校、農耕と手工業 ローデン・ランガートの教授法 (Loheland, Schule für Körperbildung, Landbau und Handwerk)	ミュンヘン	
代表者	ローデン・ランガード(Rohden Langgard)	学校名	ボーデ学校(Bodeschule München)
養成期間	2年(9ヶ月毎)	代表者	ルドルフ・ボーデ(Rudolf Bode)とエリー・ボーデ(Elly Bode)
採用条件	・高等学校の10級修了、18歳から20歳まで ・修了試験後、ローエランド系列の学校への赴任先を決定すると同時に、ローエランド連盟に加盟する権利が与えられる。 ・2年間の養成期間の他に、連盟にはローエランドの補助教員のために3年間の研修期間がある。	養成期間	2年

(Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) Ausbildungsstätten des Deutschen Gymnastik-Bundes




e.V. GYMNASSTIK 5/6: S.100-102. より作成)

授業科目について、フルダのローエランド学校、および、ハンブルクのルドルフ・フォン・ラバンのハンブルク運動合唱の2校の詳細については、記載を確認できなかったが、その他の学校では、解剖学や生理学が主要授業として位置づいており、教育学、心理学、体操・舞踊・芸術史などが頻繁に実施されていた。音楽関連の授業では、音楽理論、音楽史、ピアノ、触鍵法、和声学、音感教育、発声訓練、リトミック、楽器伴奏や音楽演奏、合唱が実施されていた。その他に目を転じてみると、呼吸体操などの身体諸器官に作用する体操、マッサージ、ダンスや振付、表現形式など、授業科目は多岐にわたるものであった。

応用された自由な運動のための連盟のミュンヘン職業専門教育養成所代表であるギュンター (Dorothee Günther, 1896年-1975年) は、自ら主宰する学校の具体的なカリキュラムの詳細を、機関誌『ジムナスティック』1927年3・4月号の寄稿論文で明らかにしている。そこから確認されるカリキュラムの実態をとりまとめた表-10に注目してみると、基礎課程においては、基礎訓練としての体操は勿論のこと、解剖学や生理学を主要科目に位置づけており、基礎課程から専門課程にいたる全ての課程で「リズム練習の実践」「パーカッション」「歌唱-合唱」、応用課程において「和声と音楽構成」「ピアノ」、応用課程と専門課程において「音楽表現と様式論」「即興」「インストルメンタルアンサンブル」がそれぞれ開講されていた。ここから、動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成をねらいとする教育が展開されていた実態を理解できよう。ギュンター学校のみならず、表-9に挙げたその他の職業養成専門教育代表校16校の授業科目に注目してみても、音楽教育の授業において、リズム体験のみならず、ピアノ伴奏を習得すること、自ら楽器を演奏し歌うことなどが実施されていた事実は、体操の授業内容の広がりや厚みを示すものであった。さらにダンスや振付といった授業が展開されていたことは、体操が芸術的側面との結び付きにおいて把握されていたを物語っている。

表-10. ギュンター学校のカリキュラム

科目名	基礎課程	応用課程	専門課程
体操/基礎訓練	■		
バランス体操	■	■	■
アンバランス体操	■	■	■
ダンス		■	■
振付実習		■	■
リズム練習の実践	■	■	■
コーラス舞踊	■	■	■
指導実習	■	■	■
解剖学	■	■	■
生理学	■		
病理学	■		
健康体操とマッサージ	■		
陸上競技	■		
教育学と心理学	■	■	■
体操史と理論	■	■	■
運動デッサン	■	■	■
芸術史	■	■	■
舞踊記譜法と形態論		■	■
和声と音楽構成		■	
ピアノ		■	
パーカッション	■	■	■
音楽表現と様式論		■	■
即興		■	■
インストルメンタルー アンサンブル		■	■
歌唱—合唱	■	■	■
音楽史		■	■

解説： 主要科目 
 副専攻科目 
 選択科目 

(Günther,D. (1927) Gymnastik als pädagogischer Faktor.GYMNASTIK4/5:S.59 より作成)

(4) 受講生の内訳

ドイツ体操連合所属の学校、および、教員によって実施された体操が、実際にドイツ国内で如何に普及していったのか、ここではその実態に迫っていきたい。ドイツ体操連合は

1927年5月31日に所属する体操学校の男女教員520名を対象に、簡易的ではあるが体操の普及に関わる実態調査を初めて実施した²⁴⁾。この調査結果から、14歳未満の児童約9000名、成人男性3200名を含む約60000名に、体操の授業を提供したことが判明した²⁵⁾。

同調査を引き継ぐかたちで、ドイツ体操連合所属の学校、および、教員を対象とした実態調査が1930年2月1日に大々的に行われた。理事長であったヒルカーは、この調査結果を『ジムナスティック』1930年5・6月号に寄せた論文「誰が体操を押し進めるのか？」(Wer treibt Gymnastik?)で明らかにした。ドイツ体操連合所属の学校教員1150名の回答から、91022名(男性5879名、女性85143名)が調査日同日に授業を受けていたことが判明した²⁶⁾。この2回の調査結果が示すように、体操の授業受講者は、約3年間で30000名以上も増加していた。

表-11は、91022名の年齢期別の男女の受講者数内訳を示したものである。男性に注目してみると、幼児期・児童期に体操を実施する者が多いが、14歳から21歳未満の青年期で著しく減少している。これは、青年期において体操よりもトゥルネンやスポーツ活動が支持されていたことを暗示するものである。一方で女性に注目してみると、幼児期・児童期から50歳未満の壮年期にかけて増加傾向を辿り、とりわけ壮年期にいたっては、全年齢期の約50%が体操の授業を受講していたことが認められる²⁷⁾。

表-11. 各年齢別体操授業の受講者数

年齢期	男性(人)	女性(人)	合計(人)
14歳未満の幼児期・児童期	3,439	16,538	19,977
14-21歳未満の青年期	856	24,278	25,134
21-50歳未満の壮年期	1,423	42,871	44,294
50歳以上の中年期・老年期	161	1,456	1,617
合計(人)	5,879	85,143	91,022

(Hilker,F. (1930) Wer treibt Gymnastik?. GYMNASSTIK 5/6:S.67.より作成)

この実態調査では、表-12のとおり受講者の職業も明らかにされている。そこでは、91022名の約半数に相当する46776名が何かしらの仕事に就いており、職種別では一般職員約20000名を筆頭に、主婦約14000名、知的労働者約8000名、肉体労働者約4000名、自営業者約1000名と続いた²⁸⁾。男性の受講者数については、知的労働者が最も多く、聖職者、医師、法学者、エンジニアと化学者において女性の受講者数を上回った。女性では、主婦の

14173名が最も多く、これに事務員の11052名が続いた。仕事に就いている受講者46776名のうち女性が45244名と実に97%を女性が占めていた。

表-12. 体操授業受講者の職業内容

	男性(人)	女性(人)	総数(人)
肉体労働者			
在宅勤務者と工場労働者	246	2464	2,710
家事手伝い	—	1,212	1,212
合計	246	3,676	3,922
一般職員			
事務員	99	11,052	11,151
店員	13	4,416	4,429
看護人	8	1,962	1,970
公務員	50	2,030	2,080
合計	170	19,460	19,630
自営業者			
手工業の親方	18	397	415
商人	223	373	596
合計	241	770	1011
主婦	—	14,173	14,173
知的労働者			
教員と幼稚園教諭	231	5,433	5,664
聖職者	45	43	88
医師	137	338	475
法学者	114	91	205
エンジニアと化学者	112	45	157
芸術家	96	752	848
文筆家	15	63	78
行政・商業・産業の第一人者	125	400	525
合計	875	7,165	8,040
総数	1,532	45,244	46,776

(Hilker,F. (1930) Wer treibt Gymnastik?. GYMNASSTIK 5/6:S.70.より作成)

これに加えて調査内容は、体操の受講者がどのような場所で受講しているのか、その活動場所にも及んでいた。学校、青少年育成、社会福祉事業に活動場所が区分され、学校については、小学校、高等学校、職業学校と専門学校、大学、市民大学に分けて受講者数が明らかにされた。それによれば、小学校2024名(男性422名・女性1602名)、高等学校2990

名（男性 310 名・女性 2680 名）、職業学校と専門学校については女性のみで 6542 名、大学 7247 名（男性 520 名・女性 6727 名）、市民大学 6245 名（男性 282 名・女性 5963 名）の合計 25048 名（男性 1534 名・女性 23514 名）であった²⁹⁾。

政府の青少年局が担当する児童と青少年グループを指し示した青少年育成は、児童グループ 1087 名（男性 343 名・女性 744 名）、青少年グループ 2356 名（男性 221 名・女性 2135）、さらに青少年育成のなかで活動する者 587 名（男性 2 名・女性 585）の合計 4030 名（男性 566 名・女性 3464 名）であった³⁰⁾。この児童と青少年グループの体操の主要活動は、本来夏季休暇中であったが、調査は冬季に実施された。このため調査日が夏季であったならば、その総数はかなりの数に及んだものと推察される。

社会福祉事業における受講者は、主要活動が夏季に開催される保養施設 1962 名（男性 210 名・女性 1752 名）、教育福祉と孤児のための福祉施設 1399 名（男性 297 名・女性 1102 名）、精神病患者用施設 307 名（男性 94 名・女性 213 名）、身体障害者用施設 595 名（男性 178 名・女性 417 名）、病院 452 名（男性 3 名・女性 449 名）、刑務所については女性のみで 38 名であった。また、これらに加えて失業者にも無料で体操の授業が提供され、受講者数は 656 名（男性 21 名・女性 635 名）であった。社会福祉事業においては、青少年と成人男女で合計 5409 名（男性 803 名・女性 4606 名）が体操を受講しており、これに学校、青少年育成での受講者 25048 名を合わせると、34487 名に授業が提供されたことになる。

91022 名の総受講者のうち 46776 名は仕事に就き、34487 名は社会的活動に該当したことから、この残りの約 10000 名については、習い事として体操の授業に参加していた児童と青少年たちであったとヒルカーは述べている³¹⁾。以上の調査結果を受けてヒルカーは、「体操が仕事に従事する人々の健康維持と社会福祉事業を担っている。まもなく 10 万人に達する支持者とともに、体操はドイツの健康的、かつ、教育的な生活の営みにおいて重要な要素の一部になっており、体操的な運動の価値を認識させ、体操を促進させるならば、今において他にはない」³²⁾と体操の社会的使命について力説した。ヒルカーの詳説するところは、ドイツ国内で体操が人々の健康維持と社会福祉に機能していること、さらに、ドイツ体操連合の活動が体操の普及・促進に多大な役割を果たしており、それ故に体操的な運動の価値を人々に認識させる使命を帯びていることを唱えたことにあった。ともかくも、調査結果を概略すると、1927 年 5 月 31 日時点における体操の授業の受講者数が約 60000 名であったこと、そこから 3 年たらずで 91022 名に増加し、その半数以上の 46776 名が仕事に従事し、97%が女性の受講者であったこと（男性 1532 名、女性 45244 名）、これに加えて、

学校や青少年育成、社会福祉事業において 34487 名と、1930 年 2 月 1 日の調査日時点で、相当数の人々がドイツ体操連合所属の体操教員の下で授業を受講していた。これらの数値は、ドイツ体操連合所属の体操学校での教育実践が、体操の普及・促進に多大な影響を与えていた実態を如実に示すものとして捉えられよう。

第 2 項 一般人向け授業と職業養成専門教育のための要綱

(1) 要綱作成の経緯

ドイツ体操連合は、1926 年 9 月 28 日に初めてとなる総会をベルリンのラバン系の学校、「ダンスと体操学校ヘルタ・ファイスト」(Tanz- und Gymnastikschule Hertha Feist) で開催した。この総会で重要な議題とされたのは、体操の普及についてであった。ドイツ体操連合は、ドイツ国内の体操の授業内容に関する法的な保護を受けていなかったため、人々が使用する「体操」(Gymnastik) という名称が、しばしば営利目的で乱用される状況に危惧を抱いていた。それは、体操の専門教育を一度も受けていない、もしくは、素人向けコースに短期間しか参加していない人物が授業を担当する、社交ダンスの学校がリズム的体操 (Rhythmische Gymnastik) の学校として広告する、ドイツ体操連合所属の体操教員であるかのように自己を表す、ボーデ、メンゼンディークなどの名称を無断で使用する、といった行為が後を絶たなかったからである。

ドイツ体操連合内では、名称の乱用について法的な規制を加える必要に迫られたものの、法的な整備は遅々として進まなかった。そこで総会において、ドイツ体操連合所属の学校のパンフレットや体操学校で発行される印刷物には「ドイツ体操連合に加盟」という印字を付すことが決定した。このようにして、ドイツ体操連合所属の体操学校と体操教員の質を維持する対策が講じられた³³⁾。さらに、各学校共通の体操授業の要綱を作成することが提案され、多数決によりこれが了承されると、即座に要綱の作成にあたる委員が選出された。1927 年 9 月 25 日にベルリンで開催された第 2 回総会において、会員の同意を得た体操授業の要綱は、「一般人向け授業と職業養成専門教育のための要綱」(Richtlinien für Laienunterricht und Berufsausbildung) として機関誌『ジムナスティック』の 1927 年 7・8 月号に掲載されるに至った。

(2) 要綱の概要

まず要綱には、体操の授業実践にあたる人材に求められる資質について、次のとおり記されている³⁴⁾。

体操の授業を実践することは、人間の活動を営むこと、人間的発達のために責任を負うことを意味する。ドイツ体操連合は、会員がこの責任をいつであっても認識していることを期待する。体操教員としての課題を実現させる者は、教育学的な専門性と経験を兼ね備え、教育者としての基本的な資質を持ち合わせていなければならない。

要綱は、①体操授業のための共通規程（授業構成、教員、授業空間、授業の服装）②一般人向け授業③職業養成専門教育④授業料と教員の俸給、とから構成されている。以下、順を追ってとりあげていきたい。

まず①の授業構成については、コース、学校、養成専門教育に分類され、「①コースは、各学校から独立した教員が、個人またはグループで行う一般人向けの授業を意味する。②学校は、一般人向けに構成された授業が展開される学校を対象とする。それは、統一的な管理の下で活動している、もしくは、身体訓練が一般的に全人格の発達のために行われているかのどちらかである。③職業養成専門教育は、体操授業を行う教員の養成に従事する。」³⁵⁾とそれぞれ規定された。次に教員の規程について、職業養成専門教育を担当する教員は、体操教員としての経験が豊富で、人間的にも教育者としての資質が備わっていること、通常の体操教員は、各学校で専門教育を受けており、なおかつ、体操教員になるための仮採用期間を経験していること、仮に体操教員として活動していたとしても、定期的に母校の継続教育コースを少なくとも4週間参加することを義務付けた。ドイツ体操連合は、体操教員の前段階として補助教員を設定し、これについては、職業養成専門教育を修了した若い教員のみ限定した。この補助教員には、1年から2年の仮採用期間を設け、その期間は熟練した体操教員の監督のもとで、一般人向けのコースの授業を担当するか、学校や職業養成専門教育のなかで指導を受けることと規定し、体操教員を目指す全ての者に義務付けられた³⁶⁾。また前述したとおり、ドイツ体操連合所属の教員の学校案内やパンフレットには、「ドイツ体操連合」(D.G.B.)、「ドイツ体操連合に加盟」(Mitglied des Deutschen Gymnastik-Bundes e.V.)、母校の体操流派の印字を付する権利が与えられた。ただこの権利については、教員が定期的に母校の継続教育コースに参加することを前提とした。

授業空間の規程については、コース、学校、職業養成専門教育のいずれの授業であっても衛生的で暖房設備があり、快適な空間で実施されねばならないとし、喫煙や飲酒を禁止し、繁華街にある施設の使用を許可しなかった。空間の広さについて、静的な運動の場合は、1人に対して2㎡、最低でも20㎡の広さ、動的な運動を伴う場合は、1人に対し4㎡、最低でも40㎡を必要とすると細かく規定した。授業の服装について、運動にふさわしい服を着用すること、学齢期前の児童は裸での授業を許可されるが、それ以外の場合は、ドイツ体操連合に届け出なければならないとした。

続いて②に関して取り上げるが、ドイツ体操連盟は、この項目が体操教員にとって最重要であると位置づけた。それは、体操教員の出身流派の特性を活かした授業により、受講者の性別、年齢、職種、健康度、機能不全や虚弱体質を同時にかつ効果的に把握できるからである。一般人向け授業の目的は、授業をとおして受講者の体質改善を目指し、職業病を緩和させること、身体的、精神的な障害を取り除くことであり、そのために授業は型にはまった形式的なものではなく、毎時間ごとに新たな種類の異なる課題を選定し、自由に授業を創出していくこととした³⁷⁾。

続いて③は、以下にあげる体操教員になるための条件、および、専門教育の内容を規定したものである³⁸⁾。

- ・18歳未満の採用は認めず、4週間から12週間の仮採用期間を経て、初めて採用される。
- ・専門教育には、体操 (Gymnastik) ・人体学 (Körperlehre) ・教育学 (Erziehungslehre) の3つの基礎領域を含まなければならない。活動領域や専門教育科目については、各学校の特性によって異なるが、各領域の科目を担当する教員は、教育学的な専門性を持ち合わせ、教育者としての資質がなければならない。
- ・職業養成専門教育における修得期間は、少なくとも9か月の活動期間ごとに、2年間行わなければならない。週時間では、最低15時間、多くとも30時間に達しなければならない。
- ・教員資格は、職業養成専門教育の修了時に、各学校の自由方式による3つの基礎領域の修了試験を受けなければならない。修了試験では、学校長と教員の他、ドイツ体操連合の代表者の立ち会いのもと実施され、その後に教員資格が記載された修了証明書が授与される。

最後に④の授業料について、一般人向け授業、職業養成専門教育のいずれにおいても具体的な額は記載されていないが、体操の授業を単なる営利目的の活動としてはならないと厳しく規定した。また、教員の俸給について、補助教員には月 120 マルク、独立した教員には 200 マルク、職業養成専門教育での教員は 250 マルクを最低給料とした³⁹⁾。

このようにドイツ体操連合は要綱を作成し、その遵守を徹底させることで、所属する体操学校と教員の質の確保に努めた。ドイツ体操連合に所属するには、理事会で承認されなければならないが、ドイツ体操連合の教育方針と志願者の活動が合致しなければ、排除を余儀なくされた⁴⁰⁾。このために、ドイツ体操連合に加盟しているという事実は、体操教員にとって一つのステータスであり、要綱の存在がドイツ体操連合所属の学校や教員による体操授業の価値を高め、営利目的の体操学校との差異を鮮明にする役割を果たした。さらにドイツ体操連合は、何よりも体操の授業を行う教員の専門性を重視し、教育学の知見に裏打ちされた授業内容の正当性を前面に押し出したのである。これを確証づける事例として、特に上記第 1 項 (3) の学校紹介の一覧から、多くの学校の養成期間が 2 年以上に定められていたこと、仮採用期間が設けられていたこと、また、解剖学と生理学が体操学校の主要授業科目として採用され、教育学の授業が頻繁に実施されていたことは、職業養成専門教育の内容に従って、教育が展開されていたことを如実に示すものであった。

第 3 項 体操の普及・促進・保護

(1) 新体操教育会議 (1926 年)

1. プログラム構成

「新体操教育会議」(Tagung für gymnastische Körperbildung) は、1926 年 5 月 27 日から 29 日にかけての 3 日間、デュッセルドルフのゲゾライ⁴¹⁾ プラネタリウムで開催された。「芸術体操会議」を引き継ぐ会議として位置づけられた新体操教育会議は⁴²⁾、ドイツ体操連合設立以降の一大イベントで、芸術体操会議の主催者であったベルリン中央教育研究所とドイツ体操連合の合同で開催された。新体操教育会議の目的は、ここ 10 年間の体操諸流派のなかで展開された様々な活動の展望を公開することで、講演、実践授業、参加学校やゲストによる舞台公演が行われた。

新体操教育会議のプログラムは、表-13 のとおりである。プログラムからは、ドイツ体

操連合の設立に貢献した体操諸流派の代表者、ならびに、彼らの学校が講演、授業を行っていたことが見て取れる。1日目は学校体操、2日目は労働健康体操、3日目は芸術的な体操がそれぞれとりあげられ、各日の夜の部では、芸術的でより華やかな舞台演出が施され、体操を専門とする学校やゲストによる舞台公演が開催された。

表-13. 新体操教育会議のプログラム

1日目 1926年5月27日木曜日

	タイムスケジュール	会議形態	会議内容
午前	9:00	大会宣言	「大会宣言」 パラート, ベルリン
	9:30	講演	「体操の教養課題」 ヒルカー, ベルリン
	10:30	授業実践	「ドイツメンゼンディーク学校の体操構築」 ヘドヴィッヒ・ハーゲマン, ハンブルグと自由と応用運動のための連盟, ミュンヘン
	12:00	授業実践	「振動体操」 ルドルフ・ボーデ ハイブリット・メダウ指導によるボーデ学校の授業実践, ベルリン
午後	3:00	授業実践	「リズム的体操」 ヒルダ・ゼンフ指導によるリズム的な学校共同体, デュッセルドルフ
	4:30	授業実践	「ローデン・ランガードの教育方法」 ローエランド学校
夜	8:00	公演	「運動芸術」 ルドルフ・ボーデ

2日目 1926年5月28日金曜日

	タイムスケジュール	会議形態	会議内容
午前	9:00	講演	「体操の治療的な意味」 ドレーゼル, ハイデルベルグ
	10:30	授業実践	「職業での体操」 体操学校ギンドラー・ホルンダー, ベルリン
午後	3:00	授業実践	「呼吸を基礎とした純粋な表現形式に向けた教育」 アンナ・ヘアマン学校, ベルリン
	4:30	授業実践	「健康的で芸術的な体操」 ドラ・メンツラー学校, ライプツヒ
夜	8:00	公演	ダンスのタベ マリー・ヴィグマン監督 "Raumgesänge空間音楽""Tanzdramaダンスドラマ"

3日目 1926年5月29日土曜日

	タイムスケジュール	会議形態	会議内容
午前	9:00	講演	「ジュヌヴィエーブ・ステバンスの活動から」 ヘドヴィッヒ・カールマイヤー・ジモン, ベルリン
	10:00	授業実践	「リズム的な身体修練」 自由と応用運動のための連盟, ミュンヘン
	11:30	授業実践	「ダンス的な身体修練」 マリー・ヴィグマン学校, ドレスデン
午後	3:00	講演	「新しいダンス」 フリッツ・ペーメ
	4:00	授業実践	「ルドルフ・フォン・ラバンの運動法則による授業構築」 マーガレーテ・シュミッツ, エッセン
	5:00	授業実践	「アマチュアコーラス訓練」 アルブレヒト・クンスト(ルドルフ・フォン・ラバンの運動合唱の代表者), ハンブルグ
夜	8:00	公演	ノイエタンツビューネミュンスター クルト・ヨース監督 ("Larven仮面", "ダンスシリーズ" "Brautfahrt花嫁さがしの旅")

(Hilker, F. (1926) Tagungen, Vorführungen und Vorträge. GYMNASTIK 4/5: S. 60. より作成)

新体操教育会議の開会宣言は、中央教育研究所所長のルードヴィッヒ・パラートが担当した。パラートは、20世紀初頭の社会における体操の状況を述べた上で、身体教育における体操の役割、若人の身体解放を目的とする硬直化した教育方法論の打開策、若人の能力

を自由に育て上げる重要性を訴えた⁴³⁾。これらを前提として、以下の体操に関する3つの主要課題を説いた⁴⁴⁾。

目的意識が存在する体操的な活動、まずこれは、流行病のように“リズム的な体操”という偽名のもとで広がった道楽のような体操、流行を追う子どもだましのような体操との区別が必要である。そのために我々は3つの主要課題を掲げ、体操を明確に認識していく。1点目は、他の専門分野を習熟し、理解することにより、それを身体的な活動に結び付けることを基礎とする。それは、新しいトゥルネンの授業を“身体形成”と特徴づけることである。2点目は、身体的な障害を予防する、または治療するためにも“衛生学的—治療法的”な方法を体操に導入し、際立たせることである。3点目は、ダンスや演劇の分野と関係を深めることで身体表現の可能性を高めるように、表現性の向上を図るためだけにそれらを取り入れるのではなく、人間の芸術的な教育の育成をも期待することである。

ここでパラートが提示した体操の主要課題、①新しい身体形成②衛生学的—治療法的な体操③芸術的な体操、に沿うかたちで会議は進行した。開会宣言に続いて、ドイツ体操連合理事長であったヒルカーが「体操の教養課題」と題して、体操に課せられる社会的使命を以下のように説いた⁴⁵⁾。

数10年間にわたる没我的な活動での体操を、自然に即した身体教育のために多種多様な方法で発展させた後に、今日の課題が浮かび上がる。それは、公的なかたちで国民教育の文化構築に向けて取り組むことである。健康的な身体は、総合的な教育、および、あらゆる生命活動の基礎でなければならないことを我々は認識した。年齢、世代、階層の異なった人々に生理学的、心理学的な見地から身体修練を施し、我々の時代の人々が再び、精力的なエネルギーを獲得し、生命溢れる身体感覚を研ぎ澄ますこと。これらが基盤となってトゥルネンとスポーツが発生し、身体的、かつ、精神的な活動へと昇華していくであろう・・・中略・・・体操は自由な身体的感情の形成の基礎となる。芸術的な成果が重要なわけではなく、内面的な体験をとおした、自然的な表現が大切である。これにより個性的な感性が生まれ、新たな表現文化とともに、共同社会の感性が生み出されるのだ。

ヒルカーは、この体操の活動がドイツの国民教育にも連なることから、公的に取り組む意義を説き、また、体操がトゥルネンやスポーツの根底にある身体性の基礎でもあることを主張した。さらに体操表現が、新たな共同社会の創造に向けた感性を最終的に磨くことを力説した。

パラートとヒルカーの講演後、初日は実践的なデモンストレーションとして、メンゼンディーク、ボーデ、ゼンフ、ローエランドの体操が行われた。メンゼンディークの体操には、ドイツメンゼンディーク学校ハンブルグとミュンヘンの生徒とともに、会議の開催地であるデュッセルドルフの女学校の生徒も参加した。ボーデの体操については、振動体操に加え、ハインリッヒ・メダウの指導によるボーデ学校の授業が披露され、フランクフルトの男子学校の生徒が参加した。午後は、ゼンフの指導によるデュッセルドルフの学校連合体のリズム的体操（図-26 参照）、ローエランド学校によるローデン・ランガードの教育方法が実戦形式でそれぞれ発表された。夜の部では、ボーデが一般の人々にたいして、体操的な練習を素地とする芸術的な作品の構築に向けた運動を実験的に試みた。

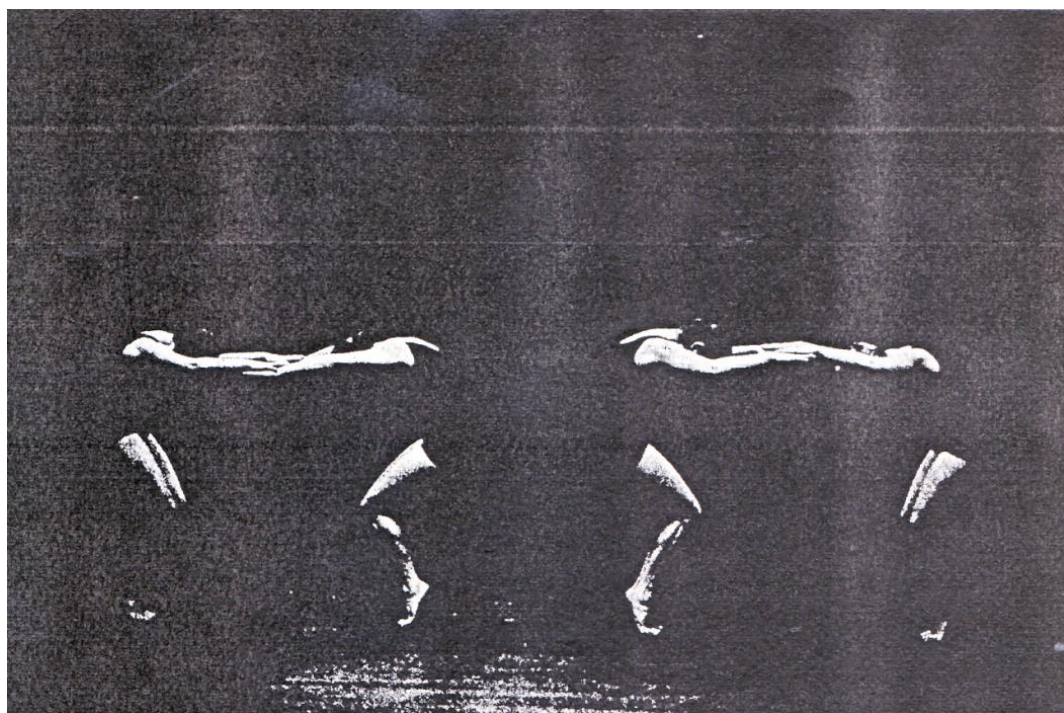


図-26. デュッセルドルフの学校連合体のリズム的体操

(Gindler,E. (1926) Die Gymnastik des Berufsmenschen. Gymnastik5/6:S.83.より転載)

2日目は労働健康体操を中心に、グライフスヴァルト大学衛生学研究所所長であったエルンスト・ゲルハルド・ドレーゼルが「体操の治療的な意味」と題して、自らが経験した人間の身体の危機的状況を説明し、その予防として身体的なトレーニングが重要であることを啓発した。さらに、実践的デモンストレーションとして、ギンドラーが労働者の体操、アンナ・ヘアーマンが呼吸法に基づいた純粋な表現教育の具体例を示し、ドラ・メンツラーが健康的で、芸術的な体操を披露した。夜の部では、マリー・ヴィグマンと彼女のダンスグループによる「空間音楽」(Raumgesänge)と「ダンスドラマ」(Tanzdrama)の2作品が公演された。

芸術的な体操に関わる会を中心に運営された最終日の講演では、カルマイヤーがアメリカ人女性であるジュヌヴィエーブ・ステバンスの活動を紹介し、身体の緊張と緩和に効果のある呼吸法に基づいた体操をカルマイヤーの生徒が披露した。また、舞踊評論家であるフリッツ・ベーメが新しいダンスとして、マリー・ヴィグマンとルドルフ・フォン・ラバンの活動をとりあげて講演を行った。実践的デモンストレーションでは、自由と応用運動のための連合がリズム的な体操、マリー・ヴィグマン学校がダンス的な体操を行った。会議の最後には、ラバンの運動法則の授業をマーガレーテ・シュミッツと彼女の学校の生徒が紹介、披露し、ラバンの運動合唱をアルブレヒト・クンストが行った。

2. プログラム内容

ドイツ体操連合の機関誌『ジムナスティック』の1926年5・6月号で、理事長のヒルカーは、新体操教育会議の報告をまとめている。この報告から確認できる参加者数に注目してみると、「芸術体操会議」の1500人を上回る約2000名の参加者が来場し、とりわけ舞台公演が行われた夜の部は、多くの観客で会場のゲゾライプラネタリウムが埋め尽くされたという⁴⁶⁾。そこには、プロセイン体育大学長のオッテンドルフ、コプレントとカッセル州立高等補習学校の副議長であったジーボウルグ、ボルバインをはじめ、政府関係者、デュッセルドルフが位置するライン-ヴェストファーレン州の代表者が招待された⁴⁷⁾。また、講演については、最終日に行われたヘドヴィッヒ・カルマイヤージモンの「ジュヌヴィエーブ・ステバンスの活動から」に言及し、女史の生徒が行った呼吸法に関わる体操の描写が、ステバンスの時代の風潮をより鮮明に再現していたこともあり、これが全参加者にとって、会議全体のクライマックス感を与えたという⁴⁸⁾。さらにヒルカーは、講演で公にされた体操の観念と理論が体操諸流派の実践的デモンストレーションをとおして具現化され、

諸流派の様々な運動形式を同時に見ることは、とても興味深かったと述べ、報告内容を次のように締めくくっている⁴⁹⁾。

1922年10月に初となる体操的な会議を開催して以降、ドイツ体操連合の設立と我々の活動は、新たな価値を有する身体教育の一つとして前進した。これは、青少年と国民の身体に関わる基本修練という課題である。健全なる身体から、職業的、スポーツ的、または、芸術的な行動様式が生じる。これは、各々の成果に必要な能力である。若い女性の身体教育のために学校教育で体操が行われるように、プロイセンの授業管理部門に新しい指導要綱の施行を目指す。体操が青少年の身体教育に有益な役割を果たすために、大いなる覚悟で今後も活動する。

ドイツ体操連合の設立以前において、各学校の内だけで、体操諸流派の体操は展開されていたが、新体操教育会議を契機として学校教育の指導要綱にそれらの体操を導入しようという考えを、ヒルカーは表明したのである。また、機関誌『ジムナスティック』の1926年5・6月号で、ヒルカーは「体操の教養課題」と題した論文を寄せ、そこで「本会議は体操家たちに向けて体操の運動教育を合同で取り組ませる、または、モードや個人的な興味として役立てる、国民教養としての自覚を喚起するという認識の機会でもあったが、全体的には立派なショーとなった」⁵⁰⁾と述べている。

つづいて、機関誌『ジムナスティック』以外の雑誌が、いかに新体操教育会議を伝えたのかという点に注目していきたい。雑誌『体育』(Die Leibesübungen)は、「ドイツトゥルネン教員協会」(Deutscher Turnlehrerverein)、「ドイツ体育大学」(Deutsche Hochschule für Leibesübungen)、「体育促進に向けたドイツ医師連合」(Deutscher Ärztbund zur Förderung der Leibesübungen)の提携により1925年1月15日に創刊された。ベルリンのトゥルネン教員であったエリッヒ・ハルテ、プロイセン体育大学長であったエドムント・ノイエンドルフの監修のもと、ドイツ体育委員会書記長であったカール・ディームと科学、芸術と国民教育のためのプロイセン教育省の審議官であったヘアーマン・オッテンドルフが編集協力を担当した。

雑誌『体育』は、1926年に発行された第21号で新体操教育会議をとりあげている。そこで、ハンブルグのトゥルネン教員であったラインホルド・ハルテンは、「体操的な身体教育」と題した論考のなかで、新体操教育会議のプログラム内容に認められる運動認識の特色に

ついて、以下のように言及している⁵¹⁾。

「これが正しい運動である」。この表現は、会議中ほとんどの系統の体操家たちが繰り返し主張し、それぞれ多少は異なった内容が込められているかのような印象を与えた。しかし、授業における運動の構成は、ほぼ同じもので、毎回のショーが異なる側面から行われたに過ぎなかった・・・中略・・・「正しい運動」に共通する内容は、全体性である。あらゆる自然的で、本質的な運動は、全身が使われ、人間の全体をもって関与し、共鳴し、あらゆる運動の刺激が全身に伝わる。従って、実演されたのは個々の筋肉や靭帯のトレーニングでも、体幹を硬直させながら行う四肢の運動でもなく、すべての体操が繊細で流れるような全体運動を目指していた。つまり本質的に重要なのは運動であり、型または何らかの姿勢ではなかった。

ハルテンの見解は、シュピース＝マウル方式のトゥルネンに認められた要素化、鋳型化にたいして、プログラム内で実施された体操が繊細で流れるような全身運動であったとして、運動そのものが重要なのであり、身体を型や姿勢にはめ込む運動ではなかったことを示すものであった。トゥルネン教員であるハルテンは、これらの体操派の運動認識から、何かを学べるはずであると主張したが、その一方で、体操派とトゥルネン派の運動認識の隔たりについても以下のとおり指摘している⁵²⁾。

体操は、今までとは異なるモダンな形態であり、また、異なる方法で行われる運動やトレーニングであるが、これらは虚栄心を満たすものであり、生活に酩酊や忘我の状態をもたらす麻酔剤である。世間一般では、また、多くの身体教育に携わる関係者（トゥルネン教員やスポーツ教員）の間ですら、残念ながら殆どこのように見做しているのである。

トゥルネン教育に従事していたハルテンによる上記の指摘は、運動認識に関わる体操派とトゥルネン派、スポーツ派との乖離を鮮明にしたものであったが、そこからはまた、ハルテンが総じてプログラム内容に好感を抱いていたことが認められる。ハルテンは、ヒルカーが提示した体操の任務に照らし合わせながら、プログラム内での実践的デモンストレーションについて、①いたるところで緊張から弛緩が行われていたこと②あらゆるステッ

プ、ジャンプ、運動が躍動的であったこと③「歩く」という日常の運動をテーマに取り上げ、それを躍動する身体に発展させた全身運動が表現力に満ちていたこと、をそれぞれ指摘した⁵³⁾。これに加えてハルテンは、プログラム内の運動が非常に表現に溢れていたとして、動きを束縛し、定められた型にはめ込むのではなく、個々人が創出した動きを空間やリズムに結びつけて発展させていたことを言及している。

またハルテンは、北欧体操を代表するニルス・ブックの体操⁵⁴⁾と比較し、プログラム内で行われた体操が表現力に満ちていたのにたいして、ニルス・ブックとその体操団が示した体操は、「女性でも優れた身体トレーニングを実践しており、その技能は、驚嘆すべきものであったが、彼女らのダンスは、取り組みの不自然さが全面的に表われていた。リラックスした感じがなく、軽快さがなく、背筋が硬直し、腕が固く、機械のようだった」⁵⁵⁾と喝破した。ニルス・ブックの体操にみられる運動認識には、従来のトゥルネンと同様に身体への抑圧的な側面が多くみられ、技能を高める弊害として、リズムを殺しているとも付言した⁵⁶⁾。その他のハルテンの指摘に注目してみると、プログラム内の体操がリラックスした状態での運動であり、身体トレーニングをそれほど重視していないにもかかわらず、素晴らしい技能が示されていたこと、プログラムを演じた生徒たちが素晴らしい体格を持ち、歩き方も姿勢も極めて模範的であったこと、トゥルネンの授業や軍隊での誤った姿勢の圧迫により、正常な姿勢の感覚を失ってしまった人々への教訓を与えたこと、といった文言が雑誌記事から確認できる⁵⁷⁾。

ハルテンはプログラムの実践にむけた一連の練習のなかに、身体教育を再び精神的イデオロギーに回収せんとする兆候を感じた旨を述べているが⁵⁸⁾、前述したとおり、プログラム内容には好意的であり、そこでの体操が自由で、さわやかな身のこなしに満ちており、本能の健全さを証明していたとの評価を下した⁵⁹⁾。

以上より、パラートが提示した体操の主要課題である「新たな身体形成」「衛生学的―治療的な体操」「芸術的な体操」に倣うかたちで、体操諸流派の各学校で取り組まれていた身体的な基本修練、労働健康体操、芸術的な体操の披露をプログラムの柱とした新体操教育会議が、トゥルネンの体操にみられる形式的な色彩とは隔たり、自由でリズムカルな運動と表現を基調とする体操で満たされた空間を形成していたことが明らかにされた。

(2) 女子体操教科課程講習会

1. 第1回女子体操教科課程講習会(1926年)

a) プログラム構成

女性教員のための第1回体操教科課程講習会は、1926年4月8日から5月19日まで、北ドイツに位置するヴィークのフェオア島(Wyk auf Föhr)で、中央教育研究所(Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht)とドイツ体操連合との合同で主催された。この体操教科課程講習会は、学校教育において体操的な活動を導入しているトゥルネン教員とスポーツ教員、および、その連合のために、体操の理論と実践に関わる研修の実施を目的としていた⁶⁰⁾。体操教科課程講習会の参加によって、何かしらの資格を獲得できるわけではないが、参加した事実を示す証明書が参加者たちに発行された。ヴィークのサナトリウム所長⁶¹⁾であったグメリンとベルリンの医師であったキルヒベルグは、ヴィークアウフフェオア内にあるグメリンのサナトリウム施設において、トゥルネン教員とスポーツ教員のための体操教科課程講習会の開催に向けてドイツ体操連合を誘致した。芸術と国民教育のためのプロイセン教育省(Preuß. Ministerium für Wissenschaft, Kunst und Volksbildung)が政令(U VI Nr.471,U II,U III A)をとおして、地方教員と行政に権限を付与し、女性教員が体操教科課程講習会に参加できるよう休暇を与え、体操教科課程講習会の開催が許可された⁶²⁾。

体操教科課程講習会への参加者の参加条件は、①公立学校と私学学校のいずれかでトゥルネン教員、もしくは、スポーツ教員であること②トゥルネンやスポーツに関する連盟や協会に所属しているトゥルネン教員、もしくは、スポーツ教員であること③これらの教員以外で、定員に空きがある場合に限り、体操やトゥルネン、スポーツに関する基礎知識を有する志願者も受け入れるが、志願者は35歳を越えてはならないこと、の3通りであった⁶³⁾。総勢66名であった参加者の氏名、職業、勤務地は表-14のとおりである。

表-14. 第1回女子体操教科課程講習会参加者リスト

	氏名	職業	勤務地
1	Herta Becker	中等学校教員	Oberhausen(Rhld.)
2	Josephine Block	技術指導教員	Friedeberg(Nm.)
3	Elsbeth van Bollhuis-Smeding	技術指導教員	Emden
4	Marg. Borsdorff	高等学校教員・トウルネン教員	Wernigerode(Harz)
5	Hanna Braun	トウルネン教員	Hagen(Westf.)
6	Irene Breternitz	教員	Hamburg
7	Maria Brocker	トウルネン教員	Dülken(Rhld.)
8	Edithmargret Brundsberg	技術指導教員	Barmen
9	Erika Eckardt	トウルネン教員	Traben-Trarbach(Mosel)
10	Lisbeth Engel	技術指導教員	Osnabrück
11	Marg. Engelke	トウルネン教員	Aken(Elbe)
12	Ruth Fischer	体操教員	Berlin-Wilmersdorf
13	Dora Flesch	夫人	Berlin-Schlachtensee
14	Gertrud Fuesers	技術指導教員	Gelsenkirchen
15	Olga Hartenstein	技術指導教員	Allstedt(Thür.)
16	Sybille Herzberg	トウルネン教員	Solingen-Breidbach
17	Klara Hoche	高等学校教員	Grünberg(Schlesien)
18	C. Hoffmann	教員	Neunkirchen(Saargebiet)
19	Hildeg.Hoppe-Seyler	技術指導教員	Kiel
20	Hildegard Jentsch	学生	Berlin
21	Martha Johannsen	教員	Hamburg
22	Hildegard John	技術指導教員	Goslar(Harz)
23	Frieda Katzan	技術指導教員	Barmen
24	Anne von der Kaus	技術指導教員	Varel i. Oldenburg
25	Else Körtge	トウルネン教員	Halberstadt
26	Else Kruber	トウルネン教員	Festenberg(Schlesien)
27	Kummerow	図書館員	Hamburg
28	Käte Kuntze	教員	Sondershausen(Thür.)
29	Erna Lanwig	トウルネン教員	Rummelsburg(Pommern)
30	Klara Lategahn	トウルネン教員	Wriezen(Oder)
31	Elisabeth Leonhardi	技術指導教員	Gera-R
32	Marg.Liedke	教員	Gelsenkirchen
33	Eva Lingnau	トウルネン教員	Gelsenkirchen
34	Grete Linden	教員	Gelsenkirchen
35	Marie Liß	技術指導教員	Neuruppin
36	Marg. Lindner	実業学校教員	Elbing
37	Wally Lobe	技術指導教員	Militzsch(Schlesien)
38	Elisabeth Lucas	教員	Einbeck
39	Dora Lustig	トウルネン教員	Berlin
40	Kath. Marx	高等学校教員	Andernach(Rhld.)
41	Lilly H. Menk	トウルネン教員	Halstenbeck(Holstein)
42	Elisabeth Meyer	技術指導教員	Bottrop i. Westf.
43	Marg. Milkuhn	トウルネン教員	Memel
44	Toni Nölle	教員	Hamburg
45	L. Othling	トウルネン教員	Bremen
46	Hanna Peters	トウルネン教員	Hamburg
47	Hildegard Pinkepank	技術指導教員	Kupferdreh(landkreis Essen)
48	C. Preiß	トウルネン教員	Meseritz(Grenzmark)
49	Frau Thilde Reinau	教員	Karlsruhe i. Baden
50	Dora Rohwedder	技術指導教員	Flensburg
51	Edith Rudolph	幼稚園教員	Erfurt
52	Elisabeth Seehaus	トウルネン教員	Nordhausen(Harz)
53	Hedwig Seikat	トウルネン教員	Suhl(Thür.)
54	Magd. Springstube	トウルネン教員	Friesack(Mark)
55	Else Scheffler	技術指導教員	Pillau(Ostpr.)
56	Mathilde Strauschmeier	トウルネン教員	Hoym(Anh.)
57	Else Tamm	トウルネン教員	Frankfurt(Main)
58	Marg. Thiele	技術指導教員	Wittingen(Hannover)
59	Marie L. Thiele	体操学校生	Berlin-Lichterfeld
60	Erna Thorun	トウルネン教員	Osterode(Ostpreußen)
61	Carla Verständig	体操学校生	Berlin
62	Welscher	体操学校生	Wandsbeck
63	Sophie Winter	トウルネン教員	Hamburg
64	Susanne Wolff	体操学校生	Berlin-Lichterfelde
65	Gertrud Zikeli	体操学校生	Berlin
66	Lotte Zimmerlich	技術指導教員	Oppeln(O.-S.)

Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1926) Liste der Teilnehmerinnen an dem Gymnastischen

Frauenlehrgang in Wyk. GYMNASTIK9/10:S.115-116.より作成)

参加者の職業を列举すると、トゥルネン教員 24 名、技術指導教員 19 名、教員 9 名、体操学校生 5 名、高等学校教員 2 名、その他は 1 名ずつであった。参加者の勤務地はドイツ全域に拡散しており、東プロイセン、グレンツマルク、オーバーシュレージエン、ザール地方、メーメルラント等、当時のドイツ国境地域と分断された地域からの参加者も存在した。体操教科課程講習会の参加者の宿泊施設や食事は、事務責任者であったサナトリウムのグメリン、ディレクターのカール・メンゼンディークによって準備され、グメリンの宿泊所サナトリウム「ノルドマルク (Nordmark)」(図-27 参照) には、教授陣と参加者がともに宿泊した。体操教科課程講習会の一日のスケジュールをまとめたのが表-15 である。



図-27. サナトリウム施設「Nordmark」

(Hilker, F. (1926) I. Berichte über den Wyker Lehrgang. GYMNASTIK8/9:S.103 より転載)

表-15. 第 1 回女子体操教科課程講習会スケジュール

時 間	内 容
7:00	起床、早朝体操と体の手入れ
7:30	朝食
8:00-10:00	体操(各グループ1授業)
10:00-11:00	講義
11:00-12:00	体操
12:30	昼食
13:00-15:00	浜辺にある臥床療法室での休息
15:00-17:00	スポーツとゲーム
17:00-18:00	報告、授業実践の意見交換
19:00	夕食
21:00	就寝

(Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1926) Mitteilungen des Deutschen Gymnastik-Bundes e.V., GYMNASTIK1/2:S.28.より作成)

参加者は7時に起床、午前に実技と講義を受け、午後にスポーツとゲーム、夕食前に参加者同士のディスカッションを行った。講義はサナトリウムで行われ、実践活動については、芝生のある公園を使用し、自由時間は参加者たちが社会的で活発に過ごせるよう、サナトリウムの経営陣が読書室を設置し、また、ハイキングを実施した⁶⁴⁾。これらの恩恵を受けた参加者たちは、参加者同士が交流を深めつつ、親たな交際関係を築いていった⁶⁵⁾。

b) 講義概要

体操教科課程講習会の講義は、教育学的な性格を基調としつつ、医学や衛生学の知見を織り交ぜながら実施された。理事長であったヒルカーは、「体操の歴史と理論」と題して、教育の基本方針に関わる10回の講義を実施した。そこでは、教育学における身体教育の一般的な分類、様々な体操的なトレーニング方法による姿勢や緊張・緩和、動き・呼吸とともに教育史が取り上げられ、最終週では、実践的な活動から提起される教育学的な課題、体操に関わる文献や図書が提示された⁶⁶⁾。

トゥルネン教員のハルテは、民族舞踊での技術的な練習、および、トゥルネン的なトレーニング学を内容とする講義を担当した⁶⁷⁾。ベルリンの医師であるキルヒベルグは、「女性の身体の発達と健康法」について24回に渡り講義し、解剖学や生理学の観点から身体に関わる問題が扱われ、参加者から理論と実践の双方において多くの賛同を集めた⁶⁸⁾。その他、先に挙げたグメリンとヘベルリンは、「健康な子どもと病弱な子ども」をテーマとした講義をそれぞれ担当した⁶⁹⁾。

c) メンゼンディークの実践活動

メンゼンディークによる実践活動は、全参加者66名を対象に必修で行われた。メンゼンディーク系の学校であったハーゲマン学校の教員であり、ドイツ体操連合会員のルイゼ・フバッハが指導を担当し、メンゼンディークの体操の主要課題である身体形成・姿勢・筋肉と関節のトレーニングやその応用を中心とする授業が展開された。授業内容は、下記のとおり組み立てられた⁷⁰⁾。

第1週目

1. 骨格と筋肉の教育

一般的な姿勢（メンゼンディークの姿勢構築）

―背中の強度と柔軟性を高める練習：立ったままで、膝立て、かかとを上げて、
上体をまっすぐにしたり、丸くしたりし

ながら前屈・後屈・側屈する

ー上体の垂れ下がり

ー大腿の筋肉組織の教育：体の重心を中心に保持した状態で膝を曲げて、膝屈でのステップ（前後での脚振り）

2. 緩和とゆるめる練習

腕と脚の揺さぶり：四足姿勢での背中 of 緊張と緩和

牛のしっぽ（四足姿勢でシッポを振るように動かす）

ー上体を緊張させ（ネコの背中のように）、一気に脱力して胴を落とす

ーゆるんだ上体の振り子

3. 呼吸と運動

地面の上に座った状態での自然な呼吸（横隔膜と胸部運動を自覚的に意識して）

ー上下に揺れる・横に揺れる・背中を叩くといったペアでの受動的な呼吸練習

ー呼吸を使った歩行

第2週目

1. 骨格と筋肉の教育

大腿の接近と肩甲骨の練習（座った姿勢で）：這う練習

ーステップでの上体と膝曲げ

ー上体を丸くする

ー背中でのブランコ：腹這いでのブランコ（うつ伏せで上体をそらして、両足首を持ちシーソーを行う）

2. 緩和とゆるめる練習

上体の緩和

ーゆるんだ脚の振り子

ー草刈り（脚を草刈機のようにブルブルと小刻みに振る）

ー自転車こぎの動き

3. 呼吸と運動

寝椅子での（横たわった状態）練習

静かな呼吸：呼吸をしながら姿勢を正す（クロス跳び、呼吸を伴った歩行で走行まで速度を上げていく）

第3週目

1. 骨格と筋肉の教育

大腿の屈曲（仰向けになって、膝を曲げずに両脚を上げる状態）

－脚の旋回

－膝のこぎり（両足を揃えたままで左右に振る）

－（両足をそろえて膝を伸ばしたまま上下に振る）

－水平立ち（バランス練習）

2. 緩和とゆるめる練習

腕と脚の緩和

－大きな円（大きな8の字―倒れる練習<上げた腕や脚を脱力して落としながら倒れる>）

3. 呼吸と運動

呼吸を使った後方回転（臼のように呼吸に合わせて上体を旋回）

－綱引き（息を吸って吐く時に、綱引きのように、後ろに脚を引いて腰を落とす）

－腕の運動と呼吸を用いた歩行（スケーターのように、大きく前に脚をスライドさせて踏み出す感じの歩行時に大きく腕の振りも使う）

第4週目

1. 骨格と筋肉の教育

コンビネーション練習

大腿と膝の屈曲（上体を振り子のように動かし、小さな旋回も入れる）

－膝を使って脚で円を描く運動と上体で円を描く運動（膝立ちの状態、膝上から、また、腰から上で上体を前後に動かし、旋回させる運動）

－エルメス（腕のない銅像のように、腕を使わずに上体だけを動かす）

－これらが学校の授業でどのように相応しいか、バリエーションを創作する

2. 緩和とゆるめる練習

腕を振り動かす

－転倒の際の受け止め

－緩和から緊張への不意の移行

3. 呼吸とゆるめる練習

呼吸を使った膝曲げ

- －鎖の運動（グループで連なって歩く）
- －大混乱（ぐちゃぐちゃに歩き／走り回る）
- －光への祈り（一方向に向かって祈る）
- －運動の半ばにおける呼吸の上昇：息を吐き出すことと、不意に息を止めたときの走行（息を吐きながら走って、突然止まる）：歩く・走る・跳ぶと倒れる

第5週目

1. 骨格と筋肉の教育

背骨が湾曲している子どもたちのために、上記の練習を様々なかたちに変える

2. 緩和とゆるめる練習

内的・外的に障がいを持つ子どもたちのための練習を考える

3. 呼吸と運動

呼吸欠陥のある子どもたちのための練習

第6週目

1. 公開発表会のための活動と総括

東洋の祈り

授業は毎日1時間行われ、4つのグループに分かれた参加者たちは、基本的な姿勢と筋機能を高めるトレーニングをはじめのうちにいった。さらに授業では、緊張と緩和、呼吸練習が展開され、歩行・走行・跳躍運動と関連付けてトレーニングが行われた⁷¹⁾。授業内では体操的な活動とともに、ボディーケアに関する啓蒙活動も行われ、とりわけボディーオイルの重要性が頻繁に言及された。オイルでのスキンケアは、多くの参加者にとって初体験のことであったが、非常に熱中してボディーケアを実践した⁷²⁾。公開発表会の際には、4グループが自由に活動しながら数種類のメンゼンディークのトレーニングを紹介した。第6週目に行われた東洋の祈りは、東洋の長い月日がもたらした、清らかで美しい動きであり、衛生的な意味を多分に含んでいた。この東洋の祈りは、とりわけ優秀であり、これに興味を持つグループだけが自発的に参加した⁷³⁾。

d) ボーデの実践活動

ラバンの実践活動との自由選択であったボーデの実践活動は、42名が参加し、ボーデ表現体操の教員であり、ドイツ体操連合会員のマーサ・チョップが指導にあたった。ボーデ

の体操は、歩行・走行・跳躍や振動運動のトレーニングを特に重視し、これらの運動に基づいた動きを導いていった⁷⁴⁾。

最初の授業は、参加者が自らの身体を知覚することから始まった。ボーデのいかなる授業においても、腕と脚が個別に動くのではなく、全身体と関連していることに気づく重要性が全面に押し出されていた。ボーデの振動運動は、短時間で習得することが非常に困難であるため、参加者たちは全身体をとおした知覚を感じることに多くの時間を費やした⁷⁵⁾。ボーデの体操においても、振動運動に伴う緊張と緩和が重視されているが、ボーデの活動を担当したチョップは、以下のように緊張と緩和の重要性について述べている⁷⁶⁾。

緊張が不足し、緩和が多すぎると、身体が振動しているのではなく、単に振り子のよう動いているだけである。緊張と緩和の絶え間ない変化のなかに、運動の美しさと力強さがある。体操とは何か、それは全身体の総合的な運動を前提として、淀みなく調和的な運動経過があることである。

チョップによれば、どの実践活動においても体操教科課程の参加者は、身体運動の硬さに起因する運動の不自由さが、当初現れていたという。しかし、緊張・緩和をとおして、全身の振動運動だけが身体の不自然さを克服できるという考えに従った結果、参加者は素晴らしく創意に富んだ活動を展開するようになった⁷⁷⁾。数少ないトゥルネンの古い手引書を手がかりに授業を実践していた参加者にとって、自由な運動にたいする喜びは、日に日に高まり、参加者のステップは大きく、ジャンプはより高く、絶え間なく、情熱的に前進した⁷⁸⁾。チョップは、ボーデの基礎体操である振動運動を習得すれば、体育やスポーツのいかなる分野の運動でも容易に慣れると力説した。また、ボーデが指導する体操が身体教育の根源に関わる為、学校における全ての身体教育に有益なかたちで作用することを願うとも述べた⁷⁹⁾。

e) ラバンの実践活動

24名が参加したラバンの活動について、当初はメンゼンディークとラバン体操の教員であったマーガレーテ・シュミッツが指導を担当する予定であったが、体操教科課程講習会が始まると同時に盲腸を患い、その代わりにエベルテが担当し、シュミッツが活動報告を行った。ラバンの実践活動は、一般的に知られているトゥルネンのトレーニングから始め、ここから自由な運動に発展させることにあった。シュミッツは、ボーデの教員であるチョ

ップと同様に、あまりにも硬直化され、図式化された動きに囚われる参加者を懸念し、運動と空間の関係性を基礎とするラバンの運動法則性をもって動きに影響を与え、新たな運動を導きだすことに主眼を据えていた⁸⁰⁾。

授業の力点は、古くから慣れ親しんだトレーニングを自由な運動に転換させ、参加者にたいして高低・左右・前後の方向を認識させることにあった。これら3次元の空間秩序の認識に向けて、重いと軽いというコントラストとその多面的な効果による速度（速いとゆっくり）を、ソロやグループ活動のなかに取り入れることにより、ラバンの運動と空間の法則性を参加者は学んだ。直線等の単純な空間経路の習得は、1グループもしくはそれ以上のグループ内に明白、かつ、原始的な規則をもたらし、ここから小さな動きの構成や運動遊戯に移行させることができた⁸¹⁾。

子どもたちの指導についてシュミッツは、子どもの運動の特性と可能性、および、それらにたいする認識は、体育の分野においてほぼ見過ごされてきたとした上で、次のように主張した⁸²⁾。

子どもの指導の出発点は、「トレーニング」ではない。子どもらしい行為は、法則や規則ではなく、年齢に応じた遊びや実生活における動きの観察から把握されるべきである。もし子どもたちの遊戯や活気あふれる運動の経過に障害があるならば、その時は「技術」が常に注目される。それから運動の可能性を与え、高めるために適度なトレーニングが必要となる。

シュミッツは、技術一辺倒の型に嵌めるような指導ではなく、子どもを指導するには、子ども本来の遊びや日常の動作から、運動を発展させるようにすべきとして、ラバンの運動学と空間学の基礎の重要性に触れた。また、成長期にある者や大人にとって重要な運動は、生き生きとした運動形成の可能性であり、それが遊戯であり輪舞であるとして、一つの規則による知覚が空間的に伝達できると主張した⁸³⁾。

f) 陸上競技的な実践活動

陸上競技的な実践活動には、総勢66名が参加し、ベルリンのトゥルネン教員でスポーツ教員でもあったゲルトロード・オッテンドルフが指導にあたった。陸上競技的な活動は、伝統的なトゥルネンとスポーツの形式においても、新しい体操とリズム的なトレーニングが有効であるとして、体操の基本的な運動認識に従ってトレーニングを行う一つの試みで

あった⁸⁴⁾。この試みは、陸上競技の最高記録を打ち出す為のトレーニングではなく、フォームの開発を重視するという点に力点が置かれていた。

活動内容は、短距離、長距離走、森林横断クロスカントリーや通常のクロスカントリーからなる競走、高跳びや幅跳びの跳躍、バレーボール、メディシンボール、槍や砲丸を使用した投球、ターゲットのある投球、パスやキャッチのフォームが必要となるラウンダーズでの投球、その他、ボールゲームとしてファウストバルであった。活動の場所として、サナトリウムの草地や寄宿生高等学校の遊び場、また、短距離競走のために浜辺を使用した。技術的なトレーニングに関わる施設としては、跳躍トレーニング用では見当たらず、その他のトレーニングは、既存の施設で実施され、トレーニング時間は、午前と昼の部に分かれ、午後に自発的な授業が行われた⁸⁵⁾。

参加者は、19歳から35歳の年齢層からなり、その多くがトゥルネン教員や技術指導教員から構成されていた。この陸上競技的な活動は、陸上競技の一般的な基礎トレーニングから組み立てられるのではなく、体操的なトレーニングが陸上競技と球技にも転用が可能であることを証明する授業内容であった。陸上競技と球技における体操的なトレーニングの試みは、フォームを獲得する上でも、学校でのトゥルネンの授業と同様に、女性の身体文化にたいして本質的な価値を持っているとして、今後も計画的に実行されるべきであるとオッテンドルフは主張した⁸⁶⁾。

g) 指導実践と公開公演

体操教科課程講習会では、最終週に北海一寄宿制高等学校 (Nordsee-Pädagogium) の生徒やヴィークの保育園の子どもたちに、メンゼンディーク、ボーデ、ラバンの体操の指導を実施することにより、体操教科課程講習会での教育的効果は、より一層明確化された。体操教科課程講習会の初日に、北海一寄宿制高等学校長であった教員のハルレスは、自校の生徒に一度体操的な授業を行うよう参加者に求めた。海辺の木々に囲まれた3面の練習用芝生“ねずみ捕り (Mausefalle)”という場所で、8歳から16歳までの約120名の少年少女は、3コースの女性教員の指導のもと、3つの円のなかで体操的な活動を行った。講習会の参加者が寄宿制高等学校の生徒への指導実践に立ち会い、ヴィークの保育園での指導では、女性教員の多くが参加したように、体操教科課程講習会が参加者に与えたものが、体操の教育的な提案であったことは、疑う余地のないところであった⁸⁷⁾。体操教科課程講習会の指導教員と参加者による子どもへの授業実践の幾つかでは、体操から生じる運動認識をいかに授業へ反映するかが指し示された⁸⁸⁾。

体操教科課程講習会の最後に公開發表会が開催され、中央教育研究所所長で上級視学長であったパラート、科学・芸術と国民教育のためのプロイセン教育省の審議官であったオッテンドルフ、ゲストとしてサナトリウムの医師たち、ヴィークの医師たちと多くの市民がここに出席し、メンゼンディーク（図-28 参照）、ボーデ、ラバン（図-29 参照）の体操、陸上競技的なトレーニングの順に上演された。公開發表会では、体操的なトレーニングによって明瞭、かつ、繊細で細部にいたるまで鍛え抜かれた身体、さらに、堂々たる風采で、非常に優れた群舞が観客を魅了した⁸⁹⁾。

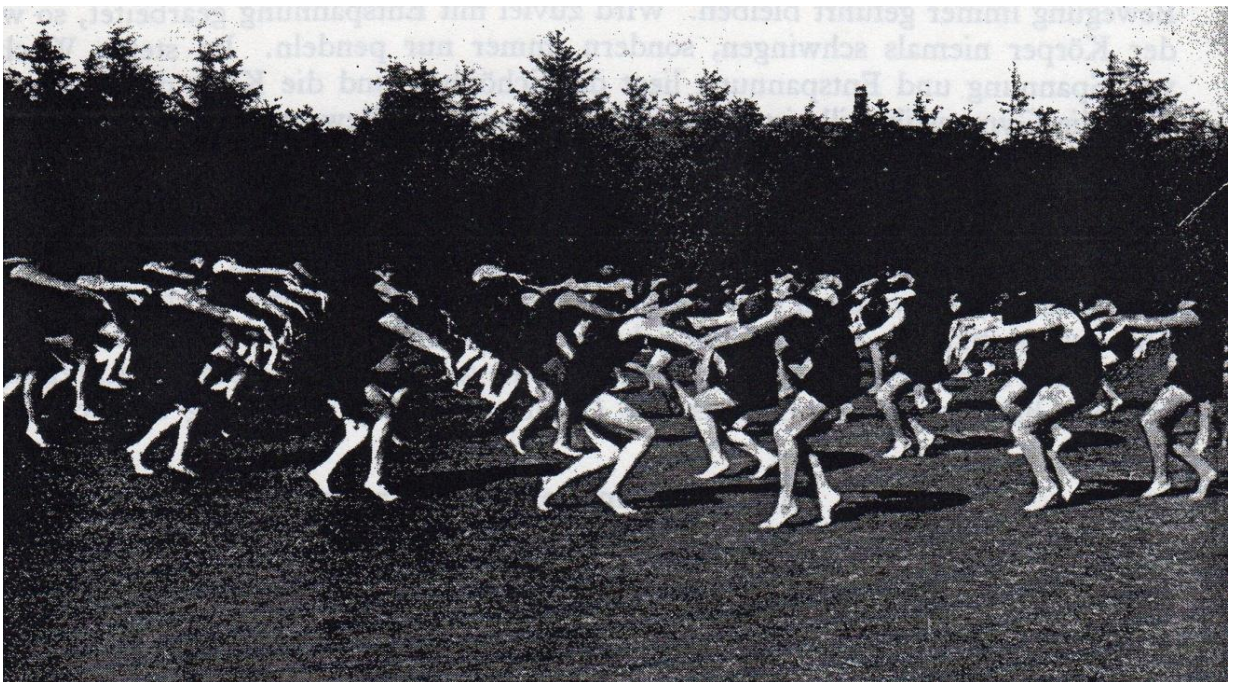


図-28. メンゼンディークの公開發表会

(Hilker, F. (1926) I. Berichte über den Wyker Lehrgang. GYMNASSTIK8/9:S.108 より転載)



図-29. ラバンの公開發表会

(Hilker, F. (1926) I. Berichte über den Wyker Lehrgang. GYMNASTIK8/9:S.107 より転載)

h) 講習会の成果

ドイツ体操連合の機関誌『ジムナスティック』の1926年9・10月号で、理事長のヒルカーは、「女子体操教科課程講習会」の報告を寄せている。そのなかで、参加者が身体教育の価値と可能性において、新しい認識を獲得したことを繰り返して強調し、「6週間の修練が彼女たちを体操教員にしたのではない。後の学校教育活動において、彼女たちが十分に体操的な方法を導入できること、新しい身体教育を築くことができることを確かに感じた」と回想した⁹⁰⁾。

それぞれの実践活動を概括してみると、メンゼンディークの活動が静的で、繊細な運動特性であったことから、参加者は集中力を常に必要とし、実際のところ、落ち着いたなかで、参加者が動きの喜びや興味を見出すことは困難を極めた。これ故に、全ての参加者がメンゼンディークの活動を好んで実行したわけではなく、参加者のなかには、メンゼンディークの活動に反論を唱えた者もいたという。しかし、大部分の参加者は、メンゼンディークの活動にたいして好意的で、体操教科課程講習会の終盤に至ってようやく全ての参加者に正当性を評価され、短時間でありがたなら身体の細部にわたって、繊細に身体を作り上

げた⁹¹⁾。また、ボーデの振動運動については、短時間での習得が非常に困難であった為、全身体の知覚をとおして感じることに多くの時間が費やされた。この知覚をとおした振動運動を繰り返し行うことにより、参加者は運動のリズムを的確に把握し、授業当初は硬くてぎこちなかった動きが活力に溢れ、淀みなくしなやかなものになった⁹²⁾。陸上競技的な実践活動では、体操的なトレーニングにより、参加者たちは陸上競技のフォームを獲得するのに十分な成果をあげ、フォームを固めることが容易になった⁹³⁾。これらの実践活動をとおして、参加者は体操的なトレーニングの有効性を学び、学校教育の現場で活用する道筋を開いていった。

サナトリウム所長グメリンは、彼が招集した集会において、「体操的な教科課程講習会は、保育所の子どもたちの身体教育にたいする全く新しい可能性を女性教員たちに示した・・中略・・保育所の教職員たちを体操的に教育するべきであり（特に呼吸に関して）、それにより子どもたちの身体的なトレーニングに新しい知覚と能力に役立てることができる」⁹⁴⁾とヴィークでの女子教科課程講習会について総括した。これは、体操的な指導を取り入れることにより、トゥルネン教育やスポーツ教育のみならず、子どもの身体教育についても新たな身体教育に発展させる可能性があることを示している。多くの参加者が女子体操教科課程講習会の再度の開催を希望したことは、同会の成功を端的にあらわす事象として捉えられよう。

2. 第2回女子体操教科課程講習会（1927年）

第2回女子体操教科課程講習会は、1927年4月4日から6週間にわたって、第1回の体操教科課程講習会と同様に、北ドイツに位置するヴィークのフェオア島で開催された。91名の教員が受講した第2回女子体操教科課程講習会では、基本体操、運動体操、国民的な運動が実施され、最後に授業実践の場が設けられた。基本体操はギンドラーの呼吸体操とメンゼンディークの姿勢体操、運動体操はボーデの振動体操とラバンの空間体操をそれぞれ選択性で実施し、国民的な運動については、体操を基盤とする歩・走・跳の調和的運動、ボールゲーム、運動遊戯、投てきが行われ、これらの実習は、ルードヴィッヒ（ギンドラー系）、ザックアー（メンゼンディーク系）、クエール（ボーデ系）、エベルト（ラバン系）、オッテンドルフ（国民的な運動）が担当した。その一方で、理論に注目してみると、ヒルカーが教育学、大学教授のドレーゼルが生物学と衛生学、サナトリウム長のグメリンが栄養学、ジッペルが体育心理学、ベアーリンが北海の島々の文化研究をそれぞれ担当した。

実習と理論の中心課題は、児童の身体・精神・表現能力の発達に置かれていた⁹⁵⁾。

第2回女子体操教科課程講習会での新たな試みは、ギンドラーの呼吸体操が実施されたことであった。呼吸体操を担当したルードヴィッヒは、機関誌『ジムナスティック』の1927年7・8月号で、自らの指導について次のように振り返っている⁹⁶⁾。

全ドイツから集まった教員は、大部分がトゥルネン教員であった。彼女たちは、自らの活動のどこかが事実と異なることに相当の違和感を覚えていたようである。なぜなら私の活動は、彼女たちが思うように先へ進まなかったからである。彼女たちは見せかけだけの厄介な教員職に苛まれ、身体がとても衰弱し、働き疲れ、神経質になっていた。このために、私の活動は難しくなった・・・中略・・・今一度、彼女たちに全身体障害を意識させることに集中させ、我々の活動をとおして、身体の可能性を理解させるために毎日訓練を行った。

ギンドラーの呼吸体操は、非常に繊細な運動であり、受講者は呼吸を伴った繊細な動きを体得することにはかなりの労力を費やしたという。正常の位置から湾曲した背骨への全神経の集中、呼吸を伴った緊張緩和の運動を本筋とするギンドラーの体操は、受講者自身が自らの身体を直視せねばならず、最初のうちは僅かな成果を得られるのみであったが、一度、呼吸体操の感覚をつかんだ受講者は、目に見える成果を上げたという⁹⁷⁾。指導実践では、ヴィークの保育所の子どもたちを対象として、ギンドラーの体操体系を内容とする授業が展開され、子どもたちは大歓声のなかで、タンバリンの合図で横になり、地面の上で這いつくばり、馬のように四つん這いで走り（図-30 参照）、伏せる、地面に転がる（図-31 参照）、横になって足を持ち上げる、背倒立をするといった運動を繰り返した⁹⁸⁾。



図-30. 四つん這いでの走行運動

(Schmidts,M. (1927) Körperbildung und Gesamtbildung. GYMNASTIK7/8,S.113.より転載)

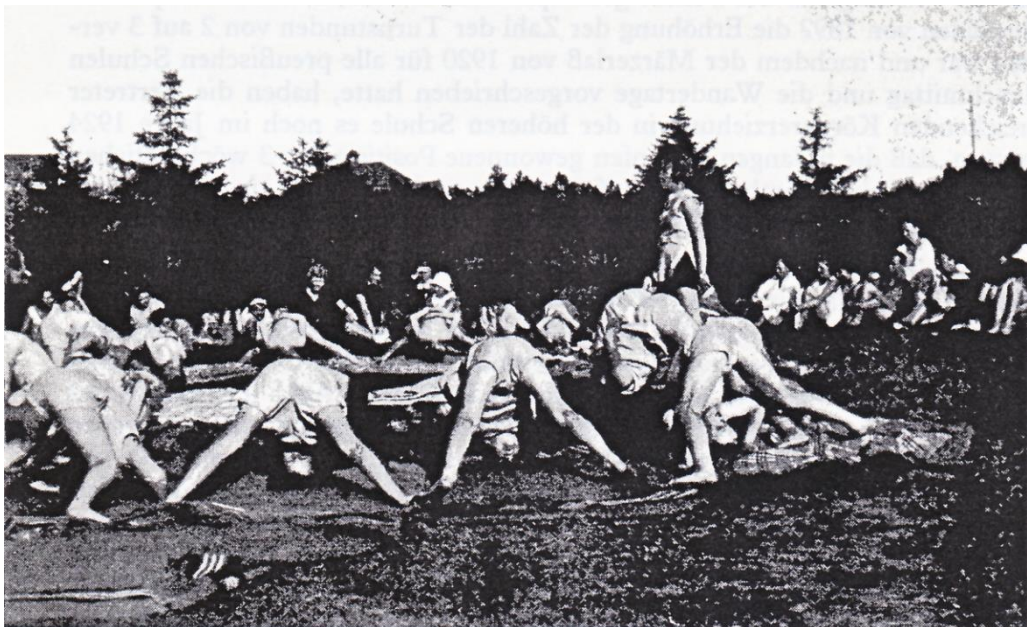


図-31. 地面に転がる

(Ottendorf,H. (1927) Zur Frage der Neuordnung der Ausbildung der Turn und Sportlehrer und -
lehrerinnen in Preussen. GYMNASTIK7/8,S.119.より転載)

第2回女子体操教科課程講習会について付言すると、6週間にわたる体操教科課程と並行して、新たに14日間の補修コースが設けられ、第1回体操教科課程講習会の出席者から23名が参加した⁹⁹⁾。

3. 第3回女子体操教科課程講習会 (1928年)

1928年4月10日から5週間にわたり、約50名の教員を集めて開催された第3回女子体操教科課程講習会は、基本体操、運動遊戯、陸上競技の3領域から構成され、これら全ての領域において、ローエランドの体操学校の教員（ズトアー、ダイnhard、ハイナー、ホルトシュミット）が指導にあたった。第3回女子体操教科課程講習会では、「身体文化」と題した、体格や身体機能、栄養に関わる講演がローエランドの学校の医師により毎日実施され、その他、サナトリウム長のグメリンや北海寄宿制高等学校教育主任のハーレスによる講演も行われた¹⁰⁰⁾。

実習に注目してみると、静的な運動を生理学や解剖学と結び付けた授業が展開され、これに加えて、歩行・走行・弾む・旋回する・振動する・跳躍の練習、音楽的なものから、韻律のあるリズム的な練習、音楽教育と発声訓練、広い空間を使った方向訓練が行われた。これらのなかでも方向訓練は、バランス感覚と生命感覚を発達させる、鋭敏な感受性の覚醒という観点から重要視された。また、音楽に合わせた運動遊戯的なダンス練習の時間は、参加者から大きな共感を集めたという。陸上競技は、投げる・跳ぶ、という動作を中心とする練習内容であった。ローエランドの学校代表のランガードは、実践的な活動をとおしてのみ、ローエランドの体操を認識できると考えていた為、自らの講演については、やや否定的な態度を示していた。ローエランドのトゥルネンの、体操的、教育学的な活動方法に関する質問については、専用の質問箱が用意され、参加者との討議時間を個別に設けることで応答していった¹⁰¹⁾。

理論については、「体操的な女性」と「身体芸術と身体育成」がテーマに設定され、それぞれ、ランガードとツィンマーマンが担当した¹⁰²⁾。ここでは、解剖学に重点を置いた講義が展開され、参加者は骨格と筋肉の基礎理論の学習をとおして、運動生理学の知識を獲得しながら、身体と精神的な感情の相互関係に関わる見識を深めた¹⁰³⁾。第3回女子体操教科課程講習会に参加したゼミナール教員のフィッシャーは、ローエランドの活動について以下のとおり述べている¹⁰⁴⁾。

講習会は、トゥルネン教員養成教育のために価値の高いものとなった。トゥルネン教員の教育的な専門教育は、この体操の包括的な感覚を人間発達に接続させなければならない。教育学者は、芸術的な才能をもってして、“運動”それ自身を明確なものとして、体現しなければならない。

フィッシャーは、トゥルネン教員を養成する教職課程のなかでも体操を導入すること、さらに教育学者には、「運動」そのものを自らが身を以て体験し、そこから教育の本質を感じ取ることの重要性をことさら強調した。最後にフィッシャーは、体操の活動と人間の芸術的な才能の促進が結びついているありようについて、講習会で明確にされたことを主張した¹⁰⁵⁾。

1926年から1928年にかけて、3回にわたり開催された女子体操教科課程講習会の目的は、体操の実習と理論をとおして、現代的な体操の授業計画と授業方法をトゥルネンとスポーツの女性教員たちへ教授することにあった。講習会の中心に位置づけられた体操は、解剖学や生理学の知見に支えられた運動、つまり、歩行・走行・跳躍などの簡単な動きを伴った振動運動、動きを空間や速度などから多面的にとらえた運動、呼吸を伴った緊張緩和の運動、音楽のリズムにのせた運動であった。それらに共通する運動認識は、体操をとおして自らの身体の内面に意識を向けることであった。

(3) 人間教育としての体操会議 (1931年)

1. プログラム構成

「人間教育としての体操会議」(Gymnastik als Menschenbildung)は、1931年2月27日から3月1日にかけての3日間、ミュンヘンのホテル「バイエリッシャホフ」(Bayrischer Hof)の大ホールで開催された(図-32 参照)。ドイツ体操連合が主催した会議としては、1926年の新体操教育会議から5年ぶりの開催であった。人間教育としての体操会議の目的は、ドイツ体操連合に所属する会員の体操学校、教育学者、医師をはじめ、様々な領域で体操に関心を抱く者にたいして、講演と実演、趣向を凝らした夜の部の公演をとおして、体操が人間教育の啓発に有効な運動であることを示すことにあった¹⁰⁶⁾。



図-32. 人間教育としての体操会議の様相

(Diesing,H. (1931) Was ist Rhythmus?. GYMNASTIK5/6:S.73.より転載)

人間教育としての体操会議のプログラムは、表-16 のとおりである。1日目の午前には理事会、午後に会員総会が開催され、夜には、ミュンヘン市主催の歓迎パーティーが旧市庁舎で繰り広げられ、ドイツ体操連合の理事長であるヒルカーが「体操による人間形成の意義」をテーマとする講演を行った。

表-16. 人間教育としての体操会議プログラム

1日目 1931年2月27日 金曜日

	タイム スケジュール	会議内容
午前	10:00	理事会
午後	2:00	連合会員総会(D. G. B. の会員のみ) 1930年の活動報告と会費報告 提案された申請の採用
夜	8:00	ミュンヘン市からの歓迎パーティー(旧市庁舎) 講演:体操による人間形成の意義 発表者:ドイツ体操連合の理事長・上級視学官退官フランツ・ヒルカー

2日目 1931年2月28日 土曜日

	タイム スケジュール	会議内容
午前	9:00	テーマ:『体操の領域課題』 研究発表 1. 体操-リズム-ダンス 研究報告者:ゲルト・フィッケンシャー 座長:ドロシー・ギュンター 2. 他の体操的な活動方法の本質に迫るには、何故に必要で、有益で、可能性があるのか? 研究報告者:ドロシー・ギュンター
午後	2:00 4:00 5:00	テーマ:『体操による人間形成の課題』 1. 姿勢と運動(ドイツ体操連合所属の学校による実演) 体操学校:ドラ・メンツラー, ライプツヒ、マーガレーテ・シュミッツ, エッセン 2. リズム、音楽と運動 体操学校:ヒルダ・ゼンフ, デュッセルドルフ 3. 方向感覚と空間経験 体操学校:ローエランド, フルダ-ランド
夜	8:00	華やかなタベ 上演体操学校:ハインリッヒ・メダウ, ベルリン, ギュンター学校, ミュンヘン

3日目 3月1日 日曜日

	タイム スケジュール	会議内容
午前	11:00	テーマ:『法律と体制問題』 研究発表 1. ドイツの各州における体操の法的な立場 研究報告者:フランツ・ヒルカー 2. アマチュアコースにおける報酬様式 研究報告者:ケセ・ザックアー, ベルリン
午後	3:00 4:00	『教育学的な催し』(体操家、教育学者、医師、他の学問の関心者のための) 1. 子どもの体操的な教育 スライドを使用した講演:エルフリード・ヘングステンベルク, ベルリン 2. 青少年のための体操 a)遊戯と造形 上演体操学校:ヘドヴィッヒ・ハーゲマン, ハンブルク, ゲルト・フィッケンシャー, ミュンヘン ドラ・メンツラー, ライプツヒ b)体操の課題における自主的な分析 体操学校:カルマイヤー-ラウターバッハ, ベルリン
夜	8:00	成人教育としての体操 スライドを使用した講演:ドイツ体操連合理事エルザ・ギンドラー, ベルリン

(Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1931) 5.Hauptversammlung und öffentliche Tagung des D.G.B. in München. GYMNASTIK3/4:S.61.より作成)

2日目の午前は、ドイツ体操連合の会員による2題の研究発表がなされた。1題目は、フィッケンシャーの「体操-リズム-ダンス」、2題目は、ギュンターの「他の体操的な活動方法の本質に迫るには、何故に必要で、有益で、可能性があるのか?」であった。午後には、「体操による人間形成の課題」を共通テーマとして、メンツラーとシュミッツの学校の

生徒が「姿勢と運動」、ゼンフの学校が「リズム、音楽と運動」、ローエランドの学校が「方向感覚と空間経験」という課題を設定し、それぞれ実演を交えながら発表した。夜の部は、メダウとギンターの学校が「華やかな夕べ」と題して、体操の演技を披露した。

3日目の午前は、「法律と体制問題」を共通テーマとして、ヒルカーが「ドイツの各州における体操の法的な立場」、ザックアーが「アマチュアコースにおける報酬様式」をそれぞれ発表した。午後は、実演形式による体操の教育学的な催しが企画され、ヘングステンベルクがスライドを使用しながら、「子どもの体操的な教育」と題した講演を行った。「青少年のための体操」では、ハーゲマン、フィッケンシャー、メンツラーの学校が「a)遊戯と造形」、カルマイヤーの学校が「b)体操の課題における自主的な分析」を実践形式でそれぞれ発表した。最終日の夜は、ギンドラーによる講演「成人教育としての体操」をもって、人間教育としての体操会議は閉会した。

2. プログラム内容

機関誌『ジムナスティック』の1931年5・6月号で、理事長のヒルカーは、「人間教育としての会議」と題した報告を寄せている。そのなかでヒルカーは、行政機関の代表者として、ミュンヘンのバイエルン州教育・文化省からヤン、バイエルン州のトゥルネン機関から統括部長のフォクトとマティアス、ミュンヘン市長のシャナグル、教育学の専門家として、ベルリン地方学校教師陣から市民大学部門で行政長官の主任クメロヴ、私立学校制度のための専門部局担当で教育行政官の参事官を兼ねていたツェルメアをはじめ、約700人に及んだ参加者が体操の普及・促進・保護に関わる方法の新たな地平を開拓しようとする意志で出席したことに言及している。その他、目に付くところでは、ハノーファーの体育のための市部局からトゥルネン評議会のグレットヘン、さらに幼稚園教諭、保育士と青少年指導者の職能団体、カトリック信者協会における女性トゥルネン帝国連盟などが参加した¹⁰⁷⁾。

人間教育としての体操会議開催の意義について、ヒルカーは以下のように論じている¹⁰⁸⁾。

1922年のベルリンにおける「芸術体操会議」から始まり、1926年のデュッセルドルフにおける「新体操教育会議」、そして、1931年のミュンヘンにおける「人間教育としての体操会議」をとおして、体操の道筋が築かれたこと、つまり、人間の身体運動から表出する現象の発見を教育の遡上に載せること、これにより体操が人間教育に向けた、美的様式をもつ身体運動になるのである。

さらに、体操の意義についてヒルカーは、「人間の内面から湧き上がる欲求は、運動の可能性を広げ、体操はこれを認識できる。人間の生命に関わる課題、および、精神的な活動に取り組むことにより、活気あふれる力が導き出されるため、体操は体育だけの問題ではなく、人間の表象的な問題になるのである」と主張した¹⁰⁹⁾。この体操の意義を広汎に伝えること、これこそヒルカーが開催した、人間教育のための会議の意図であり、会議初日の夜に行われたヒルカーの講演は、実際のところ、人間形成に連なる体操の可能性を骨子とするものであった。

2日目は、理論の側面から従前の体操研究を補完する発表がなされ、ドイツ体操連合の会員、その他多くの体操愛好家が出席した。フィッケンシャーは、「体操—リズム—ダンス」と題した発表を行い、教育学の視点から体操、リズム、ダンスを捉え、それらの特色を明らかにした上で、体操教育、音楽教育、ダンス教育の違いの明確化について論及した。ギュンターは、「他の体操的な活動方法の本質に迫るには、何故に必要で、有益で、可能性があるのか？」と題した発表を行い、他分野での体操的な活動方法を体操領域に取り入れる意義を主張した。しかし、この発表内容は、時間的な都合で不明瞭な点が多かったという¹¹⁰⁾。2日目の実演を交えた発表では、「体操による人間形成の課題」と題して、日常生活を活性化させるための身体教育、予め定められた運動認識ではなく、自発的、かつ、創造的な運動を習得するために、身体機能、音楽、リズム、方向感覚や空間認識に関わる多種多様な体操の実践方法が提示された。

3日目は、「法律と体制問題」を中心テーマとして、ヒルカーがドイツの地方における体操の法律整備について発表した。ヒルカーは、私立の体操学校の経営難について言及したうえで、教育学的な側面からの体操の人間形成に与える効果の大きさに触れ、トゥルネンやスポーツと同等の立場で、体操を公立の教育現場で指導できるよう、国や州の官庁に要請する必要性を説いた。またザックアーは、「アマチュアコースにおける報酬様式」と題して、一般人向けの体操教員の報酬に関わる問題について提言した。

研究発表と合わせて行われた実演形式の催しでは、子ども、青少年、労働者のための身体教育に向けた体操がそれぞれ発表された。実演にあった各学校は、教育的な姿勢を異にしていたが、体操が自発性と自立性の向上に適った教育内容であるという点は、一致していた。3日間にわたる会議で明確にされた、人間教育としての体操の基本方針は、最終日の夜に行われたギンドラーの講演において、際立ってあらわにされた。「成人教育としての

体操」のテーマを掲げ、スライドを用いてドイツの困難な生活状況の実態を解説し、体操こそが人間の精神的な価値の向上を目的とした身体教育の基礎あることを唱え、体操の教育学的な意義を主張した。ギンドラーの講演は、人間教育としての体操会議における個々の発表や実演の成果を網羅するかたちで行われた為に、多くの参加者から情熱的な賞賛を受けたという¹¹¹⁾。

3. 会議の意義

ドイツ体操連合主催の会議において、1926年にデュッセルドルフで開催された新体操教育会議以来の一大イベントであった人間教育としての体操会議は、人間教育の啓発に資する運動の役割を示すことに目的があり、根本的には、体操をとおした人間教育を主として主張するものであった。新体操教育会議では、体操諸流派によって構築された体操を展望することに目的が置かれ、学校体操、労働健康体操、芸術的な体操が取り上げられた。これは、当時のドイツ体操連合が、体操の主要課題について、①従来のトゥルネン授業から新しい身体修練として基礎づけること②身体的な障害を予防する、または治療するためにも“衛生学的—治療法的”な方法を確立すること③ダンスと演劇の分野における身体表現の可能性を高め、それらをかたちにするだけでなく、芸術教育の発展も担うこと¹¹²⁾と設定していたことを裏付けるものである。しかし人間教育としての会議では、教育学的な観点から、体操を人間教育との関わりのみで捉え、新体操教育会議で立ち上がったような、体操の芸術性や表現能力を向上させようとする運動認識は、実演をともなった2日目の発表で確認されたにすぎなかった。

1日目のドイツ体操連合の理事会と会員総会の討議に注目してみると、「1931年度は教育学的な体操を主要な任務とする」との宣言が理事会でなされ、会員総会において多数の支持を受けて採決された¹¹³⁾。これにより体操は、「教育学の知的対象、教育学で取り組むべき価値ある活動」¹¹⁴⁾として定位していったのである。新体操教育会議でみられた体操の運動認識は、トゥルネンの形式性を脱した、自由でリズムカルな運動と表現を基調にして、運動する喜び、身体の解放、青少年の能力を自由に育て上げるという、運動それ自体に焦点を当てたものであった。しかしながら、その一方で、人間教育としての会議では、「身体運動の練習とその活動の過程から導かれる精神性は、人間教育と人間形成に役立つ」¹¹⁵⁾とする考えのもと、体操による精神性の涵養を重視した人間教育に重点が置かれていた。

この齟齬についてアウベルトは、1931年に表明されたドイツ体操連合による体操の意義を引き合いに出し、次のとおり述べている¹¹⁶⁾。

1931年にドイツ体操連合は、設立以来の最盛期に達し、それを契機として「体操の普遍的な教育意義と教養意義」を目標に掲げた。ドイツ体操連合は、体育の形式性を高める為に体操の表現性を拒絶し、人間教育と人間形成に資する身体運動に基づいた、活動システムとして体操への理解を深めたのである。

アウベルトの言説は、当時のドイツ体操連合により掲げられた体操の意義が、決して身体を直視する主体的な性格を帯びたものではなく、人間教育と人間形成の手段として使用される副次的なものであったことを示している。この副次的なものとしての体操は、シュピース=マウル方式のトゥルネンと同質的なものと捉えられよう。それは、軍事の準備段階、別言すれば、健康で命令に従順な兵士の養成を目的としたトゥルネンが、人間の身体それ自身を直視したものではなかったからである。新体操教育会議と比較して、人間教育としての会議は、運動を主体とする教育を追求するのではなく、精神性に偏重した人間教育という世界の中で完結していたと言えよう。

人間教育としての会議の参加者数に着目してみると、約700名が来場したが、新体操教育会議の約2000名という人数からは、著しく減少していた。その理由の一つとして、ドイツ体操連合からの会員の脱退が挙げられよう。1日目の会員総会では、ドイツ体操連合の設立に貢献したボーデと彼の教師陣の一部、および、メンゼンディーク系の応用された自由な運動のための連盟の一部も脱退したことが報告されている¹¹⁷⁾。また、1928年にドイツ体操連合の理事を務めたヘアーマンと彼女の全学校に関しては、会員総会の投票により、賛成129票、反対8票、白票24票をもって除名することが採決された¹¹⁸⁾。1929年2月23日に開催された会員総会の報告には、1928年12月31日までに所属していた体操諸流派の学校数が記載されている¹¹⁹⁾。それによれば、応用された自由な運動のための連盟が168校、ボーデ系の学校が95校、ヘアーマンの学校が46校と、ドイツ体操連合のなかでも上位(2位、3位、7位)の学校数を誇る体操流派であった。ボーデと応用された自由な運動のための連盟に関しては、全ての学校がドイツ体操連合から脱退したわけではなかったが、人間教育としての会議の参加者数の減少に多大な影響を及ぼしたことは、容易に推察できよう。また、1929年にアメリカで発生した世界恐慌は、1931年のドイツ経済に、も深刻な打撃を与え、多くの体操教員が職を失った。これは、会員総会で体操教育の経済的な困窮ぶりが報告されていたことから察せられるように¹²⁰⁾、人間教育としての会議の参加者数が

著しく減少した要因の一つとして挙げられよう。

ギンドラーは、「ミュンヘンでの会議が、ドイツ体操連合の活動のなかでは頂点であった」¹²¹⁾と回想している。しかし、人間教育としての会議のプログラムを新体操教育会議のそれと比較してみると、上記の繰り返しになるが、体操の芸術性や表現能力を高めるといふ、運動それ自体を主体とした内容が僅かであったこと、体操の目的が人間教育としての精神性の修練に偏重していたこと、それにドイツ体操連合の会員の脱退状況を勘案するならば、人間教育としての会議は、ドイツ体操連合の活動がすでに峠を越えていたこと浮き彫りにする機会であったと捉えられよう。

第3節 ドイツ体操連合の右傾化と活動の変容（1933年）

1933年1月30日に、国家社会主義ドイツ労働党（Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei、以下「ナチス」と略称）の党首であるヒトラーが政権を掌握すると、ナチスはドイツの全教育制度を自らの支配下に収めていった。これは、「国家が国民教育制度全般の根本的拡充について考慮しなければならない」¹²²⁾とする党要領第20条に従ったもので、ドイツ体操連合も非常に早い段階でナチスの傘下に置かれることを強いられ、『ジムナステック』の1933年7・8月号には、ドイツ体操連合会員に向けてナチスへの併合に関する記事が記載された。そこには、新たなドイツ政府が実施している職業の統合と新規区分に伴い、国家構造のなかに体操教育が組み込まれることが明記されている。ヒルカーは、ドイツ体操連合の設立後に構築された体操を「ドイツ体操」（die deutsche Gymnastik）と命名し、「ドイツ体操連合の活動は、ドイツの教育精神から発せられるドイツ的な活動であり、ドイツのなかでのみ、体操が発展性を持ちうる」¹²³⁾と前置きしたうえで、「真のドイツ体操の運動を発展させるために、今や2倍も3倍も奮闘するべきである」と訴えた¹²⁴⁾。

上述したナチスの教育政策のもと、ドイツ体操連合は、「ボーデ体操教員職能同盟」（Berufsverband der Lehrkräfte der Bodegymnastik）と「ドイツ体育同盟」（Deutscher Körperbildungsverband）とともに、「体操とダンスのための職能同盟」（Berufsverband für Gymnastik und Tanz）へと統合された。図-33は「体操とダンスのための職能同盟」の組織図をまとめたものである。

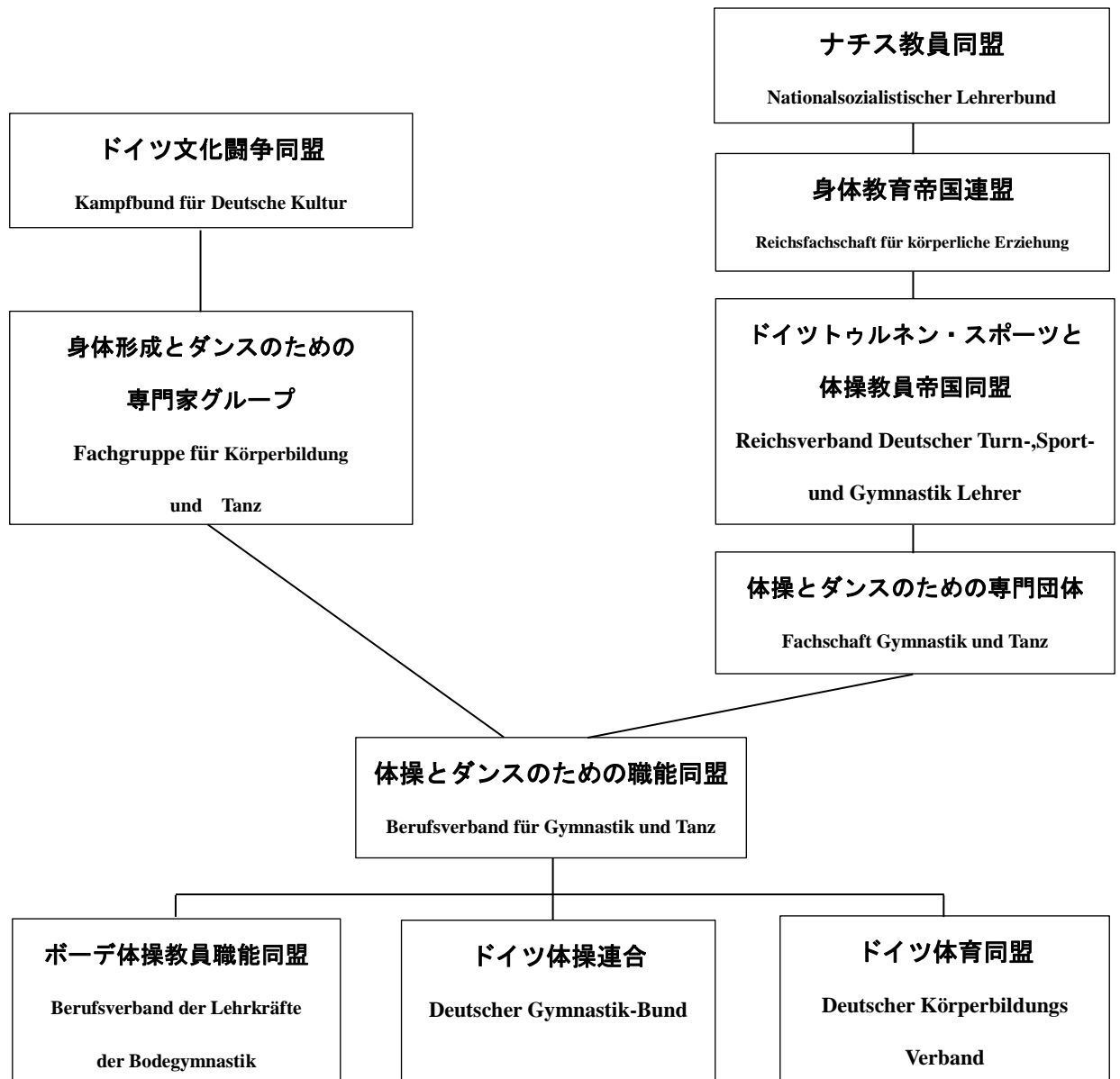


図-33. 「体操とダンスのための職能同盟」の組織図

(Hilker,F. (1936) An die Mitglieder und Freunde des Deutschen Gymnastik-Bundes.

GYMNASTIK7/8:S.102.より作成)

この体操とダンスのための職能同盟は、体操とダンスにおける自由で創造性を高める教育を目的とした職能教育団体であり、「ドイツ文化闘争同盟」(Kampfbund für Deutsche Kultur)と「ナチス教員同盟」(Nationalsozialistischer Lehrerbund)を組織母体の中心とするドイツ教育者組合への加入が義務付けられていた。ドイツ文化闘争同盟は、主として自由な創造活

動、ナチス教員同盟は、職能的な教育活動にそれぞれ取り組み、「身体形成とダンスのための専門家グループ」(Fachgruppe für Körperbildung und Tanz)には、1931年にドイツ体操連合を脱退したボーデが指導的な立場に就いた¹²⁵⁾。ドイツ国民が文化的な生活を送るために必要な体操とダンスの課題を明確にすること、このために、体操とダンスのための職能同盟の指導者たちは、最初の共同作業として「ドイツ体操」の基準を策定した。代表者であったボーデは、ドイツ体操の内容を次のように規定した¹²⁶⁾。

1. 最小限の力によって相対的な効果をあげるという法則性を全ての運動の基本とすること。ドイツ体操が根本的に重要視することがらは、以下のようなものである。
 - a) 国家の全体性を前提として、国民教育のために個人の有機的な全体性を重視すること。国民教育の実現に向けた方法は、統一的な活気あふれる表現の感覚を、人間の運動のなかで発達させることである。
 - b) 戦闘能力を教育する為に、求められるいかなる身体的課題も克服し、全ての体力の源泉を適切に調和することで、攻撃能力と防御能力を高めること。これは、迅速な対応能力を必要とし、向上した能力を正しい位置で行うだけでなく、適切な瞬間においても発揮する能力と一体である理由からである。行進に際して体操は、緊張と弛緩によるリズムカルな振動を用いた正確な運動変化の法則を満たすことを教示する。
 - c) 母性教育のために、精神的な表現と肉体的な表現の統一を再び獲得させるよう、女性の本能的な力と女性固有の使命の意義を強化すること。
 - d) 職業を全うする為に必要な身体的な柔軟性や、頭脳・精神労働者の精神的な連帯責任のためにも、偏った作業によって生じる危険を取り除くこと。
 - e) 授業を実践する為に、教師は総合的な人格を備え、言葉とそれに付随する適切な動きによって、子どもたちの心を把握するようにし、思考だけでなく体験をとおして子どもたちの生まれ持った才能を保持させること。
2. 有機的な運動経過におけるドイツ人の感受性にたいする視点を高めること。それは、強者が運動過程のなかで絶え間ない不屈の活発さを常に持ち合わせるように、原始的な表現にも、従来とは全く異なる度合いで敏感になるようにすること。
3. 体育と民族文化の表出を関連づけること。とりわけドイツ体操は、運動学として運動感覚を全面的に発展させることによって、はじめて言葉と仕草の関係、さらには俳優と観客の相互作用についてより深い理解を生み出す。ドイツ体操は、舞台芸術における国民の経験能力を根付かせる

ための内的な前提条件を整えるだろう。

4. 今日大幅に抑制されているドイツ国民の運動生活を解き放ち、ドイツ人の表現力を高めること。
これにより、国民同胞にたいして作用する、精神的な能力を再び獲得できるようにする。これは、民族のつながりが、精神的な相互作用の能力に基づくからである。

ボーデのドイツ体操の内容は、民族主義国家の建設に必要な国民教育を主体とするものであった。実際のところナチスは、新教育運動で育まれた合科教授を廃止し、ナチス教員同盟以外の教員団体を解散させ、それと同時に進歩的な教員たちを追放し、弾圧を加えた為に¹²⁷⁾、ドイツ体操連合も自らの生き残りをかけてナチスの教育政策に従っていったのである。しかしながら、ボーデがまとめたドイツ体操の内容は、明らかにドイツ体操連合の体操の理念や活動を継承していることが伺える。ナチスは、ドイツ体操連合の体操の理念や具体的な活動を温存しつつ、ドイツ国家の建設とドイツ民族アイデンティティの構築を主とした身体教育のなかに体操を組み込んだのである。体操とダンスのための職能同盟は、ナチス教員同盟のなかにあった「ドイツトゥルネン・スポーツと体操教員帝国同盟」(Reichsverband Deutscher Turn-,sport-und Gymnastiklehrer im NS-Lehrerbund)の専門団体と位置付けられたが、この職能同盟が1933年10月1日に解散すると、専門団体「体操とダンス」の直轄指揮下に置かれるようになった。『ジムナスティック』も新しい専門機関誌『体操とダンス』(Gymnastik und Tanz,1934-1937)へとタイトルが変更し、1933年11・12月号を以て廃刊となった¹²⁸⁾。

むすび

以上より、音楽と体操をテーマとした1905年の第3回芸術教育会議により胎動した新体操促進運動の担い手である体操諸流派が、1922年の芸術体操会議を契機に合流し、明確な組織的運動の帰結として実体化していったドイツ体操連合の設立目的や組織構成、活動の実態を明らかにしてきた。

1925年3月に「体操のための本部事務局」が立ち上がると、これを母体にカルマイヤー系、ギンドラー系、メンゼンディーク系、ローエランド系、ボーデ系、ラバン系の各体操流派の関係者が統合されるかたちで、11月にドイツ体操連合が設立された。ドイツ体操連合の理事長には、ベルリン中央教育研究所補佐で徹底的学校改革者同盟員の職にあったヒ

ルカーが就任し、1933年にナチスのドイツトゥルネン・スポーツと体操教員帝国同盟の専門団体である「体操とダンス」の直轄指揮下に置かれるまでの間、ヒルカーは理事長の職責を全うした。ドイツ体操連合の設立目的は、体操の促進・普及・保護に努めることにあり、体操を実践する身体を「モノ」として捉えるのではなく、精神的、かつ、知性的な主体として捉え、それを追求することにあつた。それ故にドイツ体操連合は、集団秩序運動の色彩を帯びたトゥルネンにみられる、身体の外的現象に注目した運動ではなく、身体の内面を認識する運動を重視した。ドイツ体操連合の理念に賛同し、加盟した会員は、1925年の創設時で56名を数えたが、翌年に120名に達し、ピーク時の1931年は1131名にまで膨れ上がった。ドイツ体操連合は、体操をとおした身体教育に関する知識の追求を目的として、機関誌『ジムナスティック』を1926年2月号から隔月にわたり発行した。同誌は1933年11月号をもって廃刊に至ったが、その間、都合48号が発刊され、広範にわたり体操の普及・促進・保護に努めた。

ドイツ体操連合に加盟していた学校数は、1928年12月31日時点で923校であり、そのうち177校がベルリンに本拠を構えていた。ドイツ体操連合は、所属する学校、教員にたいして、体操授業の受講生の実態調査を1927年5月1日と1930年2月1日に実施した。そこで、1927年で約60000名であった受講者数が、1930年に91022名に増加し、そのうち46776名が仕事に就いていたこと、34487名が社会活動に参加していたことが明らかにされた。僅か3年たらずで30000名以上の受講者数が増加した事実は、ドイツ体操連合に所属する体操学校の活動が、体操の普及・促進・保護に向けて軌道に乗っていた実態を如実に物語っていた。

ドイツ体操連合は、ドイツ国内での体操教育に関わる規制が曖昧であった間隙を縫って、「体操」(Gymnastik)の名称が商業目的で乱用されていた状況を危惧したことから、1927年に「一般人向け授業と職業養成専門教育のための要綱」を作成し、これをもって連合に所属する体操学校の共通要綱とした。この要綱は、ドイツ体操連合に所属する体操学校や教員が実践する体操授業の価値を高める役割を果たすのみならず、営利目的で運営されていた体操学校との差別化にも作用した。

ドイツ体操連合は、「新体操教育会議」(1926年)、「女子体操教科課程講習会」(1926年、1927年、1928年)、「人間教育としての体操会議」(1931年)と、講習会や会議をとおして体操の普及活動を展開していった。ベルリン中央教育研究所とドイツ体操連合との共催で実現した「新体操教育会議」は、ドイツ体操連合が設立されて以来の一大イベントであつ

た。1922年の「芸術体操会議」を引き継ぐ、2回目の体操に関する会議として位置付けられた新体操教育会議の目的は、体操諸流派によって実践される様々な活動を公開することにあった。会議全体の課題項目として、①新しい身体修練②衛生学的・治療的な体操（労働健康体操）③芸術的な体操、の3点をあげ、講演、授業実践、ゲストによる舞台公演が3日間にわたって繰り広げられた。新体操教育会議では、集団秩序運動の色彩を帯びたトゥルネンによる形式的な空間とは異なる、自由でリズムカルな運動と表現で満たされた空間が築かれていた。

「女子体操教科課程講習会」は、北ドイツに位置するヴィークのフェオア島で、新体操教育会議と同様にベルリン中央教育研究所との共催で開催された。ここでは、体操的な運動の学校教育への導入を希求するトゥルネン教員とスポーツ教員を中心に、6週間にわたって体操の実習と理論に関する研修が重ねられた。3回にわたり開催された女子体操教科課程講習会では、解剖学的、生理学的な知見に基づいた歩行・走行・跳躍などの簡単な動きを伴う振動運動、空間と速度から動きをとらえた運動、呼吸を意識した緊張緩和の運動、音楽のリズムにのせた運動が取り上げられ、これらは、身体の内面に意識を向けるという運動認識で共通していた。

1931年に開催された「人間教育としての体操会議」の目的は、ドイツ体操連合に加盟する体操学校や教員、医師等の会員、その他の領域で体操に関心のある者に、体操が人間教育に有効な運動であるとする理解や認識を深めることにあり、参加者にたいして講演や実演、様々な趣向を凝らした公演が行われた。ドイツ体操連合の主催による会議としては、新体操教育会議に次ぐ催しであったが、これと比べて参加者が著しく減少していた。その要因は、1929年にアメリカで発生した世界恐慌がドイツ経済にも深刻な影響を及ぼし、多くの体操教員が職を失ったこと、また、人間教育としての体操会議の直前に、ドイツ体操連合の設立に尽力したボーデ自身と彼の学校の教師陣、メンゼンディーク系の応用された自由な運動のための連盟の一部、会議当日の会員総会にドイツ体操連合の理事であったヘアーマンと彼女の全学校がドイツ体操連合から脱退したことにある。人間教育としての体操会議では、芸術性や表現能力を高める主体的な行為として体操が捉えられることは、僅かに認められたばかりで、おおよそ、精神性を涵養する手段として体操が捉えられていた。これに、ドイツ体操連合の設立に貢献した会員が相次いで脱退した事実を勘案するならば、人間教育としての体操会議は、転換に迫られていたドイツ体操連合の実状を浮き彫りにする機会であった。

1933年1月30日に国家社会主義ドイツ労働党の党首であるヒトラーが政権に就くと、ナチスはドイツ全教育制度を自らの支配下に収めた。ドイツ体操連合も例外なくナチスに付属することを強いられ、ドイツ体操連合を脱退したボーデとボーデ体操教員職能同盟、ドイツ体育同盟とともに、体操とダンスのための職能同盟へと統合された。ヒルカーは、ドイツ体操連合での普及・促進した体操を「ドイツ体操」と命名した。ナチスは、ドイツ体操連合の体操の理念や具体的な活動を継承しつつ、ドイツ国家の建設とドイツ民族アイデンティティの構築に向けた身体教育として、「ドイツ体操」を教育学の領域に取り込んでいった。ドイツ体操連合は、1925年の設立以来、自らの体操活動が国家の監督下に保護されることを要請していたが、皮肉にも、ナチス傘下の国家組織である体操とダンスのための職能同盟に統合されることで初めて達成された。1933年10月に体操とダンスのための職能同盟は、ナチス教員同盟の「ドイツトゥルネン・スポーツと体操教員帝国同盟」の専門団体「体操とダンス」の指揮下に置かれ、『ジムナスティック』も1933年11・12月号を以て廃刊となった。

第4章 ドイツ体操連合が普及・促進した体操の特色

本章では、ドイツ体操連合が普及・促進した体操の本質を明らかにするために、まずドイツ体操連合の機関誌『ジムナスティック』に掲載された寄稿論文に着目し、そこから確認できる体操の運動形成について論及する。ここで導き出された知見、および、前章でとりあげたドイツ体操連合の主催による体操専門会議、講習会の内容とそこに横たわっていた体操の運動認識を勘案し、ドイツ体操連合が普及・促進した体操の特色を明らかにする。

第1節 機関誌『ジムナスティック』にみる運動形成

第1項 運動形成の様式

機関誌『ジムナスティック』は、ドイツ体操連合に所属する会員の枠組みを超えて、体操をととした身体教育に関する知識の追求を目的として、1926年2月1日に創刊され、1933年11・12月号を以て廃刊となるまでの間、計48号が発刊された。機関誌『ジムナスティック』は、寄稿論文、文献紹介、ドイツ体操連合からの報告を主要な柱として構成された。学術的な体裁を整えた寄稿論文は、計199本が掲載されており、論陣は、教育現場や医療現場に従事する会員のみならず、執筆活動に専念する評論家にも及び、その内容は、体操に関わる運動認識や運動法則の啓発、体操の医学療法への転用・応用、教育実践の具体例など、多岐にわたっていた。そこで以下、機関誌『ジムナスティック』の寄稿論文の内容分析を進め、体操の運動形成について明らかにしていきたい。

まず、寄稿論文の執筆にあたった著者について触れておきたい。機関誌『ジムナスティック』の寄稿論文は、計153人の著者によって執筆されている。このなかで、3本以上の寄稿論文を執筆した著者に絞り、これに該当する13名の著者を掲載本数順にまとめたもの表-17である。そこには、ドイツ体操連合理事長のヒルカーを筆頭として、体操教育に精力を傾けた学校の校長や教員、教育学者、教育評論家、舞踊評論家、文筆家と多様な肩書きが名を連ねている。ここに挙げた著者の大部分は、ドイツ体操連合の活動に積極的に携わりながら体操の普及・促進・保護に献身した人物であった。表-17に挙げた著者の論考に注目しながら、運動形成について検討してみると、ここから認められる運動形成の様式は、空間の高低、前後、左右からなる3次元の動きを基礎とした運動形成、および、動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成を基軸とした様式に大別される。おおよそ著者がいずれかの様式に傾倒するなかで、舞踊評論家のベーメ、カルマイヤー系の体操系列の代表者であったカルマイヤーは、両方の様式について言及している。

表-17. 寄稿論文の掲載本数上位者

上位	著者	論文数
1	F.Hilker	28
2	v. Rohden-Langgaard	8
3	H.Medau	6
4	F.Böhme	4
	H.Kallmeyer-simon	4
	M.Uhlig	4
5	D.Günther	3
	F.Klatt	3
	H.Diesing	3
	H.Döpp-Vorwald	3
	I.Rost	3
	J.W.v.Goethe	3
	M.Schmidts	3

(機関誌『GYMNASTIK』1926年1・2月号から1933年11・12月号より作成)

ベーメは、創刊号に寄せた「ダンス的な体操」において、「運動芸術作品の表現形式のなかで身体を駆使するためには、身体を活性化させ、音楽演出や優美さを伴った体操を展開しなければならない」²⁾、また、1926年9・10月号に掲載された「ダンス的な動きの空間訓練」において、「ダンスの芸術的な表現形式は、非常に教育的価値があり、そこでは人間的な空間感覚の表現が重要である。これこそが新たなダンス的な動きにおける運動学であり、空間訓練である」³⁾ ことをそれぞれ説いている(図-34参照)。この一方で、カルマイヤーも1927年11・12月号に寄せた「表現の本質と人間の身体活動の関連性」において、「運動に向けて、リズムとメロディーの知覚を発達させなければならない(中略)より大きく空間の中で腕や足で線や型を描かなければならない・・・中略・・・例えば、歩行と走行にリズムを加え、次第にバリエーションに富んだリズムを加えていき、さらに新たなリズムを形成し、リズムに合ったメロディーを口ずさんでいく」⁴⁾と指摘しているように、空間とリズム、メロディーを包含した運動形成の様式を表明している。



図-34. ラバンの空間訓練

(Böhme,F. (1926) Die Raumlehre der tänzerischen Bewegung.

GYMNASTIK9/10,S.139.より転載)

次に、空間の高低、前後、左右からなる3次元の動きを基礎とした運動形成の様式に関する言説に注目してみたい。イエナ大学の教育学者で体操の教育的価値をテーマとする研究に取り組んでいたフォーヴァルトは、1926年3・4月号に掲載された「運動訓練と人間形成」のなかで、空間の多面的な方向へ動きを導くことを骨子とする空間学を構築したラバンの活動(図-35参照)に言及しながら、「空間での人の位置を中心として、身体の動きは、3次元的に構築できる。3次元的な動きを経験させるには、空間を存分に活用しなければならない。そこでは、高低、前後、左右へと人を中心とした動きの空間認識を学ぶことが重要である」⁵⁾として、3次元的な動きと空間認識の関係を学習する重要性を説いている。



図-35. ラバンの運動学

(Döpp-Vorwald,H. (1926) Bewegungsarbeit und Menschenbildung.

GYMNASTIK3/4,S.43.より転載)

ラバン系のシュミッツは、1926年7・8月号の「ラバングループでの活動」において、「手を中心にした練習から、任意の『自由な動き』に発展させる。例えば、手を高くしたり、低くしたり、横へ、前後の方向へと動かしていく。空間を意識しながら3次元（高低、前後、左右）の状態動き、また、この動きに重い・軽い、速い・遅いといった力の対極関係を加え、空間の多面的な可能性を試してみる」⁶⁾として、空間での手を中心とした3次元的な動きから、即興で自由な動きを形成する教育実践の試みを紹介している。シュミッツと同様にローエランド系のランガードは、1928年5・6月号の「動きについて」において、「体操は身体、表現形式、空間の3つの側面から構成されており、これらの側面から総合的に捉えなければならない。なかでも、表現形式と空間の密接な関係は、空間における身体の方向感覚の養成につうじる」⁷⁾として、身体、表現形式、空間の相互関係をもとにした動きへの助言を示している。

つづいて、動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成の様式に関連した言説に注目してみたい。リズム体操の研究を専門としたディージングは、1932年7・8月号に掲載された「音楽と身体運動の内面的な関連性の解明」において、メダウ（図-36参照）、ゼン

フ（図-37 参照）、ギュンター（図-38 参照）の各校における音楽活動の写真を掲載したうえで、「音楽が一般的に人間の運動を活気づけることは、明らかな事実である。即興による運動は、自由を帯びたものであるから、心理的な抑制を解き放つことが可能である。それにより、表面的な運動形式が軽やかになるのは明白で、運動に関する総合的な能力を本質的に高めることができる」⁸⁾として、音楽に合わせた即興による身体運動の総合的な能力向上の効果について言及している。

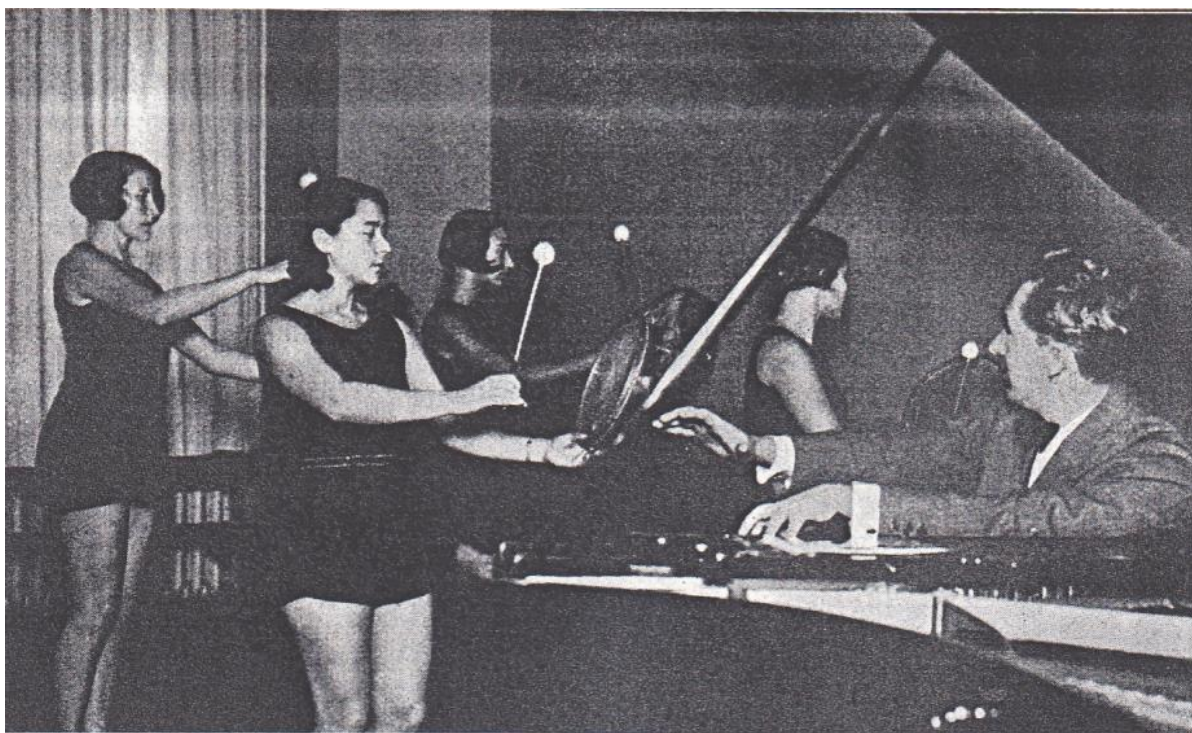


図-36. メダウ学校でのリズム練習

(Diesing,H. (1932) Versuch einer Klärung der inneren Zusammenhänge von Musik und körperlicher Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.109.より転載)



図-37. 体操学校ヒルダ・ゼンフによる打楽器での練習

(Diesing,H. (1932) Versuch einer Klärung der inneren Zusammenhänge von Musik und körperlicher Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.111.より転載)

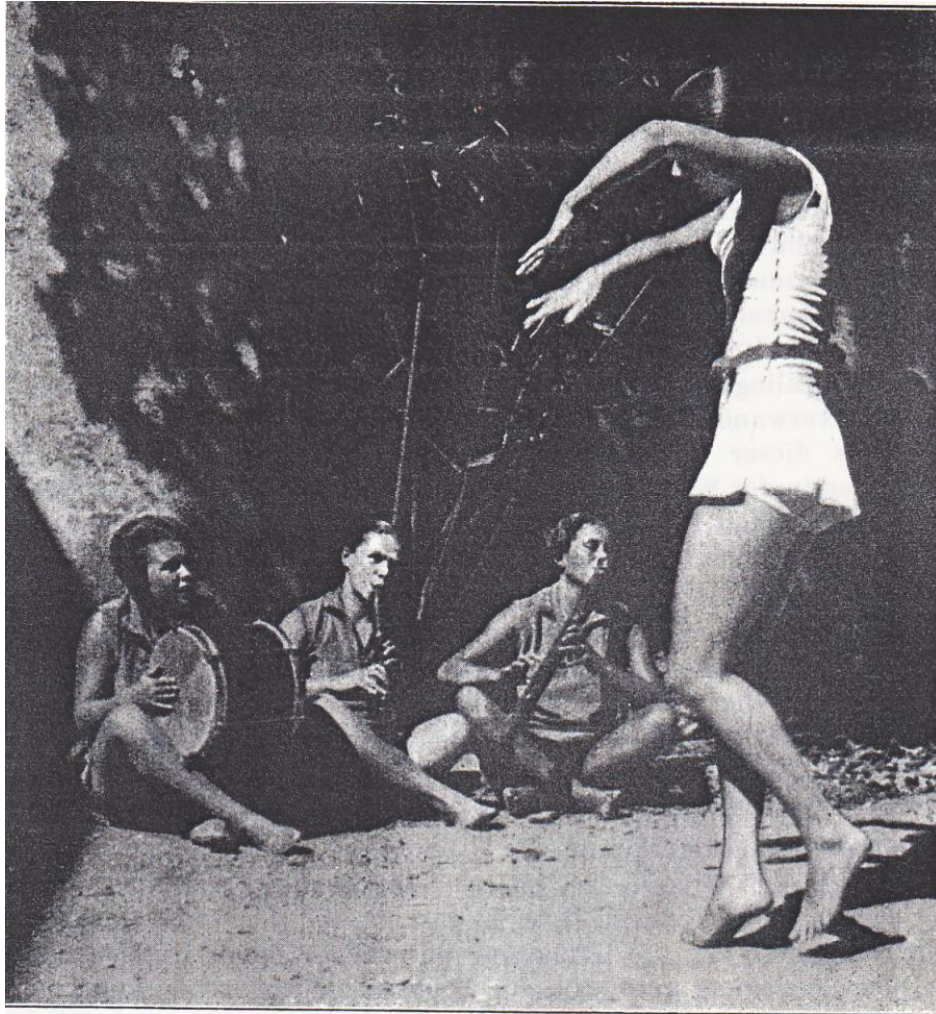


図-38. ギュンター学校での音楽と動きの練習

(Diesing,H. (1932) Versuch einer Klärung der inneren Zusammenhänge von Musik und körperlicher Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.113.より転載)

シュミッツと同じく、応用された自由な運動のための連盟に所属していたギュンターは、1933年7・8月号の「音楽と動きの統一」において、「我々は本能的に動きと音楽のバランスをとっている。そのなかで、音楽に動きを共鳴させようとしている。音楽と動きの教育課程でとりあげたこの運動形成は、体操的でダンス的な教育学の基礎をなすものである」⁹⁾と論じた。つまるところ、動きと音楽の関係について、ディージングと同様の観点から、音楽を主体に動きをつくりあげる運動形成が体操、ダンスに関わる運動教育の基盤にあることを指摘したのである。ダルクローズとボーデに師事したメダウ (Hinrich Medau, 1890年-1974年) は、1933年3・4月号でとりあげられた「運動と音楽における表現形式の成立」

のなかで、「我々は、音楽形成の教育に取り組まなければならない。それは、音楽形成が我々の身体表現の基準となるからである・・・中略・・・動きの転回点とアクセントがリズムを生み出し、ここから自然とメロディー的なモチーフがひろがる」¹⁰⁾として、ギュンターとは逆に、動きを主体にリズム、メロディーを構築する運動形成の一端を明らかにしている。

以上より、空間の高低、前後、左右からなる3次元の動きを基礎とした運動形成、および、動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成の様式に触れた寄稿論文の内容分析を施した。ここでとりあげた寄稿論文からは、従前の体操研究で見過ごされてきた、後者の運動形成に関わるギュンターとメダウの指導実践の具体例を確認することができる。そこで以下、ギュンターとメダウの指導実践について、両者の寄稿論文から明らかにしていきたい。

第2項 運動形成の指導実践

ギュンター (Dorothee Günther, 1896年-1975年) は1933年7・8月号の「音楽と動きの統一」において、カルミナ・ブラーナを作曲した音楽家カール・オルフ (Carl Orff, 1895年-1982年)¹¹⁾の音楽教育理論に基づきながら、音楽と動きに関する実験的な研究をまとめている。ギュンターは、人間は本能的に動きと音楽を同時に認識しており、この認識は体操やダンスにおける教育の基礎を成しているという¹²⁾。これを前置きとしてギュンターは、ダルクローズの音楽教育について「彼はリズムを自ら作り出すのではなく、分析した。これが大きな間違いなのである。多くの体操教育やダンス教育は、そのほとんどの授業で、音楽やリズムを分析するだけで動きを形成してこなかった。」¹³⁾として、音楽やリズムと動きを結びつけるには、楽器を使用することが最も効果的であると強調した。さらに、多くの体操やダンス学校で使用される楽器は、動きのための伴奏音としてピアノを使用するのみであり、音楽と動きを統一させることを目標とした教育は実施されておらず、伴奏音としてのピアノのみでは、単に運動のための刺激剤として、精神的に高揚させる手段にしかならないとギュンターは指摘した¹⁴⁾。動きを形成するための方法論は、教師の個人的な活動に依存しており、多くの学校がその枠から脱出できていないとして、まずは「指導にあたる教師の個性や芸術性を維持しつつ、さらに先に進むための方法を見出さなければならない。そのためには①音楽を分析するのではなく、形成していくこと、②機能的で感情的な感覚を身体から呼び覚ますこと、③存在する周囲の環境とのつながりのなかで、芸術的に適用することが重要である」¹⁵⁾とギュンターは3つの課題を掲げた。

まず、「音楽の分析ではなく、形成していくこと」という点について、ギュンターはバレエ教育を例に出し、説明している。そのなかで、「バレエは分解された動きの形態を何度も練習し、再び全体の流れのある運動に組み立てる。音楽はそのために分解される。そうではなく、例えば緊張と緩和を基礎とした動きを習得するには何が必要とされるのか、動きを導くためには、呼吸―声―共振とともにハミングを行うことで可能となる。そのなかで、速さや敏捷さ、テンポやリズムについて、動きをとおして音楽のなかで発展させることにより、動きから感情移入が可能となる。この感情移入を確実に実現させることにより、さらに単純な動きから自我を見出すことができ、動きの主題が高められる」¹⁶⁾と主張した。

つづいて、「機能的で感情的な感覚を身体から呼び覚ますこと」という点について、ギュンターは、「体操では身体機能が重視され、感情的な感覚は犠牲にされ、その反対にダンス教育では、間違った感情的な感覚が発展されている」¹⁷⁾と危惧を示した。これに関連して、振動運動は純粹に身体を揺らすべきであり、正しい姿勢で股関節を自由に動かすこと、緊張と緩和、持久性、力動性、敏捷性は、その正しい姿勢のなかで筋肉を使わなければならないという。また、運動表現は、運動の自然法則にかなった強弱法を個々人の身体のタイプに適応して行うことが表現であり、それは、機能的に正しく取り扱われる楽器によってなされるとギュンターは述べた¹⁸⁾。例えば、太鼓を叩くように銅鑼を叩くと、大きくてうるさい音を奏でてしまう。太鼓を叩くには、太鼓を叩くための身体感覚が働くのと同様に、銅鑼を叩くには、その音を正しく奏でるための身体感覚が必要である。ギュンターは、固有の楽器を取り扱うためには、そのための身体感覚が重要であり、楽器から奏でる響きのタイプとそこから形作られた運動のタイプを統一させる教育の必要性を主張している¹⁹⁾。

最後に、「存在する周囲の環境とのつながりのなかで、芸術的に適用すること」という点である。これについてギュンターは、いまだに運動教育や音楽教育の分野のなかでは、未解決であると述べている²⁰⁾。多くの体操学校やダンス学校での指導は、本来ならば多様な方法による可能性があるにもかかわらず、学校の枠に限定された芸術的な方向へ導かれる。多様な方法でこそ導かれる運動の多様性は、多種多様な社会的階層、年代に合わせることができ、教育や芸術、さらに医療の分野においても役立てられる。そこでの運動や音楽の知見は、子どもや素人のために、また聴覚障害やリズム障害をもつ人々のために、素人芝居や芸術研究所のような場所でも利用されるべきである。ギュンターは、これまでの運動教育と音楽教育の関連性が学校教育のなかで有効活用されておらず、運動は運動教育のみ、音楽は音楽教育のみという双方の乖離状態が立ち上がっているとの問題を提起した²¹⁾。

これらの課題を克服するには、オルフのシュールヴェルク²²⁾の目的にある音楽の分野と、ギンター学校で蓄積された運動分野によって達成できるとギンターは主張した²³⁾。ギンター学校における教育は、自由な即興と動きの形成に向けて、音楽の基礎練習を前提としたリズム体験、メロディー体験に注目している。ギンターは、楽器を奏でるテクニックが運動機能にあるとして、自己目的のための練習ではなく、自発的な動きの追求に向けた練習の必要性を提案した²⁴⁾。リズム体験は、聴力の他に拍手や床を踏み鳴らすといった簡単な身体運動によってリズムを捉えるもので、リズムの把握ではなく、身体をもってリズムに感銘することを目的としていた。身体に刻まれたリズムは、次第に動きに転換されると同時に、呼吸と一体化してメロディーに構成されていく。その後、メロディーは拍手、呼吸とともにハミングのような歌が加わることによって、身体が運動から音楽へ導かれ、全身運動へと転化されていくという²⁵⁾。

図-39 は、ギンターがリズム体験とメロディー体験の指導にあたり参考にした、オルフのシュールヴェルクのリズミック—メロディー的練習の具体例である。

1 Klapp. Rhythmus 1/4 (♩ = 120) Orff-Jahrbuch: A. Rhythmus d. Melodische Übung (Carl Orff) R.C.

2 Klapp. Rhythmus 3/4 (♩ = 80) R.C.

3 Klapp. Rhythmus 3/4 (♩ = 120) R.C.

4 Klapp. Rhythmus 4/4 (♩ = 120) fine R.C.

5 Klapp. Rhythmus 3/4 (♩ = 80) R.C.

図-39. オルフシュールベルクのリズミック—メロディー的練習

(Günther, D. (1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASIK 7/8: S. 115-116 より作成)

図中の1は拍手、2は拍手と足踏みのリズムのための記譜を示したもので、3、4、5の楽譜は、リズムをメロディーに発展させた具体例である。このリズム体験とメロディー体験は、分離して実施されるものではなく、リズムを鳴らせばメロディーで応答する、また、メロディーを奏でればリズムで対応するというように、動きのリズムとメロディーが相応関係にあるように結びついている。この点についてギュンターは、リズムを持続させていくと身体が高揚し、それにつれて表現力が豊かになり、さらなる動きのメロディーを奏でるようになる」と説明する²⁶⁾。

さらにギュンターは、リズム体験（図-40 参照）とメロディー体験（図-41 参照）の指導において、リズム的-拍節法的²⁷⁾な指導を実施している。



図-40. リズムにアクセントを付けた指揮練習

(Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASIK7/8,S.117.より転載)

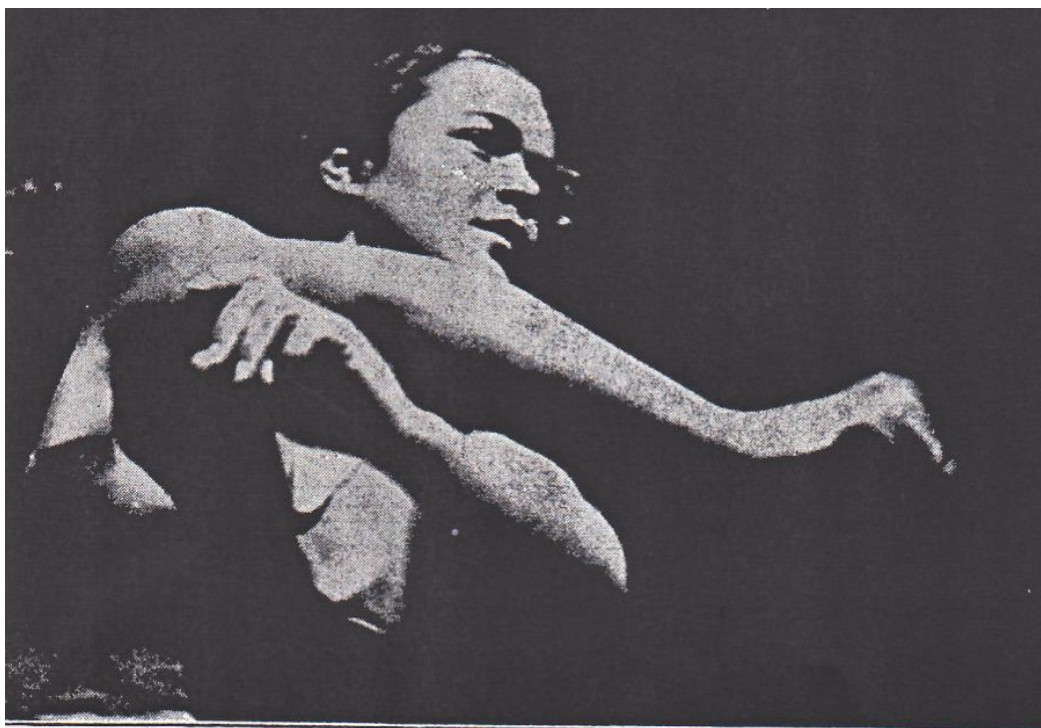


図-41. リズムにメロディーを付けた指揮練習

(Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8,S.117.より転載)

これは、拍子を限定することで、そこから新たなメロディーを発生させ、動きに変化をつけることをねらいとしたもので、そのなかで指揮練習を採り入れている。一般的に指揮者は、手で空間を描きながら音楽をつくりあげていくが、そのなかで拍子を執るだけでなく、拍子から導かれるメロディーについても主導する。ギュンターは、身体をつうじてリズムやメロディーをどのように形成し、表現することが可能なのか、無限のバリエーションへと拡大していくこの指揮練習から認識するべきであると主張した²⁸⁾。

ギュンターは原始的な楽器にも注目し、ハンドドラムやティンパニーを中心に、アフリカの木琴やリコーダーを使用して、動きとリズム、メロディーの融合を図った。一般的にハンドドラムは、身体的にリズムを捉え(図-42 参照)、メロディーは木琴やリコーダーなどで奏でられるが、ギュンターはリズムからメロディーを構築するのみならず、即興でメロディーからリズムを表現する指導を展開した。その例として、木琴が奏でるメロディーをティンパニーで表現し、ハンドドラムのリズムを木琴やリコーダーで奏でることを試み、即興をとおしてリズムとメロディーを学ぶ重要性を説いている(図-43 参照)²⁹⁾。

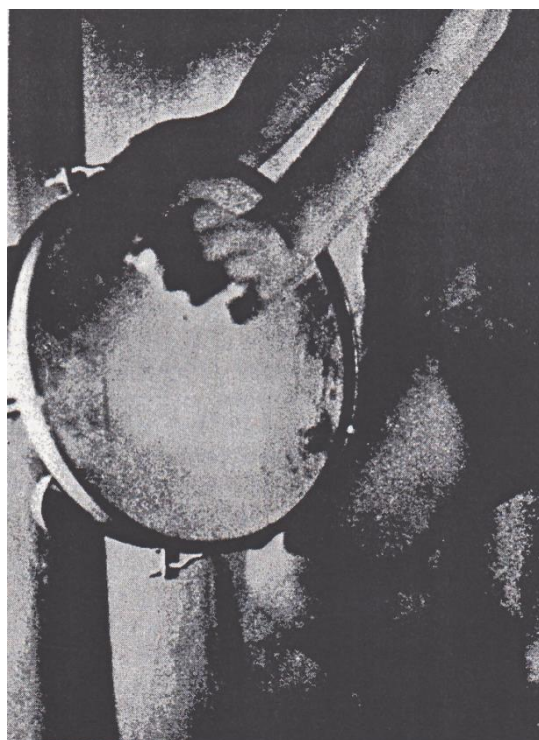


図-42. 動きにおける楽器

(Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.114.より転載)



図-43. 小さなダンスオーケストラ

Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.119.より転載)

リズム、メロディーを主体として、それらに動きを融合させた運動形成を図るギュンターの教育は、運動のなかに楽器を存分に配置し（図-44 参照）、楽器による規定のリズム、メロディーだけでなく、即興によるリズム、メロディーに動きを合わせる一面も兼ね備えていた（図-45 参照）。



図-44. ダンスの中での楽器の使用

(Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.120.より転載)

6

$\frac{2}{2}$ ($\text{♩} = 132$)

Glockenspiel

Xylophon

2 Holzblocktrommeln

Schellentrommel $\begin{matrix} F \\ B \end{matrix}$

Triangel

Becken (♩)

Kleiner Gong (Gummisch.)

Solo-Pauke

Pauken

ff (Wiederholung *pp*)

ff (Wiederholung *pp*)

ff (Wiederholung *pp*)

ff (Wiederholung *pp*)

ff (Wiederholung *pp*)

ff (Wiederholung *pp*)

U.S.W.

図-45. オルフのシュールベルクから小さな打楽器作品のための楽曲

Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.118.より転載)

これはギュンターの夏期コースにおける授業内容からも見て取れる。1931年の機関誌『ジムナスティック』の11・12月号には、1931年7月28日から8月20日にドイツ北東部のフランクフルト アン デル オーデル (Frankfurt/Oder) で開催された夏期コースの内容が記載されている³⁰⁾。授業内容には体操はもちろんのこと、リズム、ソロとグループでのダンス、ラバンの運動合唱の他に、木琴やリコーダー演奏、打楽器とダンスオーケストラ、指揮練習が含まれていた。この夏期コースの最後は、授業のまとめとして楽器を用いた即興による実演が実施されたことが報告されている。ギュンターの楽器を使用した運動形成の授業形態は、ギュンター学校のみならず、夏期コースでも実践されていたのである。

1933年3・4月号の「運動と音楽における表現形式の成立」において、メダウは動きの基準となる音楽の表現形式を運動教育に組み込む必要性を強調し、動きのなかから発せられる言葉をメロディーに置き換えて、そのメロディーに合わせた動きを導く指導方法を提示している。同論文中の運動と音楽における表現形式の一つ目の例を表した図-46について、Aはボールを用いた動きを言葉に置き換え、その言葉の抑揚を黒点で記述したもの、Bは黒点を一本のラインにつなげたものである。このラインをハ長調4拍子のメロディーの5音音階の楽譜に置き換えたものがCで、このように一つのボールを用いた動きから音楽的なモチーフを発生させるメダウの指導方法は、動きを主体に音楽を導くことにあった。

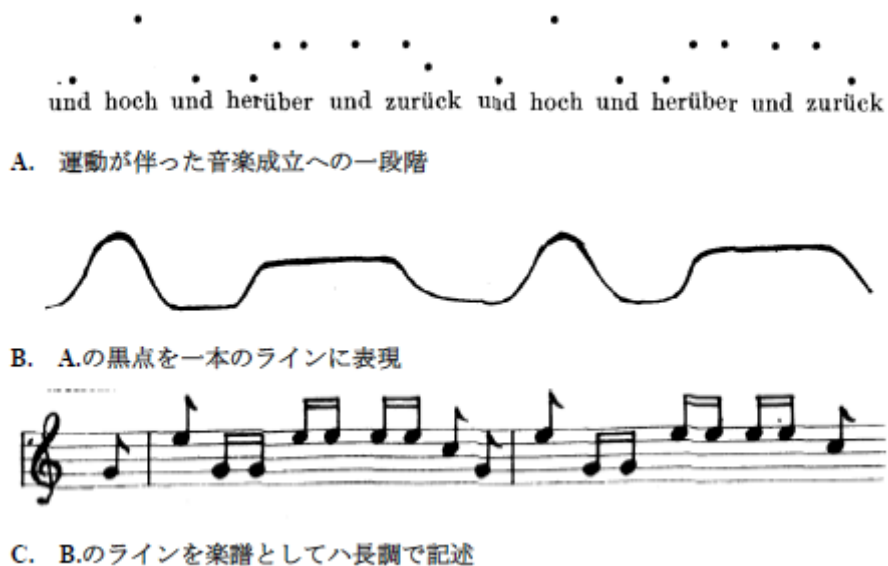


図-46. 運動から音楽への導入1

(Medau,H,1933, Entstehung der Formen in Bewegung und Musik.

GYMNASTIK3/4:S.45.より作成)

運動と音楽における表現形式の2例目を表した図-47は、振動運動によるリズムとメロディーの形成に関する事例をとりまとめたものである。振動運動で「2」という数字を手で描くとき、全身は伸縮性に富むことから、身体と呼吸との調和が重要な鍵となっていく。Aは、「2」という数字が振動運動を伴いながら右腕で繰り返し描かれた軌跡で、「2」を描くときのリズムを楽譜で表したものがBである。さらにBのリズムを用いて、Cのaからcのようなメロディーに変化させることが可能となる。運動の分岐点で自然なアクセントが加わることにより「リズム」が産出され、ここから自ずとメロディーのモチーフが出来上がる。これを指導場面で実践するにあたり重要なことは、「生徒たちがこの活動に没頭できるように、指導者が真っ先に助言するのではなく、生徒自身の身体からメロディーが奏でられるまで待つことである」³¹⁾とメダウは指摘する。



A. 「2」という文字を、指揮を執るように右腕で描く



B. Aの「2」をリズムで表現



C. Bのリズムをメロディーに置き換える

図-47. 運動から音楽への導入2

(Medau,H. (1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik.

GYMNASTIK3/4:S.46 より作成)

メダウは寄稿論文のなかで、ヴィグマンのダンス・体操学校の音楽教師であったハステイングによる動きと音楽の融合に関わる次の主張を再録している³²⁾。

ダンスと音楽は、リズムのなかで展開される。ダンサーはなぜ歌いながらダンスの動きを形成するのか。そこでは、メロディーと動きが密接に関連しており、ダンサーは歌いながら動きのイメージを探っている。これは人間の本質的な表現形態である・・・中略・・・自然な呼吸と生態リズムから身体が緊張状態に置かれ、そこから音楽的なリズムの表現へと発展することは、音楽と動きの決定的な融合形態を示すものである。

このハステイングの主張を拠り所として、メダウは動きからメロディーを構築し、ここで構築されたメロディーから新たな動きを形成する自らの指導方法の有効性を裏付けた。人間は、運動時にその運動の動きをまず声に出して表現する。「2」の動きを例にするならば、「2」を描くために指導者は「2」の軌跡について、アクセントを付けてカウントではなくオノマトペを使って歌う。それにより運動する者は、オノマトペによって動きにたいして身体が順応しやすくなり、高度な動きとなっていく。そして動きから導かれたメロディーは、ピアノ伴奏に発展していく。図-48は、「2」をモチーフにしたピアノ伴奏時の楽譜である。これについてメダウは、「これは動きから導かれた運動音楽である。メロディーは5音音階で指し示すことができ、何よりも大切なことは、指導者と生徒と一緒にこの作業に取り組むこと」³³⁾と主張した。



図-48. 「2」のモチーフからのピアノ伴奏

(Medau,H.(1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik.

GYMNASTIK3/4:S.48.より転載)

図-48 のピアノ伴奏は、図-49 のように和音を用いた伴奏へと発展していくことが可能であり、さらに図-50 のようにメロディーを歌い、和音の部分ピアノ伴奏として発展させていくことができるとメダウは主張している³⁴⁾。動きの緊張や強弱によって、メロディー・和音・転調³⁵⁾が変化し、それによって、さらなる動きの緊張や弛緩が可能となる、メダウはいかなる運動にも動きを作る上でこの音楽の役割を利用しなければならず、その出発点において簡素で原始的な動きが大切であることを強調した³⁶⁾。



図-49. 和音を用いたピアノ伴奏

(Medau,H.(1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik.

GYMNASTIK3/4:S.49.より転載)



図-50. メロディーと和音でのピアノ伴奏

(Medau,H.(1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik.

GYMNASTIK3/4:S.49-50.より転載)

動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成にたいするギュンターとメダウの基本

姿勢は、動きとリズム、メロディーのいずれを主体とするかという点で異なっていた。ギューンターの指導実践は、リズムやメロディーを主体として、既定の記譜や楽譜、指揮練習、原始的な楽器から動きを導くものであった。その一方でメダウの指導実践は、ボールの使用、振動運動による動きを主体として、リズム、メロディー、さらには動きを行う際のピアノ伴奏を築き上げていくものであった。

第2節 ドイツ体操連合の諸活動にみる体操の特色

第1項 身体の内的機能の重視と空間認識による運動

ドイツ体操連合は、2回の体操専門会議、3回的女子体操教科課程講習会をつうじて、身体の内的機能や表現を高める体操実践の必要性を追求していった。1926年の新体操教育会議では、カルマイヤーが身体の緊張と緩和を目的とする呼吸法を基礎とした体操、ヘアーマンが呼吸法に基づく純粋な表現教育の具体例をそれぞれ示した。初回的女子体操教科課程講習会では、メンゼンディークによる身体形成・姿勢・筋肉と関節を意識したトレーニングとその応用方法、ボーデによる歩行・走行・跳躍を振動運動のトレーニングへ発展させる方法、シュミッツによるトゥルネンの動きを空間へ意識を置いた「自由な運動」に展開させる方法が提示された。第2回では、第1回の内容を引き継ぐかたちでギンドラーの呼吸体操が加えられた。第3回では、静的な運動を解剖学や生理学と結び付けた、ローエランドの体操学校での授業が単独で実施され、歩行・走行・弾む・跳躍の練習、広い空間を使った方向訓練が行われた。特に方向訓練は、バランス感覚と生命感覚の発達に必要である鋭敏な感受性を覚醒させるために重要視された。1931年に開催された人間教育のための会議では、自発的で創造的な運動を習得するために、身体機能を高める運動、方向感覚や空間認識に着目した運動など、多種多様な体操の教育学的な方法論が提示された。これらに共通した点は、体操をとおして身体の内面に意識を向けることであった。

軍事訓練の準備段階として、規律と秩序による人格の陶冶を教育の本質的な課題としていた集団秩序運動では、集団運動での共通な編成をとるために、個々の運動は細かく規定されていた。このために、生徒は教師の号令によって鋳型化された運動に従うばかりであった。この集団秩序運動の特色は、集団による一糸乱れぬ集団美にあり、そこに個々の多種多様な身体性や生理学や解剖学に基づいた運動方法を見出すことはできない。生理学や解剖学の知見を豊富に取り込んだメンゼンディークの身体形成・姿勢・筋肉と関節を意識したトレーニングやその応用方法は、1926年の新体操教育会議をはじめ、第1回と第2回

の女子体操教科課程講習会においても提示されていた。特に1926年に開催された第1回女子体操教科課程の際に6週にかけて実施されたメンゼンディークの活動の内容が、同年の『ジムナスティック』9・10月号のなかで詳細に記載されていることから、生理学と解剖学的の知見に基づいたメンゼンディークのトレーニングは、ドイツ体操連合の活動のなかでも根幹をなしていたと言えよう。メンゼンディークのトレーニングは、生徒一人一人が自己の身体に向き合い、身体の内側にある微細な筋肉や関節を意識しなければ、熟し切れないものであった。

またボーデは、第1回と第2回の女子体操教科課程講習会において、歩行・走行・跳躍運動から動きを発展させる方法を提示したが、それはまさに身体を駆使して、動きの可能性を試すものであり、集団運動で試されるものではなかった。また呼吸法に基づいた体操についても、呼吸は集団の同一リズムで行うものではなく、身体から自然に導かれるものであった。さらに、バランス感覚や生命感覚の発達に必要な感受性を覚醒するための方向訓練、集団秩序運動における規定された動きから空間を意識した「自由な動き」に発展させる方法においても、重要とされたことは、個人が自らの身体を意識化し、いかなる動きに発展させるかを探究することであった。トゥルネンの動きを手掛かりに授業を実践していた参加者にとって、自由な動きに発展させる喜びは、従来のトゥルネンからは感じられないものであった。このように自らの身体の内面を意識し、動きを発展させることにより、身体による表現能力は、格段と高められるのであり、身体の内面を意識する運動は、集団秩序運動のように無味乾燥に取り組みされるものではなく、その多くが身体から表出される即興運動に他ならない。ドイツ体操連合が普及・促進した体操の一つは、身体の内面を意識する運動であり、空間を意識した即興によって自発的に動きを探究・発展させ、身体の表現能力を高めるものであった。

第2項 運動と音楽の融合

本章の第1節第2項で明らかにしたギュンターとメダウの指導実践の具体例は、動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成であった。この運動形成にたいするギュンターとメダウの基本的な考え方は、いずれを主体とするかで異なりをみせたが、運動と音楽を融合させた教育方法であることに変わりなく、身体教育に音楽を豊富に取り入れたものであった。この運動と音楽を融合させた教育方法の鍵は、音楽をいかに解釈するか、動きからいかに音楽を導き出すかという運動と音楽の相互作用にあり、ここから身体の全てを駆

使した有機的な運動に発展し、新たな動きへの可能性が追求できるのである。

先述したとおりギュンターは、オルフの音楽教育の理論に基づきながら、運動と音楽に関する実験的な研究をまとめた。ここでは、音楽を分析するのではなく、形成していくこと、機能的で感情的な感覚を身体から呼び覚ますこと、これをもって多種多様な社会的階層やあらゆる年代に合わせることができると主張した。リズム体験とメロディー体験に関わるその方法は、拍手や足踏みの動き、指揮練習からリズムを発展させる、リズムを鳴らせばメロディーを奏でる、リズムを持続させると身体が高揚し、表現力が豊かになり、さらに無限のバリエーションへと拡大していくという、即興による一連の教授法であった。

またギュンターは、固有の楽器を扱うには、そのための身体感覚が重要であり、楽器を奏でるテクニックは、運動機能そのものであることから、楽器の奏でる響きのタイプとそこから形成された運動のタイプを統一させる重要性を説いている。そこでギュンターは、ティンパニーやハンドドラム、木琴やリコーダーを使用して、規定されたリズムやメロディーのみならず、即興によるリズム、メロディーに動きを合わせる取り組みを実施した。一方でメダウは、動きの基準となる音楽の表現形式を運動教育に組み込む指導法を提示した。それは、ボールを使った運動を行う際の言葉をメロディーに置き換え、音楽を形成していく、「2」を描く際のリズムを5音音階であらわし、そこから和音を使い、ピアノ伴奏へと導くかという例を提示するものであった。ギュンターとメダウは、動きを主体としてリズム、メロディーを構築する指導実践を手がけていたが、両者ともに即興で動きを導くことを重視していた。即興による身体運動は、身体の内面に意識を向け、これに加えて心理的な抑制からの解放を可能とし、身体運動の総合的な能力の向上に連なるものであった。

集団秩序運動では、教師の号令に生徒が従う他ないため、運動リズムの速度が変化することはあっても、実質的には常に一定の運動リズムが刻まれるだけであった。これにたいし、第3章第2節第1項(3)で述べたように、ドイツ体操連合に所属する体操学校の教育は、音楽理論、音楽史、触鍵法、和声学、音感教育、発声訓練、リトミック、楽器伴奏や音楽演奏、合唱など、音楽に関係する授業が幅広く実施されていた。ギュンターの学校のカリキュラムの詳細について、『ジムナスティック』の1927年3・4月号に記載されている。そこから認められる、基礎課程から専門課程にいたる全ての課程で、「リズム練習の実践」「パーカッション」「歌唱—合唱」、応用課程において「和声と音楽構成」「ピアノ」、応用課程と専門課程において「音楽表現と様式論」「即興」「インストルメンタル—アンサ

ンブル」が開講されていた事実は、あらかじめ規定された動きの練習を排除し、それに代わり、即興で創造的な運動と音楽を融合させた教育が展開されていた様子を想起させるものである。

この点についてはメダウも同様である。それは従来のトゥルネンの動きではなく、身体により発せられた動きから音楽を形成し、ここで形成された音楽により、さらに動きが発展していくからである。またドイツ体操連合に所属する多くの学校が、リズム体験のみならず、ピアノ伴奏を習得すること、自ら楽器を演奏し、歌うことなどを音楽教育で実施していたことは、運動と音楽が密接に関わっていた実態を指し示すものであった。これらの事例をもってして、身体運動に音楽が加わることで、ダンスや振付といった授業実践にも発展し、体操が単なる身体運動であるのみならず、芸術的側面と結び付けられた運動であったことが認められよう。

以上で論じてきた運動と音楽の融合という現象は、ドイツ体操連合の主催による講習会や体操専門会議においても立ち現れていた。1926年の新体操教育会議では、集団秩序運動とは性格の異なる、自由でリズムカルな運動と表現を基調とする体操が形成されており、1928年の女子体操教科課程講習会では、ローエランドの体操学校が、音楽的なものから韻律のあるリズム的な練習、音楽教育と発声訓練が実施され、とりわけ音楽に合わせた運動遊戯的なダンス練習の時間は、参加者であったトゥルネン教員やスポーツ教員から深い共感を集めたという。従来の学校体育において、このような音楽教育が実施されていなかった事実から、運動と音楽の融合は、ドイツ体操連合が普及・促進した体操の一つと言えよう。

ヒルカーは1926年の総会で、ドイツ体操連合に所属する体操学校の共通指導要綱案を提出し、その内容を『ジムナスティック』の1926年7・8月号に記載した。それは、表-18のとおりである。そこには、体操やメンゼンディーク学、心理学、体育史などの主要科目、その補足科目として音楽理論や楽器演奏が含まれており、実際に共通指導要綱は制定されることはなかったが、ここからドイツ体操連合の理事長にあったヒルカーが運動と音楽の融合を体操の本質の一つとして捉えていたありようを垣間見えよう。

表-18. ヒルカー案によるドイツ体操連合における体操の共通指導要綱

主要科目	週時間数	補足科目	週時間数	選択科目	週時間数
1. 体操	12	1. 健康体操	2	1. 陸上	4または2
2. メンゼンディーク学 解剖学、生理学、衛生学	2	2. マッサージ	1	2. 水泳	4または2
3. 心理学 心理学の理論と方法論、 児童心理学、青少年心理学、 体育心理学	2	3. 音楽理論	4	3. 合唱	2
4. 教育学 (新しい理論と実践研究、 教育学の専門教員による教育方法論)	2	4. 楽器演奏	4または2	4. 発声訓練と話術教育	2
5. 体育史 特に体操を中心	1	5. 運動教育	4または2	5. 素人向け合唱、遊戯、輪舞	2
6. デッサンまたは形態	2	6. 振付	2	6. ダンス	2
7. 芸術史			2		
合計時間数	21		5-8		2-4

(Deutscher Gymnastik-Bund e.V.(1926)Ausbildungsstätte, Lehrgänge und Fortbildungskurse.

GYMNASTIK7/8:S.131.より作成)

運動と音楽の融合は、先に述べた身体の内的機能や表現を重視した体操として具現化され、これまで度々指摘してきたように、規定された動きによって集団が一致団結して行う集団秩序運動に内在する運動認識とは真っ向から対立するものであった。そこで鍵となるのは、号令のもとで規定された動きを行うのではなく、自発的に動きを行うという即興が十分取り扱われていたことである。ドイツ体操連合がトゥルネンやスポーツを指導する教員に対して、3回にわたる女子体操教科課程講習会を開催した事実を考慮するならば、身体の内的機能と空間認識による表現力を向上させ、運動と音楽を融合させた体操教育を学校教育に導入したいとするドイツ体操連合の意向を汲み取ることができる。これこそが、ドイツ体操連合が普及・促進した体操の本質であったと言えよう。ドイツ体操連合は、1926年からベルリンを本拠とする「ドイツ体育大学」(Deutsche Hochschule für Leibesübungen)³⁷⁾に体操のための研究所の設置を申請したが、一度は同大学の評議会で機関設置の許可がおりたものの、実現には至らなかった³⁸⁾。

第3項 芸術教育運動との接続

ドイツ体操連合が普及・促進した、身体の内的機能の重視と空間認識による運動、運動と音楽の融合を柱とした体操教育の理念は、第2章第1節で検討した20世紀初頭に興隆した芸術教育運動に遡行するものであった。それは、芸術教育運動の一環として1905年に「音

楽と体操」をテーマに開催された第3回芸術教育会議が、集団秩序運動を主とする20世紀初頭のドイツにおける学校体育を創造的で感性的な芸術教育へと変革するには、何よりも音楽との関わりとおした表現の発達を目標とする新たな体操が必要であるとの考えに基づいて挙行されたからである。

第3回芸術教育会議の際に衛生評議員であったシュミットは、「体育による身体美」と題した講演で、生理学や解剖学の知見を欠いた教育目標のもとで実施されていた集団秩序運動に異議を唱え、身体に負担をかけない方法で、美的でバランスのとれた運動によるしなやかな体型作りを基礎とする新たな体操の構築を教育目標に掲げ、これこそが全ての運動の基盤を形成すると主張した。しかし当時において、それに関わる具体的な教育方法が確立されておらず、シュミットの構想する新しい体育の構築が叫ばれるばかりであった。また3回にわたる芸術教育会議（1901年・1903年・1905年）を主導したリヒトヴァルクは、「音楽と体操」と題した講演で、体育授業における美学的な効果は、本質的に音楽との関連に獲得されると主張し、音楽と体操がダンスと輪舞の原型のなかに位置しており、生徒の自立した人間性の育成に役立つと述べた。その具体例は、第3回芸術教育会議初日のトゥルネンの公開演技披露で拍子に合わせて歩く・跳ねるというステップを中心とした運動、民謡の音楽に合わせたダンス運動、シューベルトの音楽に合わせたダンスを僅かな時間で実施したにすぎなかったが、集団秩序運動を主とした学校体育に警鐘を鳴らさんとする画期的な試みであった。

第3回芸術教育会議を契機として、リズム、音楽と結びついた人間の美的な基本運動としての体操が実体化していくこととなった。この立役者は体操諸流派であったが、とりわけ、第3回芸術教育会議の準備委員を務め、1922年に開催された芸術体操会議の主催者であるベルリン中央教育研究所の所長であったパラート、徹底的学校改革者同盟の同盟員でありドイツ体操連合の理事長を務めたヒルカーの存在を見過ごすことはできないであろう。なぜならば、ドイツ体操連合が設立される布石となったのは、第3回芸術教育会議と芸術体操会議に他ならなかったからである。

芸術教育運動は、子どもが本来知的な学習に興味を持つ知性的な存在であるばかりでなく、何よりも豊かな芸術的才能をもった創造的で感性的な存在であるという考えのもと、教育における子どもの主体的位置づけを前提としていた。ここにみられる「子どもから」を骨子とする芸術教育運動の理念は、ドイツ体操連合にも継承され、とりわけ3回にわたる女子体操教科課程講習会は、それを鮮明にした機会として捉えられよう。1926年の第1

回女子体操教科課程講習会においてラバンの実践活動を報告したシュミッツは、子どもを指導するには、子ども本来の遊びや日常動作から運動を発展させるようにするべきとして、ラバンの運動学と空間学を参考にする重要性を説いた。講習会最終日には、開催地であったヴィークの保育所の子どもたちに体操の授業を実践し、子どもの身体教育の分野において体操的な指導を導入することで、新たな身体教育を確立できる可能性を示した。

また1927年の第2回女子体操教科課程講習会では、ギンドラーが自らの体操体系をもとにした授業を行い、タンバリンの合図で横になり、地面の上で這いつくばり、馬のように四つん這いで走り、伏せる、地面に転がる、横になって足を持ち上げる、背倒立をするといった運動を披露した。従来の学校体育では、規定された動きの反復に重点を置いた教育が標準化されており、子どもの能力に注目して、それを最大限に引き出す身体教育は、不在に等しいものであった。女子体操教科課程講習会が、総じて学校教育において体操的な方法を導入していたトゥルネン教員やスポーツ教員にたいして、体操に関わる理論と実習を包括した研修を用意した事実を鑑みるならば、ドイツ体操連合が普及・促進した体操が、教育現場で子どもの表現能力を最大限に引き出すうえで、十分に活用可能であることを示唆するものであったと言えよう。これは子どもの能力に注目して、教育における子どもの主体的位置づけを前提としたまさに芸術教育運動の理念を如実に示すものにほかならない。

ドイツ体操連合は、20世紀初頭に興隆した芸術教育運動を基盤に、従来の規定された動きを集団で実施する集団秩序運動を主としたトゥルネンから、身体の内面を意識した運動と空間を意識した即興による動き、さらには音楽と融合した体操を具現化させていき、それらを体操専門会議、女子体操教科課程講習会の開催、および、『ジムナスティック』の発行をとおして社会に周知させていった。第3章第2節第1項(1)で明らかにしたように、ドイツ体操連合の会員数について、設立当初は120名であったが、1931年に1131名を数えるほど膨れ上がり、学校数も1929年時点でベルリンのみをとっても151校が開校されていた。さらに「体操」(Gymnastik)という名称が、営利目的で乱用され、体操の専門教育を一度も受けていない、もしくは、素人向けコースに短期間しか参加していない人物があたかもドイツ体操連合所属の体操教員であるかのように装い、社交ダンスの学校がリズム的体操(Rhythmische Gymnastik)を専門とする学校として広告するなど、これらの動向を危惧したドイツ体操連合は、一般人向け授業と職業養成専門教育のための要綱を作成した。この事実は、ドイツ体操連合の活動がドイツ国内で広範に展開され、それを格式づける取り組みが徹底化されていた様子を如実に示すものであったと言えよう。

しかし、1931年に開催された人間教育のための会議は、体操を教育の主体に位置づけるものではなく、体操を人間教育の手段として捉え、精神の涵養を目指した教育の促進を押し出すものであった。また、これにアメリカで発生した世界恐慌に起因する多くの体操教員の失業問題、ドイツ体操連合の活動に寄与した会員の脱退等が追い打ちをかけ、人間教育のための会議を経て以降、ドイツ体操連合の取り組みは収縮を余儀なくされていった。その帰結として、先述したとおり、1933年にドイツ体操連合はナチスに包摂されていったのである。

むすび

本章では、体操の根幹を支える運動形成とその指導実践について、『ジムナスティック』に掲載された会員の寄稿論文と体操専門会議、女子体操教科課程講習会の内容を勘案し、ドイツ体操連合が普及・促進を図った体操の特色を明らかにした。

『ジムナスティック』は、体操をとおした身体教育に関する知識の追求・啓発を目的として、1926年2月1日に創刊し、1933年11・12月号を以て廃刊となるまでの間、計48号が発刊され、寄稿論文、文献紹介、ドイツ体操連合からの報告を主要な柱としていた。『ジムナスティック』の寄稿論文から、体操の運動形成について整理していくと、空間の高低、前後、左右からなる3次元の動きを基礎とした運動形成、および、動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成とに大別された。そこで本稿では、従前の体操研究で見過ごされてきた後者のギュンターとメダウによる具体的な指導実践例を明らかにした。

ギュンターは、1933年7・8月号の「音楽と動きの統一」において、オルフのシュールベルクによる音楽の基礎練習を前提としたリズム体験、メロディー体験に注目し、音楽と動きの関係性に注目した指導実践の方法をまとめた。ギュンターは、音楽を分析するのではなく形成し、機能的で感情的な感覚を身体から呼び覚ますこと、この取り組みは、多種多様な社会的階層やあらゆる世代に適うものであると主張した。リズム体験は、リズムの把握を目的とするものではなく、簡単な身体運動によってリズムを捉えるもので、身体にリズムを刻むことを目的とするものであった。ギュンターによる音楽と動きの統一とは、身体に刻まれたリズムが次第に動きに転換されると同時に、呼吸と一体化してメロディーに構成され、その後、メロディーに拍手、呼吸とともに歌が加わることで、身体が運動から音楽に導かれ、全身運動へ転化されていくというものであった。またギュンターは、ハ

ンドラムやティンパニー等の原始的な楽器にも注目し、アフリカの木琴やリコーダーを使用して、動きとリズム、メロディーの融合を図った。その理由として、固有の楽器を扱うには、そのための身体感覚が重要であり、楽器を奏でるテクニックそのものが運動機能に基づくためであり、楽器の奏でる響きのタイプとそこから形成される運動のタイプを統一させる重要性を重んじていたからである。その一方でメダウは、1933年3・4月号の「運動と音楽における表現形式の成立」において、動きの基準となる音楽の表現形式を運動教育に組み込む必要性を唱え、動きのなかから発せられる言葉をメロディーに置き換え、そのメロディーに合わせた動きを導く指導方法を提示した。メダウは、ボールを使った運動を行う際の言葉をメロディーに置き換え、音楽を形成していく、「2」を描く際のリズムを5音音階であらわし、そこから和音を使いピアノ伴奏へと導く例を提示した。動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成に対するギュンターとメダウの基本姿勢は、動きとリズム、メロディーのいずれを主体にするかという点で異なっていたが、音楽と動きを融合させる指導実践の共通性は、『ジムナスティック』から明らかにされた。

体操専門会議や女子体操教科課程講習会の開催、『ジムナスティック』の発行というドイツ体操連合の諸々の活動から認められる体操の特色は、まず身体の内的機能の重視と空間を意識した即興による動きであった。ドイツ体操連合は、2回の体操専門会議と3回の女子体操教科課程講習会をとおして、身体の内的機能や表現を高める体操実践の検討を重ね、その必要性を提示した。これらの催しで提示された体操実践は、緊張と緩和を目的とした呼吸法に基づく方法、身体形成・姿勢・筋肉と関節を意識したトレーニングやその応用方法、歩行・走行・跳躍を振動運動のトレーニングに発展させる方法、トゥルネンの動きから空間を意識した自由な運動に展開させる方法であったが、これらの共通点は、体操をとおして身体の内面に意識を向け、空間を意識した即興により動きを発展させることであった。従来の規律と秩序による人格の陶冶を教育の本質的な課題とする集団秩序運動は、軍事訓練と同様の編成をとるために、個々の運動は細かく規定され、教師の号令に従った一糸乱れぬ集団運動を行うのみであった。そこに個人の身体性に注目し、また、身体の内面を意識する運動方法を見出すことは不可能に近かった。これにたいして、ドイツ体操連合が普及・促進した体操の一つは、自らの身体を積極的に意識し、空間を意識した即興により動きを探究・発展させること、規定された集団運動の美しさではなく、個々の身体の表現能力を高めることであった。

また『ジムナスティック』の寄稿論文から明らかにされた、ギュンターとメダウの動き

とリズム、メロディーを融合させた運動形成を主とする指導実践の具体例は、身体教育に音楽を豊富に取り入れたものであった。運動と音楽を融合させた教育方法の鍵は、音楽をいかに解釈するか、動きからいかに音楽を導き出すかという運動と音楽の相互作用にあり、これを全身体による有機的な運動に発展させ、新たな動きへ展開させることにあった。ギューンターの学校では、「リズム練習の実践」や「パーカッション」をはじめ、「即興」「インストルメンタルアンサンブル」の授業が開講されており、あらかじめ規定された動きの練習を排除し、それに代わり、即興で創造的な運動と音楽を融合させた教育が展開されていた。ドイツ体操連合に所属する多くの体操学校が、音楽教育の授業のなかで、リズム体験だけでなく、ピアノ伴奏、自ら楽器を演奏し歌う教育を実施していた状況は、体操と音楽が密接に関わっていた実状を示すものであった。これは、運動リズムの速度が変化することはあっても、常に一定の運動リズムが身体に刻まれるだけの集団秩序運動に内在する運動認識と真っ向から対立するものであった。トゥルネンやスポーツを指導する教員にたいして、3回にわたり女子体操教科課程講習会を開催したことは、身体の内的機能と空間を意識した即興によって表現力を向上させ、運動と音楽を融合させた体操の学校教育への導入を目論むドイツ体操連合の意向が反映されていた。しかしながら、1926年にドイツ体操連合は、ベルリンに本拠を構えるドイツ体育大学に研究所の設置を申請したが、一度は同大学の評議会で機関設置の許可がおりたものの、実現には至らなかった。

ドイツ体操連合が普及・促進した、身体の内的機能を重視した運動と空間を意識した動きの発展、体操と音楽を融合させた体操教育は、20世紀初頭に興隆した芸術教育運動に逆行するものであった。1905年の第3回芸術教育会議は、学校体育が教育問題として初めて公的に議題化された場で、集団秩序運動を主とする体育を創造的で感性的な芸術教育へと変革するには、音楽との関わりによる表現の発達を目標とした新たな体操が必要であるとの考えに基づいて挙行された。結果として、ここでは具体的な教育方法が編み出されず、新たな体育の構築に関わる理念が主張されるばかりであったが、第3回芸術教育会議を契機に、運動と音楽が結びついた人間の美的な基本運動としての体操が実体化していくこととなった。その立役者は、体操諸流派の体操家、舞踊家、音楽家であったが、第3回芸術教育会議の準備委員で、1922年の芸術体操会議を主催したベルリン中央教育研究所所長のパラート、同じく芸術体操会議を主催した徹底的学校改革者同盟の同盟員で、ドイツ体操連合理事長を務めたヒルカーの存在は、ドイツ体操連合が芸術教育運動の流れをくんでいたことを裏付けるものであった。芸術教育運動の理念である、子どもを主体に位置づけた

創造的で感性的な教育は、3回にわたる女子体操教科課程講習会での子どもを対象とした体操の授業実践でも発揮された。子どもの能力を最大限に引き出す体操教育が女子体操教科課程講習会であらわにされたことは、ドイツ体操連合が普及・促進する体操が、子どもの表現能力を最大限に引き出すために、教育現場で十分に活用可能であることを示すものであった。これは子どもの能力に注目して、教育における子どもの主体的位置づけを前提とした芸術教育運動の理念に倣うものであった。20世紀初頭に興隆した芸術教育運動を基盤に、ドイツ体操連合は規定の動きを集団で行う集団秩序運動を主としたトゥルネンから、身体の内的機能の重視と空間を意識した即興による動きの発展、さらには運動と音楽を融合した体操を身体教育として具現化し、体操専門会議と女子体操教科課程講習会、『ジムナスティック』をとおして社会に周知させていった。しかし、1931年の人間教育のための会議以降、ドイツ体操連合による大々的な行事は開催されず、1933年にドイツ体操連合は、ナチスの傘下に収められていった。

結章 まとめと結語

1. まとめ

本研究は、「ドイツにおける新体操促進運動 (Gymnastikbewegung) に関する史的研究 (1901年-1933年) —ドイツ体操連合 (Deutscher Gymnastik-Bund) の設立と活動の実際に着目して—」と題し、新体操促進運動を担った体操家、舞踊家、音楽家の体操諸流派が一堂に会して1925年に設立されたドイツ体操連合に着目し、ドイツ体操連合が結成されるまでの経緯と活動の全容、および、そのなかで構築された体操の特色を明らかにするものであった。本論で検討した結果を整理すると、以下のようにまとめられる。

- 1) ドイツ国民体育と称されるトゥルネンは、1811年7月にプラマン学校で教師を務めていたヤーンを中心にベルリン郊外のハーゼンハイデで産声をあげた。ナポレオンに屈した後の当時のドイツは、近代国民国家の建設に向けて、社会の隅々で新たな動きが立ち上がろうとしていた時期であった。ヤーンのトゥルネンは、走・跳・投に代表される陸上競技的な運動、器具を用いた運動、フェンシング、遊戯、ハイキングなどから成り、ヤーンが提唱・実践したトゥルネンは、祖国愛に燃え、共同体の精神に目覚めた、意志強固で身体強健な青少年を養成する手段であった。
- 2) ヤーンのトゥルネンは、ドイツ各地でクラブ組織が結成され、自主的な社会体育活動として広域で根付いていった。しかしながら、国家統一、身分制度の撤廃、多面的で調和的な人間形成という政治的、教育的な色彩を帯びながら展開されたことにより、反体制的な活動の象徴とみなされ、1820年6月に「トゥルネン禁止令」が発布されると活動が縮小していった。トゥルネン禁止令の期間、政治的、教育的な色彩とは趣を異にする、人間の身体そのものを直視した活動が展開された。
- 3) 1830年代に入り、産業資本主義の進展を背景として、トゥルネンが工場労働力や軍事力の強化を目的とする国民教育に必要不可欠な要素とみなされていくと、1837年10月にプロイセン政府は、上級諸学校における体育の採用を決定し、1842年にトゥルネン禁止令は解除された。このなかでヤーンのトゥルネンは、集団による徒手体操と手具体操を基礎とする集団秩序運動へと変容した。近代ドイツにおける学校体育の確立に指導的な役割を果たしたシュピースは、学校体育を常備軍と国土防衛のための軍事体育と捉え、そのなかに集団秩序運動を位置づけていった。
- 4) 規律と秩序による人格の陶冶を目的とするシュピースの集団秩序運動は、胴体と手足

の各部位を分節化し、それらを組み合わせて一連の運動へと再編していく「要素化」、および、一つ一つの運動の細部にまで厳格な規定を施す「鋳型化」を特色とした。シュピースの集団秩序運動は、学校や社会に次第に浸透していき、弟子のマウルにより継承され、拡大していった。

5) シュピースと同様に学校体育を軍事体育と捉えたマウルは、年齢、性別、身体能力などに応じて授業を系統化し、集団秩序運動に関わる5段階の指導法を確立した。シュピース＝マウル方式の集団秩序運動は、生徒が教師の号令に従い、一糸乱れぬ集団運動から織りなされる集団美を目指すものであった。1870年代に入り、小学校の一教科として体育が採用されると、シュピース＝マウル方式のトゥルネンは、第一次世界大戦期まで軍事力の増強が図られるなかで、学校体育の主流となっていた。その一方で19世紀後半から20世紀初頭にかけて、イギリス産のスポーツ、自然科学の知見に裏打ちされた北欧体操がドイツに伝播し、また女性の身体機能の向上を目指す取り組みの重要性が強調されると、その余波はシュピース＝マウル方式の集団秩序運動に及んでいった。

6) 1871年にドイツ帝国が成立し、経済の発展と国力の増強により一層力を注いでいくと、学校教育は総じて教師中心の硬直化した授業により占められていった。この教育界の状況に異議を唱えたのが、19世紀後半から20世紀初頭にかけて興隆したドイツ新教育運動であった。ドイツ新教育運動のなかでも、子どもの自発的活動を重視し、子どもの生と生活の充実を図ることを目的とした学校改革を進める役割を担ったのが芸術教育運動であった。

7) 創造的で感性的な教育である美術、手芸、作文、音楽といった活動に重きを置いた芸術教育運動は、まず1896年にハンブルグで開催された芸術教育保護のための教員集会で組織化され、その後の3回にわたる芸術教育会議を経て、ドイツ各地へ拡大していった。全ての芸術教育会議で中心的な役割を担ったリヒトヴァルクは、シュピース＝マウル方式の集団秩序運動を主とするトゥルネンに意義を唱え、音楽との関わりをとおした新しい体操によって、創造的で感性的な教育が実現されるという考えのもと、第3回芸術教育会議のテーマを「音楽と体操」に設定した。

8) 1905年に開催された第3回芸術教育会議は、学校体育が教育問題として公的に議題化された初の会議であった。その会議内容は、集団秩序運動を主とするシュピース＝マウル方式のトゥルネンにたいし、生理学や解剖学の知見を素地とする美的で身体のバランスを考慮した運動、トゥルネンに創造性を加える自然法則に従った運動など、新しい運

動認識に基づいた体育の在り方を指示するものであった。実際のところ、音楽との関わりをとおした具体例は僅かに過ぎなかったが、学校体育の改革に向けた画期的な試みであった。

- 9) 第3回芸術会議を契機として、人間性の問い直しを基本的な観念とする新体操促進運動が胎動していった。医学的見地からの表現技術の向上を目指したデルサルト、表出体操のカルマイヤー、メンゼンディーク、ローエランド、運動のリズムと表現力の発達に向けた音楽教育的な体操のダルクローズ、ボーデ、運動形成の発展に向けたダンス的な体操のダンカン、ラバン、ヴィグマンなど、これらの体操家、音楽家、舞踊家から成る体操諸流派により、新たな理論と方法に基づく体操の構築が進められた。体操諸流派の活動は、トゥルネンや古典バレエで見過ごされてきた、弛緩、リズム、表現といった身体運動の要素を浮かび上げ、新体操促進運動を活性化し、これにより1922年に芸術体操会議が実現するところとなった。
- 10) 3回にわたる芸術教育会議の準備委員会を務め、ベルリン中央教育研究所所長でもあったパラート、徹底的学校改革者同盟員であったヒルカーの尽力により、芸術体操会議が開催された。第3回芸術教育会議との比較において、芸術体操会議は自然に即した表現形式、音楽との融合を目指した身体教育の事例を豊富に示し、新しい身体活動領域としての体操がリズム、音楽と結びついた人間の基本的運動として教育、芸術、医学の広範な分野に周知される役割を果たした。芸術体操会議を契機として、1925年に「体操のための本部事務局」が設置され、これを母体に単独で活動を展開していた体操諸流派の明確な組織団体であるドイツ体操連合が1925年11月に設立された。
- 11) ドイツ体操連合には、カルマイヤー系、ギンドラー系、メンゼンディーク系、ローエランド系、ボーデ系、ラバン系の各流派の関係者が集合した。理事長に就任したのは、芸術体操会議で中心的な役割を担ったヒルカーであった。ドイツ体操連合の設立目的は、体操の実践者を精神的、かつ、知性的な主体として捉えながら、体操の普及・促進・保護に努めることであった。ドイツ体操連合は、体操をとおした身体教育に関する知識の追及と啓発に向け、機関誌『ジムナスティック』を1926年1・2月号から隔月にわたり発行した。
- 12) ドイツ体操連合の会員数は、1925年の創設時で56名であったが、翌年には120名に達し、ピーク時の1931年には1131名にまで膨れ上がり、また所属していた学校数については、1928年に923校で、そのうち177校がベルリンに本拠を構えていた。1927年と1930

年にドイツ体操連合は、会員や加盟校にたいして体操授業の実態調査を実施した。その結果、1927年に約60000名であった受講者が1930年に91022名にまで増加していたことから、ドイツ体操連合の活動が軌道に乗っていた実態が明らかとなった。

- 13) ドイツ体操連合に所属した体操学校の教育内容は、生理学や解剖学を主要教科に位置づけ、教育学、心理学、体操・舞踊・芸術史なども網羅していた。また音楽関連の授業については、音楽理論、音楽史、ピアノ、和声学、楽器伴奏などが実施されており、その他についてもダンスや振付など、多岐にわたっており、これは体操が芸術的な側面と深く接続していたことを如実に示すものであった。ドイツ体操連合は、ドイツ国内における体操教育に関する規制が曖昧であったことを理由として、1927年に「一般人向け授業と職業養成専門教育のための要綱」を作成し、所属する学校における体操授業の価値を高めるとともに、営利目的で運営されていた体操学校との差別化を図った。
- 14) ドイツ体操連合は、2回の体操専門会議である新体操教育会議、人間教育としての体操会議、3回にわたる女子体操教科課程講習会を開催した。体操諸流派による様々な活動が公開された1926年の新体操教育会議では、集団秩序運動を主とするトゥルネンとは異なる、自由でリズムカルな運動と表現が提示された。女子体操教科課程講習会では、体操的な運動の学校教育への導入を検討するトゥルネン教員、スポーツ教員を中心として、6週間にわたり体操の理論と実習に関する研究が重ねられた。そこでは、生理学や解剖学の知見に基づいた簡単な動きによる振動運動、動きから空間と速度を意識した運動、呼吸を意識した緊張緩和の運動、音楽のリズムにのせた運動が取り上げられ、これらは身体の内面に意識を向けることを共通の運動認識としていた。1931年に開催された人間教育としての体操会議は、体操が人間教育に有効な運動であるとの認識を深めることに目的が置かれたが、精神性を涵養する手段として体操を捉えるばかりであった。また同時期に、ドイツ体操連合の設立に携わった会員の脱退が頻繁に発生したことは、転換に迫られていたドイツ体操連合の実状を浮き彫りにするものであった。
- 15) 1933年1月にナチスの党首であるヒトラーが政権に就いたことにより、ドイツ体操連合は、「体操とダンスのための職能同盟」へ統合された。ヒルカーはドイツ体操連合で普及・促進した体操を「ドイツ体操」と命名した。ナチスは、ドイツ体操連合の体操の理念や具体的な活動を継承しつつ、ドイツ国家の建設とドイツ民族アイデンティティの構築に向けた身体教育をとして「ドイツ体操」を教育学の領域に取り込んだ。だが、1933年10月にナチス教員同盟の「ドイツトゥルネン・スポーツと体操教員帝国同盟」の専門

団体「体操とダンス」の指揮下に置かれると、『ジムナスティック』は1933年11・12月号を以て廃刊となった。

- 16) ドイツ体操連合が普及・促進した体操の詳細を明らかにするために、『ジムナスティック』に掲載された寄稿論文に注目した。学術的な体裁を整えた寄稿論文は、計199本が掲載されており、教育現場や医療現場に従事する会員、執筆活動に専念する評論家を論陣の中心とし、その内容は、体操に関わる運動認識や運動法則の啓発、体操の医学療法への転用・応用、教育実践の具体例など、多岐にわたっていた。これらから認められる体操の運動形成について整理すると、空間の高低、前後、左右からなる3次元の動きを基礎とした運動形成、動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成とに大別された。従前の体操研究で見過ごされた、動き、リズム、メロディーを融合させた体操の具体的な指導実践例として、ギュンターとメダウの内容が明らかになった。
- 17) ギュンターは、オルフのシュールベルクによる音楽の基礎練習を前提としたリズム体験、メロディー体験に注目した。ギュンターによる音楽と動きの統一とは、身体に刻まれたリズムが次第に動きに変換されると同時に、呼吸と一体化してメロディーに構成される。その後メロディーは拍手や呼吸に歌が加わることによって、運動から音楽が導かれ、全身運動へ転化されていくというものであった。楽器を扱うためには身体感覚が重要であると考えていたギュンターは、楽器を奏でるテクニックそのものが運動機能に基づくという理由から、ハンドドラムやティンパニーをはじめとする原始的な楽器に注目し、アフリカの木琴やリコーダーを使用して、動き、リズム、メロディーの融合を図った。
- 18) 一方でメダウは、動きの基準となる音楽の表現形式を運動教育に組み込む必要性を強調し、動きの中から発せられる言葉をメロディーに置き換え、そのメロディーに合わせた動きを導く指導方法を提示した。動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成にたいするギュンターとメダウの基本姿勢は、動き、リズム、メロディーのいずれを主体とするかで異なっていたが、両者ともに即興で動きを導くことを重視していた。即興による身体運動は、身体の内面に意識を向け、これに加えて心理的な抑制からの解放を可能とし、身体運動の総合的な能力の向上に連なるものであった。
- 19) 体操専門会議と女子体操教科課程講習会の内容、『ジムナスティック』の寄稿論文を勘案したところ、ドイツ体操連合が普及・促進した体操の特色は、身体の内面を意識する運動であり、空間を意識した即興によって動きを探究・発展させ、身体の実現能力を高

めるものであった。これは一つ一つの運動が細かく規定され、教師の号令に従った集団秩序運動とは全く性格の異なるものであった。また、ギンターとメダウの指導実践は、運動と音楽を融合させた教育方法に基づくものであった。実際のところ、従来の学校体育において、音楽を取り入れた教育が実施されていなかった事実を鑑みるならば、運動と音楽の融合は、ドイツ体操連合が普及・促進した体操のもう一つの特色であった。

20) ドイツ体操連合が普及・促進した体操は、20世紀初頭に興隆した芸術教育運動を遊行するものであった。芸術教育運動の理念にある、子どもを主体に位置づけた創造的で感性的な教育は、3回にわたる女子体操教科課程講習会における体操の授業実践で鮮明にあらわれており、これはドイツ体操連合が普及・促進した体操が、子どもの表現能力を最大限に引き出すために、教育現場で十分に活用可能であることを示すものであった。

21) ドイツ体操連合は20世紀初頭に興隆した芸術教育運動を基盤に、身体の内面的機能の重視と空間を意識した即興による体操、運動と音楽を融合した体操を体操専門会議と女子体操教科課程講習会で具現化し、『ジムナスティック』をとおして社会に周知させていった。しかし、人間教育のための会議以降、ドイツ体操連合による大々的な行事は開催されず、1933年にドイツ体操連合は、ナチスの傘下に収められていった。

2. 結語

シュピーズ=マウル方式の「鑄型化」と「要素化」による集団秩序運動に異を唱え、新しい運動認識に基づく体操を迫及した体操諸流派の活動を支柱とする新体操促進運動において、ドイツ体操連合は象徴的な存在であった。体操専門会議と女子体操教科課程講習会の開催、機関誌『ジムナスティック』の発行をとおして、ドイツ体操連合が集団秩序運動に代わって構築した体操の特色は、身体の内面を意識すること、空間を意識した即興による動きを展開させること、動きとリズム、メロディーといった運動と音楽を融合させ、即興で動きを導きながら表現能力を高めることにあった。ドイツ体操連合が構築した体操は、新体操促進運動が主軸に据えた、個性を重視する創造的で感性的な教育のエッセンスを集約するものであった。

最後に、本研究で残された課題を4点挙げておきたい。

1点目は、新体操促進運動にたいするドイツトゥルネン連盟の姿勢である。集団秩序運動を奨励した中枢機関たるドイツトゥルネン連盟が、新しい運動認識としての体操をいかに捉えていたのか、その実態については論究していない。2点目は、1931年に開催された

人間教育のための体操会議の際に、ドイツ体操連合の設立に貢献したボーデをはじめ、脱退者が相次いだことである。同会議以降、ドイツ体操連合がナチズムに包括されるまでの間、ドイツ体操連合主催のイベントが著しく減少していった事実を鑑みるならば、この点の解明に努める必要がある。3点目は、ナチズムの組織「ドイツトゥルネン・スポーツと体操教員帝国同盟」の専門団体「体操とダンス」に併合されるに伴い、ドイツ体操連合の体操の理念がどのように変容し、また、いかなる活動が展開されていったのかについて、本研究は僅かに触れるばかりであった。4点目は、第2次世界大戦後の新体操促進運動に関する動向である。ここで注目すべきは、1947年に体育・スポーツ教員の養成機関として設立された国立ドイツ体育大学ケルンの存在であろう。同大学では早期より体操がカリキュラムに採用されており、そこで実践された教育内容を明らかにすることは、新体操促進運動のありようを紐解く一助になると考えられる。

注記および引用・参考文献

序章

- 1) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説 保健体育編, p.5.
- 2) 松本千代栄 (2008) 舞踊論叢. 明治図書出版: 東京. p.27.
- 3) 舞踊教育研究会編 (1991) 舞踊学講義. 大修館: 東京. pp.119-120.
- 4) 松本千代栄 (2008) 舞踊論叢. 明治図書出版: 東京. p.208.
- 5) 松本富子 (2012) 学校にダンス教育の変遷を辿る. 体育科教育 2月号 p.11.
- 6) 松尾順一 (2010) ドイツ体操祭と国民統合. 創文企画: 東京. p.8.
- 7) Geissler,A (1987) Die Körpererziehung in der Schule zur Zeit der reformpädagogischen Bewegung. ALOYS HENN VERLAG・KASTELLAUN/HUNSRÜCK,S.20.
- 8) 人間の生の全体性の回復、人間の生の個性的、かつ、創造的な発達を目的とし、伝統的な教育と教育観の行き詰まりを実感していた教育学者が、新しい教育観や文化観を渴望する若い世代の教育学者に強烈なインパクトを与え、この世代が後に、新しい教育学の端緒を切り開いていった。
- 9) ヘルマン・ノール、平野正久訳 (1987) ドイツの新教育運動. 明治図書出版: 東京. p.119.
- 10) 1886年「ハンブルク芸術友の会」(die Gesellschaft Hamburger Kunstfreunde)が、1896年には「学校における芸術教育育成のためのハンブルク教員連盟 (die Hamburger Lehrervereinigung zur Pflege der künstlerischen Bildung in den Schulen) が設立された。
- 11) Lichtwark,Alfred (1852年-1914年)はドイツの美術史家である。1886年新設のハンブルク美術館長に就任し、同年「ハンブルク芸術友の会」を、1896年には「学校における芸術教育育成のためのハンブルク教員連盟」を創立、その活動を通して青少年や成人層における深い芸術理解を促進することに貢献した。また広くドイツの芸術教育全般においてつねに指導的立場で活躍した。(ヘルマン・ノール、平野正久訳 (1987) ドイツの新教育運動. 明治図書出版: 東京. p.227.)
- 12) A.リヒトヴァルク、岡本定男訳 (1985) 芸術教育と学校ードイツ芸術教育運動の源流ー. 明治図書出版: 東京. pp.35- 37.
- 13) A.リヒトヴァルク、岡本定男訳 (1985) 芸術教育と学校ードイツ芸術教育運動の源流ー. 明治図書出版: 東京. p.223.
- 14) Pallat,L.und Hilker,F. (1923) Künstlerische Körperschulung.Breslau:S.7.

- 15) Hikler,F. (1926) Bundesgründung.GYMNASTIK2:S.25.
- 16) 稲垣正浩 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店：東京. p.452.
- 17) 中村恭子 (2012) ダンス教育の展望と課題. 体育科教育 2月号 p.18.
- 18) Beckmann,Otto (1933) Beckmanns Sport Lexikon A-Z. Verlagsanstalt Otto Beckmann : Leipzig-Wien.S.1136-1148.
- 19) KLEINE ENZYKLOPÄDIE KÖRPERKULTUR UND SPORT (1972) VEB Bibliographisches Institut:Leipzig.S.354-367.
- 20) 稲垣正浩 (1987) 「新体操」最新スポーツ大辞典. 大修館：東京. pp.448-452.
- 21) Neuendorff,E. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübung vom beginn des 18.Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Band4 : Dresden.S.694-710.
- 22) 今村嘉雄 (1953) 西洋體育史. 日本體育社：東京. pp.272-276.
- 23) 岸野雄三編 (1984) 体育史講義. 大修館：東京. pp.108-113.
- 24) 成田十次郎 (2013) 近代ドイツ・スポーツ史 IV 近代体育の改革と変容・停滞. 不昧堂：東京. pp.349-365.
- 25) Bernett, H. (1978) Die Ideologie der Deutschen Gymnastik. Sportwissenschaft, Schorndorf 8, 1 : S.7-23.
- 26) Freckmann, B. (1982) Wesen und Formen der Gymnastik. In:Ueberhorst, Horst(Hg): Geschichte der Leibesübungen. Band 3/2, Berlin:S.1008-1025.
- 27) 古川裕子、小笠原サチ子 (1986) 体操改革運動期における体操家・舞踊家の運動方法の違いに関する一考察. 愛知教育大学体育教室研究紀要 No.11 : pp.46-57.
- 28) 代谷藤子 (1995) 新体操に於ける歴史的発展の一考察. 兵庫女子短期大学研究集録第 28号 : pp.64-72.
- 29) 滝沢かほる (1980) メダウの Organgymnastik について. 新潟大学教育学部紀要人文・社会科学編第 22号 : pp.129-138.
- 30) 滝沢かほる (1981) メダウの体操体系における Bewegungsentwicklung と Bewegungsgestaltung について. 新潟大学教育学部紀要人文・社会科学編第 23号 : pp.173-181.
- 31) 菅井京子 (2006) 体操改革運動の後継および発展としてのメダウの体操体系について. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第 3号 : pp.97-104.
- 32) 小川哲哉 (1999) 20 世紀初頭ドイツにおける身体文化運動に関する一考察—表現ダン

- ス運動における「身体教育論」の今日的意義一. 九州教育学会研究紀要第 27 巻 : pp.39-45.
- 33) 田中幸治・滝澤かほる (2006) ルドルフ・ボーデのリズム体操のためのピアノ音楽に関する研究.新潟大学教育人間科学部紀要人文・社会科学編第 9 巻第 1 号 : pp.107-114.
- 34) 海野敏 (1999) モダンダンスの歴史. 新書館 : 東京, pp.72-79.
- 35) 木村はるみ (1990) R. ラバンの思想と理論について. 山梨大学教育学部研究報告第 41 号 : pp.141-147.
- 36) 堀野三郎 (1995) ラバンの生涯とその業績. 比較舞踊学研究第 2 巻 : pp.43-53.
- 37) 斉藤尚大 (2000) 大都市と祝祭文化ールドルフ・フォン・ラバンの 1920-30 年代における著作と演出に関する一考察. 舞踊学第 23 号 : pp.12-22.
- 38) 斉藤尚大 (2003) コレオグラフィの遺産 ルドルフ・フォン・ラバンの 1920~30 年代における振付と演出に関する一考察. 舞踊学第 26 号 : pp.11-20.
- 39) ヴァレリー・プレストン=ダンロップ (2003) ラバンの理論. 慶應義塾大学アート・センター/ブックレット第 10 号 : pp.8-16.
- 40) 菅井京子 (2010) ドイツ体操同盟の設立に果たした F. ヒルカーの役割について. スポーツ史研究 (24) : pp.3-14.
- 41) 菅井京子 (2012) 『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』に果たしたルドルフ・フォン・ラバンの貢献について. スポーツ史研究 (25) : pp.1-15.
- 42) A・リヒトヴァルク、岡本定男 (1985) 芸術教育と学校. 明治図書出版 : 東京.
- 43) ヘルマン・ノール、平野正久、大久保智、山本正弘訳 (1987) ドイツの新教育運動. 明治図書出版 : 東京
- 44) 鈴木幹夫 (2001) ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究. 風間書房 : 東京.
- 45) 大谷武一 (1930) 新しい體操への道. 目黒書店 : 東京.
- 46) 木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂 : 東京.
- 47) Diem,L (1991) Die Gymnastikbewegung, ein Beitrag zur Entwicklung des Frauensports: Herausgeber, Carl-Diem-Institut Academia Verlag.
- 48) Arps-Aubert,E.(2010):Das Arbeitskonzept von Elsa Gindler(1885-1961), Verlag Dr.Kovač,Hamburg.p.116.
- 49) Wedemeyer-Kolwe, B. (2013) Der neue Mensch. Königshausen & Neumann : Würzburg. S.25-128.
- 50) 中村秋一 (1941) ドイツ舞踊文化. 人文閣 : 東京.

51) ヘドヴィヒ・ミュラー、田邊玲子訳 (1996) アウスドウルック (表現). ドイツ・ダンスの歴史 100 年. 東京ドイツ文化センター: 東京. pp.34-49.

52) 海野弘 (1999) モダンダンスの歴史. 新書館: 東京.

第 1 章

1) Neuendorff, E.(1927) Die deutschen Leibesübungen : Großes Handbuch für turnen, Spiel und sport / herausgegeben von Edmund NeuendorffWilhelm Andermann Verlag, Berlin, S.15.

2) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.139-140.

3) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.140-141.

4) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.142.

5) グーツ・ムーツ (Johann Vhristian Friedrich GutsMuths, 1759 年-1839 年) は、ルソーの教義「自然に帰れ」(Zurück zur Natur) ”、同時代に活躍した偉大な教育者であるペスタロッチ、最後にザルツマンの影響を直接に受け、ザルツマンが設立したシュネッペンタールの田園教育舎 (Landerziehungsheim) で指導を受けた。グーツ・ムーツは、理論と実践の相互作用に注目しながら、運動をとおした人間教育の詳細を検討し、1773 年に『青少年のための体操』(Gymnastik für Jugend) を執筆する。そこで彼は、体操的な練習として、「走る」「歩く」「投げる」「巻く」「登る」「バランス」「持ち上げる」「踊る」をそれぞれまとめ、さらに、「入浴する」「泳ぐ」、その他必要とあれば「徒手体操」「消防」「警護と断食」「音読」「朗読」などに言及し、また、運動の生理学的効果についても考察した (Diem, C.(1930)Tehorie der Gymnastik. Weidmannsche Buchhandlung/Berlin, S.15-16.)。

6) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.142-143.

7) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.144-151.

8) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.152-154.

9) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京,p.80.

- 10) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.152.
- 11) 今村嘉雄 (1950) 西洋体育史. 日本体育社 : 東京,p.127.
- 12) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.202-210.
- 13) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.132-139. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 14) 森田信博 (1990) F.L.ヤーンの体育遊戯論について. 秋田大学教育学部研究紀要 教育科学部門 41, p.100.
- 15) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.131. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 16) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.129. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 17) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.399-400.
- 18) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.143-144. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 19) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.163. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 20) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.167-168. Hrsg. von der

- Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 21) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社 : 東京,p.84.
- 22) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.181. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 23) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.179. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 24) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.180. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 25) Neuendorff, E.(1927) Die deutschen Leibesübungen : Großes Handbuch für turnen, Spiel und sport / herausgegeben von Edmund NeuendorffWilhelm Andermann Verlag, Berlin, S.17.
- 26) Neuendorff, E.(1927) Die deutschen Leibesübungen : Großes Handbuch für turnen, Spiel und sport / herausgegeben von Edmund NeuendorffWilhelm Andermann Verlag, Berlin, S.17.
- 27) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.167-168. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 28) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.173-174. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ; nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).
- 29) Jahn, F. L. u. Eiselen,E.(1816) Die deutsche Turnkunst. Berlin, S.179. Hrsg. von der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig, Institut für Geschichte und Organisation der Körperkultur ;

nach der Originalausgabe bearbeitet von Wilhelm Beier ; mit einer Einleitung von Dr. Wili Schröder(1960).

- 30) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.362.
- 31) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.401.
- 32) Neuendorff, E.(1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.II. Wilhelm Limpert, Dresden, S.374.
- 33) 稲垣正浩 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店 : 東京, p.849.
- 34) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社 : 東京, pp.77-78.
- 35) 今村嘉雄 (1950) 西洋体育史. 日本体育社 : 東京, pp.126-127.
- 36) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設――一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社 : 東京, p.46.
- 37) 今村嘉雄 (1950) 西洋体育史. 日本体育社 : 東京, pp.126-127.
- 38) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設――一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社 : 東京, p.47.
- 39) 松尾順一 (2010) ドイツ体操祭と国民統合. 創文企画 : 東京, p.38.
- 40) 松尾順一 (2010) ドイツ体操祭と国民統合. 創文企画 : 東京, p.38.
- 41) 稲垣正浩 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店 : 東京, p.852.
- 42) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設――一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社 : 東京, pp.48-49.
- 43) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設――一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社 : 東京, p.49.
- 44) 自由と統一と愛国心を設立理念として、1815 年にイエーナとギーセン大学ではじめて学生組合ブルシェンシャフトが誕生した。彼らは解放戦争に参加し、国民感情を抱いて故国に戻り、「名誉、自由、祖国」を合言葉として、戦場での一義勇軍の旗であった黒・赤・金を掲げて学生組合ブルシェンシャフトを結成した (木村精二 (2015) 新版 世界各国史 13 ドイツ史. 山川出版社 : 東京, p.186.)。
- 45) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設――一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社 : 東京, p.52.

- 46) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.87.
- 47) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設—一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社: 東京, p.53.
- 48) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, pp.87-88.
- 49) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.88.
- 50) 松尾順一 (2010) ドイツ体操祭と国民統合. 創文企画: 東京, pp.38-39.
- 51) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.88.
- 52) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設—一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社: 東京, p.97.
- 53) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, pp.88.
- 54) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.89.
- 55) 坂口修平 (2001) 木村靖二編 ドイツ史. 山川出版社: 東京, p.176.
- 56) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.89.
- 57) Neuendorff, E.(1927) Die deutschen Leibesübungen : Großes Handbuch für turnen, Spiel und sport / herausgegeben von Edmund NeuendorffWilhelm Andermann Verlag, Berlin, S.17.
- 58) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.90.
- 59) 成田十次郎 (1977) 近代・スポーツ史 I. 不昧堂: 東京, pp.475-477.
- 60) 山本徳郎 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店: 東京, p.852.
- 61) 成田十次郎 (1977) 近代・スポーツ史 I. 不昧堂: 東京, pp.478-479.
- 62) 成田十次郎 (1977) 近代・スポーツ史 I. 不昧堂: 東京, p.538.
- 63) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, pp.88-90.
- 64) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設—一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社: 東京, p.99.
- 65) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.93.
- 66) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設—一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社: 東京, pp.102-103.
- 67) 松尾順一 (2010) ドイツ体操祭と国民統合. 創文企画: 東京, p.39.
- 68) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.93.
- 69) 小原淳 (2011) フォルクと帝国創設—一九世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察. 彩流社: 東京, p.103-104.

- 70) 松尾順一 (2010) ドイツ体操祭と国民統合. 創文企画: 東京, pp.41.
- 71) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.95.
- 72) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, p.94.
- 73) 松尾順一 (2010) ドイツ体操祭と国民統合. 創文企画: 東京, pp.75-76.
- 74) 稲垣正浩 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店: 東京, p.853.
- 75) 楠戸一彦・岸野雄三編 (1979) 体育・スポーツ人物思想史. 不昧堂: 東京, p.319.
- 76) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.III. Wilhelm Limpert, Dresden, S.169-170.
- 77) 木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂: 東京, p.97.
- 78) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.III. Wilhelm Limpert, Dresden, S.186.
- 78) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.III. Wilhelm Limpert, Dresden, S.187.
- 79) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.III. Wilhelm Limpert, Dresden, S.188.
- 80) 楠戸一彦・岸野雄三編 (1979) 体育・スポーツ人物思想史. 不昧堂: 東京, p.329.
- 81) 楠戸一彦・岸野雄三編 (1979) 体育・スポーツ人物思想史. 不昧堂: 東京, p.330.
- 82) 楠戸一彦・岸野雄三編 (1979) 体育・スポーツ人物思想史. 不昧堂: 東京, p.330.
- 83) 今村嘉雄 (1955) 西洋体育史. 日本体育社: 東京, p.159.
- 84) 松尾順一 (2010) ドイツ体操祭と国民統合. 創文企画: 東京, p.38.
- 85) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社: 東京, pp.143-144.
- 86) 楠戸一彦・岸野雄三編 (1979) 体育・スポーツ人物思想史. 不昧堂: 東京, p.329.
- 87) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.III. Wilhelm Limpert, Dresden, S.148.
- 88) Neuendorff, E.(1927) Die deutschen Leibesübungen : Großes Handbuch für turnen, Spiel und sport / herausgegeben von Edmund Neuendorff Wilhelm Andermann Verlag, Berlin, S.19.
- 89) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.IV. Wilhelm Limpert, Dresden, S.107.
- 90) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.III. Wilhelm Limpert, Dresden, S.184.

- 91) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.III. Wilhelm Limpert, Dresden, S.184-185.
- 92) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.III. Wilhelm Limpert, Dresden, S.185.
- 93) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.III. Wilhelm Limpert, Dresden, S.185.
- 94) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社 : 東京, p.142.
- 95) 成田十次郎 (1977) 近代ドイツ・スポーツ史. 講談社 : 東京, p.535.
- 96) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.IV. Wilhelm Limpert, Dresden, S.102-106.
- 97) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社 : 東京, pp.152-153.
- 98) E. Neuendorff. (1932) Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. Bd.IV. Wilhelm Limpert, Dresden, S.128.
- 99) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社 : 東京, pp.152-153.
- 100) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社 : 東京, p.154.
- 101) イギリスでは、遊びや賭を楽しむ伝統的な国民性、パブリックスクールにおけるエリート教育としてのスポーツの導入、および、産業革命をいち早く達成し、世界に広域的な貿易圏を開拓したことなどによって、スポーツの近代化を強力に推進させていった。サッカーがドイツに伝播したのは 1875 年頃で、その後、1900 年にドイツサッカー連盟が設立された。

第 2 章

- 1) 平野正久、長尾十三二 (1988) 新教育運動の生起と展開. 明治図書出版 : 東京, p.55.
- 2) 木内洋一、アンドレアス・ペーンケ、小林万里子 (2010) 19 世紀末・20 世紀初頭におけるハンブルクの新教育. 鳴門教育大学研究紀要 第 25 巻, p.2.
- 3) 鈴木幹雄 (1999) ハンブルクにおける新教育運動の光と陰《教育観の革新》と《リーダー的教師の「苦悩」》との接点に位置する教育改革運動. 神戸大学発達科学部研究紀要 第 6 巻第 2 号, p.37.
- 4) 平野正久、長尾十三二 (1988) 新教育運動の生起と展開. 明治図書出版 : 東京, pp.55-56.
- 5) 平野正久、長尾十三二 (1988) 新教育運動の生起と展開. 明治図書出版 : 東京, p.56.

- 6) A.リヒトヴァルク、岡本定男訳 (1985) 芸術教育と学校—ドイツ芸術教育運動の源流—。
明治図書出版：東京， p.15.
- 7) 平野正久、長尾十三二 (1988) 新教育運動の生起と展開。明治図書出版：東京， p.57.
- 8) 鈴木幹雄 (1999) ハンブルクにおける新教育運動の光と陰《教育観の革新》と《リー
ダー的教師の「苦悩」》との接点に位置する教育改革運動。神戸大学発達科学部研究紀要
第6巻第2号， p.37.
- 9) A.リヒトヴァルク、岡本定男訳 (1985) 芸術教育と学校—ドイツ芸術教育運動の源流—。
明治図書出版：東京， p.17.
- 10) ヘルマン・ノール、平野正久訳 (1987) ドイツの新教育運動。明治図書出版：東京，
p.119.
- 11) ヘルマン・ノール、平野正久訳 (1987) ドイツの新教育運動。明治図書出版：東京， p.119.
- 12) K.H.Günther,u.a.,Geschichte der Erziehung. Siebente Aufl.1966.S.433.
- 13) 鈴木幹雄 (2001) ドイツにおける芸術教育学成立の課程の研究。風間書房：東京， p.29.
- 14) A.リヒトヴァルク、岡本定男訳 (1985) 芸術教育と学校—ドイツ芸術教育運動の源流—。
明治図書出版：東京， pp.36-37.
- 15) A.リヒトヴァルク、岡本定男訳 (1985) 芸術教育と学校—ドイツ芸術教育運動の源流—。
明治図書出版：東京， p.35.
- 16) 鈴木幹雄 (2001) ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究—芸術教育運動から初期 G・
オットーの芸術教育学へ—。風間書房：東京， pp.31-32.
- 17) Liselott Diem. (1991) Die Gymnastikbewegung. Herausgeber, Carl-Diem-Institut Academia
Verlag, S.15.
- 18) 鈴木幹雄 (2001) ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究—芸術教育運動から初期 G・
オットーの芸術教育学へ—。風間書房：東京， p.32.
- 19) A.リヒトヴァルク、岡本定男訳 (1985) 芸術教育と学校—ドイツ芸術教育運動の源流—。
明治図書出版：東京， pp.191.
- 20) 鈴木幹雄 (2001) ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究—芸術教育運動から初期 G・
オットーの芸術教育学へ—。風間書房：東京， pp.31-32.
- 21) 歡喜隆司 (2004) 学校改革教育学運動の先駆けとしての芸術教育運動とその民衆学校
教授への生徒能動化の刺激 (II) —ワイマール (1903)、ハンブルク (1905) での芸術教
育会議の研究—。教授研究 第25巻第2号， p.3.

- 22) 歡喜隆司 (2004) 学校改革教育学運動の先駆けとしての芸術教育運動とその民衆学校教授への生徒能動化の刺激 (II) —ワイマール (1903)、ハンブルク (1905) での芸術教育会議の研究—。教授研究 第25巻第2号, pp.6-7.
- 23) LICHTWARK, Alfred: "Die Einheit der künstlerischen Erziehung". In: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des zweiten Kunsterziehungstages in Weimar am 9., 10., 11. Oktober 1903. Leipzig: Voigtländer 1904. Nachdruck in: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des zweiten Kunsterziehungstages in Dresden, Weimar und Hamburg, Leipzig: Voigtländer 1929, S.118-127.
- 24) LICHTWARK, Alfred: "Die Einheit der künstlerischen Erziehung". In: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des zweiten Kunsterziehungstages in Weimar am 9., 10., 11. Oktober 1903. Leipzig: Voigtländer 1904. Nachdruck in: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des zweiten Kunsterziehungstages in Dresden, Weimar und Hamburg, Leipzig: Voigtländer 1929, S.124-125
- 25) Lichtwark, A. (1906) Musik und Gymnastik. In: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des 3. Kunsterziehungstages in Hamburg, Leipzig, S.25-26.
- 26) Lichtwark, A. (1906) Musik und Gymnastik. In: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des 3. Kunsterziehungstages in Hamburg, Leipzig, S.25-26.
- 27) 政府機関関係では、バーデン、ザクセン - アルターブルグ、エルザス - ロートリンゲン、メッツ、シュレスヴィック、カッセルの州政府とハンザ都市ブレーメン、リューベックとハンブルクの政府が招待された。市当局の関係者は、シュレスヴィックとドルトムント、フランクフルト、アルトナ、シャルロテンブルク、ケムニッツ、ドレスデン、ライプツヒ、キール、ザール地方のハレ、マクデブルク、ミュンヘンの代表者たちが出席した。
- 28) Braun, G. (1957) Die Schulmusikerziehung in Preußen, Kassel/Basel, S.53-54.
- 29) 輪舞 (Reigen) は、シュピースが女子の体育のために考案した、音楽とダンスと体育を結合した運動で、幾何学的な美を求める集団秩序運動である。女子に最も効果的なかたちで秩序を形成できると考えられ、女子体育に強い影響を与えた教材である。
- 30) Lichtwark, A. (1906) Musik und Gymnastik. In: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des 3. Kunsterziehungstages in Hamburg, Leipzig, S.26.
- 31) Lichtwark, A. (1906) Musik und Gymnastik. In: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des

3. Kunsterziehungstages in Hamburg, Leipzig,S.28.
- 32) Lichtwark, A. (1906) Musik und Gymnastik. In: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des 3. Kunsterziehungstages in Hamburg, Leipzig,S.27.
- 33) Lichtwark,A. (1906) Musik und Gymnastik. In: Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des 3. Kunsterziehungstages in Hamburg, Leipzig,S.27.
- 34) Batka,R. (1906) Musikpflege im Hause. In:Kunsterziehung,Leipzig,S.44.
- 35) Tervooren,H. (1987) Die rhythmisch-musikalische Erziehung im ersten Drittel unseres Jahrhunderts.Frankfurt am Main:PETER LANG,S.126.
- 36) Johannsen,H. (1906) Der Schulgesang als Bildungsmittel. In:Kunsterziehung. Ergebnisse u. Anregungen d. 3. Kunsterziehungstages,Leipzig,S.65.
- 37) Johannsen,H. (1906) Der Schulgesang als Bildungsmittel. In:Kunsterziehung. Ergebnisse u. Anregungen d. 3. Kunsterziehungstages,Leipzig,S.77.
- 38) Schmidt,F.A. (1906) Körperschönheit durch Leibesübungen. In:Kunsterziehung,Leipzig, S.170.
- 39) Schmidt,F.A. (1906) Körperschönheit durch Leibesübungen. In:Kunsterziehung,Leipzig, S.171.
- 40) Schmidt,F.A. (1906) Körperschönheit durch Leibesübungen. In:Kunsterziehung,Leipzig, S.170-171.
- 41) Sparbier,J. (1906) Spiele und volkstümliche Übungen. In:Kunsterziehung,Leipzig,S.195.
- 42) Sparbier,J. (1906) Spiele und volkstümliche Übungen. In:Kunsterziehung,Leipzig,S.186.
- 43) Möller,K. (1906) Bedeutung der Leibesübung in der ästhetischen Erziehung. In:Kunsterziehung,Leipzig,S.293-294.
- 44) Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des dritten Kunsterziehungstages in Hamburg am 13., 14., 15. Oktober 1905 ; Musik und Gymnastik. Leipzig: Voigtländer 1906,S.117-119.
- 45) Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des dritten Kunsterziehungstages in Hamburg am 13., 14., 15. Oktober 1905 ; Musik und Gymnastik. Leipzig: Voigtländer 1906,S.119.
- 46) Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des dritten Kunsterziehungstages in Hamburg am 13., 14., 15. Oktober 1905 ; Musik und Gymnastik. Leipzig: Voigtländer 1906,S.120.
- 47) ファウストバル (Faustball) とは、こぶしを用いるドイツ式バレーボールである。
- 48) タンバリンバル (Tamburinball) とは、バドミントンに似たイタリアの遊戯である。
- 49) コルプバル (Korbball) とは、バスケットボールに似た女子の球技である。
- 50) シュラグバル (Schlagball) とは、ラウンダーズと呼ばれる 12 人制の野球に似た球技で

ある。イギリスでは 1930 年頃まで行われていた。

- 51) Vorführung aus dem Gebiete des Turnens, Jugendspiels und Schwimmens. (1906)
In:Kunsterziehung,Leipzig,S.117-119.
- 52) Pallat,L. (1920) Kunsterziehung.In: Die deutsche Schulreform,Leipzig,S.128.
- 53) Sparbier,J. (1906) Spiele und volkstümliche Übungen. In:Kunsterziehung,Leipzig,S.195.
- 54) Pallat,L. (1926) Gymnastische Körperbildung. GYMNASTIK5/6:S.65.
- 55) Harte,E.:”Die Verschiedenen Gymnastikschulen”.:Die deutschen Leibesübungen.Großes Handbuch für Turnen,Spiel und Sport. Berlin,Wilhelm Andermann Verlag.1927.S.273.
- 56) 武田清 (1999) デルサルトの表現システムについて I. 明治大学文芸研究会文芸研究 (81) : pp.102-103.
- 57) 海野弘 (1999) モダンダンスの歴史. 新書館 : 東京, p.19.
- 58) 武田清 (1999) デルサルトの表現システムについて I. 明治大学文芸研究会文芸研究 (81) : p.104.
- 59) 武田清 (1999) デルサルトの表現システムについて I. 明治大学文芸研究会文芸研究 (81) : p.117.
- 60) 武田清 (1999) デルサルトの表現システムについて I. 明治大学文芸研究会文芸研究 (81) : pp.105-106.
- 61) スウェーデン体操とは、19 世紀初頭にスウェーデンのリング (P.H.Ling) によって創案され、生理学と解剖学に基づく徒手体操を特色とした体操の方式である。医療体操、軍隊体操、教育体操、芸術体操の 4 領域を柱とする体操の体系化を構想したリングが主として取り組んだのは、姿勢矯正のための医療体操とフェンシング・銃剣術を主とした軍隊体操であった。リングの死後、スウェーデン体操は、医療体操、軍隊体操、教育体操を包括した「健康体操」的内容として展開し、19 世紀後半には、厳格な姿勢矯正を目的とする体操を推進しようとするグループと、動きの自然さを強調しようとするグループとの間で対立が生じ、20 世紀以降、後者が主流を占めていった。
(日本体育学会監修 (2006) 最新スポーツ科学事典. 平凡社 : 東京, p.626.
- 62) 稲垣正浩 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店 : 東京, p.449.
- 63) 三浦雅士 (1994) 身体の零度. 講談社 : 東京, p.248.
- 64) 木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂 : 東京, pp.133.
- 65) 木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂 : 東京, pp.132-134.

- 66) 中村秋一 (1941) ドイツ舞踊文化. 人文閣: 東京, p.151.
- 67) 稲垣正浩 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店: 東京, p.450.
- 68) 新妻弓子 (1989) Bess M. メンゼンディークの女性体操に関する一考察. 見形道夫先生退職記念論集刊行会編. 体操とスポーツと教育と. 見形道夫先生退職記念論集刊行会: 東京, p.234.
- 69) 新妻弓子 (1989) Bess M. メンゼンディークの女性体操に関する一考察. 見形道夫先生退職記念論集刊行会編. 体操とスポーツと教育と. 見形道夫先生退職記念論集刊行会: 東京, pp.234-235.
- 70) 稲垣正浩 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店: 東京, p.450.
- 71) 木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂: 東京, p.130.
- 72) 木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂: 東京, p.131.
- 73) 中村秋一 (1941) ドイツ舞踊文化. 人文閣: 東京, pp.155-156.
- 74) L.チョクシー/R.エイブラムソン/A.ガレスピー/D.ウッズ共著 板野和彦訳 (1994) 音楽教育メソードの比較. 全音楽譜出版社: 東京, p.53.
- 75) L.チョクシー/R.エイブラムソン/A.ガレスピー/D.ウッズ共著 板野和彦訳 (1994) 音楽教育メソードの比較. 全音楽譜出版社: 東京, p.54.
- 76) L.チョクシー/R.エイブラムソン/A.ガレスピー/D.ウッズ共著 板野和彦訳 (1994) 音楽教育メソードの比較. 全音楽譜出版社: 東京, pp.61-62.
- 77) L.チョクシー/R.エイブラムソン/A.ガレスピー/D.ウッズ共著 板野和彦訳 (1994) 音楽教育メソードの比較. 全音楽譜出版社: 東京, p.63.
- 78) 海野弘 (1999) モダンダンスの歴史. 新書館: 東京, p.67.
- 79) 海野弘 (1999) モダンダンスの歴史. 新書館: 東京, p.67.
- 80) クラーゲスは、精神と生命の二元論的人間像を描き、精神から生じる理性や合理的な諸力を否定し、生命の基本原理としての心情を肯定する立場をとった生の哲学者である。クラーゲスによれば、生命が精神の恣意によって犯されることのない純粹状態が「自然」であるという (木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂: 東京, p.120.)。
- 81) 板垣了平 (1990) 体操論. アイオーエム: 東京, p.46.
- 82) 板垣了平 (1990) 体操論. アイオーエム: 東京, pp.51-52.
- 83) 木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂: 東京, p.123.
- 84) 「パ」(Pas) とはバレエ用語で、歩幅、歩調、ダンスのステップのことである。

- 85) 田丸理沙・香川檀編 (2004) ベルリンのモダンガール. 平文社: 東京, p.194.
- 86) キーワード事典編集部 (1995) バレエ・ダンスの饗宴. 洋泉社: 東京, p.20.
- 87) 木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂: 東京, p.140.
- 88) 片岡康子編 (1999) 20世紀舞踊の作家と作品世界. 遊戯社: 東京, pp.28-29.
- 89) 片岡康子編 (1999) 20世紀舞踊の作家と作品世界. 遊戯社: 東京, p.22.
- 90) 片岡康子編 (1999) 20世紀舞踊の作家と作品世界. 遊戯社: 東京, p.22.
- 91) 木村真知子 (1989) 自然体育の成立と展開. 不昧堂: 東京, p.143.
- 92) 稲垣正浩 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店: 東京, p.450.
- 93) 舞踊教育研究会編 (1991) 舞踊学講義. 大修館: 東京, p.178.
- 94) 海野弘 (1999) モダンダンスの歴史. 新書館: 東京, p.73.
- 95) 邦正美 (1968) 舞踊の文化史. 岩波書店: 東京, pp.163-164.
- 96) 邦正美 (1968) 舞踊の文化史. 岩波書店: 東京, pp.159-164.
- 97) 慶應義塾大学アート・センター編 (2003) 身体をキャプチャーするー表現主義舞踊の系譜. 慶應義塾大学アート・センター: 東京, p.20.
- 98) 舞踊教育研究会編 (1991) 舞踊学講義. 大修館: 東京, p.49.
- 99) キーワード事典編集部 (1995) バレエ・ダンスの饗宴. 洋泉社: 東京, p.151.
- 100) 小峰総一郎 (2002) ベルリン新教育の研究. 風間書房: 東京. pp.354-355.
- 101) 小峰総一郎 (2002) ベルリン新教育の研究. 風間書房: 東京. p.358.
- 102) 小峰総一郎 (2002) ベルリン新教育の研究. 風間書房: 東京. p.365.
- 103) フランツ・ヒルカー (Franz Hilker,1881-1969)。比較教育学者で学校改革を企図したテューリングゲンの上級視学に招聘され、学校改革に着手した。
- 104) 小峰総一郎 (2002) ベルリン新教育の研究. 風間書房: 東京. pp.328-330.
- 105) 小峰総一郎 (2002) ベルリン新教育の研究. 風間書房: 東京. p.355.
- 106) JAHRBUCH DES ZENTRALINSTITUTS FÜR ERZIEHUNG UND UNTERRICHT 1922,S.188.
- 107) JAHRBUCH DES ZENTRALINSTITUTS FÜR ERZIEHUNG UND UNTERRICHT 1922,S.188.
- 108) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In: Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.411.
- 109) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:

- Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.411.
- 110) JAHRBUCH DES ZENTRALINSTITUTS FÜR ERZIEHUNG UND UNTERRICHT
1922,S.188.
- 111) JAHRBUCH DES ZENTRALINSTITUTS FÜR ERZIEHUNG UND UNTERRICHT
1922,S.188.
- 112) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.411-412.
- 113) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.411.
- 114) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.412.
- 115) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.412.
- 116) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.412.
- 117) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.413.
- 118) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.413-414.
- 119) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.414.
- 120) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.414.
- 121) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.414.
- 122) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.414.
- 123) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:
Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.414.
- 124) Harte,E. (1922) Tagung für künstlerische Körperschulung(5.-7.Oktober)in Berlin.In:

- Monatsschrift für Turnen,Spiel und Sport 2.Jahrgang,1922,S.414-415.
- 125) Beckmann,O (1933) BECKMANN'S SPORT LEXIKON.VERLAGSANSTALT OTTO BECKMANN,LEIPZIG・WIEN,S.1146.
- 126) Diem,L. (1991) Die Gymnastikbewegung : ein Beitrag zur Entwicklung des Frauensports; Herausgeber, Carl-Diem-Institut Academia Verlag,S.170.
- 127) Pallat,L. (1923) KÜNSTLERISCHE KÖRPERSCHULUNG,S.1.
- 128) 大河内保雪 (1982) 第1回ドイツ女子体育会議の体育史的意義について. 体育史の探求. 岸野雄三教授退官記念論集刊行会 : 茨城, pp.228-229.
- 129) 大河内保雪 (1982) 第1回ドイツ女子体育会議の体育史的意義について. 体育史の探求. 岸野雄三教授退官記念論集刊行会 : 茨城, p.224.
- 130) Hilker,F. (1930) Fünf Jahre Deutscher Gymnastik=Bund. GYMNASTIK11/12:S.164.
- 131) Hilker,F. (1930) Fünf Jahre Deutscher Gymnastik=Bund. GYMNASTIK11/12:S.164.
- 132) Hilker,F. (1933) Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes Aus den Ereignissen der Jahre1925-1933. GYMNASTIK11/12:S.166.
- 133) Hilker,F. (1930) Fünf Jahre Deutscher Gymnastik=Bund. GYMNASTIK11/12:S.164-165.

第3章

- 1) Hilker,F. (1926) Bundesgründung.GYMNASTIK1/2:S.25.
- 2) Hilker,F. (1926) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. Satzung. GYMNASTIK1/2:S.22.
- 3) Hilker,F. (1926) Vom Sinn unserer Arbeit. GYMNASTIK 1/2 : S. 1 .
- 4) Hilker,F. (1926) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. Satzung. GYMNASTIK1/2:S.22.
- 5) Hilker,F. (1926) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. Satzung. GYMNASTIK1/2:S.23-24.
- 6) Hilker,F. (1933) Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes. GYMNASTIK11/12:S.165-178.
- 7) Hilker,F. (1926) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. Satzung. GYMNASTIK1/2:S.24.
- 8) Hilker,F. (1926) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. Satzung. GYMNASTIK1/2:S.22.
- 9) Hilker,F. (1926) Vom Sinn unserer Arbeit. GYMNASTIK 1/2 :S. 2 .
- 10) Hilker,F. (1930) Fünf Jahre Deutscher Gymnastik=Bund.GYMNASTIK11/12:S.168.
- 11) Hilker,F. (1926) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. Satzung. GYMNASTIK1/2:S.22.
- 12) Hilker,F. (1926) Vom Sinn unserer Arbeit. GYMNASTIK 1/2 :S. 2 .
- 13) Hilker,F. (1926) Vom Sinn unserer Arbeit. GYMNASTIK 1/2 :S. 2 .

- 14) Hilker,F. (1926) Vom Sinn unserer Arbeit. GYMNASTIK 1/2 :S. 2 .
- 15) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1931) Mahnung zur Beitragszahlung.
GYMNASTIK11/12:S.189.
- 16) Holtz,L. (1931) Gymnastische Arbeit mit Arbeitslosen in der Ortsgruppe Königsberg.
GYMNASTIK11/12:S.187.
- 17) Hilker,F. (1933) Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK11/12:S.175.
- 18)Deutscher Gymnastik-Bund e.V.(1931)V. Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes.
GYMNASTIK 5/6 : S.89.
- 19) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1929) Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes
am 23. Februar 1929. GYMNASTIK 5/6 : S.85.
- 20) ヒルシュラーは、ドイツにおけるベス・メンゼンディークの体操の全権を委任されて
いる。ハーゲマン学校は、ドイツメンゼンディーク体操連盟（Bund für deutsche
Mensendieck-Gymnastik）に所属しており、応用された自由な運動のための連盟（Bund für
angewandte und freie Bewegung）は、以前、メンゼンディーク連盟に所属していた。
- 21) Günther,D. (1960) Bess Mensendieck.Leibeserziehung10:S.333.
- 22) 海野弘 (1999) モダンダンスの歴史. 新書館：東京, p.199.
- 23) 松澤慶信監修 (1996) ドイツ・ダンスの 100 年. 東京ドイツ文化センター：東京. p.39.
- 24) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) Umgang der gymnastischen Bewegung.
GYMNASTIK9/10:S.162.
- 25) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) Umgang der gymnastischen Bewegung.
GYMNASTIK9/10:S.162.
- 26) Hilker,F. (1930) Wer treibt Gymnastik?.GYMNASTIK5/6:S.65.
- 27) Hilker,F. (1930) Wer treibt Gymnastik?.GYMNASTIK5/6:S.68.
- 28) Hilker,F. (1930) Wer treibt Gymnastik?.GYMNASTIK5/6:S.69.
- 29) Hilker,F. (1930) Wer treibt Gymnastik?.GYMNASTIK5/6:S.72.
- 30) Hilker,F. (1930) Wer treibt Gymnastik?.GYMNASTIK5/6:S.73.
- 31) Hilker,F. (1930) Wer treibt Gymnastik?.GYMNASTIK5/6:S.74.
- 32) Hilker,F. (1930) Wer treibt Gymnastik?.GYMNASTIK5/6:S.74.
- 33) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1926) Erste Hauptversammlung des Deutschen
Gymnastik-Bundes in Berlin vom 18. Sept.1926. GYMNASTIK9/10: S.157.

- 34) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) 1. Antrag des auf der Hauptversammlung 1926 gewählten Ausschusses für die Ausarbeitung von Richtlinien für Laienunterricht und Berufsausbildung.GYMNASTIK7/8:S.125.
- 35) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) 1. Antrag des auf der Hauptversammlung 1926 gewählten Ausschusses für die Ausarbeitung von Richtlinien für Laienunterricht und Berufsausbildung.GYMNASTIK7/8:S.126.
- 36) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) 1. Antrag des auf der Hauptversammlung 1926 gewählten Ausschusses für die Ausarbeitung von Richtlinien für Laienunterricht und Berufsausbildung.GYMNASTIK7/8:S.126.
- 37) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) 1. Antrag des auf der Hauptversammlung 1926 gewählten Ausschusses für die Ausarbeitung von Richtlinien für Laienunterricht und Berufsausbildung.GYMNASTIK7/8:S.127.
- 38) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) 1. Antrag des auf der Hauptversammlung 1926 gewählten Ausschusses für die Ausarbeitung von Richtlinien für Laienunterricht und Berufsausbildung.GYMNASTIK7/8:S.127.
- 39) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) 1. Antrag des auf der Hauptversammlung 1926 gewählten Ausschusses für die Ausarbeitung von Richtlinien für Laienunterricht und Berufsausbildung.GYMNASTIK7/8:S.128.
- 40) Hilker,F. (1930) Fünf Jahre Deutscher Gymnastik-Bund.GYMNASTIK11/12:S.168.
- 41) ゲゾライとは「健康、社会福祉と体育のための展示会」(Ausstellung für Gesundheit,soziale Fürsorge und Leibesübungen) の略である。
- 42) Hilker,F. (1926) Die Düsseldorfer Tagung. GYMNASTIK5/6:S.65.
- 43) Pallat,L. (1926) Gymnastische Körperbildung. GYMNASTIK5/6:S.65.
- 44) Pallat,L. (1926) Gymnastische Körperbildung. GYMNASTIK5/6:S.69.
- 45) Hilker,F. (1926) Die Kulturaufgabe der Gymnastik. GYMNASTIK5/6:S.74.
- 46) Hilker,F. (1926) Gymnastische Körperbildung. GYMNASTIK5/6:S.93.
- 47) Hilker,F. (1926) Gymnastische Körperbildung. GYMNASTIK5/6:S.93.
- 48) Hilker,F. (1926) Gymnastische Körperbildung. GYMNASTIK5/6:S.93.
- 49) Hilker,F. (1926) Gymnastische Körperbildung. GYMNASTIK5/6:S.94.
- 50) Hilker,F. (1926) Die Kulturaufgabe der Gymnastik. GYMNASTIK5/6:S.74.

- 51) Harten,R (1926) Gymanstische Körperbildung. Die Leibesübungen Heft21:S.497.
- 52) Harten,R (1926) Gymanstische Körperbildung. Die Leibesübungen Heft21:S.498.
- 53) Harten,R (1926) Gymanstische Körperbildung. Die Leibesübungen Heft21:S.499.
- 54) ニルス・ブックは、固定的な姿勢を排除し、動作の連続、律動的運動、弾性、柔軟性、自由のための強度の伸張等を特徴とする体操 (Prmitif Gymnastike) を発展させた。
- 55) Harten,R (1926) Gymanstische Körperbildung. Die Leibesübungen Heft21:S.499.
- 56) Harten,R (1926) Gymanstische Körperbildung. Die Leibesübungen Heft21:S.499.
- 57) Harten,R (1926) Gymanstische Körperbildung. Die Leibesübungen Heft21:S.499.
- 58) Harten,R (1926) Gymanstische Körperbildung. Die Leibesübungen Heft21:S.500.
- 59) Harten,R (1926) Gymanstische Körperbildung. Die Leibesübungen Heft21:S.500.
- 60) Deute Gymnastik-bund e.V. (1926) Mitteilungen des Deutschen. GYMNASTIK2:S.28.
- 61) サナトリウムとは、気候が温暖で、空気の澄んだ土地に建てられた、健康回復や健康増進のための施設のことである。
- 62) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr. GYMNASTIK7/8:S.102.
- 63) Deute Gymnastik-bund e.V.(1926) Mitteilungen des Deutschen. GYMNASTIK2:S.29.
- 64) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr. GYMNASTIK7/8:S.102.
- 65) Seehaus,E.(1926) Die Wyker Zeit Entspannung, Spannung, Erneuerung. GYMNASTIK7/8:S.114-115.
- 66) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr. GYMNASTIK7/8:S.104.
- 67) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr. GYMNASTIK7/8:S.104.
- 68) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr. GYMNASTIK7/8: S.104.
- 69) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr. GYMNASTIK7/8: S.104.
- 70) Hubach,L.(1926)Die Mensendieck-Arbeit in Wyk. GYMNASTIK7/8:S.106-107.
- 71) Hubach,L.(1926) Die Mensendieck-Arbeit in Wyk. GYMNASTIK7/8: S.106.

- 72) Hubach,L. (1926) Die Mensendieck-Arbeit in Wyk. GYMNASTIK7/8:S.105.
- 73) Hubach,L.(1926) Die Mensendieck-Arbeit in Wyk. GYMNASTIK7/8:S.107.
- 74) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK7/8:S.103-104.
- 75) Tschopp,M.(1926) Die Arbeit in der Bodegruppe. GYMNASTIK7/8:S.108.
- 76) Tschopp,M.(1926) Die Arbeit in der Bodegruppe. GYMNASTIK7/8:S.108-109.
- 77) Tschopp,M.(1926) Die Arbeit in der Bodegruppe. GYMNASTIK7/8:S.108.
- 78) Tschopp,M.(1926) Die Arbeit in der Bodegruppe. GYMNASTIK7/8:S.108.
- 79) Tschopp,M.(1926) Die Arbeit in der Bodegruppe. GYMNASTIK7/8:S.109.
- 80) Schmidts,M.(1926) Die Arbeit in der Labangruppe. GYMNASTIK7/8:S.109.
- 81) Schmidts,M.(1926) Die Arbeit in der Labangruppe. GYMNASTIK7/8:S.109.
- 82) Schmidts,M.(1926) Die Arbeit in der Labangruppe. GYMNASTIK7/8:S.109.
- 83) Schmidts,M.(1926) Die Arbeit in der Labangruppe. GYMNASTIK7/8:S.109.
- 84) Ottendorf,G.(1926) Leichtathletik und Spiele im Arbeitsplane des Wyker Lehgangs.
GYMNASTIK7/8:S.111.
- 85) Ottendorf,G.(1926) Leichtathletik und Spiele im Arbeitsplane des Wyker Lehgangs.
GYMNASTIK7/8:S.111.
- 86) Ottendorf,G.(1926) Leichtathletik und Spiele im Arbeitsplane des Wyker Lehgangs.
GYMNASTIK7/8:S.112.
- 87) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK7/8:S.104.
- 88) Seehaus,E.(1926) Die Wyker Zeit Entspannung, Spannung, Erneuerung.
GYMNASTIK7/8:S.114.
- 89) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK7/8:S.104.
- 90) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK7/8:S.104-105.
- 91) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK7/8:S.103.
- 92) Tschopp,M.(1926) Die Arbeit in der Bodegruppe. GYMNASTIK7/8: S.108.

- 93) Ottendorf,G.(1926) Leichtathletik und Spiele im Arbeitsplane des Wyker Lehgangs.
GYMNASTIK7/8:S.112.
- 94) Hilker,F. (1926) Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK7/8: S.1 05.
- 95) Deutche Gymnastik-bund e.V. (1927) II .Gymnastischer Frauenlehrgang in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK3/4:S.66.
- 96) Ludwig,S. (1927) Erkenntnisse aus meiner Arbeit.GYMNSSTIK7/8:S.108.
- 97) Ludwig,S. (1927) Erkenntnisse aus meiner Arbeit.GYMNASTIK7/8:S.108.
- 98) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1927) Eine feine Turnstunde. GYMNASTIK7/8:S.110.
- 99) Deutche Gymnastik-bund e.V. (1927) II .Gymnastischer Frauenlehrgang in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK3/4:S.66.
- 100) Deutche Gymnastik-bund e.V. (1928) III.Gymnastischer Frauenlehrgang in Wyk auf Föhr
vom11.April bis 16.Mai 1928.GYMNASTIK3/4:S.59.
- 101) Fischer,L. (1928) III.Gymnastischer Frauenlehrgang in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK9/10:S.157.
- 102) Hilker,F. (1933) Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes Aus den Ereignissen der Jahre
1925-1933. GYMNASTIK11/12:S.172.
- 103) Fischer,L. (1928) III.Gymnastischer Frauenlehrgang in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK9/10:S.157.
- 104) Fischer,L. (1928) III.Gymnastischer Frauenlehrgang in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK9/10:S.158.
- 105) Fischer,L. (1928) III.Gymnastischer Frauenlehrgang in Wyk auf Föhr.
GYMNASTIK9/10:S.158.
- 106) Deutche Gymnastik-bund e.V. (1931) Tagung und 5.Hauptversammlung des Deutschen
Gymnastik-Bundes in Münnchen vom 27.Februar bis 1.März.GYMNASTIK3/4:S.24.
- 107) Hilker,F. (1931) Die Münchener Gymnastiktagung.GYMNASTIK5/6:S.65.
- 108) Hilker,F. (1931) Die Münchener Gymnastiktagung.GYMNASTIK5/6:S.65.
- 109) Hilker,F. (1931) Die Münchener Gymnastiktagung.GYMNASTIK5/6:S.65.
- 110) Hilker,F. (1931) Die Münchener Gymnastiktagung.GYMNASTIK5/6:S.67.
- 111) Hilker,F. (1931) Die Münchener Gymnastiktagung.GYMNASTIK5/6:S.66.

- 112) Pallat,L. (1926) Gymnastische Körperbildung.GYMNASTIK5/6:S.69.
- 113) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1931) V. Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK5/6:S.89.
- 114) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1931) V. Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK5/6:S.89.
- 115) Hilker,F. (1933) Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes. GYMNASTIK11/12:S.175-176.
- 116) Edith von Arps-Aubert (2010) Das Arbeitskonzept von Elsa Gindler (1885-1961),Verlag Dr.Kovač,Hamburg.p.117.
- 117) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1931) V. Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK5/6:S.89.
- 118) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1931) V. Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK5/6:S.90.
- 119) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1929) Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes am 23. Februar 1929. GYMNASTIK5/6 : S.85.
- 120) Deutscher Gymnastik-Bund e.V. (1931) V. Hauptversammlung des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK5/6:S.89.
- 121) Edith von Arps-Aubert (2010) Das Arbeitskonzept von Elsa Gindler (1885-1961),Verlag Dr.Kovač,Hamburg.p.107.
- 122) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社 : 東京. p.292.
- 123) Hilker,F. (1933) An die Mitglieder und Freunde des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK7/8:S.101.
- 124) Hilker,F. (1933) An die Mitglieder und Freunde des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK7/8:S.101.
- 125) Hilker,F. (1933) An die Mitglieder und Freunde des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK7/8:S.101-102.
- 126) Hilker,F. (1933) An die Mitglieder und Freunde des Deutschen Gymnastik-Bundes.GYMNASTIK7/8:S.102-103.
- 127) 成田十次郎 (1975) 世界教育史大系 31 体育史. 講談社 : 東京. p.293.
- 128) Edith von Arps-Aubert (2010) Das Arbeitskonzept von Elsa Gindler(1885-1961) ,Verlag Dr.Kovač,Hamburg.p.110.

第4章

1) 表-1から確認されるゲーテは、周知のとおりドイツを代表する文豪で、ドイツ体操連合の発足時には既に故人であったが、ゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』の内容がドイツ体操連合の活動方針やその骨子となる体操認識に多くの示唆を与えることから寄稿論文として転用されたものと推察される。参考までに転用された3本の論文を以下に挙げておきたい。

1. v.Goethe,J,W. (1932) Die pädagogische Provinz. Aus „Wilhelm Meisters Wanderjahre“. GYMNASTIK3/4 : S.33-40.

2. v.Goethe,J,W. (1932) Ausdrucksbildung. Aus „Wilhelm Meisters“. GYMNASTIK7/8 : S.97-108.

3. v.Goethe,J,W. (1932) Die Kenntnis der menschlichen Gestalt. Aus „Wilhelm Meisters Wanderjahre“. GYMNASTIK9/10 : S.129-137.

2) Böhme,F. (1926) Tänzerische Gymnastik. GYMNASTIK1/2:S.11.

3) Böhme,F. (1926) Die Raumlehre der tänzerischen Bewegung. GYMNASTIK9/10:S.136.

4) Kallmeyer ,H. (1927) Vom Wesen des Ausdrucks und seiner Beziehung zur Arbeit am Körper des Menschen. GYMNASTIK11/12:S.177.

5) Döpp-Vorwald,H. (1926) Bewegungsarbeit und Menschenbildung. GYMNASTIK3/4:S.43.

6) Schmidts,M. (1926) Die Arbeit in der Labangruppe Bericht über den Wlker Lehrgang. GYMNASTIK7/8: S.109.

7) Langaard,R. (1928) Über Bewegung. GYMNASTIK5/6:p.65.

8) Diesing,H. (1932) Versuch einer Klärung der inneren Zusammenhänge von Musik und körperlicher Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.108.

9) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8: S.109.

10) Medau,H.(1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik. GYMNASTIK3/4:S.45-47.

11) カール・オルフは、ドイツ生まれの作曲家である。オルフは子どもたちを音楽の世界へと誘い、子どもたちの想像や空想を膨らませる力強い方法を世界に紹介した。オルフはギュンターとともに、1924年に体操学校としてギュンター学校を設立した。ギュンターが体操やダンス、トレーニングの責任者であり、オルフは授業や演奏会で使用する曲を作っていた(L.チョクシー、他3名・板野和彦訳(2000)音楽教育メソードの比較.全音楽譜出版社:東京, pp.141-142.)。

- 12) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.109.
- 13) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.109.
- 14) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.109.
- 15) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.110-111.
- 16) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.111.
- 17) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.111.
- 18) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.113.
- 19) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.113.
- 20) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.113.
- 21) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.113.
- 22) オルフのシュールヴェルク (Orff-Schulwerk) とは、ギュンター学校で音楽、体操、舞踊を総合的に習得することをめざして、1931年に考案された音楽教育法である。
- 23) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.113.
- 24) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.113-114.
- 25) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.114-115.
- 26) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.116.
- 27) 拍節とは連続するいくつかの拍の間に、アクセントの強弱（強拍、弱拍）の周期的パターン（拍子）が生じたとき、そこに確立されるリズム構造をいう（海老澤敏、他3名（2004）音楽中辞典. 音楽之友社：東京, p.502）。
- 28) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.117-118.
- 29) Günther,D.(1933) Die Einheit von Musik und Bewegung. GYMNASTIK7/8:S.118-120.
- 30) Detuscher Gymnastik-Bund e. V.(1931) Mitteilungen des Deutschen Gymnastikbundes e. V. und der ihm angeschlossen Schulen und Bünde. GYMNASTIK11/12: S.190.
- 31) Medau,H.(1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik. GYMNASTIK3/4:S.46.
- 32) Medau,H.(1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik. GYMNASTIK3/4:S.47.
- 33) Medau,H.(1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik. GYMNASTIK3/4:S.48.
- 34) Medau,H.(1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik. GYMNASTIK3/4:S.49-50.
- 35) 楽曲の途中で調を変えること。例えばト長調からホ短調に調を変えることをいう。
- 36) Medau,H.(1933) Entstehung der Formen in Bewegung und Musik. GYMNASTIK3/4:S.50.
- 37) ドイツ体育大学 (Deutsche Hochschule für Leibesübungen) は、1920年5月5日にベルリ

ンに開設された。同大学は、体育・スポーツの普及、体育教師養成、教科としての体育科の発展、体育科学の発展を目的としてカール・ディームによってドイツ初の体育大学として設立された。

38) Hilker,F. (1933) Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes. GYMNASTIK 11/12:S.168.

機関誌『ジムナスティック』（1926年－1933年）の寄稿論文目録

1926年

月号	著者名	論文タイトル	原文	頁
1/2	F.Hilker	我々の活動の目的	Vom Sinn unserer Arbeit	1
	E.G.Dresel	体操の必然性	Die Notwendigkeit der Gymnastik	4
	H.Medau	教育と授業の基本としてのリズム的体操	Rhythmische Gymnastik als Grundlage der Erziehung und des Unterrichts	6
	von Rohden-Langgaard	動きについて	Über Bewegung	9
	F.Böhme	ダンス的な体操	Tänzerische Gymnastik	11
	H.Kallmeyer-simon	健康体操	Heilgymnastik	14
	J.Lichtenstaedter	社会的な女性労働の枠組みにおける体操課題	Die Aufgabe der Gymnastik im Rahmen der sozialen Frauenarbeit	16
	F.Hilker	体操運動の歴史から I. フランソワ・デルサルト	Aus der Geschichte der gymnastischen Bewegung I.François Delsarte	19
3/4	von Rohden-Langgaard	教育と運動について	Über Erziehung und Bewegung	33
	F.Hilker	身体教育に関するペスタロッチの見解	Pestalozzis Anschauungen über Körpererziehung	34
	H.Medau	ボーデの表出体操の基本	Die Grundlagen der Ausdrucksgymnastik von Dr.Bode	38
	H.Doepp-Vorwald	運動訓練と人格形成	Bewegungsarbeit und Menschenbildung	41
	E.Plockross	体操と発声訓練	Gymnastik und Stimmbildung	45
	F.Hilker	体操運動の歴史から II. ベス・メンゼンディークと ドイツメンゼンディーク体操	Aus der Geschichte der gymnastischen Bewegung II.Frau Dr.Beß M.Mensendieck und die Deutsche Mensendieck-Gymnastik	48
5/6	L.Pallat	体系的な身体教育	Gymnastische Körperbildung	65
	F.Hilker	体操による文化の課題	Die Kulturaufgabe der Gymnastik	69
	H.Kallmeyer-simon	ジュヌヴィエーブ・ステバンの仕事から	Aus der Arbeit von Geneviève Stebbins	74
	E.Gindler	専門家の体操	Die Gymnastik des Berufsmenschen	82
	F.Hilker	プロイセンの高等女学校における身体教育のための新指導要項	Die neuen Richtlinien für die körperliche Erziehung an den höheren Mädchenschulen Preussens	89

7/8	F.Hilker	体操的な女子教育課程の構築と経過	Aufbau und Verlauf des Gymnastischen Frauenlehrgangs in Whk auf Föhr	101
	L.Hubach	ヴィークでのメンゼンディークの活動	Die Mensendieck-Arbeit in Whk	105
	M.Tschopp	ボーデグループでの活動	Die Arbeit in der Bodegruppe	107
	M.Schmidts	ラバングループでの活動	Die Aeebit in der Labangruppe	109
	G.Ottendorff	ヴィーク講習会の活動計画における 陸上競技と遊戯	Leichtsthtletik und Spiele im Arbeitsplane des Wyker Lehrgangs	110
	Gmelin	春の北海での女性体操	Frauegymnastik im Nordseefühling	112
	E.Seehaus	ヴィークでの時間	Die Whker Zeit	113
	H.Medau	ボーデの表出体操におけるヴァルネミュンデでの 教育学的講習会の課題	Die Aufgabe des Warnemünder Pädagogischen Lehrgangs in der Ausdrucksgymnastik Dr.Bode	116
	M.Siegfried	学校の中での体操	Die Gymnastik in der Schule	120
	W.Krenn	ヴァルネミュンデでの講習会は参加者に何を 提供するか	Was der Warnemünder Lehrgang den Teilnehmern gab	121
9/10	F.Böhme	ダンス的な動きの空間訓練	Die Raumlehre der tänzerischen Bewegung	134
	R.Loeszler	ヴルツブルグのラバン振付養成所	Das "Choreographische Institut Laban" in Würzburg	142
	F.Böhme	合唱舞踊から I	Von den Bewegungschören	145
	M.Gleissner	合唱舞踊から II	Von den Bewegungschören	149
	H.Döpp-Vorwald	ラバンの活動における教育的観点	Pädagogische Perspektiven der Laban-Arbeit	151
	K.Naue	合唱的な体験	Chorisches Erlebnis	153
	F.Böhme	ダンスの文献	Tanzliteratur	154
11/12	H.Ottendorff	古典と現代的な身体文化	Antike und moderne Körperkultur	166
	E.G.Dresel	体操の衛生的な意義	Die hygienische Bedeutung der Gymnastik	172
	H.Senff	身体教育と音楽	Körpererziehung und Musik	181
	H.Kallmeyer-simon	身体教育と表現形式	Körpererziehung und Ausdrucksgestaltung	185

1927 年

月号	著者名	論文タイトル	原文	頁
1/2	H.Pestalozzi	自然と芸術	Natur und Kunst	1
	H.Pestalozzi	身体教育について	Über Körperbildung	3
	E.Klinge	身体教育の問題	Fragen der Körperschule	16
	R.Bode	システムか身体トレーニングか？	System oder Körperschule?	25
3/4	H.v.Berlepsch-Valendas	反動	Gegenbewegung	41
	F.Klatt	我々の時代の身体的危機	Die Körperliche Not unserer Zeit	46
	D.Günther	教育学的要素としての体操	Gymnastik als pädagogischer Faktor	53
	K.Sackur	子供と一緒にを行うメンゼンディーク体操	Mensendieck-Gymnastik mit Kindern	60
5/6	F.Hilker u. L.Schreyer	芸術と教育についての概念	Gedanken über Kunst und Erziehung	73
7/8	H.H.Sesemann	身体教育と学校	Körpererziehung und Schule	105
	S.Ludwig	ヴィークでの第 2 回女性の体操講習期間中に 行われた私の活動からの洞察	Erkenntnisse aus meiner Arbeit während des 2. Gymnastischen Frauenlehrgangs in Whk	108
	E.Wittkower	小児の身体的教育について	Über die körperliche Erziehung des Kleinkindes	110
	M.Schmidts	身体形成と概観	Körperbildung und Gesamtbildung	111
	E.Müller	リズム的な教育について	Über rhythmische Erziehung	114
	H.Ottendorff	プロイセンにおけるツルネン、スポーツ教員養成 の再編の問題に向けて	Zur Frage der Neuordnung der Ausbildung der Turn-und Sportlehrer und -lehrerinnen in Preußen	117
9/10	H.v.Kleist	マリオネット劇場について	Über das Marionettentheater	137
	M.Uhlig	3 歳までの子供の運動発展	Die Entwicklung der kindlichen Bewegung bis in das dritte Lebensjahr	143
	M.Bergemann-Koenitzer	立体的構成と体操	Plastisches Gestalten und Gymnastik	153
	H.Döpp-Vorwald	体操と学校	Gymnastik und Schule	159
11/12	F.Hilker	体操運動の歴史から	Aus der Geschichte der gymnastischen Bewegung	167
	H.Kallmeyer-Simon u. F.Lauterbach	表現の本質と人間の身体活動の関連性から	Vom Wesen des Ausdrucks und seiner Beziehung zur Arbeit am Körper des Menschen	170

1928 年

月号	著者名	論文タイトル	原文	頁
1/2	F.Hilker	1928 年における体操の課題	Gymnastischen Aufgabe im Jahre 1928	1
	M.Buchholz u. E.. Vogler	社会的に応用された体操と身体育成	Sozial angewandte Gymnastik und Körperpflege	5
	I.Hoeborn	保育所における社会的な体操活動と身体育成的な活動の必要性	Notwendigkeit der sozial-gymnastischen und körperpflegerischen Tätigkeit an Kinderheimen	9
	M.Juengling	保育所の中での体操	Gymnastik im Kleinkinderheim	12
	L.Jahn	フリーデン保育園における虚弱体質児との活動	Arbeit mit Rückenschwächlingen im Kinderheim Flieden	13
	I.Müller	ゲルスフェルトでの体操と空気浴の時間	Gymnastik-Luftbadestunden in Gersfeld	14
	E.Meiners	ケルンでの社会的な体操	Soziale Gymnastik in Köln	16
	C.Rediker	ハノーファーにおける女子刑務所での体操授業	Gymnastikunterricht im Frauengefängnis in Hannover	17
S.Rühl	精神病の子供との体操	Gymnastik mit psychopathischen Kindern	18	
3/4	L.Schreyer	運動する人	Der bewegte Mensch	33
	E.Klatt	福祉施設での身体教育	Körpererziehung in den Fürsorgeanstalten	50
5/6	von Rohden-Langgaard	動きについて	Über Bewegung	65
	von Rohden-Langgaard	ベルリンを取り巻く体操に関して	Über Gymnastik zu umstehenden Bilden	67
	M.Deinhardt	ノヴァーリスの断章から	Aus den Fragmenten des Novalis	71
	M.Deinhardt	1838 年から体操に関するいくつか	Etwas über Gymnastik aus dem Jahre 1838	76
	I.Rost	1通の手紙	Ein Brief	79
7/8	M.Uhlig	自然法則にかなった基礎をベースにした水泳授業	Schwimmunterricht auf natürlicher Grundlage	97
	J.Gutsmuths	水泳	Schwimmen	105
	F.Klatt	国民調査と成人教養のための ドイツ単科大学第2回会議	Die zweite Akademie der Deutschen Schule für Volksforschung und Erwachsenenbildung	109
	H.Kramer	市民大学での生活と知的労働組合との関連に おける体操活動	Gymnastische Arbeit im Zusammenhang mit Leben und geistiger Arbeitsgemeinschaft im Volkshochschulheim	116

9/10	F.Hilker	アメリカ合衆国における健康育成と身体教育	Gesundheitspflege und Körpererziehung in den Vereinigten Staaten	129
11/12	O.Frey	体操と社会的活動	Gymnastik und soziale Arbeit	161
	F.Klatt	小学校における身体教育	Körpererziehung in der Grundschule	164
	M. von Proseh	精神分析と呼吸	Psychoanalyse und Atmung	172

1929 年

月号	著者名	論文タイトル	原文	頁
1/2	F.W.N.Froebel	教育の原理	Grundlagen der Erziehung	1
	F.Hilker	体操の重大問題	Lebensfragen der Gymnastik	10
	E.Klatt	体操における生物学的な手掛かり	Der biologische Ansatzpunkt der Gymnastik	20
	E.Blume	我々はどのように女性界の脅迫的な退廃に抵抗するか	Wie wirken wir der drohenden Degeneration der Frauenwelt entgegen	22
3/4	W.Flörcke	ルドヴィヒ・クラージェスの哲学における表出の意味	Die Bedeutung des Ausdrucks in der Philosophie von Ludwig Klages	33
5/6	L.Langgaard	体操における現在の状況	Die gegenwärtige Lage der Gymnastik	65
	G.Bäumer	体操の社会的な意義	Die soziale Bedeutung der Gymnastik	79
7/8	D.Menzler	構成された動き	Gestaltete Bewegung	97
	F.Spies	音楽的聴力に向けた教育	Erziehung zum musikalischen Hören	99
	F.Schimmer	ヴストロウにおけるドラ・メンツラー学校の夏季活動	Die Sommerarbeit der Dora Menzler-Schule in Wustrow	102
	A.Thiele	女性と体操	Die Frau und die Gymnastik	106
	O.Frey	女性体操教員について	Über die Gymnastiklehrerin	110
	E.Rasch	体操と大衆	Gymnastik und Masse	112

9/10	M.Tepp	独自のリズムでの体操	Gymnastik im ureigenen Rhythmus	129
	L.Jürries	ゾーリングにおける州立学校での小学校の体操授業	Der Gymnastik Unterricht in der Grundschule des Landschulheims am Solling	138
	S.Roellenbleck	モンテッソリーシステムと体操	Montessorisystem und Gymnastik	141
	H.Grun	体操と発声訓練	Gymnastik und Stimmbildung	147
	F.Hilker	学校と特殊学校における身体教育に向けた原則	Grundsätzliches zur Körpererziehung in Schule und Hilfsschule	149
11/12	J.Fußhöller	エッセン市民大学における私の体操的な活動	Meine gymnastische Arbeit in der Essener Volkshochschule	161
	L.Fußhöller	発声訓練と言語教育	Stimm und Sprachbildung	179

1931 年

月号	著者名	論文タイトル	原文	頁
1/2	E.Hengstenberg	子供たちとの体操	Gymnastik mit Kindern	1
	I.Rost	幼稚園教員と保護者の研修セミナーと体操	Kindergärtnerinnen-Hortnerinnen-Seminar und Gymnastik	10
3/4	E.Schöning	学校トウルネンのための体操の意義	Die Bedeutung der Gymnastik für das Schulturnen	33
	M.Uhlig	スキー板によるターンで行われる上半身のリズム的行為における自然的な導入	Natürliche Einführung ins rhythmische Spiel des Oberkörpers während eines Schneeschuhschwunges	44
	H.Diesing	リズムとは何か	Was ist Rhythmus?	50
	v.Rohden-Langgaard	杖とポールでの体操	Gymnastik mit Stab und Kugel	56
5/6	F.Hilker	ミュンヘンでの体操会議	Die Münchener Gymnastiktagung	66
	G.Fuchs	体操の教育価値	Bildungswerte der Gymnastik	69
	H.Diesing	リズムとは何か	Was ist Rhythmus?	72
	E.Mehl	「体操」の表現とその定義	Der Ausdruck "Gymnastik" und seine Definition	80

7/8	J.W.v.Goethe	表現形式 「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」から	Ausdrucksbildung. Aus "Wilhelm Meisters Wanderjahren"	97
	H.Diesing	音楽と身体運動の内面的な関連性の解明	Versuch einer Klärung der inneren Zusammenhänge von Musik und körperlicher Bewegung	108
9/10	J.W.v.Goethe	人間的な形態の知識 「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」から	Die Kenntnis der menschlichen Gestalt. Aus "Wilhelm Meisters Wanderjahren"	129
	R.Samson	生理学におけるいくつか選択された概念に向けた 「体操」の概念と、その関連に向けた所見	Bemerkungen zum Begriff "Gymnastik" und seine Beziehung zu einigen ausgewählten Begriffen der Physiologie	138
	H.Labus	身体文化と医学の相互関係について	Über die Wechselbeziehung von Körperkultur und Medizin	147
	G.Westerkamp	3月号で掲載された「手ごころな操施設」に関する 考察	Betrachtungen zu dem im Doppelheft 3/4 gebrachten Artikel über "Ein erschwingliches Gymnastikheim"	149
11/12	v.Rohden-Langgaard	体操の基本要素としての空間経験	Raumerlebnis als Grundelement der Gymnastik	162
	v.Rohden-Langgaard	純粋な運動の分野としての体操	Gymnastik, das Gebiet der reinen Bewegung	168
	v.Rohden-Langgaard	体操とオイリトミー	Gymnastik und Eurhythmie	171
	E.M.Deinhardt	訓練方法としての幾何学	Geometrie als Schulungsweg	173
	D.Zimmermann	訓練法としての解剖学	Anatomie als Schulungsweg	181

1933年

月号	著者名	論文タイトル	原文	頁
1/2	Platon	物事の内面的な本質から	Vom inneren Wesen der Dinge	1
	F.Hilker	量か質か？	Quantität oder Quantität?	4
	R.Kienzle	体操授業のための「身体—精神—統一」と その意義	Die "Leib-Seele-Einheit" und ihre Bedeutung für den Gymnastikunterricht	6

1/2	F.Spies	ドラ・メンツラー学校における全活動の範囲での 音楽教育	Musikerziehung im Rahmen der Gesamtarbeit der Dora Menzler-Schule	12
	H.Huber	ダンス的な体操	Tänzerische Gymnastik	15
	Malmberg-Funke	地方のユースとの活動	Arbeit mit Dorfjugend	20
3/4	H.Medau	私の活動方法	Meine Arbeitsweise	34
	H.Thommen	メダウのボール体操	Ballgymnastik Medau	43
	H.Medau	運動と音楽における表現形式の成立	Entstehung der Formen in Bewegung und Musik	45
	A.Hütz	運動伴奏の導入と過程	Arbeitsansatz und Arbeitsweg der Bewegungsbegleitung	51
	H.Luchterhandt	「動きと音楽」のテーマに向けた寄稿 動きの源と歌の源	Urbewegung und Urlied. Ein Beitrag zur Frage "Bewegung und Musik"	57
5/6	F.Hilker	体操とユース教育	Gymnastik und Jugenderziehung	69
	G.Bäumer	自発的な労働奉仕における体操の課題	Die Aufgabe der Gymnastik im freiwilligen Arbeitsdienst	71
	F.Hilker	ユースの身体的な鍛錬と体操	Die körperliche Ertüchtigung der Jugend und die Gymnastik	78
7/8	F.Hilker	ドイツ体操連合の会員と後援者へ	An die Mitglieder und Freunde des Deutschen Gymnastik-Bundes	101
	D.Günther	新しいドイツ文化構築での体操とダンスの地位	Die Stellung von Gymnastik und Tanz im neuen Deutschen Kulturaufbau	104
	D.Günther	音楽と動きの統一	Die Einheit von Musik und Bewegung	108
	B.Imhoff	体操的スポーツ的な教育における 身体形成的意義の補足	Ergänzung der körperbildenden Werte in gymnastischer und sportlicher Erziehung	121
9/10	M.Scnmidts	体操的な活動の 20 年	Zwanzig Jahre gymnastischer Arbeit	133
	M.Weinert	事務作業と体操	Büroarbeit und Gymnastik	135
	Kellermann.Geude und Klueber	エッセンの体操学校マーガレーテ・シュミッツの 市民大学コースでの 8 年	Acht Jahre Teilnahme an den Volkshochschulkursen der Gymnastikschule Margarete Schmidts, Essen	137

9/10	C.Fornari	エッセンの体操学校マーガレーテ・シュミッツの 市民大学コースの自由時間、フェスティバルと休暇	Freizeit, Feste und Ferien der Volkshochschulkurse der Gymnastikschule Margarete Schmidts, Essen	139
	K.Burg	女性従業員のための体操	Gymnastik für die weiblichen Angestellten	142
	H.Gerlach	社会福祉活動と体操	Sozialarbeit und Gymnastik	143
	N.Acherfeld	幼稚園での幼児たちの身体修練	Körperschulung des Kleinkindes im Kindergarten	144
	H.Thaden	盲目者との体操	Gymnastik mit Blinden	148
	G.Breuer	閉鎖された女性の労働奉仕における 20 週間	Zwanzig Wochen im geschlossenen weiblichen Arbeitsdienst	149
11/12	F.Hilker	ドイツ体操連合の編年史	Chronik des Deutschen Gymnastik-Bundes. Aus den Ereignissen der Jahre 1925-1933	165
	E.Röhr	体操概念の形成に向けて	Zur Bildung des Begriffes Gymnastik	178
	C.Fornari	イタリアでの体操	Gymnastik in Italien	186